

研究紀要 No.43

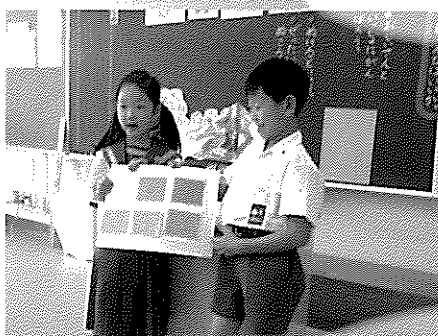
福岡教育大学, 附属共同研究初等教育研究部・特別支援教育研究部

「開かれた個」を育てる 学習指導の創造(1年次)

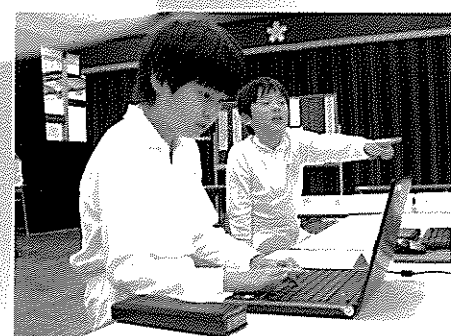
～チームを活かした学習過程の工夫～



豊かな学力

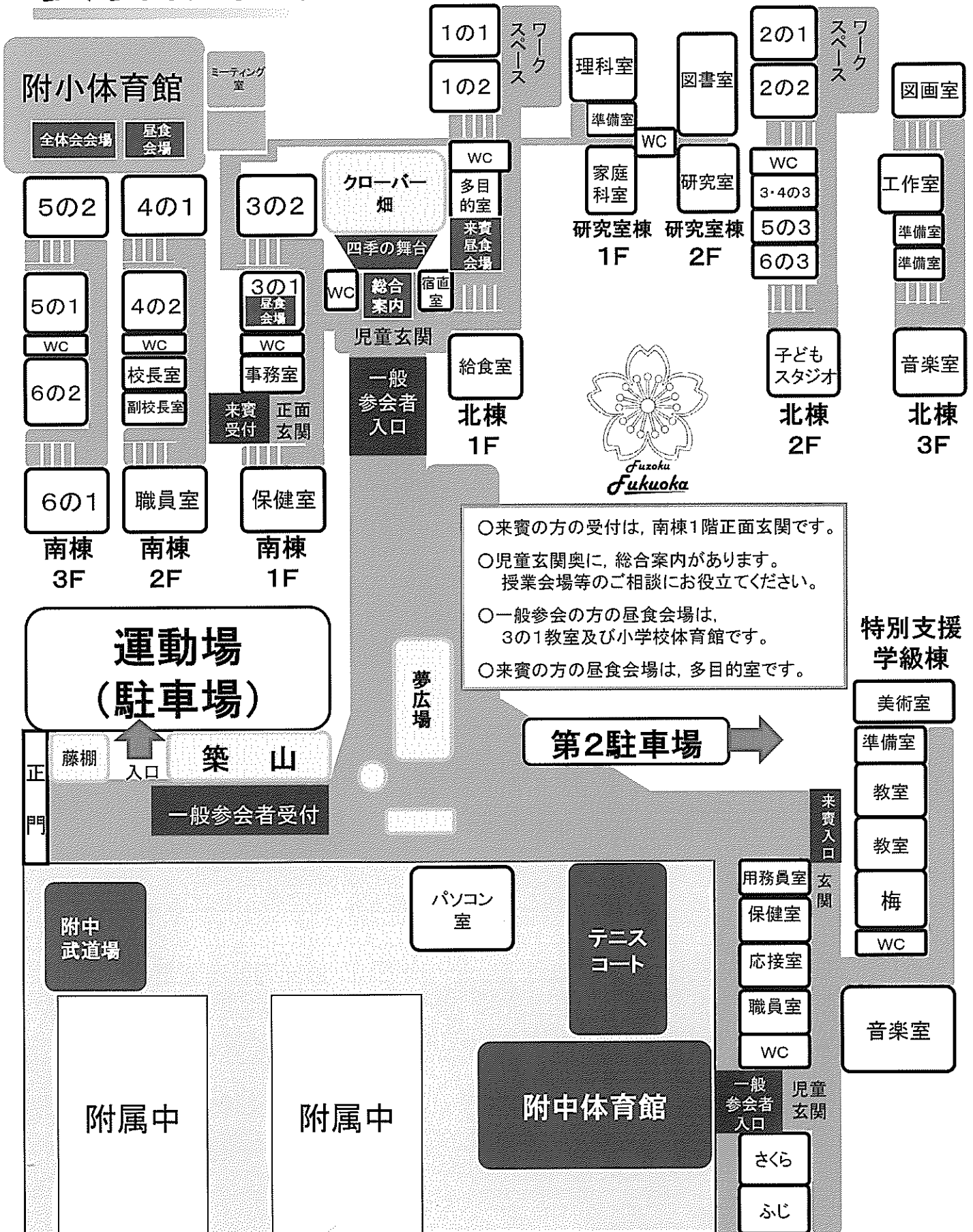


人と働く力



平成25年2月22日(金)・23日(土)

福岡教育大学附属福岡小学校

[illegible]

ごあいさつ

福岡教育大学 学長 寺 尾 慎 一

福岡教育大学附属福岡小学校の平成 24 年度教育研究発表会の開催にあたり、ひとことごあいさつを申し上げます。

本学は、九州地区で唯一の教員養成系単科大学として、教員にふさわしい人材育成を中核に据えて、地域とともに歩む大学をめざしているところです。そのなかで、各附属学校園は、地域の先導的教育研究校としての任務を確かに果たしていくことが、大きな使命の一つであると考えています。特に、本学は、各附属学校園との連携を強化して教育研究の開発を行っており、その成果を、研究発表会等の開催を通じて、地域の諸学校に還元し、地域教育界の発展に大きく貢献することをめざしています。

本年度の研究発表会は、主題を「『開かれた個』を育てる学習指導の創造－チームを活かした学習過程の工夫－」と設定して、その研究の成果を世に問うものであります。公開授業はもちろんテーマ別講演会、学習指導協議会、全体講演など、2 日間にわたる多彩な内容となっています。特に今年度は、開催時期を 2 月に移行しましたことや、第 2 日目を土曜日に行うことなどの新しい試みにも取り組んでおります。今回の研究発表会が地域の学校のみならず、我が国における初等教育実践の進展に少しでも寄与できれば、これに優る喜びはありません。ご参会された皆様のご指導・ご助言を切にお願いする次第であります。

最後になりましたが、ご多用の中、ご講演を快くお引き受けくださいました文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官の杉田洋先生に深く感謝申し上げます。また、学習指導協議会におきまして指導助言者としてご協力くださいました諸先生方にも、心より御礼申し上げます。

今後とも、附属学校園の教育研究活動を介して、各地域の公立学校及び教育関係機関との連携を深めてまいりたいと考えています。関係する皆様方に一層のご指導・ご鞭撻をお願い申し上げまして、ごあいさつといたします。

は じ め に

校 長 古 賀 元 章

現代社会は変化の激しい社会であり、これまでに経験したことのない課題や、正解のない課題に遭遇するであろうことが予想されます。そうした社会の変化に対応するためには、多様な文化や価値観をもった人々とコミュニケーションを図りながら、新しい世界を創造していく人間の育成が求められます。

平成23年度から実施された新しい学習指導要領では、自ら課題と向き合い、他者と協調しながら社会に貢献しようとする人間像として「開かれた個」というキーワードが提唱されました。それは、よい人間関係を築くことができるとともに、そのなかで自分の力を発揮していく柔軟でたくましい人間の姿です。

そこで、本校では、今年度から研究主題として「『開かれた個』を育てる学習指導の創造」を掲げ、新しい研究を始めました。今年度はその研究の第1年次と位置付け、副主題に「チームを活かした学習過程の工夫」と設定いたしました。

私たちは「開かれた個」の特性を「豊かな学力」と「人と働く力」から規定し、目指す子どもの姿を求めて日々の学習指導に取り組んでまいりました。この研究主題が目指すのは、子どもが友達と目標を共有するチームをつくり、互いにかかわり合いながら、相乗的に個々の学力を高めていくことです。本研究は、人間関係を育む学級経営や生徒指導の働きを日々の学習指導の中で行うという考え方に立脚しており、いじめや学級崩壊など現代の教育課題の解決に資するものであると考えます。また、本研究は他者を受容しながら折り合いを付けつつ、自分の考えを主張できる調和のとれた人格の形成に寄与するものであると確信しています。

今回の研究発表会を開催するにあたり、多くの方々のご指導・ご支援をいただきましたことに深く感謝申し上げます。今後とも各方面からのご助言やご協力を切にお願いする次第でございます。

目 次

公開授業指導案

ごあいさつ	1
はじめに	2
目 次	3
日程と内容（第1日目）	4
日程と内容（第2日目）	6
本校研究の歩み	8

全 体 講 演

学習指導案（第1日目午前）	12
学習指導案（第1日目午後）	26
学習指導案（第2日目午前）	40
学習指導案（第2日目午後）	56

研 究 紀 要

全体講演講師紹介	70
研究紀要の部目次	73
研究全体構想	74
各教科等部要項	82
特別支援教育部要項	146
帰国子女教育部研究構想	162
養護部会研究構想	164
おわりに	166
平成24年度研究同人	167

第1日目 2月22日（金）の日程

I 学習指導の部（午前）

▼ 授 業 説 明（9：30～9：45）

※ 各授業会場にて

▼ 学 習 指 導（9：45～10：30）

学年 組	教科等	単 元 ・ 題 材 ・ 主 題 名	授 業 者	会 場
1年1組	算 数 科	どんな かたちが できるかな	森 将和	1年1組教室
2年2組	道 徳	おさない子にもあたたかい心で 低学年2－(2)	三浦 研一	2年2組教室
3年1・3組	体 育 科	チーム対こうリズム高とび（走・跳の運動）	平井 源樹	附中体育館
4年2組	算 数 科	チームで探ろう 直方体と立方体	伯川 康洋	4年1組教室
5年1組	社 会 科	自然災害からくらしを守ろう	藤岡 太郎	5年2組教室
6年1・3組	外国語活動	互いの国の遊びを伝え合おう～Let's play together.～	棚町 尚子	子どもスタジオ

▼ 特別支援学級の学習指導（9：45～10：30）

生単グループ	生活単元学習	ひなまつりの たのしい さげもんを つくろう	片小田雅夫 植田 秀樹	特別支援学級棟 音楽室
--------	--------	------------------------	----------------	----------------

※ 教科領域等到下線のある公開授業は、午後の部の学習指導協議会対象の授業です。

II 全体会の部（午前）

▼ あ い さ つ（10：45～10：50）

学 長 寺 尾 慎 一

▼ 主 題 発 表（10：50～11：05）

・「開かれた個」を育てる学習指導の創造

ーチームを活かした学習過程の工夫ー

研 究 主 任 弘 松 英 樹

▼ 教 科 等 発 表 ①（11：05～11：20）

・伝え合う楽しさを共有する国語科学習

ーペアでの紹介活動を位置付けた学習過程ー

国 語 科 部 大久保 良 博

▼ 教 科 等 発 表 ②（11：20～11：35）

・友達と共に柔軟に造形表現する図画工作科学習

ーソロとチームを効果的に組み合わせた学習過程ー

図画工作科部 合 田 賢 治

▼ 児 童 発 表（11：40～11：55）

・創り出そう！私たちのハーモニー

指 導 者 高 武 龍 彦

Ⅲ 学習指導・協議会の部 (午後)

▼ 授 業 説 明 (12:30~12:45)

※ 各授業会場にて

▼ 学 習 指 導 (12:45~13:30)

学年 組	教科等	単 元 ・ 題 材 ・ 主 題 名	授 業 者	会 場
1年2組	国 語 科	ペアでつくろう おはなししょうかい ブックトーク	大久保良博	1年2組教室
2年1組	学 級 活 動 (食育)	チームで考えよう！元気がでる朝ごはん	谷岡 良寛 藤井 裕希	2年1組教室
3年1組	算 数 科	チームでちょうせん！ 重さくらべゲームをしよう	弘松 英樹	3年2組教室
4年1・3組	理 科	チームで発見 水の変化	今村 光宏	理 科 室
5年2・3組	図画工作科	ドミノ・デ・アート	合田 賢治	工 作 室
6年2組	学 級 活 動 (心の健康)	伝え合おう あなたの気持ち、わたしの気持ち	佐藤美和子 岡田 充弘	6年1組教室

▼ 特別支援学級の学習指導 (12:45~13:30)

体育グループ	体 育 科	すすめ！ バランスコース	堀 亮輔	附中武道場
--------	-------	--------------	------	-------

※ 教科領域等到下線のある公開授業は、授業後の学習指導協議会対象の授業です。

▼ 学習指導協議会 (13:45~15:00)

教科等	指 導 助 言 者	提 案 者	会 場
国 語 科	福岡教育大学国語教育講座 准 教 授 河野 智文先生	大久保良博	1年2組教室
理 科	福岡教育大学理科教育講座 教 授 坂本 憲明先生	今村 光宏	理 科 室
図画工作科	福岡教育大学美術教育講座 教 授 阿部 守先生	合田 賢治	工 作 室
体 育 科	福岡教育大学保健体育講座 教 授 相部 保美先生	平井 源樹	3年2組教室
道 徳	福岡教育大学教職大学院 教 授 池田 隆先生	三浦 研一	2年2組教室
外国語活動	福岡教育大学英語教育講座 准 教 授 中島 亨先生	棚町 尚子	子どもスタジオ

▼ 特別支援学級の学習指導についての協議会 (13:45~15:00)

特別支援教育 体育科	福岡教育大学特別支援センター 准 教 授 中山 健先生 福岡県教育センター 指導主事 下川 勝彦先生	堀 亮輔	特別支援学級棟 音楽室
------------	---	------	----------------

▼ 養護教諭と連携した学習指導についての協議会 (13:45~15:00)

養護部会 学級活動 (心の健康)	福岡教育大学教職大学院 教 授 小泉 令三先生 聖マリア学院大学 講 師 筑紫 味子先生	佐藤美和子 岡田 充弘	6年1組教室
---------------------	---	----------------	--------

Ⅳ 分科会の部 (午後)

▼ テーマ別講演会 (15:15~16:45)

分科会① 「人間関係を育む学び合いのある授業づくりの基礎」 (会場：体育館)

福岡教育大学教職大学院 教 授 小 泉 令 三 先生

分科会② 「学級集団における協働性の発達の支援」 (会場：多目的室)

福岡教育大学幼児教育講座 准 教 授 植 村 善太郎 先生

分科会③ 「児童の人間関係を測定するアセスメントの実際」 (会場：子どもスタジオ)

福岡教育大学教職大学院 研究補助員 山 田 洋 平 先生

分科会④ 「特別支援学級の共同的な学びの理論的背景」 (会場：特別支援学級棟)

福岡教育大学特別支援教育センター 准 教 授 中 山 健 先生

▼ あ い さ つ (各分科会場にて)

第2日目 2月23日（土）の日程

I 学習指導の部（午前）

▼ 授 業 説 明（9：30～9：45）

※ 各授業会場にて

▼ 学 習 指 導（9：45～10：30）

学年 組	教科等	単 元 ・ 題 材 ・ 主 題 名	授 業 者	会 場
1年2組 1・2年合同	体 育 科 (交流学习)	みんなで すすもう ピョンピョンワールド (器械・器具を使った運動遊び)	堀 亮輔 平井 源樹	附中体育館
2年2組	生 活 科	とどけよう！ありがとうのきもち ～大きくなったね ぼくわたし～	福原 伸治	1年2組教室
3年1組	学級活動	自分たちを支えてくれた6年生に感謝の気持ちを伝えよう	谷岡 良寛	3年2組教室
4年2組	総合的な学習	開さい！附小マスコット総選挙 ～学校のよさを発信して、学校を元気に～	三浦 研一	4年1組教室
5年2組	算 数 科	設計しよう！理想の陸上競技トラック！！ (円をくわしく調べよう)	二串 英一	5年2組教室
6年1組	算 数 科	チームで道順の数を調べよう（場合の数の発展）	森 将和	6年1組教室

▼ 帰国子女学級の学習指導（9：45～10：30）

3・4・5・6年 3組合同	国際交流タイム (総合的な学習の時間)	ひらこう！絵本ミュージアム	今村 光宏 合田 賢治 江口 友子	子どもスタジオ
------------------	------------------------	---------------	-------------------------	---------

※ 教科領域等到下線のある公開授業は、午後の部の学習指導協議会対象の授業です。

II 全体会の部（午前）

▼ あ い さ つ（10：45～10：50）

校 長 古 賀 元 章

▼ 主 題 発 表（10：50～11：05）

- ・「開かれた個」を育てる学習指導の創造

—チームを活かした学習過程の工夫—

研究副主任 三 浦 研 一

▼ 教 科 等 発 表 ①（11：05～11：20）

- ・数理をつくり合う算数科学習

—解釈活動を段階的に位置付けた学習過程—

算数科部 二 串 英 一

▼ 教 科 等 発 表 ②（11：20～11：35）

- ・動きを築き合う体育科学習

—チーム追究を段階的に位置付けた活動構成—

体育科部 平 井 源 樹

▼ 児 童 発 表（11：40～11：55）

- ・創り出そう！私たちのハーモニー

指 導 者 高 武 龍 彦

Ⅲ 学習指導・協議会の部 (午後)

▼ 授業説明 (12:30～12:45)

※ 各授業会場にて

▼ 学習指導 (12:45～13:30)

学年組	教科等	単元・題材・主題名	授業者	会場
1年1組	音楽科	みんなで あそぼう あそびうた	高武 龍彦	音楽室
2年1組	外国語活動	チームで楽しい動物園をつくろう ～What animals do you like?～	棚町 尚子	子どもスタジオ
3年2組	国語科	どうして3つの事例なのだろう? ～人をつつむ形～世界の家めぐり～	平川 洋一	3年2組教室
4年1組	社会科	掘割のめぐるまち 水とともに生きる人々 ～よかばんも～柳川市、よかろうが福岡県～	山田 耕司	4年1組教室
5年1組	体育科	みんなでチャンスメイク! トライアングルハンドボール (ボール運動)	緒方 勝彦	附中体育館
6年2組	国語科	どんな構成で書こう わたしの未来宣言文	岡田 充弘	6年1組教室

▼ 特別支援学級の学習指導 (12:45～13:30)

国語グループ	国語科	おもいでカルタを つくろう	松尾 京子	特別支援学級棟 音楽室
--------	-----	---------------	-------	----------------

※ 教科領域等に下線のある公開授業は、授業後の学習指導協議会対象の授業です。

▼ 学習指導協議会 (13:45～15:00)

教科等	指導助言者	提案者	会場
国語科	大野城市立大野小学校 副校長 伊藤 啓二先生	岡田 充弘	6年1組教室
社会科	大野城市教育委員会 総務室長 高野 誠一先生	山田 耕司	4年1組教室
算数科	福岡教育大学教職大学院 教授 森 保之先生	二串 英一	5年2組教室
生活科	みやま市教育研究所 所長 堤 直樹先生	福原 伸治	1年2組教室
音楽科	福岡県教育センター 指導主事 原 クミ先生	高武 龍彦	音楽室
学級活動	久留米市立青峰小学校 校長 中原 浩先生	谷岡 良寛	3年2組教室

▼ 特別支援学級の学習指導についての協議会 (13:45～15:00)

特別支援教育 国語科	福岡教育大学教職大学院 教授 納富 恵子先生 福岡県教育庁義務教育課 指導主事 落合 純哉先生	松尾 京子	特別支援学級棟 梅組教室
------------	--	-------	-----------------

Ⅳ 全体会の部 (午後)

▼ 全体講演 (15:15～16:45)

演題 「よりよい人間関係をつくる授業のあり方」 ～特別活動の理念を活かした各教科等の指導～

文部科学省 初等中等教育局 教育課程課 教科調査官
国立教育政策研究所 教育課程研究センター 研究開発部 教育課程調査官

杉 田 洋 先生

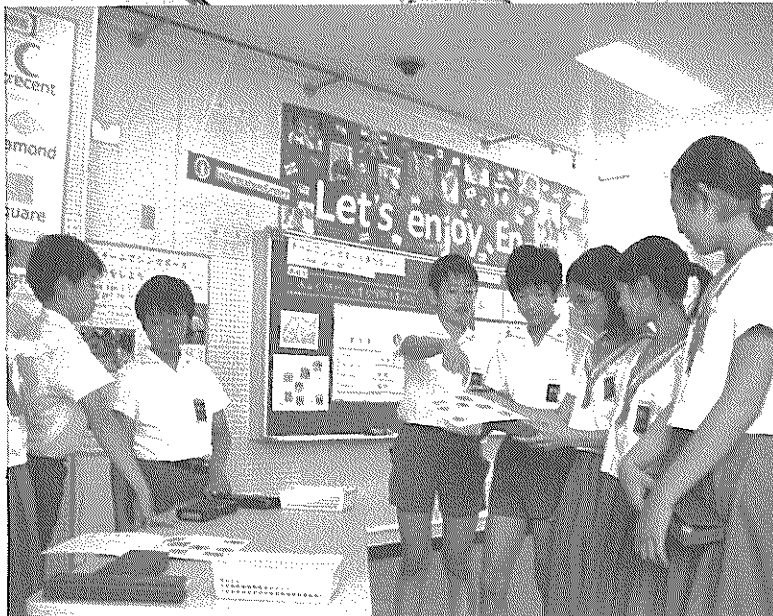
▼ あ い さ つ

副校長 芋 生 修 一

本校研究のあゆみ

年度	研究主題等	年度	研究主題等
昭和		61	○自己実現の喜びを生み出す学習指導法 「学習の個性化をめざす指導法の開発」(明治図書から出版)
23	○学習効果判定の理論と実際	62	○自己実現の喜びを生み出す学習指導法 学習の個別化をめざす学習過程
24	○カリキュラムの構成と実際 (発表会なし)	63	○自己実現の喜びを生み出す学習指導法 「学習の個性化」をめざす授業の改造 「感動体験を中核とした生活科の授業づくり」(明治図書から出版)
25	○学習深化の指導	平成	○個が生きる授業の創造 自己理解の学習過程
26	○学習深化の指導	元年	○個が生きる授業の創造 考えを確かにする活動構成
27	○学習深化の指導	2	○個が生きる授業の創造 考えを深める自己吟味活動を通して 「個が生きる授業づくり」(北大路書房から出版)
28	○学習深化をめざす指導	3	○生きた喜びを生み出す授業の創造 思い・願いをもって問いつける活動づくり
29	○学習指導における諸問題の再検討	4	○生きた喜びを生み出す学習の創造 思いをあらわしていくよさを実感する活動の展開
30	○学習指導における新課題の再検討	5	○生きた喜びを生み出す学習の創造 自分のよさを実感する表現活動の展開
31	○学習指導深化をめざす新課題の究明	6	○生きた喜びを生み出す教育課程の創造 新しい教育課程における教科領域の学習の具体化
32	○組織化をめざす学習指導法の究明	7	○生きた喜びを生み出す教育課程の創造 子供主体の活動からみる教育課程の編成 「新時代の授業を創る」(明治図書から出版)
33	○組織化をめざす学習指導法の究明	8	○生きた喜びを生み出す教育課程の創造 子供主体の活動からみる教育課程の編成
34	○学習指導の系統化	9	○豊かな人間の育成をめざす教育の創造 活動や体験を基盤にした学習の総合化 「学習創造」(算数・人間・障害児教育)出版
35	○改訂指導要領による学習指導の諸問題	10	○豊かな人間の育成をめざす教育の創造 子供と創る教科・総合的学習の展開 「学習創造」(理科・図画工作・音楽)出版
36	○考える子どもを育てる指導法の究明	11	○豊かな人間の育成をめざす教育の創造 知恵と心情をはぐくむ教科・総合的展開 「学習創造」(国語・体育)出版
37	○考える力をのばす学習指導法の考察	12	○豊かな人間の育成をめざす教育過程の創造 調和的に展開する教科領域・総合的学習像の明確化 「新世紀の学力づくり」(明治図書から出版)
38	○考える力をのばす学習指導法の考察	13	○豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造 一教科・総合の学びを連動する〈ふくおかプラン〉の展開一
39	○考える力をのばす学習指導法の考察	14	○豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造 一「自己追究」の学びを拓く〈ふくおかプラン〉の展開一 「評価で変えるカリキュラムづくり」(明治図書から出版)
40	○考える力をのばす学習指導法の考察	15	○豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造 一「生活・文化・人間の学び」を位置付けた〈ふくおかプラン〉の構想一
41	○考える力をのばす学習指導法の考察 「授業における思考訓練」(明治図書から出版)	16	○豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造 一自己開発と「生活・文化・人間の学び」を統合する〈ふくおかプラン〉の展開一
42	○教科の本質に立脚した学習指導法の考察 「思考をのばす学習過程の評価」(明治図書から出版)	17	○豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造 一協働を中核とした学習の展開一
43	(発表会なし)	18	○学びを強め確かにする学習の創造 一学びの体験を活かす3つの統合による授業づくり一
44	○現代化をめざす指導法の究明 教材の現代的価値と児童の実態と反応に基づく指導内容の検討	19	○豊かな学びを育む学習の創造 一子どもの「問い」を深化・拡充させる授業づくり一
45	○現代化をめざす指導法の究明 基本的内容にせまらせる学習の開発	20	○豊かな学びを育む学習の創造 一知のネットワーク化を図る活用・探究の授業づくり一
46	○現代化をめざす指導法の究明 ひとりひとりを生かす合理的な学習指導のしくみ	21	○未来を豊かに生きる学力を育む学習指導の創造 一活用の質を高める学び方を活かした指導法の開発一
47	○現代化をめざす指導法の究明 学習の連帯化をはかる指導のしくみ	22	○未来を豊かに生きる学力を育む学習指導の創造 一学び方の連続・発展を重視した授業づくり一
48	○現代化をめざす指導法の究明 連帯性を育てる学習指導のしくみ	23	○「開かれた個」を育てる学習指導の創造 一チームを活かした学習過程の工夫一 (平成25年2月開催)
49	○現代化をめざす指導法の究明 連帯の力で学びとる姿勢の形成をはかる学習指導のしくみ 「学習を連帯化する指導法」(明治図書から出版)	24	
50	○現代化をめざす指導法の究明 学びとる力の育成をはかる学習指導のしくみ		
51	○学びとる力を伸ばす学習指導法の究明 操作を通した学習の構造化		
52	○学びとる力を伸ばす学習指導法の究明 操作を通した学習指導法の展開 「できるまで育てる」(秀巧社から出版)		
53	○「できるまで育てる」学習指導の計画と運営 交流でよりよい操作を身につける学習指導 「自由活動の時間」(秀巧社から出版)		
54	○現代化をめざす指導内容と指導法の実証的究明 教材の価値にせまらせる操作学習の評価		
55	○自己実現の喜びを生み出す学習指導 見直し活動を生かした操作学習の深化		
56	○自己実現の喜びを生み出す学習指導 自己を見直し、考えを深める指導のしくみ		
57	○自己実現の喜びを生み出す学習指導 自ら見直し活動に取り組み、自己を深める指導のしくみ 「学ぶ喜びを生み出す授業」(北大路書房から出版)		
58	○自己実現の喜びを生み出す学習指導 個が生きる課題づくり		
59	○自己実現の喜びを生み出す学習内容の検討 学習実態の多様性に即応する学習指導		
60	○自己実現の喜びを生み出す学習指導法 子どもの個性が生きる指導		

公開授業 学習指導案の部



公開授業 学習指導案

◆第1日目 午前 学習指導案

1の1	算数（森）	12
2の2	道徳（三浦）	14
3の2・3	体育（平井）	16
4の2	算数（伯川）	18
5の1	社会（藤岡）	20
6の1・3	外国語活動（棚町）	22
特別支援学級	生活単元学習（片小畑・榎）	24

◆第1日目 午後 学習指導案

1の2	国語（大久保）	26
2の1	学級活動（谷岡・藤井）	28
3の1	算数（弘松）	30
4の1・3	理科（今村）	32
5の2・3	図画工作（合田）	34
6の2	学級活動（佐藤・岡田）	36
特別支援学級	体育（堀）	38

◆第2日目 午前 学習指導案

1の2・ふじ組	体育（平井）	40
1の2・ふじ組	体育（堀）	42
2の2	生活（福原）	44
3の1	学級活動（谷岡）	46
4の2	総合的な学習の時間（三浦）	48
5の2	算数（二串）	50
6の1	算数（森）	52
帰国子女学級	国際交流タイム（今村・江口・合田）	54

◆第2日目 午後 学習指導案

1の1	音楽（高武）	56
2の1	外国語活動（棚町）	58
3の2	国語（平川）	60
4の1	社会（山田）	62
5の1	体育（緒方）	64
6の2	国語（岡田）	66
特別支援学級	国語（松尾）	68

ペアチームで影絵の問題をつくりながら、図形の見方を豊かにする算数科学習
第1学年1組 算数科学習指導案

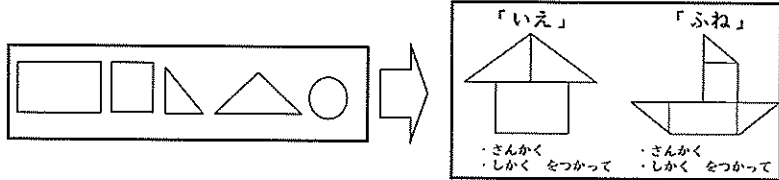
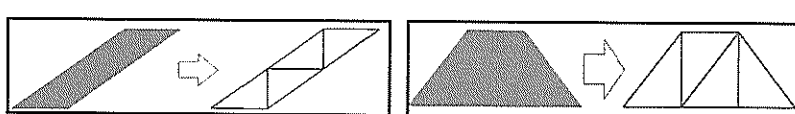
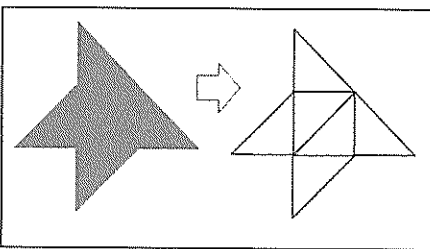
指導者 森 将 和

単 元 どんな かたちが できるかな

単 元 目 標

豊かな 学力	○ ずらす、まわす、裏返すという図形の基本操作を理解し、「さんかく」の色板を2つ合わせると「しかく」になることをとらえることができる。(知識・技能) ○ 構成要素であるかどやへりに着目する図形の見方や、図形の内部を部分で見る見方で、他の図形がどのように敷き詰められているかをとらえることができる。(思考力・判断力・表現力) ○ 意欲的に色板をずらしたり、まわしたり、裏返したりして自由に物の形をつくったり、つくった形の中から「さんかく」や「しかく」を見つけ出したりすることができる。(関心・意欲・態度)
人と 働く力	◎ 考えた問題を出し合い、一人一人の考えの共通点や差異点に着目して整理して、チームで難しい問題である根拠の合意を図ることができる。(調整力)

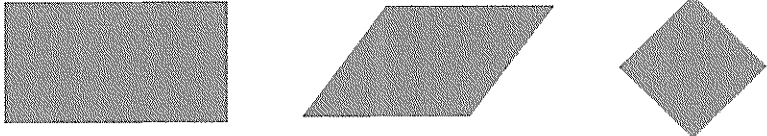
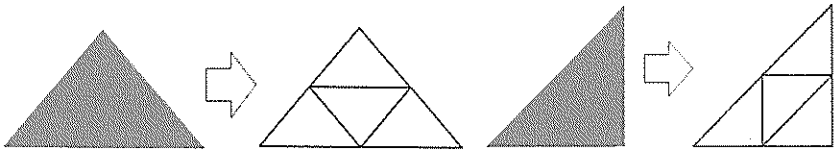
単 元 計 画 (全4時間) ※ 太枠囲みはチームの活動を中心に行う時間

活 動 と 内 容		「開かれた個」の支援	配時
1 「さんかく」や「しかく」、「まる」の形の色板を組み合わせて形づくりを行ったり、影絵遊びを行ったりする。 ○ 図形をずらしたり、回したり、裏返したりして、図形を組み合わせて、色々な形をつくること 		※ 基本図形を用いて自由に形をつくったり、つくった形に名前を付けたりする活動の位置付け (関心・意欲・態度) ※ ペアチームでつくった影絵の問題を出し合い、解き合う活動の位置付け (調整力)	2
2 直角三角形の色板を4枚使って、色板の置き方を考えて難しい影絵の問題をつくったり、つくった問題をペアチームで解き合ったりする。 ○ 「しかく」を「さんかく」2つに分けたり「おおきなしかく」を「さんかく」4つに分けたりする見方で図形をとらえること 		※ 難しい影絵の問題をつくるという目標をペアチームで共有するチームIの位置付け (調整力) ※ 自分で色板を操作して難しい置き方を調べるというソロの位置付け (思考力・判断力・表現力)	1 本 時
3 直角三角形の色板を6枚に増やして、さらに難しい影絵の問題をつくったり、つくった問題をペアチームで解き合ったりする。 ○ どんな影絵でもかどやへりを合わせると見つけやすいことや全体の形から「しかく」や「ながしかく」を図形の内部に見出し、多様に形を分解すること 		※ 図形の内部に他の図形を見る見方を用いて、解決する問題事象の提示 (思考力・判断力・表現力) ※ チームの考えを共有することができる色板のマグネットとそれを貼り付けることができるボードの活用 (調整力)	1

本時の目標

- 影絵の形の内部を部分で見える見方で「さんかく」2つで「しかく」を構成している部分や「さんかく」4つで「ながしかく」を構成している部分をとらえ、色板の置き方を多様に見つけ、置き方の違いについて説明することができる。
- ◎ ペアチームで考えた問題を出し合い、考えの共通点や差異点に着目して整理し、ペアチームで難しい問題の根拠を説明し合い、ペアの難しい問題を決定することができる。

本時の展開

活動と内容	子どもの思考の流れ
1 直角三角形の色板4枚を使って、ペアチームで影絵遊びを行うという本時学習のめあてについて話し合う。 ○ 直角三角形の置き方で難しさが変わりそうだとすることに気付くこと ※ 4枚の直角三角形の色板でつくった影絵を提示し、本時の学習についてペアチームで話し合う場を設定する。 めあて さんかくのいろいろな 4まいで むずかしい かげえの もんだいを つくろう。 2 直角三角形の色板4枚を組み合わせて、いろいろな影絵をつくり、どの問題が一番難しいか、ペアチームで話し合う。 (1) 色板4枚を使って、いろいろな形の影絵をつくる。  ・ かどやへりが見えない影絵をつくろう。 ○ 図形の内部に「しかく」や「ながしかく」の場所をつくって、影絵を構成すること ※ 直角三角形の図形カードとカードを貼り付けることができるホワイトボードを準備し、色板を操作しながら多様に影絵をつくることができるようにする。 (2) ソロでつくった影絵をペアで出し合い、チームで一番難しい影絵を選ぶ。 ○ それぞれが考えた影絵をペアチームで出し合い、どれが一番難しいかを色板の置き方に着目して説明すること ※ ホワイトボードを用いて、つくった影絵を可視化し、ペアチームで比較できるようにする。 3 ペアチームでつくった一番難しい問題を他のペアチームと解き合い、本時学習をまとめる。  ○ 図形の中に他の図形を見る見方を使って、他のチームの問題を解決すること ※ チームのつくった難しい問題を他のチームと解き合い、答えを見つける活動を設定する。	子どもの思考の流れ ・ 今日は、4枚のさんかくの色板を使って、ペアチームで影絵遊びをするんだな。 ・ 4枚の色板で影絵をつくるんだね。よし、難しいのをつくるよ。 ・ さんかくのかどが見えないような影絵が難しいんじゃないかな。 ・ まず、何種類かつくって、どれが一番難しいか、チームの友だちと話し合おう。 ・ できたよ。この影絵は、いろいろな置き方が考えられそうだよ。 ・ できた影絵を出し合おう。どれが一番難しいかな。 ・ これは、中に「ながしかく」があるから、いろいろな置き方が考えられるね。 ・ これを僕達のチームの問題にしようよ。 ・ そうだね。これが一番難しいね。 ・ よし、隣のチームと問題を出し合おう。 ・ この問題は、ここの「しかく」の場所の置き方が2種類考えられるね。 ・ 2人で考えると、難しい問題やたくさんの答えを考えることができたね。

ペアで考えてみたいことを共有し、親切についての価値観をつくり出す道徳学習
第2学年2組 道徳学習指導案

指導者 三 浦 研 一

主 題 名 おさない子にもあたたかい心で

低学年2- (2)

第2学年の内容項目2-(2)の主題配列について

前 期	中 期	後 期
◇ こまっている あい手の ことを 考えて	◇ お年よりに やさしい心で	◇ おさない子にも あたた かい心で
◆「どうしたらいいのかな」 (文溪堂)	◆「プールのかえりみち」 (日本文教出版)	◆「しあいにいくみちで」 (日本文教出版)

主 題 の ね ら い

豊かな 学力	○ 幼い人へむけた温かい心について考え、一緒にしてあげる親切のよさやすばらし さについてとらえ、自分の生活に活かそうとすることができる。(道徳的実践力)
人と 働く力	◎ 自分の体験や、資料をもとにした考えを友達と交流し合う中で、自分や友達の考 えのよさに気付く、認め合うことができる。(対話力)

計 画 (全1時間) ※ 太枠囲みはチームの活動を中心に行う時間

活 動 と 内 容	「開かれた個」の支援	時
1 これまでの生活の中(日常生活体験や1年生とのかかわり など)から親切にすることができた体験やできなかった体験 を書きまとめる。 ○ これまでの自分の傾向性を明らかにすること 人に親切にすることができている自分を見つめる	※ 1年生とかかわる活動 の設定 ※ 親切にかかわる自分の 体験を想起するための、 振り返りカードの活用 ※ 振り返りカードをもと にした体験の交流	事 前
2 資料「しあいにいくみちで」をもとに、一緒にしてあげる 親切のよさやすばらしさについてペアや全体で明らかにし、 話し合う。 (1) 事前の体験活動での気がかりについて交流し、追求すべ き道徳的問題について話し合う。 ○ 幼い人への温かい心についての問題意識を高めること (2) 主人公かずおが放っておけないと考えたわけについてソ ロで自分の考えをつくった後ペアで話し合い、学級全体で 交流する。 ○ 迷いながらも、ひろ子のことが放っておけなくなった主 人公の気持ちを共感的に追求すること (3) これまでの自分の親切な行動について振り返り、親切に できる自分について話し合う。 ○ 温かい心を大切にしようとする自分の姿に気付くこと	※ 道徳的問題を共有化す るための体験活動をもと にした問題場面の提示 ※ 問題場面での取り得る 行為についての予想的な 話し合いの位置付け(協力)	本 時
3 縦割り清掃や休み時間など1年生とかかわり、親切にでき た体験を生活記録文に書き、交流する。 ○ 思いやりや親切を実現することができた自分を見つめる こと これから、身近な幼い子へ優しくしてあげたいな	※ 自分の考えをつくるた めの道徳ノートを活用 ※ 対話を促すためのペア ボードの活用(対話力) ※ 学級での全体交流 ※ 幼い人に親切にできた 体験を交流する話し合いの 位置付け(道徳的実践力) ※ 1年生とのなかよし集 会の設定 ※ 体験を記録するカード の活用 ※ 価値を実現できた体験 を交流する場の設定	事 後

本時の目標

- 資料「しあいにいくみちで」をもとに、幼い人へ向けた温かい心について考え、一緒にしてあげる親切のよさやすばらしさについてとらえることができる。
- ◎ 資料中の登場人物の言動から一緒にしてあげる親切のよさや大切さについてペアと進んで話し合うことができる。

本時の展開

活動と内容

1 事前の体験活動での気がかりについて交流し、追求すべき道徳的問題について話し合う。

○ 幼い人への親切についての問題意識を高め、追求の見通しをもつこと

※ 事前の体験活動（1年生との交流）での様子を提示する。

めあて

ペアの友だちといっしょに、おさない子へのあたたかい心について考えよう。

2 資料「しあいにいくみちで」をもとに、幼い人へ一緒にしてあげる親切のよさや大切さについて追求し、ペアで話し合う。

(1) 転んだひろ子のことが放っておけないと考えた主人公かずおの気持ちについて道徳ノートに書き【ソロ】、その後、ペアで話し合う。【チームワーク】

○ 互いの考えのよさを認めながら、ペアでよりよい考えをつくり出すこと

自分の見方や考え方

→

ペアボードで2人の考えをつくり出す

←

相手の見方や考え方

※ ペアボードをもとに、互いの考えを出し合わせ、一番最適な考えをつくり出させる。

(2) 主人公かずおが放っておけないと考えたわけについて学級全体で話し合う。【チームワーク】

○ 困っている幼い人へ一緒にしてあげる親切のよさや大切さについてとらえること

ペアでの追求で予想される主人公を支える考え方

自分中心の考え方

自分だったらという考え方

相手中心の考え方

・ ○○に叱られるから

・ おれがもらえるかも

・ ○○さんからはめてもらいたい

・ 自分がひろ子ちゃんだったら助けてほしい

・ 後で助けておけばと思いたくない

・ よく知っているひろ子ちゃんが困っている

・ 痛くて心細いだろうな

・ ひろ子ちゃんが喜んでくれる

深める発問：野球に間に合わなくても、かずおくんが元気だったのは、どの考えが大きくなったからですか。

※ 類型化した考えをもとに、主人公が試合に行けなくても元気でいられたわけについて問う発問を行い、価値に迫らせる。

3 これまでの自分の幼い人への親切にすることができた経験について振り返り、話し合う。

○ 温かい心を大切にしようとする自分の姿に気付くこと

※ 具体的な場面（登下校中、休み時間、縦割り清掃など）を提示し、把握した価値をもとに振り返る時間を設定する。

子どもの思考の流れ

・ 1年生が上手に跳べるようになると嬉しい気持ちになりました。

・ 他の幼い子にもやさしくできるようになりたいな。

・ かずおくんは、どうしてそこまでしてあげられたのかな。

・ かずおくんがそこまでしたわけについてペアの友達と考えてみたいな。

・ 野球に行きたい気持ちは少しはあったと思うな。でも、ひろ子ちゃんを放っておいたことを知られたくないと思う。

・ 自分にも放っておけなくなって優しくしてあげたことがあるよ。

・ 自分のことしか考えていなかった気持ちがなくなって、ひろ子ちゃんのことだけを考えるようになった。

・ これまでの自分たちはどうだったかな。

・ 縄跳びの練習のときに、1年生にやさしくしてあげることができました。

・ ペアで話し合うと自分の考えがよりよくなった気がする。

・ これからも、自分より幼い子に優しくできたらいいな。

チームの勝利を目指して、チームで一人一人の動きを高め合う体育科学学習
第3学年2・3組 体育科学学習指導案

指導者 平井源樹

単元 チーム対こうリズム高とび（走・跳の運動）

単元目標

豊かな 学力	○ 短い助走から調子よく踏み切って高く跳ぶことができる。（技能） ○ 動きのポイントと練習の仕方を知り、自分の能力や課題に応じた練習方法を選んだり工夫したりすることができる。（思考・判断） ○ 仲間と励まし合いながら意欲的に練習や競争をすることができる。（態度）
人と 働く力	◎ チームの勝利に向けて、仲間と課題的コミュニケーションや情的コミュニケーションを行いながら、一人一人の動きを高める練習をすることができる。（行動力）

単元計画

（全7時間）※ 太枠囲みはチームの活動を中心に行う時間

活動と内容	「開かれた個」の支援	時
1 高く跳ぶために大切なことを交流しながら、いろいろな跳び方で高跳びをしたり、簡単なルールで競争したりする。 (1) 高いところへタッチする場やゴム紐高跳びの場で、跳び方をいろいろ試しながら高く跳ぶ運動をする。 ○ 調子よく踏み切って高く跳ぶ心地よさを味わい、高く跳ぶために大切な助走のリズムや踏切りの仕方に気付くこと	※ 調子よく踏み切って高く跳ぶ動きにつながる体を沈み込ませて肩を引き上げる感覚やリズムカルな助走、片足踏切りが表出する運動体験（技能）	2 ①
(2) 簡単なルールをつくって、チーム対抗で高跳びをする。 ○ 競争の楽しさを味わい、チームで協力して一人一人の動きを高め記録を伸ばすことに必要感をもつこと	※ 一人一人の記録の伸びをチームで合計して競い合うルール設定（態度）	①
2 5歩アクセント助走でチーム対抗リズム高跳びをしながら、チームで調子よく踏み切って高く跳ぶ練習をする。 (1) 等質課題・異質技能のチームで、互いに動きを観合いながら、調子よく踏み切って高く跳ぶ練習をする。 ○ チームの一人一人が、自分に合った助走や踏切りの仕方を見出すこと (2) 等質課題・等質技能のチームで、互いに動きを観合いながら、調子よく踏み切って高く跳ぶ練習をする。 ○ チームの一人一人が、自分に合った助走や踏切りの仕方を高めること (3) 異質課題・異質技能のチームで、互いに動きを観合いながら、調子よく踏み切って高く跳ぶ練習をする。 ○ チームの一人一人が、自分に合った助走や踏切りの仕方を見直して、高く跳ぶ動きをさらに高めること	※ うまくいかない時に、動き方や場の代替案を選んで試すことができる「動きの財産表」の活用（思考・判断） ※ 自分に合った運動感覚や場を見出すことができる設置用具の操作（思考・判断） ※ 繰り返し運動の手応えと観察情報を関係付けながら、動きの高まりや課題を見出す学習過程（行動力）	3 ① ① ① 本時
3 一人一人がチームの練習で高めた動きを発揮しながら、チーム対抗リズム高跳びトーナメント戦をする。 (1) 異質課題・異質技能のチームで、アピールポイントを説明して、チーム対抗リズム高跳びトーナメント戦をする。 ○ チームで高めた一人一人の調子よく踏み切って高く跳ぶ動きを発揮すること (2) チームや一人一人の伸びについて話し合う。 ○ 互いの動きの高まりとチームでの学び方のよさを実感し、認め合うこと	※ 一人一人が自分に合ったリズムで、調子よく踏み切って高く跳ぶことができる5歩アクセント助走リズム高跳び（技能） ※ チームで高めた一人一人の動きを発揮して、チーム対抗で競うトーナメント戦の設定（態度）	2 ① ①

本時の目標

- 動きの各ポイントに目を向けて場を選んだり工夫したりして練習しながら、短い助走から調子よく踏み切って高く跳ぶ動きを高めて、チーム対抗リズム高跳びを楽しむことができる。
- ◎ 異質課題・異質技能のチームの仲間と、課題的コミュニケーションや情的コミュニケーションを繰り返し行いながら、一人一人の高く跳ぶ動きを各ポイントから見直すことができる。

本時の展開

活動と内容

子どもの思考の流れ

1 前時の練習を振り返り、どうすれば一人一人がさらに記録を伸ばすことができるか話し合う。

○ 前時までと違う動きのポイントにも目を向けて、異質課題のチームで動きを見直すことの必要性をとらえること

今の自分	練習する高さ	見直す動きのポイント
最高記録がなかなか跳べない	最高記録より低くして	助走リズム(歩幅)の見直し
最高記録が跳べたり跳べなかったりする	最高記録の高さで	振上げ足の上げ方の見直し
最高記録が気持ちよく跳べる	最高記録より高くして	真下への着地の仕方の見直し

さらに記録を伸ばすために

※ 動きが高まる順序や練習での体験を、一人一人が直面している問題と関係付けながら、板書で追究の見通しを整理する。

めあて ちがうかだいのなかまと高くとぶ動きを見直して、もっととろくをのぼそう。

2 異質課題のチームで、一人一人の動きを見直しながら練習し、チーム対抗リズム高跳びをする。

(1) 異質課題のチームで練習する。

○ 調子よく踏み切って高く跳ぶための自分に合った動きと場を見つけること(運動者)、観察で担当するポイントから動きの高まりや課題を見つけること(観察者)

※ 動きの財産表から代替案を選んだり、設置用具を操作したりする活動を練習に位置付ける。

側面から観察 助走のリズム、安全な着地

正面から観察 全体からの課題

側面から観察 振上げ足の高さ

側面から観察 足の位置

キック風船

着地シート

運動者

助走メジャー

5歩アクセント助走のリズム高跳びの場

(2) 5歩アクセント助走でチーム対抗リズム高跳びをする。

○ チームで見直した動きで、調子よく踏み切って高く跳ぶこと

※ 一人一人の目標記録や練習の過程をもとに、チームで運動者に意識させたい動きのポイントについて声かけをさせる。

3 チーム内でチームや一人一人の伸びについて発表し合い、学級全体でチームでの成果を話し合う。

○ 互いの動きの高まりとチームでの学び方のよさを実感し、認め合うこと

※ 高跳びの動きのポイントの視点と、チームの活動の視点から自己評価をする場を設ける。

・ ぼくは、前の時間、最高記録が伸びたけれど、助走の足の位置がマークしたところと合わなくなってきたな。

・ わたしは、振上げ足の練習を頑張っていたら、最高記録が跳べなくなったよ。

・ ぼくは、最高記録の80 cmの高さで、足の位置(歩幅の組合せ)の見直しをしよう。

・ わたしは、最高記録より2 cm低い77 cmの高さで、足の位置(歩幅の組合せ)の見直しをしよう。

・ A君、今の踏み切りは強くてよかったね。80 cmも楽々跳べているよ。今の足の位置で、助走のフープの位置をマークし直そうか。

・ Bさん、今の足の位置になって、最高記録が何度も跳べるようになったね。今度は、もう1 cm高くして、キック風船を使って練習してみる?

・ 対抗戦だ。練習通りのフープの位置で、自信をもって跳ぼう。

・ 成功だ。2 cmも伸びた。みんなでぴったりの歩幅を見つけたからだ。これで、チームも勝てるかもしれない。

チームで立体を多様につくり，構成要素の関係を見つける算数科学習
第4学年2組 算数科学習指導案

指導者 伯 川 康 洋

単 元 チームで探ろう 直方体と立方体

単 元 目 標

豊かな 学力	○ 直方体や立方体の構成要素やその関係を理解するとともに，展開図や見取図をかくことができる。(知識・技能) ○ 直方体や立方体について，構成要素に着目して観察したり構成したりして，どの形にも当てはまる関係を説明することができる。(思考力・判断力・表現力) ○ 身の回りのはこの形に興味をもち，進んで直方体や立方体を観察したり構成したりすることができる。(関心・意欲・態度)
人と 働く力	◎ 大きさや形の違う直方体や立方体を分析する着眼点や考え方を友達と比べて話し合い，どの形にも当てはまる数理として整理することができる。(調整力)

単 元 計 画 (全 10 時間) ※ 太枠囲みはチームの活動を中心に行う時間

活 動 と 内 容	「開かれた個」の支援	配時
1 立方体と直方体の構成要素に着目して調べる。 (1) いろいろな大きさや形のはこの形当てをするとともに，仲間分けをする。 ○ 立方体や直方体を構成している面の形に着目して，その定義を理解すること (2) 辺や頂点，面の数，形について調べる。 ○ 直方体や立方体の構成要素に着目して，それらの特徴や性質を理解すること (3) 直方体や立方体を切り開いて，展開図をかく。 ○ 切り開く辺を変えた展開図について理解すること (4) いろいろな形の直方体の展開図の正誤を判断し，その根拠を説明する。 ○ 辺や面に着目した展開図のかき方を理解すること	※ たくさんの箱を集めて形を当てるはこの形当て (関心・意欲) ※ いろいろな箱の面の形に着目する仲間分け (思考・判断) ※ 直方体の箱の構成要素についてそれらの数や長さを調べる活動 (知識・技能) ※ 構成要素の観察や展開図の妥当性や一般性を話し合う交流 (調整力)	4 ① ① ① ① 本時
2 直方体や立方体の辺と辺，辺と面，面と面の位置関係を調べる。 (1) 辺と辺の位置関係を調べる。 ○ 直方体の辺と辺の垂直・平行の関係を理解すること (2) 辺と面の位置関係を調べる。 ○ 直方体の辺と面の垂直・平行の関係を理解すること (3) 面と面の位置関係を調べる。 ○ 直方体の面と面の垂直・平行の関係を理解すること (4) いろいろな大きさの直方体の見取図を辺や面の位置関係に着目してかく。 ○ 辺や面の垂直・平行関係をもとに見取図のかき方を理解すること	※ 分担した構成要素の位置関係を調べる活動 (思考・判断) ※ 構成要素の関係を統合する交流 (知識・技能) ※ 直方体の構成要素の関係をもとに見取図を作図する活動 (思考・表現) ※ 直方体の構成要素の関係を比較し，妥当性や一般性の観点から話し合う交流 (調整力)	4 ① ① ① ①
3 ものの位置の表し方を調べる。 (1) 平面で，ものの位置の表し方を調べる。 ○ (横，たて) の要素で表すことができること (2) 空間で，ものの位置の表し方を調べる。 ○ (横，たて，高さ) の要素で表すことができること	※ いろいろなものの位置を表す場 (思考・表現) ※ ものの位置の表し方を一般性の観点から話し合う交流 (調整力)	2 ① ①

本時の目標

- 直方体の展開図の重なり合う辺の長さは等しく、向かい合う面の形が同じであることを理解し、かくことができる。
- ◎ 直方体の面の形を多様につないだ図から正しい展開図を選び、その根拠について話し合うとともに、正しい展開図の辺のつながりや面の位置のきまりを整理することができる。

本時の展開

活動と内容

- 1 直方体の展開図の正誤を判断する原問題を知り、それをつくりかえる本時の問題と解決方法について話し合う。

- (1) 直方体の見取図と複数の展開図を比べて、正しい展開図を見つける着眼点や難しさについて話し合う。

- 直方体の展開図の面や辺に着目すること

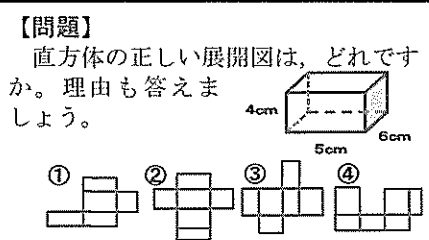
※ 前時までの流れ図を提示して、直方体の展開図の特徴を想起させ、活動の着眼点に気付かせる。

- (2) 問題づくりの条件について話し合い、要素をつくりかえる。

- 辺の長さを変えた直方体の展開図の問題づくりがわかること

※ 直方体の見取図の辺の長さを□で提示することにより、たて、横、高さの辺の長さを変えて問題をつくりかえることに気付かせる。

めあて 形を変えた直方体のてん開図の問題をつくって、とき合い、正しさやあやまりを説明しよう。



- 2 つくりかえた直方体の展開図の正誤問題を、面カードを操作しながらつくり、妥当性と一般性の観点から話し合っ、他のチームに出題する問題を決めるとともに、チーム同士で解き合う。

- (1) 直方体の見取図をもとに、面カードをつくりながら正しい展開図や誤った展開図の問題をつくるとともに、妥当性と一般性の観点から話し合い、出題する問題を決める。

- 直方体のどの展開図も、面をつないでいる辺の長さが等しく、向かい合う面の形が同じことに気付くこと

※ つくった展開図の正誤をチーム活動表を使って分類させる。

- (2) チーム同士でつくった問題を解き合っ、正誤の判断とその根拠を確かめ合う。

- 形や大きさの違う直方体の正しい展開図を判断し、根拠を説明すること

※ つくりかえた展開図の問題を解き合わせることで、正しい展開図を見つける考えの一般化を図る。

- 3 チームで出し合っった展開図の問題について、その正誤と根拠を全体交流で説明し、確かめる。

- 正しい展開図を辺や面の位置に着目して判断すること

※ 形の違う直方体の展開図を複数提示して、正しい展開図を判断させることで考えを強化させる。

チーム活動表	
正しい展開図	正しい展開図
正しい展開図は	
【予想される活動表】	

子どもの思考の流れ

- ・ どの展開図が正しいのかな。
- ・ 直方体の展開図もかけるかな。
- ・ どの問題が難しかったかな。
- ・ 難しい問題にも挑戦してみよう。
- ・ 長さを変えると形が違う直方体がいろいろつくれるね。
- ・ 面の形や数を考えるとよさそうだね。
- ・ 僕たちは、この直方体の問題にしよう。
- ・ この直方体は、どのような長方形の面でできているかな。
- ・ 必要な面カードを作っつないでみよう。
- ・ この面カードはどこにつけようかな。
- ・ この面をここにおいたら、できないね。
- ・ チームの友達が考えた展開図は正しいのかな。確かめ合おう。
- ・ この展開図はここにこの面カードをつけるといいよ。この辺とあの辺がつながるから。
- ・ いろいろな直方体について調べることができたね。
- ・ たくさんの展開図がつくれるんだな。
- ・ 形が違ってても展開図が正しいかはすぐにわかるよ。

第5学年1組 社会科学習指導案

指導者 藤岡 太郎

小 単 元 自然災害からくらしを守ろう

単 元 目 標

豊かな 学力	○ 我が国は自然災害が起こりやすいことや防災のために国や県が対策や事業を進めていることについて資料を活用して調べ、とらえることができる。(知識・技能) ○ 自然災害の防止の重要性を国民生活と結び付けて考え、防災のために必要な行動の仕方を判断することができる。(思考力・判断力・表現力) ○ 自然災害の被害を最小限に防ぐ国や県の対策や事業、自分の身を自分で守る適切な行動のあり方を意欲的に追究することができる。(関心・意欲・態度)
人と 働く力	◎ 万が一の自然災害に対する適切な行動の仕方を追究対象が同質や異質の友達と情報の収集や共有を行いながら、粘り強く考え続けることができる。(行動力)

単 元 計 画

(全8時間) ※ 太枠囲みはチームの活動を中心に行う時間

活 動 と 内 容	「開かれた個」の支援	時
1 我が国で起きた地震や津波、洪水などの自然災害の様子を調べ、学習問題について話し合う。 (1) 我が国のどこで、どのような自然災害が起きたのかや、その被害の様子を映像や地図等の資料を活用して調べる。 ○ 我が国では全国的に地震や津波、洪水や土砂災害が多く、生活に大きな影響を及ぼしていることをとらえること (2) 地震や津波、洪水などが起きやすい原因を調べ、学習問題について話し合う。 ○ 我が国では、自然災害が起こりやすいことを国土の環境と関係付けてとらえ、災害を防止する人々の働きに意識を向けること	※ 東日本大震災の津波の映像やこれまでに我が国で起きた主な自然災害の年表及び、世界と日本の自然災害の数を表す地図や被害(死者数、被害額)の資料提示(知識・技能) ※ 世界の震源地の分布図や洪水が起きやすいことがわかる断面図の提示 (思考・判断・表現)	2 ① ①
2 自然災害を防止する国や県の対策や事業、従事する人々の工夫や努力を調べ、その意味について話し合う。 (1) 地震や津波、洪水などの自然災害を防止する国や県の対策や事業を資料をもとに調べる。 ○ 国や県の対策や事業を「起きる前の取組」「その効果」「その後の取組」の視点からとらえること (2) それぞれの災害における国や県の対策や事業、従事する人々の工夫や努力の意味を話し合う。 ○ 国や県は、地震や津波、洪水などの自然災害から国民の生命や財産を最小限に防ぐために、関係機関と連携しながら対策や事業を進めていることをとらえること	※ 身近な九州北部豪雨の事例学習を一斉で行った後に、追究の視点に沿って地震や津波の事例を選択させる対象の複線化 (行動力) ※ 災害前後の人やものの動きの変化や従事する人々の思いや願いに迫るエピソードの提示 (思考・判断・表現)	4 ③ ①
3 万が一の地震や津波、洪水に対する自分の行為について、実際に被災した人々の対策を調べ、それをもとに話し合う。 (1) 実際に被災した人々の自然災害に対する対策を調べる。 ○ 万が一に備えた自分の行為に必要な情報を収集すること (2) 国や県、被災した地域や学校の対策をもとに、自分の適切な行動の仕方について話し合う。 ○ 日頃から防災に関する情報に関心をもつなど、一人一人の防災意識を高めることが大切であることをとらえること	※ 東日本大震災の被害を福岡市に置き換えた資料提示と先進事例の調査の場の設定 (知識・技能) ※ 自分の行為について適切な判断を促す、立場の異なる他者からの情報収集の場の設定 (行動力)	2 ① ① 本時

本時の目標

- 万が一の地震や津波、洪水の災害に対する自分の行為について、国や県の対策、実際に被災した地域や学校の事例を根拠に、自分の身は自分で守る防災意識を高めることができる。
- ◎ 防災のための自分の行為を追究対象が異なる立場の友達の多様な情報を収集・選択しながら粘り強く追究し続けることができる。

本時の展開

活動と内容	子どもの思考の流れ
1 本時学習で追究する課題について話し合う。 ○ 本時学習の内容や方法について見通しをもつこと めあて 国や県、被害にあった地域や学校の対策をもとに、自分たちはどのような備えをしておくべきか話し合おう。 ※ 前時までの流れ図を提示し、追究する課題について話し合う場を設定する。 2 国や県、実際に被災した地域や学校の事例を根拠に、万が一の災害に備えた自分たちの行為のあり方について話し合う。 (1) 前時までで個で調べた地域や学校の事例を追究対象が同質のチームで出し合う。 ○ 実際に被災した地域や学校の先進事例について、情報を共有すること ※ 資料をもとに、地震や津波、洪水の被害に遭った学校の対策を説明する場を設定する。 (2) 追究対象が異質の相手と調べた先進事例を相互に出し合って比較し、共通点や差異点を話し合う。 ○ 新たな情報をもとに、自分たちの行為を判断する観点を見出すこと ※ 相互に考えの根拠となる事実を説明する活動を位置付ける。 (3) 他チームでの情報収集をもとに、自分たちの行為について話し合う。 ○ 万が一の災害に備えた自分たちの行為を判断すること ※ 国や県、地域や学校の対策の共通点から、自分たちの行為を判断する活動を位置付ける。 3 チームでの話し合いをもとに、万が一の災害に備えた自分の行為を決定し、本時学習のまとめをする。 ○ 日頃から防災に関する情報に関心をもつなど、防災意識を高めていく必要性をとらえること ※ チームでの話し合い結果をもとに、万が一の自然災害に対する自分の行為を意思決定する場を設定する。	子どもの思考の流れ ・ ぼくは、岩手県の釜石小学校の「津波てんでんこ」の事例を調べたよ。 ・ 今日、調べたことを出し合って、災害に備えた自分たちの行動を決めるぞ。 ・ 同じ津波チームの友達はどのような事例を調べたのだろう。 ・ ぼくは津波の場合だけど、地震や洪水の場合はどうだろうか。 ・ 他のチームの考えも聞いてみたいな。 ・ 洪水の被害にあった八女市の小学校では、校区の防災マップをつくっているのか。 ・ 釜石の「てんでんこ避難」と八女の「防災マップ」づくりは、被害を「最小限に食い止める」対策だね。共通しているよ。 ・ これらをまとめると国や県、地域や学校もぼくたちの命を守るために努力しているよ。 ・ だからぼくたちも、自分の身は自分で守る気持ちをもとう。 ・ ぼくは、災害が起きたとき、釜石市や八女市の人たちと同じように、日頃からアンテナを張って、防災の情報を集めるぞ。

チームで遊びをわかりやすく伝えるための表現や表現方法を話し合う外国語活動 第6学年1・3組 外国語活動指導案

指導者 棚 町 尚 子

単 元 互いの国の遊びを伝え合おう ～Let's play together.～

単 元 目 標

豊かな 学力	○ 外国の人と一緒に遊びを楽しめるように、説明するときの表現やジェスチャーなどを話し合い、よりよいものにしていこうとすることができる。 (思考力・判断力・表現力) ○ 仲間と教え合い、外国の人と外国語やジェスチャーなどを使ってコミュニケーションをしようとするすることができる。 (関心・意欲・態度)
人と 働く力	◎ 遊びを紹介するために使えるような表現やジェスチャーなどをチームで話し合っ選んだり、チーム同士で評価を伝え合ったりすることができる。 (対話力)

単 元 計 画

(全5時間) ※ 太枠囲みはチームの活動を中心に行う時間

活 動 と 内 容		「開かれた個」の支援	配時
1 A L TやG Tと一緒に、昔から知られている日本の遊びを体験し、一緒に体を動かして楽しむ。 紹介する遊びの例：おにごっこ・手つなぎおに・こおりおに・だるまさんがころんだ・ハンカチ落とし (1) J T Eの英語での説明を聞いて、鬼ごっこやハンカチ落としなどの遊びをA L TやG Tと一緒に楽しむ。 ○ 動作を表す簡単な表現とジェスチャーでルールを説明して楽しく遊べることに気付くこと (2) G Tに紹介したい遊びをチームごとに決め、遊びのルールを説明するために使えるような表現を選ぶ。 ○ チームごとに留学生と一緒に体を動かして楽しむため、説明するときの表現やジェスチャーの効果を考えること		※ J T Eの説明を聞いて外国の人と一緒に体を動かして、簡単な表現で楽しむ機会を設けること (関心・意欲・態度) ※ 遊びのルールを説明するために使えるような表現をチームで話し合っ選択し、組み合わせることができるようにセンテンスカードを提示すること (対話力)	2 ① ①
2 チームごとに相手によりわかりやすく伝えるための表現や表現方法を話し合い、チーム同士で評価し合う。 (1) コミュニケーション評価表の項目をもとにチーム同士で遊び紹介を見合う。 ○ ジェスチャーの重要性に気付くこと 【資料1 コミュニケーション評価表】 (2) 新たな評価の視点をもってチーム同士で紹介を見合い、よいところやわかりづらいところを伝え合い、チーム内の遊び紹介の改善をする。 ○ コミュニケーション評価表をもとにアドバイスをし、相手に伝わる遊び紹介にしようという意欲をもつこと		※ 遊び紹介の様子をチームで評価し、互いのよいところを見つけるためのコミュニケーション評価表、視聴覚機器の活用 (思考力・判断力・表現力) ※ 他チームの助言をチーム内で共有することができるコミュニケーションノートの提示 (対話力)	2 ① 本 時 ①
3 チームごとに、これまでの改善点を活かしてA L TやG Tと遊びを紹介し合い一緒に体を動かして楽しむ。 (子どもの活動：日本の遊び紹介→外国の遊び体験) ○ チームワークを活かし、協力して遊び紹介をやり遂げた満足感や、A L TやG Tに笑顔で参加してもらったことへの喜びを感じる		※ 外国語で説明をして、一緒に遊ぶ場の設定 (思考力・判断力・表現力) ※ 表現を確かめたり教え合ったりして遊びを紹介すること (対話力)	1

ジェスチャーを加えている。	1	2	3	4	5
相手に聞こえる声の大きさ	1	2	3	4	5
自分の言葉を覚えている。	1	2	3	4	5
※子どもが項目を考えて書き込む。	1	2	3	4	5
※子どもが項目を考えて書き込む。	1	2	3	4	5

【資料1 コミュニケーション評価表】



【資料2 コミュニケーションノート】

本時の目標

- チーム内やチーム間で改善点について意見を言ったり自分が任された表現を繰り返し発音したりすることができる。
- ◎ コミュニケーションノートをチームで共有し、ALTやGTに伝わる遊び紹介に高めるための表現や表現方法について話し合うことができる。

本時の展開

活動と内容	子どもの思考の流れ
1 ALTによる2通りの遊び紹介を見て、相手に遊び方がわかるように伝えるための表現方法を話し合う。 ○ 相手に遊び方がわかるように伝えるためには、言葉に加えてジェスチャーなども大切であることに気付くこと ※ ALTが遊び紹介をしている映像を見せたり使っていた表現や表現方法をカードで提示したりして、どのような表現を付け加えたりどのような表現方法をしたりしていくとよいのか可視化する。 めあて チームで、留学生にわかりやすく遊び紹介をするための表現や方法を付け加えよう。 2 チームで新しく組み合わせた表現や表現方法を使って、相手のことを考えた遊び紹介をチーム同士で見せ合う。 (1) チーム内で、新たに使えるような表現や表現方法を話し合って選び、コミュニケーションノートに付け加えていく。 ○ 相手に確認したり相手を誘ったりする表現の効果に気付くこと ※ ALTの遊び紹介を見てチームごとにまねをしたいところを取り入れていくことができるように、チームごとのタブレットPCで繰り返し見ることができるようにする。 【相手の理解を確認する表現や誘う表現の付け加え】 Let's play "Oshikuramanjyu". First, make circle. Second, hold hands. OK? Third, look outside. Push! Push! OK? Let's play together. 【ジェスチャーの確認】 ①円を作る→②手をつなぐ(ゲストを見てOK?と聞く)→③外側を向く→④押す(ゲストを見てOK?と聞く) 例:おしくまんじゅう (2) ペアのチーム同士でビデオ撮影しながら遊び紹介をし合い、評価表をもとによりよいところや改善点を伝え合う。 ○ 外国の人に遊び方をわかりやすく伝え、一緒に楽しむための改善点に気付くこと ※ GT役と紹介者で役割分担をし、繰り返し試しの活動をさせる際に、説明の順番や付け加えた方がよい表現、ジェスチャーの使い方などアドバイスの観点となる評価表を示す。 【アドバイスの観点】 ・ジェスチャーが大きい・ゆっくり発音しているか ・台詞を覚えているか・説明の順番・ゲストへの確認 など 3 新しい表現や表現方法を付け加えたことで、よくなった点について話し合う。 ○ ALTやGTにわかりやすく遊び紹介をする意欲を高めること ※ 遊び紹介にどのような付け加えをしたのかを視覚化し、よくなっている点やよりわかりやすくなるように変えていきたい点に気付かせ、ALTやGTに紹介する意欲をもつことができるようにする。	子どもの思考の流れ ・ 1回目のラヴィ先生の説明では、よくわからなかったよ。 ・ 2回目はやって見せてくれたからすぐにわかったよ。 ・ ジェスチャーがあるとわかりやすいね。 ・ 言葉の説明だけでは伝わりにくいんだね。 ・ 留学生にラヴィ先生みたいに上手に説明できたら前よりももっと楽しく遊べそうだね。 ・ ここまで伝わっているか"OK?"と聞きながら説明していくとよさそうだね。 ・ ジェスチャーをする人数を増やしてやってみようよ。 ・ 私の評価ペアは〇〇さんね。お願いします。 ・ 私たちの遊び紹介で、わかりにくいと思ったところはありませんでしたか。 ・ 評価してくれた友達が、鬼が交代することがはっきりわかるようにしたらいいと言ってくれたよ。 ・ 私も同じような感想をもらったよ。 ・ 3回やってみることができたね。遊び方が伝わりそうだね。 ・ 今度はすらすら言えるようになりたいね。

一人ひとりが得意なことを活かしながらさげもん作りに取り組む生活単元学習

生活単元3グループ 生活単元学習指導案

指導者

片 小 田 雅 夫
植 小 田 秀 樹

単 元 ひなまつりの たのしい さげもんを つくろう

グループの実態

本グループは、3年生男子1名、4年生男子1名、5年生女子2名、6年生男子2名の計6名で編制されている。物を作る上で緻密な作業が苦手であったり、作業の手順をよく理解しないまま、自分本意に活動に取り組んだりすることがあるが、作りたいもののイメージが明確で興味・関心をもった活動には、集中して意欲的に取り組むことができる。

単 元 目 標

主体性	◎ みんなで楽しいさげもんを作ろうと、自分のできることを活かしながら、さげもん作りに積極的に取り組もうとする姿
自己発揮性	◎ 飾りの作り方の基本的な技能や手順をつかんで、手順を捉えて、自分の飾り作りに取り組んだり、工夫して友達と飾りを合わせたりする姿
成就性	◎ 自分たちの活動やその成果物を友だちや教師に認めてもらうことで、達成感や満足感を味わい、それを自分の言葉で表現する姿

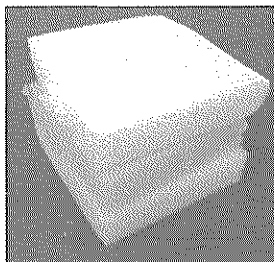
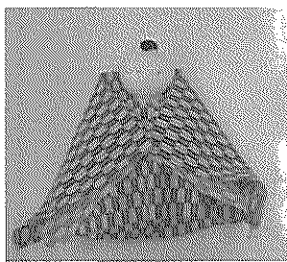
単 元 計 画 (全6時間)

段階	活 動 と 内 容	個の活動を促す支援	時
動機	1 柳川地方でひな祭りのときにひな人形と一緒に飾られているさげもんを見て感想を話し合い、さげもん作りの計画を立てる。 ○ さげもんに興味をもち、さげもん作りの活動への見通しをもつこと	※ 活動の見通しをもたせるための支援 ・モデル作品の提示 ・活動計画を書いたカードの提示	1
熱中	2 自分たちでさげもんを作り、ひな祭りの準備をする。 (1) さげもんを試しに作る。 a グループ b グループ ○さげもんの飾り作りで使う材料の使い方をとらえること ○ さげもんの飾りの作り方の手順をとらえること (2) 大きさや形の異なる飾りをたくさん作って、さげもんを完成させる。 a グループ b グループ ○前時の飾り作りを活かして大きさや形が違う材料の使い方をとらえること ○前時の飾り作りを活かして、大きさや形が違う飾り作りの手順をとらえること (3) みんなで部屋の飾り付けをして、ひな祭りの会場の準備をする。 ○ みんなで作ったさげもんを、見ばえよく飾る方法をとらえること	※ 一人ひとりが自分のよさを発揮してさげもん飾りを作るための支援 ・個別の作業を順序よく行わせるための材料を作業順に配置した場の設定・自分たちが作る飾りのイメージをもたせるためのモデル作品の提示 (a グループ) ・材料の使い方がわかるヒントカードの提示 (b グループ) ・飾りの作り方の手順表の準備	4 ② ① 本時
発展	3 ひな祭りをを行い、見に来てくれた人たちにさげもんについて紹介する。 ○ 飾りを見に来てくれた人たちの楽しそうな表情を見たり感想を聞いたり、教師からの賞賛の言葉を聞いたりすることで成就感や満足感を味わうこと	※ 達成感や満足感を味わわせるための支援 ・招待した人たちの感想の紹介 ・教師の賞賛の言葉かけ	1

本時の目標

- さげものの作り方の手順が分かり、進んでさげもん作りに取り組むことができる。
- 自分の仕事を理解して、さげもんを作る活動に見通しをもち、友達と協力しながら最後まで活動に取り組むことができる。
- (a グループ)前時に行った飾り作りの材料の使い方を活かして、大きさや形の異なる飾りを作ることができる。
- (b グループ)前時に行った飾り作りの手順を活かして、大きさや形の異なる飾りを作ることができる。
- できた作品を見て活動を振り返り、活動に取り組んだことへの達成感や満足感をもつことができる。

本時の展開

活 動 と 内 容		個の活動を促す支援
1 前時までに作ったさげもとモデル作品を比べて、本時のめあてについて話し合う。 ○ モデル作品には飾られているがまだ作っていない飾りを作り、みんなでさげもんを完成させたいという思いをもつこと めあて かざりを ふやして さげもんを かんせいさせよう。 2 前時に作ることができなかったモデル作品の中にあるさげもんの飾りを作る。 (1) ひし餅とひな人形の2つの飾りを試しに作る。  ひし餅飾り  ひな人形飾り		1 本時活動への意欲と具体的な見通しをもたせるための支援 ※ 前時までの自分たちの作品とモデル作品の比較 ※ 完成させるために必要な材料の提示 2 一人一人がよさを発揮しあって協同するための支援 ※ 活動の流れや作り方の手順をとらえやすい机と教材・教具の配置 ※ 作る飾りのイメージをつかませるモデルの提示 ※ 大きさや形を変えるための芯材などの準備 ※ 活動が停滞したときの、目印や補助具などの個別の支援の準備 ※ それぞれのグループごとの支援
a グループ	b グループ	(a グループ) ・材料の使い方がわかるヒントカードの提示 (b グループ) ・飾りの作り方の手順表の準備
○飾り作りに必要な、貼る・巻く・描くなど基本的な技能をとらえること	○一つの飾りを作るために、複数の材料を加工するための手順をとらえること	
(2) これまでに作った飾りとは、形や大きさが異なるさげもん飾りを作って、ひもにつなぐ。		
a グループ	b グループ	
○異なる形や色、大きさの材料の中から、飾りに使用する材料の組み合わせ方を考えること	○複数の飾りを、それぞれの作り方の手順に沿って作っていく方法をとらえること	3 達成感や満足感を味わわせる支援 ※ 感想を発表し合う場の設定 ※ 教師からの活動と作品への賞賛の言葉かけ
3 みんなで一緒に作った大きなさげもん飾りを見たり、教師からの称賛の言葉を聞いたりして、活動を振り返り、がんばったことやうれしかったことを発表する。 ○ 友達と力をあわせて、さまざまな飾りをたくさん作り、ひもにつないで、一つの大きなさげもんを完成させることができたことの達成感や満足感を味わうこと		

見つけたお話のとおきをおきペアでつくり、紹介の仕方を練り上げる国語科学習
第1学年2組 国語科学習指導案

指導者 大久保 良 博

単 元 ペアで つくろう おはなししょうかい ブックトーク

単 元 目 標

豊かな 学力	○ 自分で見つけた昔話について、登場人物の行動や会話に着目してあらすじをとらえたり、お話同士の共通点や相違点に気付いたりすることができる。(読む能力) ○ 昔話を讀んだり紹介したりして、伝統的な言語文化に触れることの楽しさを味わうことができる。(伝統的な言語文化に関する事項) ○ 進んで昔話を見つれたり紹介したりすることができる。(関心・意欲・態度)
人と 働く力	◎ 紹介する内容や順序について、自分の考えを伝えたり、ペアの友達の考えを聞いたりしながら、お話紹介プランを選択・決定することができる。(対話力)

単 元 計 画 (全 13 時間) ※ 太枠囲みはチームの活動を中心に行う時間

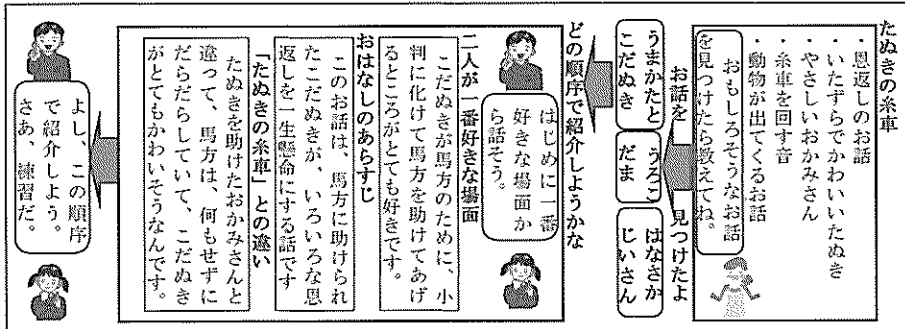
活 動 と 内 容	「開かれた個」の支援	配 時
1 読み聞かせ名人による教材文のブックトークを聞く。 (1) 「たぬきの糸車」の紹介や読み聞かせを聞く。 ○ お話を聞いておもしろいと感じたり、自分たちもお話を紹介したいと思ったりして活動意欲をもつこと (2) 教材文「たぬきの糸車」のあらすじを読み取ったり、一番好きな場面について話し合ったりする。 ○ 「誰が」「何を」「どうした」お話なのかに着眼しながらあらすじをとらえたり、好きな場面のわけを友達に話したりできること	※ ブックトークのイメージをつかませるための読み聞かせ名人の招聘 (関心・意欲・態度) ※ 「たぬきの糸車」のあらすじをとらえたり、好きな場面について話し合ったりさせるための挿絵の提示 (読む能力)	4 ① ③
2 ペアの友達と協力してお話紹介をつくる。 (1) 自分で選んだお話を読み、好きな場面やとおきのおもしろさを見つける。 ○ 自分が選んだお話のあらすじをとらえたり、「たぬきの糸車」との相違点を見つれたり、一番好きな場面を探したりできること (2) 同じテーマのお話を選んだ友達とお互いのとおきについて話し合い、ペアでのお話紹介をつくる。 ○ 自分のとおきをおきに話したり、友達のとおきをおきをおきに話したりして二人のとおきをつくり、あらすじ、「たぬきの糸車」との相違点、一番好きな場面の3つの内容をどのような順序で紹介するかをペアで決めること	※ 幼稚園の友達に読み聞かせを行うという機会の設定(関心・意欲・態度) ※ 特徴的な表現やあらすじが関連したお話の提示 (読む能力) ※ お話紹介に見通しをもたせるための紹介プランモデルの提示(言語文化) ※ 紹介プランの操作化、可視化するための短冊とボードの準備 (対話力)	6 ③ ③ 本 時 2 ／ 3
3 幼稚園の友達にお話を紹介するブックトーク「おはなしおとどけ会」を開いて、自分たちのお話を披露する。 (1) ペアを考えてつくってきたブックトークの発表で、幼稚園の友達に自分たちの成果を披露する。 ○ 話し合って決めた順序や役割分担に沿って、お話のとおきやあらすじを紹介したりしてお話紹介ができること (2) 「お話おとどけ会」で紹介したお話を図書室に展示したり、他のペアの友達と交換して読み合ったりする。 ○ 「お話おとどけ会」で紹介したお話の中から、自分も読んでみたくなったお話を読むことができること	※ 自分たちで考えたブックトークを伝える「お話おとどけ会」という発表の場の設定 (関心・意欲・態度) ※ 学級全体でお話を紹介し合い、様々なお話を読んで昔話に親しませるための読書会の設定 (伝統的な言語文化)	3 ② ①

本時の目標

- 自分たちのおすすめのお話をおもしろいと感じてもらうために、見つけたとおきをどのような順序で紹介するか話し合い、お話紹介の内容をつくることができる。
- ◎ ペアの友達とお話のとおきを見合って、お互いのとおきの似ているところや違うところについて話し合い、協力してお話を紹介することができる。

本時の展開

活動と内容	子どもの思考の流れ
1 自分たちのお話紹介や本時学習の見通しについて話し合う。 (1) 教師の3つの紹介モデルを比べて、紹介する順序の効果について話し合う。 ○ あらすじ、「たぬきの糸車」との相違点、好きな場面の3つを紹介する順序の違いで、とおきの伝わり方が変わることに気付くこと ※ 紹介する順序により伝わり方が違うことに気付かせるために、教師による3つの紹介モデルを提示する。 (2) 紹介プランづくりの見通しについて話し合う。 ○ お互いのとおきメモを見合い、二人が見つけたとおきの共通点や相違点に気付くこと ※ 前時に見つけたとおきを記したとおきメモを提示する。 めあて おはなしの とっておきの おもしろさが つたわる じゅんじょを ペアの ともだちと きめよう。 2 お話のとおきの紹介の順序についてペアで紹介し合う。 (1) 教師のモデルをもとに、紹介の順序の効果について話し合う。 ○ 3つの内容のどれから紹介するのかで、初めに全体像をつかませたり、聞き手を惹きつけたりするなどの効果が違うことに気付くこと ※ 3つのモデルを比較しやすいように、類型化した板書を提示する。 (2) ペアの友達とお話の紹介の順序について話し合う。 ○ 3つの紹介内容をどのような順序で紹介するかを順序の効果を考えながら、ペアで決めること ※ 紹介の順序を決定するために、3つの内容を記した短冊とマグネットボードを各ペアに準備する。	・ 最初にあらすじから紹介すると、お話の内容がわかりやすいからうまく伝わりそうだ。 ・ 一番好きな場面を最初に紹介すると、どんなお話なのか知りたくなるからいいかもね。 ・ ぼくたちのとおきはどのような順序で紹介しようかな。 ・ 先生のモデルのように紹介の順序を工夫しよう。 ・ 初めにあらすじを言えば、どのようなお話なのかがわかってもらえるね。 ・ 一番好きな場面を最初に話そう。きっと、ぼくたちの紹介をわくわくしながら聞いてくれるよ。 ・ 「たぬきの糸車」との違いを発見したことを最初に紹介しよう。どのようなお話なのか考えながら最後まで聞いてもらえそうだな。 ・ よし、わたしたちは好きな場面、あらすじ、違いを見つけたことの順序で紹介しよう。 ・ 二人で決めた順序に沿って練習しよう。 ・ わたしたちがつくったお話紹介を幼稚園のみんなは気に入ってくれるかな。
3 話し合って決めた順序に従って、ペアの友達と練習する。 ○ 自分たちで決めた順序に沿ってお話紹介を練習してみることで順序を工夫すれば伝わり方も変わってくることを実感すること ※ 学級全体で「お話おとどけ会」やペアでの学習に対する意欲を喚起するために、お話紹介の順序をいっしょに考えたり、練習したりして感じたことを交流する場面を設定する。	



チームで情報収集したことを活かして、自己の食生活を見直す学級活動

第2学年1組 学級活動指導案

指導者 谷岡良寛(T1)・藤井裕希(T2)

題材 チームで考えよう!元気がでる朝ごはん

題材目標

豊かな 学力	○ 朝食摂取の大切さや栄養のバランスについて理解したことをもとに、バランスのよい朝ごはんを小集団チームで考えることができる。(思考力・判断力) ○ 自分の食生活に関心をもち、進んで自分にあった朝ごはんのメニューをつくり、家庭で実践することができる。(実践力)
人と 働く力	◎ チームの友達と役割分担し、それぞれが選んだ朝食のメニューをもちより、話し合っ てバランスのよい朝食のメニューをつくり上げることができる。(調整力)

題材計画

(全2時間)※ 太枠囲みはチームの活動を中心に行う時間

活動と内容	「開かれた個」の支援	時
1 自分たちの食生活について、アンケート調査から振り返り、食生活上にかくれている課題について話し合う。 (1) 事前の食生活に関するアンケート調査から、自分たちの食生活の様子を話し合う。 ○ 自分たちの日常の給食の様子や食事のとり方についての実態を共通理解すること (2) 食べ物のもつ赤・黄・緑の働きについて知り、どんな食品があるか話し合う。 ○ 学校給食をもとに食べ物の3つの働きを整理しながら理解すること	※ 個人の一週間分の朝食摂取の様子と学級全体の傾向を調べるためのアンケート調査の実施 (思考力・判断力) ※ 日常の給食の様子から食物の3つの働きについての理解を深める、栄養教諭の専門的な話 (思考力・判断力)	1 課 外
2 朝食を摂取する大切さを知り、どのような朝食を摂取すればよいのか、学級全体やチームで話し合う。 (1) 朝食の役目やどのような朝食がよいかを栄養教諭から聞き、バランスのよい朝食について話し合う。 ○ 栄養教諭の話を聞くことで、朝食摂取の大切さを知り、朝食を摂取することへの課題意識をもつこと (2) チーム内で分担しながらバランスのよい朝食を考えるとともに、バランスのよい朝食メニューを自己決定する。 ○ チーム内で主食・主菜・副菜・汁物のコースに分かれ、食品を選び、チームにもちより話し合いながらバランスを考えた朝食メニューをつくり、自己決定すること	※ 朝食と体の健康との関係を表した資料の提示 (思考力・判断力) ※ 食生活に対する違う課題をもった子どものチームによる話し合い(調整力)	1 本 時
3 自己決定したバランスのよい朝食メニューをもとに、家族と協力しながら実践する。 (1) 自己決定した内容を家族に働きかけ、家族に協力してもらいながら日曜日の朝食をつくる。 ○ 家族に対して積極的に働きかけながら、自分が中心となって日曜日の朝食づくりに参画していくこと (2) 朝食づくりを振り返り、自分で朝食を考える楽しさを感じるとともに、実践の評価をする。 ○ 朝食づくりをの実践したことを、保護者とともに振り返り、評価すること	※ 一人でも簡単につくることができ、朝食に対する実践意欲を高めるレシピや作り方の提示 (実践力) ※ 日常の朝食の様子をふり返ることができる自己評価表の提示と相互評価の場の設定 (思考力・判断力・実践力)	課 外

本時の目標

- 朝食のもつ大切な役目を栄養教諭の話や資料から理解し、自分の朝食を見直そうとする意欲を高め、自分の朝食メニューを自己決定することができる。
- ◎ 体に必要な赤・緑・黄の栄養バランスを考えて、チームで役割分担しながらメニューを集め、取捨選択しながら朝食メニューをつくることができる。

本時の展開

活動と内容	子どもの思考の流れ
1 朝、保健室に来室する子どもの朝ごはんの様子を見て、朝ごはん と体の様子との関係について考え、朝ごはんを食べることの大切さについて話し合う。 ○ 朝ごはんの内容と体調不良とが関係していることに気づき朝ごはんをとることの大切さを感じる ※ 体調不良で保健室に来室している子どもの様子と朝ごはんの内容の関係に目を向けさせ、自分たちの朝ごはんの様子や事前に学習した栄養バランスについて考えさせる (T1)。 めあて 朝ごはんのやく目を知り、朝から元気にスタートできる自分に合った朝ごはんを見つけよう。 2 朝ごはんの役目やよい朝ごはんの内容について知り、よりよい朝ごはんにするための方法について話し合う。 (1) 朝ごはんのもつ大切な役目について栄養教諭から聞き、どのような朝ごはんがよいのかを話し合う。 ○ 朝ごはんの役目として、体の3つのスイッチ(脳・おなか・体)が入ることを共通理解すること ※ 朝ごはんが体に与える影響や体温と朝ごはんの関係などの掲示資料を使い、朝ごはんには、3つの役目があることを理解させ、朝ごはんを食べることの大切さを感じ取らせる (T2)。 (2) どうすればバランスのよい朝ごはんになるか、チームで話し合い、つくり上げたおすすめの朝ごはんをチームごとに発表する。 ○ 事前に理解した赤・黄・緑の食品の働きをする食品と関係付けながら、チームでバランスのよい朝ごはんのメニューを話し合って決めること ※ チーム内で分担しながら主食、主菜、副菜、汁物の料理の情報を各コーナーから集め、バランスのよい朝食のメニューを完成させ、栄養教諭から評価する (T2)。 3 チームで作り上げた、バランスのよい朝ごはんのメニューをもとに、自分に合った朝ごはんを自己決定する。 ○ 自分の生活に合った、バランスのとれた朝ごはんメニューを、チームでつくった朝ごはんメニューをもとに、自己決定すること ※ 自己決定した朝ごはんメニューを、家族(主に朝食をつくっている人)へ伝えるとともに、栄養教諭が赤・黄・緑の働きをする食品別に作成したおすすめレシピ集を配付することで、日曜日に家庭で実践できるようにする。	・ 朝から保健室に、体の調子が悪くて行く人は、朝ごはんを食べてなかったり、黄色の働きをする食べ物だけの人が多いんだな。 ・ 自分たちの朝ごはんの内容と保健室に行く人は似ているな。 ・ 元気になる朝ごはんってどんなのだろう。 ・ 朝ごはんには、どんな役目があるのかな。 ・ 朝ごはんを食べると体を動かす3つのスイッチが入るんだ。 ・ 朝ごはんを食べることは、体調をよくするために大切なんだね。 ・ どんな朝ごはんがいいのかな。友達と一緒に考えてみよう。 ・ 緑の食品がないから緑の食品をとるにはどんなメニューがいいかな。コーナーに行って探してみるね。 ・ みんなが集めてきたメニューを合わせてみよう。これでいいのか栄養教諭の先生に聞いてみよう。 ・ 他のチームのおすすめも取り入れて、ぼくのメニューを作ろう。 ・ 今までなかった緑の働きをする食品を入れたからバランスがよい朝ごはんになったよ。

チームで論理的に思考し、重さの意味や比べ方を体験的に身に付ける算数科学習
第3学年1組 算数科学習指導案

指導者 弘 松 英 樹

単 元 チームでちょうせん! 重さくらべゲームをしよう

単 元 目 標

豊かな 学力	○ 重さの特徴や単位がわかり、計器などを用いて正しく重さの比較や測定ができる。 (知識・技能) ○ 3つの重さを比較したり、重さを別の単位に置き換えたりする重さの比較や測定の仕方を筋道立てて説明することができる。 (思考力・判断力・表現力) ○ 身の回りの物の重さに関心を持ち、進んで調べることができる。 (関心・意欲・態度)
人と 働く力	◎ 重さの比べ方や重さに関する問題について、役割を決めて活動したり、それぞれの結果を総合してチームの結論をまとめたりすることができる。 (調整力)

単 元 計 画 (全8時間) ※ 太枠囲みはチームの活動を中心に行う時間

活 動 と 内 容	「開かれた個」の支援	配時
1 チームをつくり、いろいろな物の重さを比べて「重さくらべゲーム」を行う。 (1) チームを決め、いろいろな身近な物の重さの比べ方を話し合う。 ○ 重さは見た目や持った感覚だけでは正確に分からず、天秤を使えば、比べられることがわかること (2) 天秤で重さを比べ、重い順番に並べる「重さくらべゲーム」を行う。 ○ 筋道立てて重さを比べれば、推移律の考えを用いて複数の重さの関係がわかることに気付くこと	※ 重さは見た目の大きさとは関係がないことがわかるような多様な重さ比べの対象の準備 (知識・理解) ※ チームで3つ以上の重さを比べる比べ方を話し合い、解決の過程をまとめていく協働的な活動の設定 (調整力)	3 ② ① 本時
2 チームで重さの単位を使って、身近な物の重さを調べ、「重さあてゲーム1」を行う。 (1) 身近な物を小さな重さのいくつ分で量り、重さを当てる問題をつくる。 ○ 任意単位のいくつ分や、1g(1円玉)という単位のいくつ分で重さが数値化できることがわかること (2) 身近な物の重さを見積もり、gやkgの単位で重さを表して当てる問題を他のチームと出題し合う。 ○ kgの単位や量り方が分かり、100gや1kgの重さの量感を目安に、重さを見積もること	※ 重さを任意単位に置き換えて数値化したり、目安となる量感をもって判断したりするための媒介物の準備 (思考力・判断力・表現力) ※ チームでより難しい問題を考えたり、答えを予想したりする協働的な活動の設定 (調整力)	3 ① ②
3 チームで重さを計算する問題をつくり、身の回りにある、さらに重い物の重さを考える「重さあてゲーム2」を行う。 (1) 1000gより重い重さになるような重さを合計する問題や重さを差し引いて考える問題をつくる。 ○ 同じ単位であれば重さに加法性が成り立つことや、1tの単位があることがわかること (2) 重さを計算したり、単位を置き換えたりして答える問題を他のチームと出題し合う。 ○ 重さの単位換算などの知識を進んで用いて、重さに関する問題を意欲的に解決すること	※ 実際には測定できないような重さも単位換算をすることで重さを実感できるような問題設定 (関心・意欲・態度) ※ これまでの学習を活かしてより難しい問題をチームで考えたり、答えを予想したりする協働的な活動の設定 (調整力)	2 ① ①

本時の目標

- $A > B$, $B > C$ ならば $A > C$ という推移律の考えを用いて、チームで合意しながら重さの順番を並べ替えたり、確定したりして、その過程をまとめることができる。
- ◎ 友達の意見を傾聴したり、友達の発言に同意や質問をしたりして、チームの中で役割分担して行ったことを合わせながら、結論を導くことができる。

本時の展開

活動と内容	子どもの思考の流れ
1 8個のおもりを手に取り、重い順番に並べられる方法について、チームで話し合う。 (1) 手で持ち比べてみて、順番が正しく並べられそうか話し合う。 ○ 手で持っただけでは比べられないので、天秤で比べた方が分かりそうだとすることに気付くこと ※ これまでの学習で天秤を用いたことを想起させる。 (2) チームでおもりを重い順番に並べる方法を見つけることを目標にして、本時のめあてを話し合う。 ○ たくさんのおもりを比べる難しさを感じ、チームで協力することの必要性に気付くこと ※ 1チームに2つの天秤とチームボードを与え、チームでの活動の手順をチームで考えさせるようにする。 めあて チームできょう力して、おもりを重いじゅんにならべる方ほうを見つけよう。 2 おもりの数を4個から6個へと増やしながら、チームで協力して重さを比べ、重い順に並べ替える。 (1) 4個のおもりを役割分担して、重い順に並べ替え、その手順をチームでまとめる。 ① 4個を手で持ち比べ、重い物と軽い物に2分する。 ② 重い物同士と軽い物同士を、それぞれ天秤で比べる。 ③ 重い物と軽い物の境目を天秤で比べて確かめる。 ④ 4個を重い順に並べた順番を確定する。 ○ 役割と手順を意識して、筋道立てて重さの順番を調べること ※ チームでの解決手順を、チームボードに表現させる。 (2) おもりを6個に増やした場合をチームで役割分担して調べ、重い順に並べ替える。 ○ 6個を2分した3個の重さの比べ方を考え、推移律の考えを用いれば、全ての場合を調べなくてもよいことがわかること ※ 手順通りに、まず、おもりを2分することを確認し、その後をチームで解決させることで考え方を活かせるようにする。 3 重さ比べの仕方を全体で交流し、わかったことを活かして8個の重さ比べをする。 ○ 重さの比べ方を振り返り、$A > B$, $B > C$ ならば $A > C$ といった考え方に気付いたり、おもりが増えてもチームで協力して解決できたことに達成感を感じたりすること ※ 学習内容の視点と、チームとしての活動の視点から自己評価をさせる。	・ 今日は8個の物の重さを比べるんだ。できるかな。 ・ 手で持っただけでは比べにくいね。 ・ 天秤を使ったら、比べられるんじゃない。 ・ こんなにたくさんものを重い順番に並べるのって難しいね。 ・ チームで協力して並べ方を見つけよう。 ・ 8個は難しいから、4個の場合で考えてみよう。 ・ まず手で持って、重そうな物と軽そうな物に分けてみよう。 ・ 2人ずつで分けて調べたら、協力できるね。 ・ 重いグループと軽いグループで調べたから後は、その間があつてるか確かめよう。 ・ できた！順番があつていたよ。 ・ 4個は簡単だったけど、おもりを増やしたら難しそうだなあ。 ・ 重い物と軽い物3個ずつになるよね。3個の比べ方を考えよう。 ・ チームで考えた比べ方をしていけば、8個の場合もきっと比べられるよ。 ・ チームで協力してたくさん重さの比べ方が見つけれられたね。

水が姿を変える実験のデータを共有し、客観的に自然事象のきまりを見出す理科学習 第4学年1・3組 理科学習指導案

指導者 今村 光宏

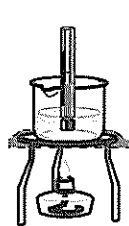
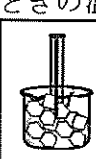
単元 チームで発見 水の変化

単元目標

豊かな 学力	○ 空気を冷やすと水蒸気が水に変わることができる。(知識・技能) ○ ものとの温度差を利用して水蒸気を水に戻し、その現象について実験の提示や図、言葉で説明することができる。(思考力・判断力・表現力) ○ 水蒸気を水に戻す実験を意欲的に行うことができる。(関心・意欲・態度)
人と 働く力	◎ 各個人で水蒸気を水に戻す方法を試し、得られたデータをチームに進んで提供したり、友達の考えを聞き、共通点についてまとめたりすることができる。(対話力)

単元計画

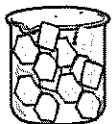
(全8時間) ※ 太枠囲みはチームの活動を中心に行う時間

活動と内容		「開かれた個」の支援	総時
1 水を温め続けたときの変化について調べる。 (1) 水の温度を高くしたときの温度と状態変化の様子について調べる。 ○ 水は100℃付近で沸騰し、温度はそれ以上上がらないこと (2) 水をあたためたときに発生する泡について調べる。 ○ 水をあたためたときに出る泡は水が水蒸気に変化したものであること	 ビーカーに入れた水を温め、温度変化と状態変化について調べる。	※ 氷をあたため水に変化させ、蒸発していくまでの事象提示 (関心・意欲・態度) ※ 水が沸騰するまでの温度変化と状態変化を見る視点の提示 (知識・技能)	2 ①
		※ 泡を集めて水になった状態を共通理解する話合いの設定 (対話力)	①
2 水を冷やしたときの変化について調べる。 (1) 水の温度を低くしたときの温度と状態の変化について調べる。 ○ 水は、温度を下げると0℃付近で凍り始め、全て凍ると更に温度が下がること (2) 水の温度を下げ、全ての水が凍ったときの体積の変化について調べる。 ○ 水は温度が下がり、氷になったときには見た目の体積が大きくなること	 氷水に食塩を混ぜ、試験管の中の温度変化と状態変化を調べる。	※ 温度変化をグラフ化させ、水の温度が下がったときのものの共通点について結論を共有する活動の位置付け(知識・技能) ※ 各自の実験結果の考察を出し合い、共通点から水が凍るときに規則性を温度と状態の視点から明らかにする活動の設定 (対話力)	3 ② ①
		※ 空気中における水蒸気の様子をイメージ図による可視化し、共通理解する活動 (知識・理解)	3 ①
3 空気中の水や水蒸気について調べる。 (1) 常温における水の蒸発と、空気中の水蒸気の状態について調べる。 ○ 常温でも水は蒸発し、空気中には水蒸気があること (2) 窓に結露がついたり、氷を入れたコップに水滴がつくことなどのことから、空気中に水蒸気があることを確かめる方法について調べる。 ○ 空気中の水蒸気は、温度の変化によって水に戻ったり、再び水蒸気になったりして、その姿を変えるという客観的なきまりを見出すこと		※ 水蒸気が水に戻る現象の図による可視化 (思考力・判断力・表現力) ※ ソロでの実験とチームでの共通点を見出す話合いの位置付け (対話力)	2 本時 2 ／ 2

本時の目標

- ものと空気の温度差に着目しながら実験を行い、水の状態変化について実験を提示し合ったり説明し合ったりすることで、水蒸気が水に戻るときのきまりを客観的に見出すことができる。
- ◎ 各個人がものを冷やして空気中の水蒸気を水に戻す方法を試した結果から、お互いの見出したきまりを出し合い、水蒸気を水に戻すときのきまりについて検討することができる。

本時の展開

活動と内容	子どもの思考の流れ
1 身の回りでものがくもることの原因と、くもる原因を調べる方法について話し合う。 ○ 空気中の水蒸気を水に戻すという目的を共有し、チームのメンバーが何についてどのような方法で調べるか共通理解すること ※ ものがくもっている様子の提示と、チームのメンバーでくもりやすい実験方法を検討する活動を位置付ける。 めあて 自分で考えた空気中の水じょう気を水にもどす方法について説明し、チームで考えをまとめよう。 (ここまでを前時に取り扱う)	・ 家の窓などはどうしてくもるんだろう。 ・ 水が蒸発した水蒸気が空気中にあるね。 ・ 水蒸気を水に戻せばいいんじゃないかな。 ・ 水をあたためると水蒸気になったから逆に冷やせばいいよ。
2 空気中の水蒸気を水に戻す方法についてチームで検討する。 (1) 各個人でものと空気の温度差を利用して、空気中の水蒸気を水に戻す方法をチーム内で提示する(モニタリング)。 ○ 空気とものの温度差と水の状態の関係に着目すること (実験の例)  ガラス板を冷やし、空気中での変化を調べる。  ガラスのコップに氷を入れ、変化を調べる。  鉄の板を冷やし、空気中での変化を調べる。 ※ 室内を高温、多湿の状態にし、ものと空気の温度差がある状態で実験ができるようにする。 (2) チーム内で提示された実験結果をもとに、水蒸気を水に戻す方法についての考えをまとめる(アドバイス、相互調整)。 ○ 各個人で行った実験方法と結果についての妥当性と共通点について共通理解すること  鉄の板を冷やしたけどくもらないよ。水蒸気を冷やしたら水に戻と思うんだけど。  もっと冷たく冷やしてみるといいんじゃない？冷やす時間を長くしてみようよ。 モニタリング→アドバイス、相互調整 ※ 空気中の水蒸気が水に変化する様子を実験の再現やイメージ図で可視化させ、話し合わせる。	・ ぼくはガラスの板を冷やして空気中におくともりました。これは空気中の水蒸気が冷やされて水に戻ったんだと思います。 ・ 水をあたためると水蒸気になって冷やすと水に戻るということから確かに水蒸気が水に戻ったと言えるね。 ・ ぼくはまだくもらせることができていないけど、冷やし方が足りなかったのかもしれない。もう一度試してみよう。 ・ みんなの見つけたきまりの同じところは、空気中の見えない水蒸気は気体だから、温度を下げて液体の水に戻すと、細かい水滴になってものをくもらせるということだね。 ・ 空気よりも、ガラスや鉄の板などのものを低い温度まで冷やせば、水蒸気が冷やされて水に戻るんだね。
3 水蒸気が水に戻るためのきまりについて学級全体で話し合う。 ○ チームで見出した方法のおかげで、空気中の水蒸気を水に戻すことができたという目的を達成したと感ずること ※ チームごとに出し合ったきまりの共通点について、空気とものの温度差を視点に話し合わせる。	

個々が見え方を工夫し、チームの表現をつくりあげる図画工作科学習
第5学年2・3組 図画工作科学習指導案

指導者 合 田 賢 治

題 材 ドミノ・デ・アート

題 材 目 標

豊かな 学力	○ 身に付けてきた造形経験をもとに、自分のつくりたいドミノアートの具体的イメージをもち、表現することができる。(創造的な技能) ○ 材料・用具の使い方、動き方、表現と表現とのつなぎ方について試行錯誤しながら考え、様々な表し方を工夫したり、作品のよさや美しさを感じ取ったりすることができる。(発想・構想、鑑賞の能力) ○ 材料や用具の特徴を考えてつくった経験を生かし、楽しんで場面を表現することができる。(造形への関心・意欲・態度)
人と 働く力	◎ 友達のアイデアのよさを採り入れ、つくりかえながら表現を調和させることができる。(調整力)

題 材 計 画

(全9時間) ※ 太枠囲みはチームの活動を中心に行う時間

活 動 と 内 容	「開かれた個」の支援	配 時
1 「ドミノ・デ・アート」について意見を出し合う。 (1) ドミノ倒しの参考映像を見て、表すドミノアートの方向性について話し合う。 ○ どのようなテーマのドミノアートをつくるか、考えていることを説明すること (2) 同様のイメージをもった友だちとチームをつくり、テーマを決めて、アイデアを練り、交流する。 ○ 構成、つなぎ方について材料の使い方や表現の仕方を発想・構想すること	※ わかりやすく、活動の見通しが立てやすい参考映像の提示 (関心・意欲・態度) ※ 板片が倒れた時に現れる絵の見え方やつなぎ方について話し合う構想活動の位置付け (思考力・判断力・表現力)	1
2 チームで協力してドミノ型板片をつくる。 (1) 自分たちのつくりたいドミノアートについて、簡単な絵に表す。 ○ 彩色した板片を倒して表すということを考え、どのような表現ができそうかイメージしたことを表出すること (2) チーム内でアイデアを交流する。 ○ 観点ごとに思いついたアイデアを共有すること (3) 材料の特徴を考えたりモデルで確かめたりしながらドミノ型板片に彩色を行う。 ○ 自他のアイデアを活かして倒れたときに絵が現れるように、ドミノピースの配色を工夫すること	※ 絵の見え方やつなぎ方に限定したモデルを試しながら行う構想活動の位置付け (思考力・判断力・表現力) ※ 観点ごとにアイデアを交流する鑑賞活動の設定 (対話力) ※ 見え方を確認するためのモデル操作の位置付け (思考力・判断力・表現力)	5 ① ① ③
3 板片を並べて、互いの表現のよさについて話し合う。 (1) チームの表現が成功するように、それぞれのソロ表現のパーツを並べて配置してみる。 ○ 倒れたときに絵が現れるように試しながら配置を調整しそのよさを共有すること (2) それぞれのチームのソロ表現を連結し、ドミノ倒しを行い、表現意図を説明し合いながら鑑賞する。 ○ 協力して練り上げたソロ表現や全体の一体化したチーム表現の構成、つなぎ方のよさに気付くこと	※ よりよくつくりかえたり、調和させたりするための他チームの表現の映像提示 (思考力・判断力・表現力) ※ それぞれのチームの表現意図を説明した後に行う作品を相互鑑賞する場の設定 (知識・技能)	3 ① 本 時 ②

本時の目標

- 板片の構成，つなぎ方を見通してモデルを使ったり，映像を参考にしたりして試行錯誤しながら板片の動きを工夫することができる。
- ◎ 構成，つなぎ方について思い付いた考えの交流を通して，アイデアのよさや面白さに気付いたり，自分たちの表現に採り入れたりすることができる。

本時の展開

活動と内容	子どもの思考の流れ
1 参考映像を見てドミノアートづくりについて話し合う。 ○ 板片の構成，つなぎ方など，表現上の効果を高める要素について考えること ※ 構成，つなぎ方などのドミノアートづくりのポイントが明らかで表現に活かしやすく，見通しが立てやすい2種類の参考映像を比較提示する。 板片の構成…板片が倒れた時に現れる絵の色や形の見え方の工夫 つなぎ方…ドミノが連続的に倒れていく成功率を高める工夫 めあて 板片の構成，つなぎ方などを考えて，チームで表したいドミノアートになるように並べよう。 2 板片の構成，つなぎ方を考えながらドミノアートづくりを行う。 (1) 色や形の構成，ドミノ倒しが成功するつなぎ方などを考えて，チームの表現について話し合う。 ○ 板片が倒れることでドミノアートがよく見えるような板片の構成，つなぎ方などの観点について各自で考えること ※ 板を操作させたり，モデルで確認させたりして試行錯誤しながらよりよい表現を見つけさせる。 (2) チームの表現が成功するように各自でパーツの並べ方を工夫しながら配置する。 ○ 倒れたときに絵が現れるように試しながら配置を調整し，その並べ方のよさを共有すること ※ 見え方を確かめるため，映像やモデルを活用させたり，相互鑑賞を適宜設定したりする。 3 どのようなドミノアートづくりをねらったのか表現意図を説明し合い自他の作品のよさや面白さについて話し合う。 ○ お互いの板片の構成，つなぎ方に焦点を当てて交流する中で自他の発想のよさに気付くこと ※ チーム内で協力して考えたアイデアが活かされたところについて振り返らせ，自分たちが考えた図柄や構成，つなぎ方の面白さを説明させる場面を設定する。	子どもの思考の流れ ・ 前の時間は各自で考えた図柄を活かして色をつけてきたから，自分たちの作品を早くつくりたいな。 ・ 参考映像みたいに，板がうまく倒れて絵がはっきり見るようにつくりたいな。 ・ ソロ表現の連結部分は下側に位置させた方が順番に絵が見えて面白そうだな。 ・ かなり近づけて置かないと最初から絵が見えてしまうね。ピースとピースの間は板2枚分ぐらいがいいかな。 ・ 参考映像みたいに2方向から倒れるようにすると面白いけど，どのように並べるといいのか。やってみよう。 ・ 物語になるように順番を考えて並べよう。 ・ 連続して倒れなかったので並べる角度を少し変えてみよう。 ・ 他のチームを見ると動きがスムーズで勢いがあるね。 ・ 真ん中から広がるように板が倒れて絵が見えるようにしました。 ・ 難しい連結部分の並べ方が参考になるね。 ・ ○○くんのアイデアで滑らかに倒れて色がきれいに見えたね。

アサーション活動を通して自己表現力を高め、生き生きとした子どもを育てる学級活動
第6学年2組 学級活動指導案
 指導者 佐藤美和子(T1) 岡田充弘(T2)
 題材 伝え合おう あなたの気持ち、わたしの気持ち

題材目標

豊かな 学力	○ 一人一人の感じ方やとらえ方の違いを認め尊重し、相手も自分も大切にしたい自己表現ができる。(知識・技能) ○ 自分のことや周りの人のことを認め理解し、受け入れようとする。(思考・実践) ○ 相手も自分も大切にしたい自己表現を今後の生活にも意識して取り入れようとする。(意欲・態度)
人と 働く力	◎ 自分の気持ちを伝える際に、相手の気持ちや状況を感じ取りながら伝えることで、コミュニケーション力が高まり、よりよい人間関係を築くことができる。(調整力)

題材計画 (全4時間)

活動と内容	支援	時
1 事前アンケートに記入する。 (1) 気持ちについてのアンケートに記入する。 ○ 自分の気持ちや生活を振り返り、内面を見つめること (2) これまでの生活の中で、人間関係で困ったことや悩んだことがなかったか話し合う。 ○ 友達の気持ちがわからなくて困ったことや、気持ちがすれ違って悩んだ経験が誰にでもあることに気付くこと	※ 自己の内面を見つめ直す場の設定 (態度) ※ 人間関係について、保健室での子どもたちの様子や養護教諭自身の体験談を伝える場の設定 (意欲)	課外
2 相手も自分も大切にすることの大切さについて考える。 (1) ワークシート「自分について書いてみよう」に記入する。 ○ 自分のありのままの姿を知ること (2) 書いたワークシートをもとに、友達にインタビューする。 ○ 友達のありのままの姿をその人らしさとして認めること	※ 自他のありのままの姿に気が付き、尊重することの大切さを体感するワークシートを用いた交流 (思考・調整力)	1
3 相手も自分も大切にしたい言葉を使って気持ちを伝える方法を考え、意見を交流する。 (1) 相手の気持ちを知るヒントについて考え、相手を理解することの大切さについて話し合う。 ○ 伝え方の違いで伝わる内容が変わることに気付くこと (2) ワークシート①を使った活動を通して、相手も自分も大切にしたい気持ちの伝え方を話し合う。 ○ 友達の気持ちはわかっているけど、その気持ちをいつも伝えることができていない現状に気付くこと (3) ナイスカードを用いて、気持ちを伝える際に大切な言葉や表現方法について具体的に話し合う。 ○ 伝え合うためには相手も自分も大切にしたい自己表現が必要なことに気付くこと	※ 気持ちを伝える際に、相手の気持ちを知るヒントを使うことが大切であることに気付く活動構成 (技能) ※ 登場人物の立場になって表現方法を考えることができる段階を経たワークシートの工夫 (思考) ※ 知識から日常の生活に活かすことができる言葉や態度を習得する場の設定 (実践・調整力)	2 ① ① 本時
4 日常の生活の様々な場面で、相手も自分も大切にしたい表現を考え、ロールプレイングする。 (1) ワークシート②を使い、ペアでロールプレイングする。 ○ 継続することで、伝え合うことへの自信が高まること (2) 養護教諭の話聞き、今後の生活での実践を記入する。 ○ 今後も、学んだ自己表現が大切であることに気付くこと	※ 様々な場面で相手も自分も大切にしたい自己表現が大切であることに気付く活動構成 (技能) ※ 日常生活に活かす意欲を高める場の設定 (態度)	1

本時の目標

- 場面や状況に応じた表現の仕方について積極的に考え、意見を交流することができる。
- ◎ 日常よくある場面について、相手の気持ちも自分の気持ちも大切にしながら気持ちを伝え合うことができる。

本時の展開

活動と内容	子どもの思考の流れ
1 これまでの学習や事前アンケートの結果を見て、本時のめあてについて話し合う。 (1) 事前アンケート結果のグラフを見て、自己のとらえ方や他者とのかわり方について話し合う。 ○ 自分の気持ちに気付いたり、学級の実態に気付いたりすること ※ 伝えられる、伝えられないの2つの立場から色分けしたグラフを提示する。 (2) アンケートの結果と養護教諭の話から、これまでの人間関係について話し合う。 ○ 友達の気持ちがわかっていても伝えることができていない現状に気付くこと ※ 保健室でのエピソードを話し、身近な課題としてとらえさせる。 めあて 自分の気持ちをどのように表現して伝えたらよいか考えよう。	・ 気持ちをいつもはっきり伝えることができるという人はそんなに多くないんだね。 ・ 悩んでいるのは自分だけじゃなくて、少し安心した。 ・ 確かに友達の手がわかっていても言葉や態度で伝えることができていないな。 ・ 保健室でも人間関係のいろいろな悩みを聞いてくれるんだね。もし悩んだ時は話してみようかな。
2 「あなたならどうする？こんなとき」について考え、適切な自己表現の仕方を話し合う。 (1) ワークシートに記入し、班で意見を交流する。 ○ 使う言葉や表現の仕方で相手への伝わり方が変わることに気付くこと ※ 相手に表現のよいところ	・ どうしたらもっと上手に伝えることができるのだろう。 ・ これまでに似たような場面を経験したことがあるな。 ・ 相手の気持ちになって考えることは思っていたより難しいな。
を伝えるナイスカードを書く場面を位置付ける。 (2) 相手も自分も大切にしたい表現方法を発表する。 ○ 相手の気持ちを大切にしながら自分の気持ちを表現することの大切さに気付くこと ※ 発表内容を、相手の気持ち、自分の気持ちの観点からプレートに貼って、板書に整理する。	・ どのような言葉を使ったらうまく伝えることができるのだろう。 ・ 自分の言い方が褒められて嬉しいな。
3 これからの自分に取り入れたい表現について話し合う。 (1) 自分で選んだ表現を使い、ペアでロールプレイングをする。 ○ 実際に、相手の気持ちを大切にしながら自分の気持ちを伝える表現ができた自分の姿に気付くこと ※ 積極的に表現している子どもを賞賛し、表現しやすい雰囲気づくりをする。 (2) ロールプレイングを振り返り、これからの人とのかわり方について話し合う。 ○ 相手の気持ちを大切にしながら自分の気持ちを伝える表現を、自分の生活に活かしていこうとする実践意欲をもつこと ※ ロールプレイングの感想を自由な雰囲気の中で発表する場を設ける。	・ ナイスカードの言葉で伝えられると気持ちがいいな。 ・ この前学習した相手の気持ちを知るための大切なヒントが使えるうだね。 ・ 相手の気持ちと自分の気持ちの両方を考えた言葉が入っていると伝わりやすいんだね。

バランスをとりながら体を動かす身体感覚を、繰り返し楽しむ体育科学学習 体育2グループ 体育科学学習指導案

指導者 堀 亮 輔

題 材 すすめ! バランスコース

グループの実態

2グループの子どもたちは、環境の変化に敏感に反応し、不安を抱いたり注意が多方向に向いてしまったりすることがあるが、環境に慣れたり状況が理解できたりすると、安心して活動することができる。また、複雑な学習環境の認識は難しいが、スタートとゴールの明確化や色によるコース分けなどの視覚的な手掛かりがあれば、自分で活動することができるようになりつつある。

題 材 目 標

主体性	◎ 自分のコースや目標、活動の進め方がわかり、見通しをもって取り組もうとする姿
自己発揮性	◎ 体のバランスをとりながら、歩く、投げる、蹴る、持つなどの場に応じた動きをしようとする姿
成就性	◎ 教師の評価言をもとに、自分ができるようになったことを振り返り、頑張ったことを自分なりの言葉で発言している姿

題 材 計 画 (全7時間)

段階	活 動 と 内 容			個の活動を促す支援	時
動 機	1 活動の手順に沿って、バランスコースの7つの動きを1つずつ試す。 ○ それぞれの場での動きを行う際に必要となってくる身体感覚をつかむこと			※ 活動の手順をつかませて動きの見通しをもたせるための、手順表の提示	2
	2 身体のバランスをとりながら、サーキットコース形式のバランスコースを進む。 (1) バランスコース① (はしご歩き→平均台→スクーターシュート)を進む。			※ コースごとの、個に応じた支援 ・ a 児：高さの高低差が少なく、幅の広い場の設定 ・ b 児：直線的に配列した場の設定 ・ c 児：体調に応じて運動量を柔軟に変化できる、可動式の場の設定	4 ②
熱	a 児	b 児	c 児	※ 触覚の刺激を感じる肌触りが心地よい学習具の準備	② 本 時
	○それぞれの場での活動の手順をとらえ、バランスをとって動く楽しさを味わうこと	○バランスをとりながらボールを操作する動きの見通しを持ち、繰り返し活動を楽しむこと	○体調にあわせた運動の仕方をとらえ、バランスをとって動くことを楽しむこと		
中	(2) バランスコース② (トンネルくぐり→平均台→バランスボールでの風船パス→トランポリンシュート)を進む。			※ 回転する、揺れる、バランスをとるなどの身体感覚を活かして楽しみながら活動することのできる場の設定	1 / 2
	a 児	b 児	c 児		
発 展	3 バランスコース大会をする。 ○ これまでの学習を活かして、場に応じて自分で体を動かしながらコースを進むことができたことに満足感をもつこと			※ これまでの学習を想起させるための板書写真の活用や活動をまとめたボードの掲示	1

本時の目標

- バランスコースでの活動の仕方がわかり、それぞれのコースでの動きの見通しをもって取り組むことができる。 (主体性)
- 正しい手順で活動に取り組み、見通したことに沿って自分の動きを楽しみながら身に付けていくことができる。 (自己発揮性)
- (a児) 各コースでの体の動かし方をとらえ、バランスをとって運動することができる。
- (b児) とらえた身体感覚をもとに、規則に沿った体の動かし方ができる。
- (c児) 場が変化した様子をとらえ、それに応じて体全体をスムーズに使いながら運動をすることができる。
- 見通したことに対応させて活動を振り返り、できるようになったことに満足感をもつことができる。 (成就性)

本時の展開

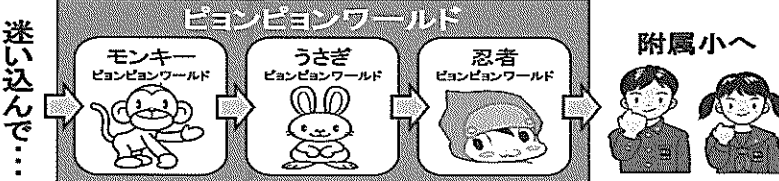
活動と内容			個の活動を促す支援
1 本時のバランスコースで必要な動きを確認し、活動の仕方を話し合う。 ○ 場の様子を見たり試したりして、本時は前時に比べて場の条件が難しくなったことをとらえ、各コーナーでの動きや活動の見通しをもつこと めあて むずかしくなった バランスコースで あそぼう。			1 活動の見通しをもたせて、目標設定をさせるための支援 ※ 本時の活動の手順をつかませるための手順表の使用 ※ 身体感覚の見通しをもたせるための場の一部を取り出した試しの場の設定
2 4つのバランスコースで、バランスをとりながらボールを操作するゲームをする。 (1) 活動の手順に沿って、本時のバランスコースで体全体を使った動きを楽しむゲームをする。			2 見通しに沿って体を動かしてコースを進むための支援 ※ コースを進んでいく目的意識をもたせるためのカードの準備 ※ 個に応じた支援 ・ a児：高さの高低差が少なく、幅の広い場の設定 ・ b児：スタートとゴールの位置を明確に示した場の設定 ・ c児：体調に応じて運動量を柔軟に変化できる、可動式の場の設定 ※ 心地よい肌触りの学習具の準備
a児	b児	c児	
○教師とともに活動していく手順をとらえ、動きの楽しさを味わうこと	○教師とともに動きやコースの進み方を確認し、動きの楽しさを味わうこと	○自分の体調に合わせて場や条件設定を考え、活動する楽しさを味わうこと	
(2) (1)のコースに比べて、距離や幅などの場の条件が難しくなったバランスコースで、バランスをとりながら用具を操作するゲームをする。			
a児	b児	c児	
○用具を操作する際の体の位置をつかみ、バランスをとって体を動かす動きを身に付けること	○とらえた感覚をもとに自ら動きを決定して、状況に応じた動きの変換の仕方を身に付けること	○場の変化に応じて体全体をスムーズに使うためめらかに体を動かす動きを身に付けること	
3 本時のバランスコースで、頑張ったことやできるようになったことなどを発表する。 ○ 見通しに沿って活動して、最後まで自分の力でコースを進むことができたことや、パズルを集めて完成させることができたことに対して、満足感や達成感をもつこと			3 活動への満足感をもたせるための支援 ※ できるようになったことを想起させるための板書写真の活用

イメージとストーリーに浸って、全員で運動遊びの楽しさを味わう体育科学習
第1学年2組 体育科学習指導案 (1・2年ふじ組との交流学习)
 指導者 平井 源 樹 (T1) 堀 亮 輔 (T2)
 単 元 みんなで すすもう ピョンピョンワールド (器械・器具を使った運動遊び)

単 元 目 標

豊かな 学力	○ 支持跳躍運動の基礎となる動きができる。 (技能) ○ 楽しく遊ぶことができる場を選んだり、友達のよい動きを見つけてまねしたりしながら、簡単な遊び方を工夫することができる。 (思考・判断) ○ 友達と仲よく進んで運動することができる。 (態度)
人と 働く力	◎ ピョンピョンワールドをみんなでクリアしようと、友達と一緒に遊び方を選んだりまねしたりしながら、楽しい遊び方へと高めることができる。 (行動力)

単 元 計 画 (全4時間) ※ 太枠囲みはチームの活動を中心に行う時間

活 動 と 内 容		「開かれた個」の支援	配時
1 ピョンピョンワールドに迷い込んで冒険するというストーリーを知り、最初のコースで遊ぶ。 ○ 冒険することへの期待感と、全員でシールを集めて絵を完成させないと3つのピョンピョンワールドをクリアできないという運動遊びの見通しをもつこと 		※ ピョンピョンワールドで冒険するストーリーと跳びはねる動物に変身するというイメージの設定 (態度) ※ 支持跳躍運動につながる跳び乗ったり跳び下りたりする動きが表出する易しい場での運動体験 (技能)	1
2 冒険のストーリーと跳ねる動物のイメージに浸って、2つのピョンピョンワールドで遊ぶ。 (1) モンキーピョンピョンワールドで遊ぶ。 ○ 身軽なサルをイメージして、踏み切って跳び乗ったり跳び下りたりする感覚や動きを見出すこと (2) うさぎピョンピョンワールドで遊ぶ。 ○ 4本足で跳びはねるうさぎをイメージして、支持で跳び乗ったり跳び下りたりする感覚と動きを見出すこと 〈うさぎピョンピョンワールドのコース〉 ① ながなが岩 … またぎ乗って腕支持で体重移動させながら進む。 ② ピョンピョン原っぱ … 足・手・足の交互操作で道を進む。 ③ ピョンピョン岩 … 足・手・足の交互操作で小さな台を越す。 ④ 一本橋丸太 … 腕支持で体を浮かせて平均台を越す。 ⑤ にんじんゲット … 両足踏切りでウレタンマットに体を投げ出す。 ⑥ だんだん岩 … 段差付の跳び箱に跳び乗って跳び下りる。 ⑦ どっこいしょの崖 … ステージに腕支持で跳び乗る。 ※ 友達と一緒に進んでクリアすると、シールが2枚ずつもらえる。		※ コースを進んでシールを獲得し、全員で全てのシールを貼って絵が完成するというストーリーの設定 (態度) ※ 理想モデルを追体験したり、評価機能がある場で自分が進めそうなコースを選択したりする場面の設定 (思考・判断) ※ 支持跳躍運動の基礎となる動きが表出する運動遊びの場 (技能) ※ 友達と一緒に挑戦してそれぞれ2枚ずつシールを集めることができる活動構成 (行動力)	2 ① ① 本時
3 冒険のストーリーに浸って、総合的な場の忍者ピョンピョンワールドで遊ぶ。 ○ いろいろな動きができる忍者をイメージして、身に付けた感覚や動きを活かして、小さな台や跳び箱で支持でまたぎ越しをして、達成感や満足感を得ること		※ 身に付けた支持跳躍運動の基礎となる感覚と動きを活かして、またぎ越しをしながらクリアする運動遊びの場 (技能)	1

本時の目標

- 冒険してみんなで絵を完成させるストーリーと手足を使って跳びはねるうさぎのイメージに浸って遊びながら、支持跳躍運動の基礎となる動きを身に付けることができる。
- ◎ うさぎピョンピョンワールドをみんなでクリアしようと、友達と一緒に遊び方を選んだりまねしたりしながら、手足を使って跳ねる遊びを楽しむ続けることができる。

本時の展開

活動と内容	子どもの思考の流れ
1 冒険をクリアするために大切なことを話し合う。 (1) 登場した魔法使いピョンピョンの話聞く。 ○ うさぎピョンピョンワールドの冒険に期待感をもつこと ※ 話の中で、シールを集めて絵を完成させるという目標、トラに噛まれないように進むという適度な困難さを伝える。 (2) 実際に場を見ながら、がんばりたいことを話し合う。 ○ それぞれの場でどうやって遊ぶのか見通しをもつこと ※ このコースが、難易度別に3つ横に並んでいる。 ※ それぞれの場で、自分ができそうな場を選ぶ。 ※ 魔法使いピョンピョンの話の内容に沿って、実際の場で教師のモデルを見ながら、大切なことを出し合わせる。 めあて えが かんせいするように みんなで うさぎピョンピョンワールドを クリアしよう。	・ 今日は、魔法使いピョンピョンにうさぎに変身させられたぞ。どんな冒険になるのかな。ドキドキするな。 ・ うさぎピョンピョンワールドにも、たくさん楽しい場があるぞ。楽しみだな。 ・ えっ、石の上に下りないと、トラにかまれてしまうのか。頑張ってコースを進むぞ。 ・ 思いっきりピョンと跳ぶと、トラにかまれずに下りることができたよ。 ・ ながなが岩も、手でえいっと押せば、お尻がピョンピョン浮いて進むことができるよ。 ・ にんじんゲットも、少し走ってピョンとジャンプすると、にんじんに手が届くよ。 ・ ペアのAちゃんが、ぼくのまねをして、高い一本橋丸太もピョンと跳び越すことができたよ。
2 うさぎピョンピョンワールドのコースに一人で挑戦したり、ペアの友達と一緒に挑戦したりする。 (1) うさぎピョンピョンワールドに一人で挑戦する。 ○ 支持跳躍運動の基礎となる感覚や動きを見出すこと ※ うさぎのイメージに浸らせながら、難易度で分けた3コースの場からできそうな場を選ばせながら、遊び方を工夫させる。 (2) うさぎピョンピョンワールドに友達と一緒に挑戦する。 ○ お互いに支持跳躍運動の基礎となる動きを高めること ※ 理想の遊びモデルを紹介してまねさせたり、友達と励まし合ったりしながら遊ばせる。 3 頑張ったことや楽しかったことを発表する。 ○ 自分たちの遊びの高まりと学び方のよさを実感し、みんなでクリアできた喜びを分かち合うこと ※ 魔法使いピョンピョンの話の中で、友達と共同して挑戦したことでクリアできたことを賞賛する。	・ Bくん、いいぞ。一緒にクリアして、たくさんシールをゲットしよう。 ・ 魔法使いピョンピョンも友達と頑張ったことをほめてくれた。次のピョンピョンワールドも頑張ろう。

通常学級の友達とともに、用具を操作する運動遊びを繰り返し楽しむ体育科学学習
第1・2学年ふじ組 体育科学学習指導案 (1年2組との交流学习)
 指導者 堀 亮 輔 (T1) 平 井 源 樹 (T2)
 題 材 みんなで すすもう ピョンピョンワールド

子どもの実態

本学級の子どもたちは、1年生女子2名、2年生男子1名女子2名の計5名で構成されている。休み時間や体育の学習では、ケンステップを並べて跳んだり、長縄跳びを波立たせて跳んだりなど、跳ぶ動きを楽しんで行っている姿が見られる。またこれまでの交流学习では、ゲームや遊びの中で、通常学級の友達の動きをよく見て、同じように活動を楽しもうとする姿が見られる。

題 材 目 標

主体性	◎ 日常生活で取り組んでいる方法を使って、自分の方法でピョンピョンワールドでの動きに取り組もうとする姿
自己発揮性	◎ ピョンピョンワールドの場に応じた多様な動きを、繰り返し挑戦して身に付けることができる姿
成就性	◎ 導入時にもった見通しを想起して、それに沿って活動できたことを教師とともに振り返り、満足感を抱いている姿

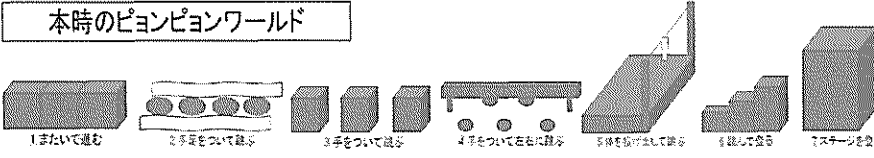
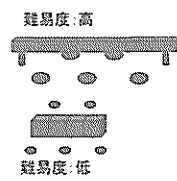
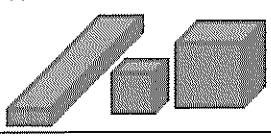
題 材 計 画 (全7時間)

段階	活 動 と 内 容	個の活動を促す支援	配時
動 機	1 ピョンピョンワールドの各コースでの動きを試す。 (1) コースの動きを1つずつ試しにやってみる。 ○ それぞれの動きを行う際の体の感覚をとらえること (2) コースの規則に沿って、動きを続けてやってみる。 ○ 活動の手順がわかること	※ 活動の手順をつかませる手順表の提示 ※ 家庭での運動経験や生活経験にもとづいた支援方法の実施	2 ① ①
熱 中	2 ピョンピョンワールドの各コースを進む。 (1) サルになって、ピョンピョンワールド①(ながながいわ→ピョンピョンはっぱ→ピョンピョンいわ→いっぽんばしまるた→かさゲット→だんだんいわ→どっこいしょのがけ)を進む。	※ 個に応じた支援 (a グループ) ・動きのイメージをもたせるための友達の動きのモデル演示を見る場の設定 (b グループ) ・手足の動かし方を身に付けるための友達と操作して試すことのできる学習具の活用	4 ②
	a グループ	b グループ	
	○教師や友達の動きをまねて、手足を使ったいろいろな跳び方を身に付けること	○友達と学習具を用いて、手足を使ったいろいろな跳び方を試しながら身に付けること	
	(2) ウサギになって、条件が難しくなったピョンピョンワールド②(ながながいわ→ピョンピョンはらっぱ→ピョンピョンいわ→いっぽんばしまるた→にんじんゲット→だんだんいわ→どっこいしょのがけ)を進む。	※ 活動をつかませるためのスタートとゴールを明確にして直線に配列した場の設置 ※ 活動の意欲を高めて動きを繰り返させるためのシールの準備	② 本 時 1 / 2
	a グループ	b グループ	
	○友達の動きをまねて、手足を使ったいろいろな跳び方をやる際の体の動かし方を身に付けること	○学習具を減らしていきながら、手足を使ったいろいろな跳び方を繰り返し試す中で身に付けること	
発 展	3 さらに条件が難しくなったピョンピョンワールド③に挑戦する。 ○ これまでの学習を活かして難しいコースを進むことができたことに満足感をもちこと	※ これまでの学習を想起させるための板書写真の活用や活動をまとめたボードの掲示	1

本時の目標

- ピョンピョンワールドでの活動の仕方がわかり、それぞれのコースでの動きの見通しをもって取り組むことができる。(主体性)
- 正しい手順で活動に取り組み、見通したことに沿って自分の動きを高めることができる。(自己発揮性)
- (a グループ) 教師や友達のモデル演示や動作補助によって動きの見通しをもち、それを自分の動きとすることができる。
- (b グループ) 友達と学習具を用いて繰り返し試すことによって動きの見通しをもち、それを自分の動きとすることができる。
- 見通したことに対応させて活動を振り返り、できるようになったことに満足感をもちことができる。(成就性)

本時の展開

活動と内容		個の活動を促す支援
1 本時のピョンピョンワールドで必要な動きを確認し、活動の仕方を話し合う。 ○ 本時は前時に比べて場の条件が難しくなったことをとらえ、各コーナーでの動きや活動の見通しをもつこと		1 活動の見通しをもたせて、本時の学習の目標設定をさせるための支援 ※ 本時の活動の手順をつかませるための手順表の使用 ※ 必要な跳び方の見通しをもたせるための場の一部を取り出した試しの場の設定
本時のピョンピョンワールド  めあて ともだちと いっしょに ピョンピョンワールドで あそぼう。		
2 ピョンピョンワールドの7つのコーナーを、手足の力で跳びながら進んでいく。 (1) 活動の手順に沿って、本時のピョンピョンワールドのコーナーを自分で進んでシールを集める。		2 見通しに沿って友達とともにコースを進むための支援 ※ 自分一人では難しい場(④、⑤、⑦)の設定とそれに応じた個別の支援
a グループ	b グループ	(a グループ)
○教師の動きをまねて、手足を使った跳び方をとらえること	○学習具を用いて、手足を使った跳び方を試してとらえること	・友達の様子を見て模倣させやすい、複線化されて難易度の違うコースの設定
(2) 距離や幅などの条件が難しくなったピョンピョンワールドのコーナーを、友達の動きを模倣したり一緒に場を作り替えたりしながら進んで、シールを集める。		(b グループ)
a グループ	b グループ	・友達と操作できる簡易化した場や学習具、条件の違う場を作り替えるコーナーの準備
○友達の動きをまねることで、手足を使ったいろいろな跳び方や体の動かし方を身に付けること	○学習具を減らしていきながら、手足を使ったいろいろな跳び方を繰り返し試し身に付けること	
 ④模倣しやすい場	 ⑦選択したり組み合わせたりできるブロック	
3 本時のピョンピョンワールドで、頑張ったことやできるようになったことなどを発表する。 ○ 見通しに沿って活動することができ、最後までコーナーを進むことができたことや、その結果シールを集めることができたことに対して、満足感をもちこと		3 活動への満足感をもたせるための支援 ※ できるようになったことを想起させるための板書写真の活用

お互いが気付いたことのよさを活かしながら感謝の気持ちを伝える生活科学学習
第2学年2組 生活科学学習指導案

指導者 福 原 伸 治

小単元 とどけよう!ありがとうのきもち～大きくなったね ぼくわたし～

単 元 目 標

豊かな 学力	○ これまでの自分が成長を続けてきたことに気付き、自分が知らないところについて、家族や親戚、写真や記録などをもとに調べることができる。(知識・技能) ○ 自分の写真や家族からの話、自分で書いた作文などをもとに、これからできることを考え、相手に伝える方法を見つけることができる。(思考力・判断力・表現力) ○ 自分が大きく成長したことに興味をもち、さらにできることを増やしていきながら、支えてくれた人へ感謝の気持ちをもつことができる。(関心・意欲・態度)
人と 働く力	◎ 家族の人に自分が小さい頃のことを聞いたり、友達からどんな方法で感謝の気持ちを伝えるのか聞いたりして、考えたことを自分から伝えることができる。(対話力)

小単元1 計 画 (全4時間)

活 動 と 内 容	「開かれた個」の支援	配 時
1 赤ちゃんの頃に使っていたおもちゃや洋服などをもとに、今の自分の姿と比べて考えたことについて話し合う。 ○ 今の自分は大きく成長していることに気付き、もっと自分のことについて調べてみたいという意欲をもつこと	※ 事前に借りた赤ちゃんの頃のおもちゃなどの提示と、気付いたことを話す場の設定(関心・意欲)	1
2 家族や親戚などに自分が小さかった頃のことを聞いたり、これまでの自分の情報が載っている物などを探したりして、自分の思い出アルバムを作る。 ○ 小さかった頃からたくさんの人々に支えられ、大切に育てられてきたことに気付くこと	※ 家の人に話を聞いて調べたことをわかりやすくまとめるための学習プリントと、思い出アルバムの提示 (知識・技能)	2
3 お互いの思い出アルバムを見ながら、気付いたことや感じたことを話し合う。 ○ 自分と同様に友達も大切にされていることに気付くこと	※ お互いが作った思い出アルバムを見て、話し合う場の設定 (対話力)	1

小単元2 計 画 (全4時間)

活 動 と 内 容	「開かれた個」の支援	配 時
1 自分たちを支えてくれた人への感謝を伝える方法について話し合い、チームをつくって計画を立てる。 ○ 友達と同じ思いをもっていることに気付き、お互いに協力して伝える会を成功させようという意欲をもつこと	※ 伝える方法や内容に合わせたチームを考えて編制するため場の提示 (思考力・判断力)	1
2 伝える会に向かって、自分たちのチームで考えた計画に合わせて、準備をする。 (1) チームごとに準備するために必要な物や、しなければいけない活動について話し合っ、準備をする。 ○ 自分の役割を考え、協力して活動できること (2) 準備したことを他のチームに見てもらって、アドバイスをもらい、活動の見直しをする。 ○ 友達のよさに気付き、自分の考えを伝えること	※ 自分たちの計画を書き込むチームボードの提示 (知識・技能) ① ※ チームで話し合いながら、準備を進めていく活動の設定 (対話力) ① ※ アドバイスカードによる相互評価 (対話力) 本時	2
3 伝える会を行い、自分たちが感謝していることを伝えて、これからの生活への思いを話す。 ○ 自分が大切に育ててもらってきたことにあらためて気付き、友達と協力できてうれしいと感じること	※ 家の人からもらう感想カードの提示と、感想を話し合う場の設定 (意欲・態度)	1

本時の目標

- 自分の成長を支えてくれた人へ感謝していることを、自分の思いや願いを活かして表現し、友達のよさについて気付いたり、よくするための方法について話し合ったりすることができる。
- ◎ 自分が伝えようとしている人の気持ちになって発表したり、友達の発表を聞いたりしながら、相手のいいところを自分も取り入れてよりよいものにしようすることができる。

本時の展開

活動と内容	子どもの思考の流れ
1 これまで「ありがとうの会」に向かって準備してきたことを、今日の時間でどのように仕上げるのかについて話し合う。 ○ チームで発表する練習したことを友達に見てもらいながら、さらによいものにしようという見通しをもつこと ※ ビデオに撮った練習の風景を提示する。 めあて 「ありがとうの会」で、家の人によるこんでもらうために、友だちに見てもらってれんしゅうしよう。 2 自分たちが練習してきたことを、他のチームの友達と見せ合いながら、よいところや工夫すべきところについて話し合う。 (1) 自分たちが練習してきたことを友達に見せる。 ○ 同じチームの友達と練習してきたことに自信をもつこと 紙しばいチーム 自分たちの成長を集めた資料をもとに、自分の手書きの絵や、写真を使ってまとめる。 ペア かえ歌チーム 成長を支えてもらったことへの感謝を歌や踊りで表現する。 ペア パソコンチーム えんげきチーム ※ チームごとの時間を決めて、評価をするためのペアのチームを設定し、よかったところともっと工夫したらよいところを書くことができる学習プリントを提示する。 (2) 他のチームの出し物を見て、どんなところをもっと工夫したらよいと思ったかについて、同じチームの友達と話し合う。 ○ チームの中で、友達に自分の考えを伝えたり、友達の考えを受け入れたりして、チームとしての意見を1つにできること 「アドバイスカード」 → ソロとして、自分が友達の出し物を見て感じたことから、よいところや工夫したらよいと思ったところを記入する。 → 「チームアドバイスカード」 → ソロで考えた中で、多い意見だけでなく、少なくともいい意見を含めて記入する。 チームの相手へ ※ 自分の考えを記入できる「アドバイスカード」と、チームで考えをまとめて記入する「チームアドバイスカード」を提示する。 3 アドバイスをもらったことについて、チームの中でどうするか話し合う。 ○ 自分のチーム以外の友達の考えも受け入れ、さらによいものへとつくりかえようとする ※ 他のチームからもらった「チームアドバイスカード」をもとに、話し合う場を設定する。	・ チームではきちんと練習してきたけど、本当にうまくいくか不安だな。 ・ 自分たちだけではなくて、ほかの人にも見てもらった方が、いろいろアイデアが出ていいかもしれないな。 ・ 自分の役割をきちんとしてがんばろう。 ・ 小さい頃ののことをよく調べているな。 ・ おもしろいだけじゃなく、お家の人きちんと気持ちを伝えていいいな。 ・ もっとセリフをはっきり話した方がいいかもしれないな。 ・ あそこところは、ぼくたちのチームの中に資料があったから見せてあげたらいいかもしれないぞ。 ・ ぼくたちのチームでもあのやり方をまねしたらよくなるかもしれないな。 ・ ここのセリフをかえるというのは確かによさそうだから、これもチームのアドバイスの中に入れてみよう。 ・ もらったアドバイスはどれもよさそうだから、全部を発表の中に入れてながら、もっとよいものにしよう。

小集団で相互交流を図りながらよりよい実践方法につくりかえる学級活動
第3学年1組 学級活動指導案

指導者 谷 岡 良 寛

題 材 自分たちを支えてくれた6年生に感謝の気持ちを伝えよう

題 材 目 標

豊かな 学力	○ 自分たちを支えてくれた6年生に対して感謝の気持ちを表す方法について、話合いのめあてにそって考えを出し合いながら、よりよい原案へつくりかえることができる。 (思考力・判断力) ○ 集団決定した実践方法をもとに、集団の中での自分の役割を自覚し、進んで実践することができる。 (実践力)
人と 働く力	◎ 小集団での交流を通して、友達の考えのよさを知り、活かしながらよりよい方法をつくり上げたり、協働しながら実践したりすることができる。 (調整力)

題 材 計 画

(全2時間) ※ 太枠囲みはチームの活動を中心に行う時間

活 動 と 内 容	「開かれた個」の支援	配時
1 これまでの自分たちと6年生とのかかわりについて振り返り、自分たちを支えてくれたことについて気づき、6年生に対する思いを話し合う。 (1) 自分たちと6年生とのかかわりを話し合う。 ○ 3年生になってからの自分たちと6年生のかかわりの中から自分たちを支えてくれた6年生の存在に気付くこと (2) これまで自分たちを支えてくれた6年生に対する感謝の気持ちを表す場面として、お別れ集会を取り上げ、どのような方法で感謝の気持ちを伝えるか原案をつくる。 ○ お別れ集会で感謝の気持ちを伝える方法別に組織したチームごとに具体的な原案を考えること	※ 学級全体でこれまでに活動してきたことを振り返らせることができる資料と6年生とのかかわりを表す資料の提示 (思考力・判断力) ※ 6年生に感謝の気持ちを表すための、伝える方法ごとのチーム編制と原案作成の場の設定 (思考力・判断力)	1 + 課 外
2 方法別チームからの提案をもとに、自分たちを支えてくれた6年生に対する感謝の気持ちを伝える方法について、小集団チームや学級全体チームで話し合う。 (1) 方法別チームで考えた、お別れ集会で行う6年生に感謝の気持ちを伝えるための活動の原案のよさや不十分さを学級全体で話し合う。 ○ 方法別チームの原案に対する個の考えを出し合うことで原案のよさや不十分さに気付くこと (2) 焦点化した内容を話合いのめあてから、小集団チームや全体チームで話し合いながら集団決定する。 ○ 小集団チームでの話合いの中で、自分の考えを説明したり、友達の考えを聞いたりしながら考えをまとめること	※ 各方法別チームがつくった原案のよさや不十分さを焦点化する話合いのめあての提示 (思考力・判断力) ※ 互いの原案をよりよく作りかえるための小集団チームでの相互交流の場や全体での集団設定 (調整力) ※ 話合いボードの活用 (思考力・判断力)	1 本 時
3 お別れ集会に向けて、方法別グループを中心として、準備をしたり、役割分担した仕事を行ったりしながら実行する。 (1) 集団決定した内容をもとに、各方法別のグループで実行に向けて準備をしたり、必要な仕事分担を行ったりする。 ○ 一人一人がチームでの役割を自覚して活動すること (2) お別れ集会で3年生全体から、これまで支えてくれた6年生へ感謝の気持ちを伝える。 ○ 6年生のことを考えて、実践していくこと	※ 方法別チームごとの個々が自分の役割を自覚するチーム内やチーム相互の役割分担 (調整力) ※ 方法別チームを中心に学年全体で6年生に向けた実践を行う場の設定 (実践力)	課 外

本時の目標

- 話し合いのめあてをもとに、学級全体で方法別チームの原案の内容を共通理解し、小集団チームで話し合いボードを使って交流することで、よりよい原案につくりかえることができる。
- ◎ 小集団チームでの話し合いの中で、友達の考えをしっかりと聞き、自分たちの考えに合わせたり、付け加えたりしながら、よりよい考えをつくることができる。

本時の展開

活動と内容	子どもの思考の流れ										
1 本時の議題や提案理由、話し合いのめあてを聞き合い、本時の話し合いについての見通しを話し合う。 ○ 本時の議題や提案理由を聞き合ったり、本時の話し合いの進め方を考えたりすること ※ 司会グループが、本議題の意義や話し合いのめあてについて確認する場を設定する。	・ これまで6年生にたくさんの場面で支えてもらったので、6年生が卒業するまでに、感謝の気持ちを伝えていきたいね。										
【議題】 6年生への感謝の気持ちが伝わる、お別れ集会の内容を決めよう。											
【提案理由】 これまでにたくさんの場面で6年生に支えられてきたので、6年生が卒業するまでに、6年生への感謝の気持ちを伝えることができれば、6年生も喜んでくれると思うし、自分たちも、これから上学年に向けて、もっと成長していけると思うから											
【話し合いのめあて】 これまで6年生に支えてもらった自分たちの感謝の気持ちが表れ、6年生がうれしくなるような、伝える方法や内容を考えよう。											
2 感謝の気持ちを伝えるために組織した、方法別チームで考えた原案が、よりよくなるように、小集団や学級全体で話し合う。 (1) 方法別チームの原案を、学級全体で確認することで、吟味し合う内容を話し合う。	・ それぞれのチームで考えた原案を紹介し合おう。 ・ いろいろな伝え方があるけど、まだ決めなくてはいけないところもあるみたいだよ。 ・ 互いのチームで話し合って、それぞれの原案をもっとよくしていこうね。 ・ 呼びかけは、6年生が頑張っていたことをいれたらいいね。 ・ その他にも、お世話になった場面とその時の気持ちも入れよう。 ・ チーム同士で考えると新しい考えが出てくるね。 ・ チームの考えを活かしたら、原案がよくなったね。 ・ お別れ集会で6年生が喜んでくれるように準備していこうね。										
<table border="1"> <thead> <tr> <th>どんな方法で</th><th>考えられる内容</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>・ 呼びかけ</td><td>・ 学校のために頑張っていた6年生の姿</td></tr> <tr> <td>・ 歌</td><td>・ 「ありがとう」の言葉が歌詞に入っている歌</td></tr> <tr> <td>・ 動き</td><td>・ 6年生にエールをおくる応援の動き</td></tr> <tr> <td>・ 小道具</td><td>・ 感謝の言葉をいれた横断幕や旗</td></tr> </tbody> </table>		どんな方法で	考えられる内容	・ 呼びかけ	・ 学校のために頑張っていた6年生の姿	・ 歌	・ 「ありがとう」の言葉が歌詞に入っている歌	・ 動き	・ 6年生にエールをおくる応援の動き	・ 小道具	・ 感謝の言葉をいれた横断幕や旗
どんな方法で	考えられる内容										
・ 呼びかけ	・ 学校のために頑張っていた6年生の姿										
・ 歌	・ 「ありがとう」の言葉が歌詞に入っている歌										
・ 動き	・ 6年生にエールをおくる応援の動き										
・ 小道具	・ 感謝の言葉をいれた横断幕や旗										
○ 全体場で、各方法別チームの原案を聞き合い、原案に対する個人の考えをつくること ※ 各方法別チームの考えた原案を説明させることで、互いの原案の共通性や相違性に気付かせる。 (2) 話し合いのめあてをもとに小集団チームやチーム相互で話し合うことで、場面に応じた内容や方法をつくり上げる。 ○ 感謝を伝える方法と内容の関係を考えて自分の考えをつくり、小集団チームでの話し合いの中で、自分の考えを説明したり、友達の考えを聞いたりしながら考えをまとめること ※ 話し合いボードでチームでまとめた考えを、もとの小集団チームに戻って伝えることにより、よりよい原案につくりかえらせる。											
3 全体チームで集団決定し、今後の活動の見通しを話し合う。 ○ 各場面で決めた内容や方法を学級全体に報告させ、学級全体で話し合い、納得すること ※ 話し合いを振り返らせ、自他の話し合いへのかかわりや学級全体で問題解決をしたことのよさを評価させる。											

目的に応じてチームを更新しながら新たな学校文化を創造・発信する総合的な学習
第4学年2組 総合的な学習指導案

指導者 三 浦 研 一

単 元 開さい!附小マスコット総選挙 ～学校のよさを発信して、学校を元気に～

単 元 目 標

豊かな 学力	○ 学校の伝統や文化のすばらしさについてとらえることができる。(知識・技能) ○ 収集した情報を整理する中で、観点を取り出し、自分たちのチームに合う情報を選び出すことができる。(思考力・判断力・表現力) ○ 学校にかかわる人々の思いについて進んで調べようとすることができる。(関心・意欲・態度)
人と 働く力	◎ リサーチした情報をもとに、チームで合意形成しながらマスコットをつくり出したり、同じ目的のために複数の人と協力して働いたりすることができる。(調整力)

単 元 計 画

(全 18 時間) ※ 太枠囲みはチームの活動を中心に行う時間

活 動 と 内 容	「開かれた個」の支援	時 間
1 リサーチチームをつくり、学校のよさを発信するための「附小オリジナルマスコットづくり」に出合い、マスコットや学校の伝統などについて調べる。 (1) 大学のマスコット「フッキー」や「ご当地キャラ」に出合い、活動の計画やゴール像について話し合う。 ○ 附小オリジナルマスコットへの意欲を高めること	※ 大学のマスコットなどにかかわる資料の提示 (関心・意欲・態度) ※ ゴール像が明確になる目標の設定 (関心・意欲・態度)	6 ②
(2) リサーチチームをつくり、様々なマスコットや学校の文化、様々な人の学校への思いなどを調べる。 ○ 様々な人々の学校への思いを追究し、学校の伝統や文化のすばらしさを把握すること	※ 在校生、保護者、卒業生、教職員などへのリサーチする活動の設定 (知識・技能)	④
2 マスコット開発チームをつくり、学校のよさが伝わるマスコットを開発し、提案する。 (1) マスコット作製について専門家に取材をする。 ○ マスコットに必要な条件についてとらえること	※ デザインの専門家を招聘し、マスコット作製について話を聞く場の設定 (知識・技能)	8 ②
(2) チームごとに専門家と一緒にマスコットに取り入れるキーワードについて話し合い、マスコットの案を作製する。 ○ マスコットに取り入れるキーワードを、学校の文化や歴史などの観点から明らかにすること (3) でき上がったマスコット案をもとに、専門家と話し合いながら、チームごとのマスコットを決定する。 ○ 「学校のよさ」「学校に対する人々の思い」などの観点から、チームで作製したマスコットを見直すこと	※ マスコット開発チームごとにG.Tの招聘 (関心・意欲・態度) ※ 作製したマスコットを総選挙に向けて練り上げるための話し合い分析ボードの活用 (思考力・表現力・判断力)	④ ②
3 「附小マスコット総選挙」を開催し、全校に学校のよさを発信する。 (1) 「附小マスコット総選挙」に必要なものについて考え、イベント成功チームをつくり準備をする。 ○ イベントへ向けて力を合わせて取り組むこと (2) 「附小マスコット総選挙」を開催し、決定したマスコットを全校へ発信する。 ○ 自分たちでつくり出した新たな学校文化を発信する喜びを味わうこと	※ 総選挙を成功させるための役割分担を明確にした新たなチームの編成 (関心・意欲・態度) ※ 全校へ向けて発信する場の設定 (調整力) ※ 自分たちの高まりを実感する評価活動の設定 (関心・意欲・態度)	4 ③ 本時 1分 ① + 課外

本時の目標

- 「附小マスコット総選挙」の開催に向けて、イベント成功に向けて必要な事柄について考え、観点をもとによりよいアイデアへと高めることができる。
- ◎ 友達の意見のよさを取り出しながら、それぞれの意見の違いを乗り越え、よりよいチームの考えになるように合意形成している。

本時の展開

活動と内容

子どもの思考の流れ

1 完成した附小オリジナルマスコットのコンセプトについて、チームごとに発表する。

- どのチームのマスコットにも「学校のよさ」と「人々の思い」が表れていることを把握すること

【マスコットの例】

※ 説明資料をもとに、各チームのマスコットを紹介させる。

めあて 全校へ向けた「附小マスコット総選挙」を成功させるための必要な役わりについて話し合おう。

2 「附小マスコット総選挙」開催に向けて必要な事柄についてチームごとに話し合う。

(1) 「附小マスコット総選挙」に向けて必要なものについてソロで考えをまとめる。【ソロ】

- イベントを成功させるために必要な事柄について考えをつくり出すこと

※ 「附小マスコット総選挙」の開催日までのスケジュール表を提示する。

(2) ソロで考えたものを持ち寄り、チーム内でイベント成功に向けて必要な事柄について話し合う。【チームワーク】

- 「学校のよさは伝わるか?」「学校が元気になるか?」の観点で、出された案を吟味すること

ソロで考えたイベント成功のために必要な事柄

選挙についてPRが必要になるな。

マスコットを紹介するポスターが必要だ。

選挙会場の選定と借用の依頼が必要だ。

投票用紙や投票箱を作らなければ。

学校のよさは伝わるか?

学校が元気になるか?

観点をもとにチーム内で吟味

※ それぞれの考えを観点ごとに類型化するためにチームボードを準備し、活用させる。

3 チーム内で考えたイベント成功させるためのアイデアについて学級全体で交流する。

- 学級全体でアイデアを共有化すること

※ 出されたアイデアをまとめ、イベント成功のための役割分担について提示する。

・ ぼくたちのチームは藤の花をモチーフにしたマスコットをつくりました。

・ 私たちのチームは、附属小の子どもたちが未来にはばたくことができるようにという願いを込めたマスコットです。

・ いよいよ次は総選挙の開催だな。開催に向けたどんなものが必要になるのかな。

・ 選挙をPRするためのポスターが必要になると思うな。

・ それなら、どんなマスコットが立候補しているのか紹介するコーナーが学校の中に必要だね。

・ 選挙会場はどんな場所がいいかな。

・ この前アンケートをとったときみたいに、学年に合わせた投票用紙にしたほうがいいなと思うな。

・ 学校のよさと、学校を元気にすることが学校のみんなに伝えることが大切だね。

・ 役割分担がはつきりしてきたね。

・ 附小マスコット総選挙が大成功するように、役割ごとに準備をしっかりと進めよう。

円周とそれに関する要素に着目して、チームで最適な解決方法を見出す算数科学習 第5学年2組 算数科学習指導案

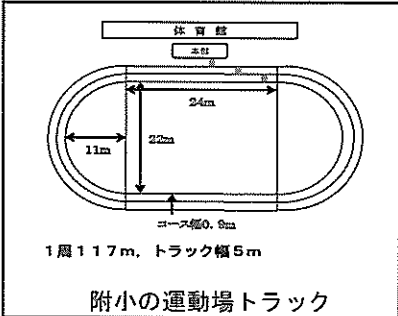
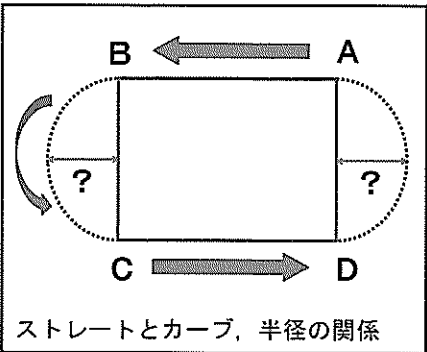
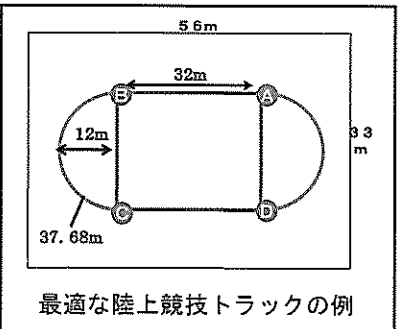
指導者 二 串 英 一

単 元 設計しよう!理想の陸上競技トラック!! (円をくわしく調べよう)

単 元 目 標

豊かな 学力	○ 直径の約3.14倍が円周であることをとらえることができる。(知識・技能) ○ 場面を構成している条件に合わせて、「円周＝直径×3.14」をそのまま用いたり、一部を変更して用いたりすることができる。(思考力・判断力・表現力) ○ 場面に合わせて、意欲的に直径と円周の関係をみようとするすることができる。(関心・意欲・態度)
人と 働く力	◎ 直径と円周の関係におけるチームのメンバーの考えに付加や修正を加えて、考えを統合することができる。(調整力)

単 元 計 画 (全5時間) ※ 太枠囲みはチームの活動を中心に行う時間

活 動 と 内 容		「開かれた個」の支援	配時
1 附小運動場トラックのカーブの長さを、円周の長さをもとに話し合う。 ○ 円周の長さは円に内接する六角形の周りの長さより長く、円に外接する正方形の周りの長さより短いこと	 附小の運動場トラック	※ 体感経験をもとにトラックの長さの概数値を予想する場の設定 (関心・意欲・態度) ※ 円周の長さをとらえさせるための、円周と六角形や正方形の周りの長さの比較 (知識・理解)	1
2 円周の長さを調べる方法を話し合い、円周と直径の関係を調べる。 (1) 円周と直径の関係を調べ、きまりを見つける。 ○ どのような円も、円周の長さは直径の約3.14倍になっていること (2) 円周と直径の関係を使い、全長100mのトラックのカーブの半径を調べる。 ○ カーブの長さから、カーブ÷3.14で半径を求めること	 ストレートとカーブ、半径の関係	※ 直径と円の大きさの関係をとらえるための直径と円周の項目で構成した表への記入(知識・技能) ※ 提示された条件内で解決を図るための条件設定 (思考・判断・表現) ※ チームのメンバーの解決結果を分類・整理するための、チーム思考マトリックスへの記入 (調整力)	2 ① ①
3 条件に合った陸上競技トラックを設計する。 (1) チームで最適なトラックを設計する。 ○ 競技場の広さとトラックの全長、ストレート、カーブ、直径とを関係付けけること (2) 4コースある場合のスタート地点の求め方について話し合う。 ○ 1m×3.14ずつ前に設定すること	 最適な陸上競技トラックの例	※ トラックを設計するための基準となる4つのコーナーの設定と目印となる磁石の活用 (思考・判断・表現) ※ チームのメンバーそれぞれが提示条件を克服しているかどうか確認するための、チーム思考マトリックスへの書き込み (調整力)	2 ① 本時 ①

本時の目標

- 「円周＝直径×3.14」を使ってトラックのカーブの長さや直径、半径を求めたり、トラックの全長とカーブの長さから、ストレートの長さを求めたりすることができる。
- ◎ 陸上競技トラックの設計手順において、提示条件を満たしているかどうか、無駄がないかどうか、チームのメンバーの考えのよさを認めながら、考えを統合することができる。

本時の展開

活動と内容	子どもの思考の流れ										
1 陸上競技トラックの設計条件を知り、試しに設計する。【チーム】 ○ 競技場の広さと関係付けて、陸上競技トラックの基点となるコーナー4地点の位置を考えること ※ 陸上競技トラックの基点を試行錯誤しながら決定することができるように、移動可能な4種類の磁石を基点として用意する。 めあて 条件に合うストレートやカーブの長さを決めて、 陸上競技トラックをチームで設計しよう。 2 条件に合う陸上競技トラックを設計し、その手順を話し合う。 (1) 分担した基点の設計図をもとに、条件に合う陸上競技トラックをチームで設計する。【ソロ→チーム①】 ○ 条件に合ったストレートとカーブの長さを決定すること ※ 諸条件を解決したかどうかとらえることができるように、諸条件に表にしたシートを用意する。 (2) 設計図をチーム間で出し合い、設計手順について話し合う。 【チーム②】 ○ 競技場の縦の長さに着目すればカーブを決定することができ、競技場の横の長さに着目すればストレートを決定することができることに気付くこと ※ 設計手順の共通点や差異点をとらえることができるように、2つの設計手順を並列に板書する。	子どもの思考の流れ ・ Aはこの辺りかな。 ・ Dはその真向かいだから、この辺りかな。 ・ だったら、BとCはこの辺りかな。 ・ カーブの直径をもう少し長くできそう。 ・ ストレートを少し短くしないといけない。 ・ 競技場の横が56mだから、半径を12mにするとカーブは$24\text{m} \times 3.14 \div 2$で37.68m。 ・ ストレートの長さは、$100\text{m} - 37.68\text{m}$で62.32m。半分だから、31.16m。約32mだ。 ・ 競技場の横の長さを見れば、ストレートとカーブの半径を決めることができる。 ・ 競技場の縦の長さを見れば、カーブやカーブの直径を決めることができる。 ・ チームのみんなで設計することができた。 ・ 全長が400m、AからBが100mだから、CからDも100mだ。BからC、DからAも100mになるね。 ・ 競技場の横の長さは、ストレートとカーブの直径を合計した長さ以上だね。 ・ 競技場の縦の長さは、カーブの直径の長さ以上だね。										
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 50%;">設計手順Aの例 (競技場の横の長さに着目)</th><th style="width: 50%;">設計手順Bの例 (競技場の縦の長さに着目)</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>① A地点からB地点までのストレートの長さを決める。</td><td>① B地点からC地点までのカーブの長さを決める。</td></tr> <tr> <td>② 同様に、C地点からD地点までのストレートの長さを測り取る。</td><td>② 同様に、D地点からA地点までのカーブの長さを測り取る。</td></tr> <tr> <td>③ B地点からC地点までのカーブの長さを決める。</td><td>③ A地点からB地点までのストレートの長さを決める。</td></tr> <tr> <td>④ 同様に、D地点からA地点までのカーブの長さを測り取る。</td><td>④ 同様に、C地点からD地点までのストレートの長さを測り取る。</td></tr> </tbody> </table>	設計手順Aの例 (競技場の横の長さに着目)	設計手順Bの例 (競技場の縦の長さに着目)	① A地点からB地点までのストレートの長さを決める。	① B地点からC地点までのカーブの長さを決める。	② 同様に、C地点からD地点までのストレートの長さを測り取る。	② 同様に、D地点からA地点までのカーブの長さを測り取る。	③ B地点からC地点までのカーブの長さを決める。	③ A地点からB地点までのストレートの長さを決める。	④ 同様に、D地点からA地点までのカーブの長さを測り取る。	④ 同様に、C地点からD地点までのストレートの長さを測り取る。	
設計手順Aの例 (競技場の横の長さに着目)	設計手順Bの例 (競技場の縦の長さに着目)										
① A地点からB地点までのストレートの長さを決める。	① B地点からC地点までのカーブの長さを決める。										
② 同様に、C地点からD地点までのストレートの長さを測り取る。	② 同様に、D地点からA地点までのカーブの長さを測り取る。										
③ B地点からC地点までのカーブの長さを決める。	③ A地点からB地点までのストレートの長さを決める。										
④ 同様に、D地点からA地点までのカーブの長さを測り取る。	④ 同様に、C地点からD地点までのストレートの長さを測り取る。										
3 条件に合った陸上競技トラックを設計するために必要な競技場の広さを求める。【チーム③】 ○ 競技場の横の長さは（ストレート＋カーブの直径）、縦の長さはカーブの直径で求められること ※ ストレート及びカーブの半径と競技場の横の関係、カーブの直径と競技場の縦の関係に気付くことができるように、条件としてトラックの全長とA地点からB地点の長さを提示する。											

チームで道順の数を多様な方法で調べ、考え方の合意形成を図る算数科学習 第6学年1組 算数科学習指導案

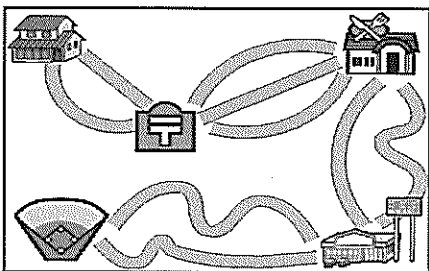
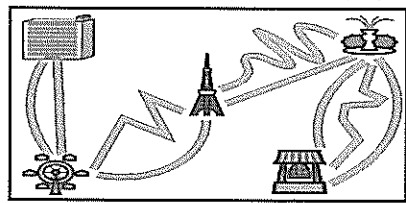
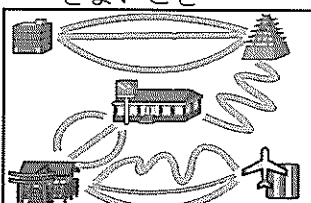
指導者 森 将 和

単 元 チームで道順の数を調べよう (場合の数の発展)

単 元 目 標

豊かな 学力	○ 条件に合った道順を落ちや重なりがないように調べるには、樹形図や表に整理して、書き表せばよいことを理解することができる。(知識・技能) ○ 条件に合った道順を調べる際に、ある観点に着目して調べたり、整理して図や表に表して調べたりすることができる。(思考力・判断力・表現力) ○ 条件に合った道順を意欲的に調べることができる。(関心・意欲・態度)
人と 働く力	◎ 条件に合った道順の調べ方について、考えを出し合い、友達の考えのよさや自分の考えの共通点、差異点に気づき、チーム内で考えを合意してチームの結論としてまとめることができる。(調整力)

単 元 計 画 (全3時間) ※ 太枠囲みはチームの活動を中心に行う時間

活 動 と 内 容		「開かれた個」の支援	配時																								
1 4人で1チームをつくり、家から野球場まで複数の道がある場合のすべての道順の数について、落ちや重なりがないように調べる。 ○ 複数の道がある場合の道順を、落ちや重なりがないように調べるときには、樹形図や表を用いて整理しながら調べるとよいこと		※ チームで複数の道を組み合わせた道順の数を調べるという問題提示 (関心・意欲・態度) ※ ソロで調べた方法をチームで出し合い、考えを整理するチームワークの位置付け (調整力)	1																								
2 チームで、条件に合った道順の数を落ちや重なりがないように調べる。 ○ 条件に合った道順を調べる場合でも、これまでと同じように樹形図や表を用いれば落ちや重なりがなく調べることができ、距離の長い順番に調べたり、距離や○、×などの印を書き込んで調べたりするとよいこと	 <table border="1"> <tbody> <tr> <td>すみれ通り 4.5km</td> <td>あじさい通り 3km</td> </tr> <tr> <td>ひまわり通り 4km</td> <td>つばき通り 6.5km</td> </tr> <tr> <td>アサガオ通り 3.5km</td> <td>ゆうがお通り 3.5km</td> </tr> <tr> <td>すいせん通り 5.5km</td> <td>さざんか通り 2.5km</td> </tr> <tr> <td></td> <td>さくら通り 1km</td> </tr> <tr> <td colspan="2">条件 合計距離が16km未満の道順</td> </tr> </tbody> </table>	すみれ通り 4.5km	あじさい通り 3km	ひまわり通り 4km	つばき通り 6.5km	アサガオ通り 3.5km	ゆうがお通り 3.5km	すいせん通り 5.5km	さざんか通り 2.5km		さくら通り 1km	条件 合計距離が16km未満の道順		※ チームで道順の数を調べるという目標を共有するチームⅠ→自分でいろいろな方法で道順を調べるというソロの位置付け (思考力・判断力・表現力) ※ 自己追究した考えをチームで出し合い、チームで考えの合意を図るチームⅡの位置付け (調整力)	1 本 時												
すみれ通り 4.5km	あじさい通り 3km																										
ひまわり通り 4km	つばき通り 6.5km																										
アサガオ通り 3.5km	ゆうがお通り 3.5km																										
すいせん通り 5.5km	さざんか通り 2.5km																										
	さくら通り 1km																										
条件 合計距離が16km未満の道順																											
3 チームで、さらに条件が複雑になった道順の数を落ちや重なりがないように多様な方法を用いて調べる。 ○ 条件が複雑になった場合にも番号や記号を用いたり、条件に合うように並べ替えて整理したりして効率よく調べるとよいこと	 <table border="1"> <tbody> <tr> <td>ライオン通り 4km</td> <td>キリン通り 2km</td> <td>ライオン通り 500円</td> <td>キリン通り 500円</td> </tr> <tr> <td>しまうま通り 3km</td> <td>うさぎ通り 3km</td> <td>しまうま通り 400円</td> <td>うさぎ通り 450円</td> </tr> <tr> <td>カンガルー通り 3.5km</td> <td>パンダ通り 5.5km</td> <td>カンガルー通り 350円</td> <td>パンダ通り 450円</td> </tr> <tr> <td>ペンギン通り 5km</td> <td>しろくま通り 4km</td> <td>ペンギン通り 450円</td> <td>しろくま通り 300円</td> </tr> <tr> <td>イノシシ通り 2.5km</td> <td>トナカイ通り 3.5km</td> <td>イノシシ通り 250円</td> <td>トナカイ通り 100円</td> </tr> <tr> <td colspan="2">条件Ⅰ 合計距離が16km以上の道順</td> <td colspan="2">条件Ⅱ 合計金額が1500円以上の道順</td> </tr> </tbody> </table>	ライオン通り 4km	キリン通り 2km	ライオン通り 500円	キリン通り 500円	しまうま通り 3km	うさぎ通り 3km	しまうま通り 400円	うさぎ通り 450円	カンガルー通り 3.5km	パンダ通り 5.5km	カンガルー通り 350円	パンダ通り 450円	ペンギン通り 5km	しろくま通り 4km	ペンギン通り 450円	しろくま通り 300円	イノシシ通り 2.5km	トナカイ通り 3.5km	イノシシ通り 250円	トナカイ通り 100円	条件Ⅰ 合計距離が16km以上の道順		条件Ⅱ 合計金額が1500円以上の道順		※ 効率よく調べることができる方法が多様に考えられる問題事象の提示 (思考力・判断力・表現力) ※ 多様な方法を表現することができ、チームで共通点や差異点を明らかにすることができるカードとボードの活用 (調整力)	1
ライオン通り 4km	キリン通り 2km	ライオン通り 500円	キリン通り 500円																								
しまうま通り 3km	うさぎ通り 3km	しまうま通り 400円	うさぎ通り 450円																								
カンガルー通り 3.5km	パンダ通り 5.5km	カンガルー通り 350円	パンダ通り 450円																								
ペンギン通り 5km	しろくま通り 4km	ペンギン通り 450円	しろくま通り 300円																								
イノシシ通り 2.5km	トナカイ通り 3.5km	イノシシ通り 250円	トナカイ通り 100円																								
条件Ⅰ 合計距離が16km以上の道順		条件Ⅱ 合計金額が1500円以上の道順																									

本時の目標

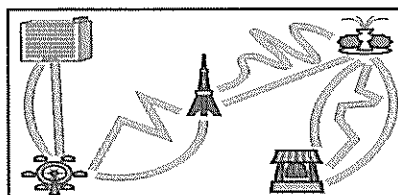
- 合計の距離が16km未満といった条件に合った道順の数を調べる際に、既習の樹形図や表を使って合計距離の長い順番に調べたり、○、×や記号を用いて調べたりするとともに、調べた方法について説明することができる。
- ◎ チームで落ちや重なりがない方法について出し合い、友達の考えのよさや自分との共通点、差異点に気づき、チームの合意した結論としてまとめることができる。

本時の展開

活動と内容

- スタート地点から条件に合う4つの目的地に行く道順の数を落ちや重なりがないように調べる本時学習についてチームで話し合う。
 - 道順を落ちや重なりがないように調べるには、樹形図や表をつかえばよいという見通しをチームでとらえること

- ・ チームで条件に合うスタート地点から指定された4つの目的地に行く道順の数を落ちや重なりがないように調べること



すみれ通り 4.5km	あじさい通り 3km
ひまわり通り 4km	つばき通り 6.5km
アサガオ通り 3.5km	ゆうがお通り 3.5km
すいせん通り 5.5km	さざんか通り 2.5km
	さくら通り 1km
条件 合計距離が16km未満の道順	

- ※ チームの目標となる具体的な条件の提示と、チームでの活動の手順を確認し合う場を設定し、目標を共通理解させる。

めあて チームで条件に合う道順の数を
落ちや重なりがないように工夫して調べよう。

- 道順の数を調べた過程と結果をカードに表し、ボードを使ってチームの答えや調べた方法について整理する。
 - 条件に合う道順の数を樹形図や表を使って、工夫して調べる。
 - 樹形図や表を距離の長い順番にかいたり、距離や○や×の印を付けたりして、条件に合う道順を落ちや重なりがないように工夫して調べること

(すみ) 4.5	(すい) 5.5	(つ) 6.5	(ゆ) 3.5 ×	(さ) 2.5 ×	(さく) 1 ×
	(あさ) 3.5	(あじ) 3			

すみれ (4.5)	すいせん (5.5)	つばき (6.5)	ゆうがお (3.5)	×	(20)
すみれ (4.5)	すいせん (5.5)	つばき (6.5)	さざんか (2.5)	×	(19)
すみれ (4.5)	すいせん (5.5)	つばき (6.5)	さくら (1)	×	(17.5)
すみれ (4.5)	すいせん (5.5)	あじさい (3)	ゆうがお (3.5)	×	(16.5)
すみれ (4.5)	すいせん (5.5)	あじさい (3)	さざんか (2.5)	○	(15.5)
すみれ (4.5)	すいせん (5.5)	あじさい (3)	さくら (1)	○	(14)

- ※ 樹形図や表を自由に書き込めるカードを準備し、条件に合う道順について調べた方法や結果を表すことができるようにする。
 - ソロで追究した工夫した方法や結果を出し合い、道順の数と調べた方法について話し合う。
 - チームで調べた結果や方法の共通点や差異点から、チームとしての結果を整理して考えること
- ※ カードとボードを用いて、道順の数と工夫した方法についてのチームの考えをまとめることができるようにする。
- 3 チームでの考えを全体に出し合い、学級で工夫した方法を共有し、別の問題に取り組む。
 - 共有した考えを使って、新たな事象を解決すること
- ※ チームで新たな事象を解決するチームの活動を設定する。

子どもの思考の流れ

- ・ 4つの目的地に行く道順の数を調べればよいんだな。
- ・ 合計距離が16km未満という条件に合った道順を調べるんだね。
- ・ これまでと同じように樹形図や表を使うと道順の数を調べることができそうだよ。
- ・ 樹形図に距離をかき込んで、条件に合うものを探そう。
- ・ 16km未満という条件があるので、合計距離の長い順番に調べていけば、効率よく調べることができそうだ。
- ・ みんなが調べたカードをボードに貼って整理しよう。
- ・ まず、条件に合うものはいくつあったかチームで出し合おう。
- ・ 条件に合う道順は13通りあったよ。
- ・ ぼくは、表に距離を書いて条件に合うものを調べたよ。
- ・ 私は、樹形図に距離をかいて調べたよ。
- ・ 途中で16kmを超える時は、続きは調べないのも工夫だね。
- ・ チームで調べるといろいろな考えで求めることができることがわかったよ。

滞在国での経験を生かし、複数のものの見方から考えを深める総合的な学習

帰国子女学級 国際交流タイム学習指導案

指導者 今村 光宏 合田 賢治 江口 友子

単 元 ひらこう!絵本ミュージアム

単 元 目 標

主体性	○ 絵本を聞いた経験や滞在国で過ごした経験を生かしながら調べることができる。 ○ みんなといっしょにアイデアを出し合ったり意見交換したりして、意欲的に調べ方やまとめ方を工夫しようすることができる。
価値性	◎ 滞在国や日本の絵本について調べたことを比較し、滞在国と日本の歴史やものの考え方、人々の工夫や努力にふれ、それぞれのよさを考えることができる。
自己発揮性	○ 滞在国の文化と日本の文化の両面を伝えることのできる自分に自信をもって生活しようすることができる。

単 元 計 画 (全12時間)

活 動 と 内 容	「開かれた個」の支援	配時
1 滞在国の絵本について話し合う。 (1) それぞれの滞在国で出合った絵本について話し合う。 ○ 滞在国で生活していたときにどのような絵本と出合ったり、親しんだりしてきたか、思い出して説明すること (2) 滞在国で親しんできた絵本の中から、どの絵本について調べるとよいか視座別グループで交流して決める。 ○ 記憶している絵本の中から、滞在国で作られた絵本であり、わかりやすい内容のものを相談しながら選ぶこと	※ 比較した際に親しみやすく、わかりやすく、作者の意図が表れている日本の絵本「うさぎとかめ」の提示 (主体性) ※ 滞在国での経験をもとに絵本を決定させる場の設定 (価値性)	2 ① ①
2 滞在国の絵本について調べてまとめる。 (1) 滞在国で出合ったり、親しんできたりした絵本についてインターネットや資料によって調べる。 ○ 絵本の内容と絵本が作られた時期やそのころの滞在国の様子、作者が伝えたかった意図について調べたり、まとめたりすること (2) 絵本について調べたことをノートにまとめて視座別グループ内で発表する。 ○ 絵本の作られた背景や考え方についてまとめて、わかりやすく発表すること	※ 滞在国で身に付けた言語を生かしてインターネットや資料等を使って調べる場の設定 (自己発揮性) ※ それぞれの視座から交流させ、お互いにアドバイスし合い、まとめたことを付加修正させる活動の位置付け (価値性)	4 ② ②
3 滞在国の絵本と似ている日本の絵本について調べてまとめ絵本ミュージアムをひらいて話し合う。 (1) 地域別のグループで、みんなで調べてきた滞在国の絵本と同じような内容だったり、作者が伝えたかったことが似ていたりする日本の絵本を選ぶ。 ○ 滞在国の絵本の内容を読み取り、同じような内容の日本の絵本を探すこと (2) 選んだ日本の絵本について、作られた背景や考え方について調べ、2つの絵本を比較してまとめ、絵本ミュージアムを開いて、それぞれの絵本やその考え方のよさについて発表し合う。 ○ 滞在国と日本の共通点や考え方・文化の違いやよさに気付くこと	※ 滞在国と日本の絵本について個別の追究やグループでの交流を通した滞在国側と日本側の視点を変化させる活動構成 (主体性) ※ 地域別のグループで、滞在国と日本の絵本とを比較させ、両国には共通点や考え方・文化の違いがあり、それぞれによさがあることに気付かせる場の設定 (価値性)	6 ① ⑤ 本 時 4 ／ 5

本時の目標

- 滞在国や日本の絵本について調べたことを比較して、お互いの絵本のよさを感じ取ることができる。
- ◎ 滞在国や日本の絵本について調べたことについて、経験を生かして意見を出し合ったり、意見交換したりすることができる。

本時の展開

活 動 と 内 容

1 滞在国の絵本について発表し合う。

- 滞在国で親しんだ絵本について作られたときの背景や考え方について調べたことをもとに自分なりの考えをもつこと

※ 視座別グループで協力して滞在国で経験してきたことや詳しく調べたことを取り入れながら発表させる。

めあて たいざい国と日本の絵本を比べて、お互いのよさをみつけよう。

2 滞在国と日本の絵本を比較して話し合う。

- (1) 滞在国の絵本と似ている日本の絵本について発表する。

- 滞在国の絵本と似ている日本の絵本について、作られたときの背景や考え方について、事実をもとに分析すること

※ 地域別のグループで協力して、自分たちが調べた滞在国の物語と似ているところについて説明しながら発表させ、補足させる。

- (2) 滞在国の絵本と日本の絵本を比較し、共通点と相違点について発表し合う。

- 独自の文化を発展させてきた滞在国と日本について、絵本を通してそれぞれの考え方のよさを見つけ出すこと

※ 同じ観点でまとめたものを比較して見せることによって、共通点と相違点を一目で理解できるようにする。

	滞在国の絵本	日本の絵本
題名	Don't Let the Pigeon Drive the Bus!	いたずらこぎつね
お話の内容	 口がうまいハトがバスを運転しようとする	 子ぎつねが助けられたお礼にプレゼントをする
作られた時期	2005年09月	1986年10月
その時の国の様子	2001年同時多発テロ、2005年カトリック教団	いじめ問題、三原山噴火
絵本の意味	ユーモアを楽しむ	恩返し of 気持ち
よいところ	いたずら鳩との根気強い知恵比べ	いたずらこぎつねが気持ちを入れ替えて恩返しする

3 滞在国と日本の文化のよさについて話し合う。

- 滞在国の絵本と日本の絵本の作られた双方の背景から、滞在国と日本のよさに気付くこと

※ 滞在国での自分の経験をもとに、滞在国と日本の双方のよさを見つけさせ、海外での経験が自分たちの視野を広げていることに気付かせる。

子どもの思考の流れ

- ・ 前の時間までに滞在国と日本の絵本について調べてまとめたから、早くみんなに発表したいな。

- ・ 僕は同じアメリカに滞在していたからその絵本について聞いたことを付け加えます。

- ・ 滞在国の絵本が、いろんな仲間と出会って協力して敵を倒すものだったので、日本のものもたろうに似ていると思います。

- ・ どちらも国内で戦いが起こっていた時につくられています。

- ・ どちらの絵本も、嘘をつくことやズルをすることはいけないということを意味していると思います。

- ・ この絵本は、現地校で人気があった絵本だった。仕事を怠けているとろくなことがないということが学校でもよく言われていたよ。

- ・ 同じ人をだますのですが、日本とアメリカとは大きく違うね。

- ・ どちらの国の絵本にも考え方・文化の違いやよさがあるね。

- ・ どちらの考え方も理解できるのは私たちが海外で生活してきたからだね。

体全体を通してチームで表現を追究し、音楽とのかかわりを深める音楽科学習
第1学年1組 音楽科学習指導案

指導者 高 武 龍 彦

題 材 みんなで あそぼう あそびうた

題 材 目 標

豊かな 学力	○ 楽曲のリズムや拍の流れに合わせて身体表現しながら歌うことができる。 (知識・技能) ○ 楽曲を特徴付けるリズムや拍の流れ、フレーズをとらえた遊び方を工夫することができる。 (思考力・判断力・表現力) ○ わらべうたのリズムや歌詞のおもしろさに関心をもち、進んで活動に取り組むことができる。 (関心・意欲・態度)
人と 働く力	◎ 友達とともに音楽に合わせたあそびを工夫することを通して、あそびの楽しさや喜びを味わうことができる。 (対話力)

題 材 計 画

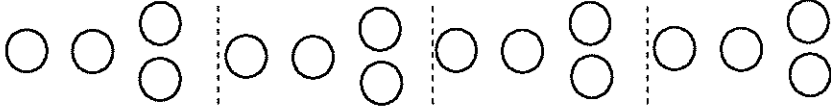
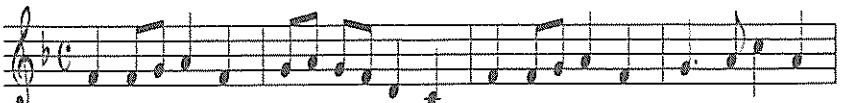
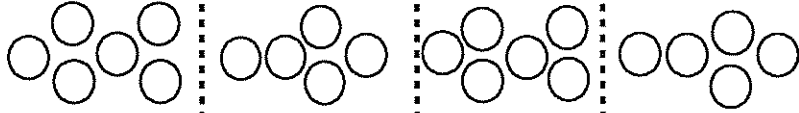
(全4時間) ※ 太枠囲みはチームの活動を中心に行う時間

活 動 と 内 容		「開かれた個」の支援	配時
1 手あそびうたやじゃんけんうたなどさまざまなあそびうたを歌って遊ぶ。 ○ あそびうた特有の拍の流れやフレーズなどをとらえ、あそびうたの楽しさをとらえること		※ 手あそびうた、かぞえうたなど、様々な遊び方があり、フレーズや拍の流れに特徴がある楽曲の選定(関心・意欲・態度) ※ 手拍子や手あわせなどのあそびを通した身体表現を交えた活動の設定 (思考・判断・表現)	1
例)「おちゃらか」  おち ら か おち ら か おち ら か ほい おち ら か かつ た よ おち ら か ほい			
2 遊び方や遊ぶ人数をチームで工夫して、あそびうたを歌って遊ぶ。 (1) 指あそびをしながら「でんでらりゅう」を歌う。 ○ フレーズのまとまりやくり返しなど楽曲の特徴的な要素をとらえること (2) けんけんあそびや手合わせあそびなど、チームで遊び方を工夫して「でんでらりゅう」を歌って遊ぶ。 ○ 楽曲がもつフレーズのまとまりや拍の流れを活かしたあそびをつくること		※ 楽曲に関するお話や写真など興味・関心をもたせる掲示物 (関心・意欲・態度) ※ お互いに考えた遊び方を伝え合うシンキングボードの活用 (思考・判断・表現) ※ フレーズや拍の流れを体感的にとらえるための身体表現の活用 (知識・理解) ※ 表現像を共有するチーム1と、ソロとチームを行き来して表現を工夫するチーム2の活動構成 (思考・判断・表現)	2 ① ① 本 時
「でんでらりゅう」  でん で ら り ゅ う ば で て く る ば っ て ん でん で ら れ ん けん でー て こん けん 遊び方の例 ①けんけんあそび ②手合わせあそび			
3 チームで工夫したあそびを発表し、それぞれの遊び方で歌って遊ぶ。 ○ 他のチームの工夫のよさを認め合い、チームのあそびをさらに高めること		※ 他のチームの表現を聴いて、表現を認め合い、チームの表現をさらに深め合う場の設定(対話力)	1

本時の目標

- 選んだ遊び方をもとに、フレーズのまとまりやくり返しなどの楽曲の諸要素をとらえて、チームの遊び方をつくることができる。
- ◎ ソロとチームの活動を通して、拍の流れやフレーズのまとまりなど自分の遊び方の音楽的根拠をもち、ペアの友達とかかわり合いながら、チームの「でんでらりゅう」のあそびをつくることができる。

本時の展開

活動と内容	子どもの思考の流れ
1 指あそびしながら「でんでらりゅう」を歌い、どのようなあそびにするか、チームの表現像について話し合う。 ○ 様々なあそびのおもしろさや楽しさをとらえること ※ 工夫するあそびを共有し合うチーム1を設定する。 (予想されるチームのあそびの例) 【けんけんあそび】  でんでらりゅうば でてくるばってん でんでられんけん でーてこんけん	・ わらべうたは、いろいろな遊び方があって楽しいね。 ・ 「でんでらりゅう」は、一人で指あそびをして歌ったね。 ・ 「でんでらりゅう」を「けんけんば」みたいに体を使ったあそびにすることもできるかもしれないね。
めあて チームで 「でんでらりゅう」に ぴったりの たのしい あそびを つくろう。 2 ソロやチームで、あそびを試しながらチームの「でんでらりゅう」のあそびをつくる。 (1) ソロで、「でんでらりゅう」に合うあそびをつくる。 ○ フレーズや、くり返しをとらえあそびを工夫すること ※ 身体表現しながら工夫を試行錯誤できるように、伴奏CDをくり返し流したり、あそびを書き込む楽譜を準備したりする。 (2) チームで、それぞれが工夫したあそびを出し合い、チームの「でんでらりゅう」のあそびをつくる。 ○ あそびを試しながら友達の工夫をとらえ、チームのあそびを高めていくこと ※ ソロとチームを行き来する活動構成を設定したり、チームのあそびを記録するボードを準備したりする。 【2小節をまとまりととらえた「けんけんあそび」の工夫例】	・ みんなで考えたら、いろいろなあそびができそうだよ。 ・ わたしは、〇〇さんと一緒に「けんけんば」しながら「でんでらりゅう」を歌ってみよう。 ・ けんけんばをひとまとまりにしてくり返してみよう。 ・ 〇〇さんは、どんな遊び方にしたかな。 ・ チームで遊び方を紹介しあおう。 ・ 〇〇さんは「けんばけんばけんけんば」をひとまとまりにしたんだね。 ・ まとまりを活かしてつくったんだね。 ・ 〇〇さんのあそびのほうが音楽に合うね。私もやってみよう。 ・ 他のチームも遊び方を工夫しているね。 ・ いろいろな遊び方があるね。
 でんでらりゅうば でてくるばってん でんでられんけん でーてこんけん  でんでらりゅうば でてくるばってん でんでられんけん でーてこんけん 3 それぞれのチームのあそびを発表する。 ○ 他のチームと自分のチームの違いや共通点、それぞれのチームの工夫のよさを見出すこと ※ 発表の場の設定と工夫した観点を確かめて発表するよう促す。	・ 〇〇さんは、どんな遊び方にしたかな。 ・ チームで遊び方を紹介しあおう。 ・ 〇〇さんは「けんばけんばけんけんば」をひとまとまりにしたんだね。 ・ まとまりを活かしてつくったんだね。 ・ 〇〇さんのあそびのほうが音楽に合うね。私もやってみよう。 ・ 他のチームも遊び方を工夫しているね。 ・ いろいろな遊び方があるね。

ペアとチームでの活動を組み合わせコミュニケーションを楽しむ外国語活動
第2学年1組 外国語活動指導案

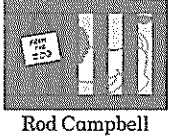
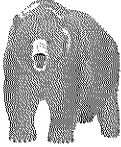
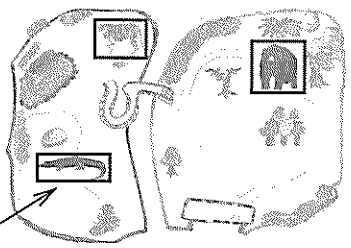
指導者 棚 町 尚 子

単 元 チームで楽しい動物園をつくろう ～What animals do you like?～

単 元 目 標

豊かな 学力	○ たくさんの相手に好きな動物を質問したり相手の質問に答えたりして繰り返し会話をし、動物カードを集めたり相手が言った動物カードを正しく渡したりすることができる。 (思考力・判断力・表現力) ○ 体を動かしたり鳴き声をまねしたりしながら、外国語での動物の言い方を楽しんで発音しようとする事ができる。 (関心・意欲・態度)
人と 働く力	◎ どんな動物園をつくりたいか友達と話し合い、外国語やジェスチャーを使って動物を集めて、オリジナルの動物園をつくる事ができる。 (対話力)

単 元 計 画 (全4時間) ※ 太枠囲みはチームの活動を中心に行う時間

活 動 と 内 容		「開かれた個」の支援	時
1 外国語での動物の言い方を、楽しみながら繰り返し聞いたり動作で表したり、自分で発音したりする。 【活動例】 ・ALTによる読み聞かせを聞く。 ・絵本にでてくる動物の名前を一緒に読む。 ・ALTのヒントを聞いて動物を当てる。 ○ 様々な動物の英語での言い方を知り、慣れること	Dear Zoo  Rod Campbell 【本の例】   【動物カード】	※ 前半は聞くことが中心の活動、後半は動作化から音声化することが中心となる活動への変化 (思考力・判断力・表現力) ※ ALTやJTEとやり取りをして動物の言い方を予想する活動(対話力)	1
		※ コミュニケーションが何回成立したかわかるように可視化する動物シールの提示 (思考力・判断力・表現力) ※ 外国語での言い方やジェスチャーを使ってやり取りをすることができるよう役割を交代して活動させたり、自分の動物園の特徴を紹介したりさせる活動の位置付け (対話力)	2 ① ①
2 “What animals do you like?”, “I like ~.”の会話をして自分が好きな動物カードを集めて自分のオリジナル動物園をつくったり、役割を交代して動物カードを渡したりする。 (1) 新しく知った動物の言い方を中心にペア対抗キーワードゲームやカード取りゲームを通して音声化することに慣れ親しむ。 ○ 動物園で見られる動物の英語での言い方に親しむこと (2) 自分の動物園をつくるために “What animals do you like?” “I like ~.”の会話をして動物カードのやり取りをする。 ○ 好きな動物は何かをたずねる表現に慣れること	 【動物カード】	※ メンバーの分担が見えチーム独自の動物園になるように複数の地図の選択肢の提示 (思考力・判断力・表現力) ※ チームの特色が出るように動物園の地図の選択肢を複数提示し、チームで話し合う時間の設定 (対話力)	1 本時
3 もっと大きな動物園をつくるためにチーム内で分担して動物を集めるとい見通しをもち、一人一人がコミュニケーションをしてチームで動物園を完成させる。 ○ チームで力を合わせて動物を集め、大きな動物園を完成させる楽しさや、チームで力を合わせたからこそ大きな動物園をつくる事ができた満足感を味わうこと	 【動物園の地図と動物シール】		

本時の目標

- 友達と大きな動物園をつくるための動物集めをするために、“What animals do you like?”の質問に答えて動物カードを集めたり役割を交代して相手にたずねたりすることができる。
- ◎ 友達とどんな動物園をつくりたいか話し合い、役割を分担してたくさんの動物を集めて、動物園を完成することができる。

本時の展開

活動と内容	子どもの思考の流れ
1 大きな動物園の図を見て、限られた時間の中で大きな動物園にたくさんの好きな動物を飼って楽しい動物園にするにはどうしたらよいかペアで話し合う。 ○ ペア同士でチームをつくり、チームで活動することのよさがありそうだとすることに気付くこと  ←池・草むらの動物担当 木の上の動物担当→   ←水辺の動物担当 草原の動物担当→  【大きな地図のパーツ】 ※ それぞれの地図ごとに担当を決め、最後に合わせればよさそうだとすることに気付かせる。 めあて チームで楽しくて大きなどうぶつ園をつくろう。 2 大きな動物園を完成させるために、ペア同士でチームをつくり、誰がどんな動物を集めてくるかの作戦を立てて動物集めをする。 (1) ペア同士で声を掛け合い、それぞれが担当する場所や集めてくる動物を話し合う。 ○ チームで分担すれば短い時間でたくさんの動物を集められそうだとすることに気付くこと ※ 必要に応じて子どもたちが英語での動物の言い方を繰り返し聞いて確認することができるコーナーをつくり、ALTによる音声を吹き込んだタブレットPCを置く。 (2) チームの役割にもとづいて、メンバーの一人ひとりが任された場所の動物集めをするためにコミュニケーションをして動物カードを集める。 ○ チームの一員として、コミュニケーションをして動物カードを集める楽しさを感じる ※ チームで動物カードが集まったことへの喜びや、メンバーのがんばりを伝え合っているところを取り上げ、全体に紹介して称賛する。 3 チームごとに動物園を紹介し、工夫したところやコミュニケーション活動で自分ががんばったこと、チームのメンバーががんばっていたことを発表する。 ○ チームで活動することで大きな動物園を完成させることができたという達成感を得ること ※ 全てのチームの動物園を全体に提示し、どのチームも力を合わせて動物集めをしたこと、そのためにたくさんの英語での動物の言い方が使えるようになったことを称賛し、本時の活動でのがんばりや成長に気付かせる。	・ この前は一人で動物園をつくったよ。またつくりたいな。 ・ 北海道の動物園は大きいよ。あんな動物園をつくりたいな。 ・ 大きな動物園が出てきたよ。一人ではつくれそうにないね。 ・ 友達と一緒になら大きくても動物園をつくれそうだよ。 ・ 一緒に大きな動物園をつくろうよ。 ・ この地図をくっつけたら楽しい動物園になりそうだよ。 ・ 私は草原コーナーに動物を集めてくるね。 ・ 池があるといいよね。この地図を組み合わせよう。 ・ そこには水の近くにわにをおこうよ。 ・ じゃあ私は草原のコーナーにしてトラとライオンをおくよ。 ・ パンダのコーナーは○○ちゃんの草原コーナーにしよう。 ・ たくさん動物を集めてくるよ。楽しい動物園になりそうだな。 ・ ○○ちゃん、もうそんなにカードを集めたの。すごいね。 ・ たくさん動物の名前を言って動物園をつくることができたよ。

事例の共通性をもとに、チームで「筆者の選材の理由」を見出していく国語科学習 第3学年2組 国語科学習指導案

指導者 平 川 洋 一

単 元 どうして三つの事例なのだろう？「人をつつむ形－世界の家めぐり－」

単 元 目 標

豊かな 学力	○ 「地元にある材料」「その土地の気候」「人々のくらしに便利」という三つの視点で、事例の中の事柄を弁別することができる。（読む能力） ○ 事例の共通性に着眼しながら、段落を比較して読むことができる。（読む能力） ○ 「自分が気に入った理由」と「筆者が選んだ三つの家を選んだ理由」とのズレに疑問をもち、筆者の選材の理由に課題をもつことができる。（関心・意欲・態度）
人と 働く力	◎ 同じ家を読んだ友達と考えを強化し合ったり、違う家を読んだチームの友達の考えの違いに気付いて認め合ったりすることができる。（行動力）

単 元 計 画 (全9時間) ※ 太枠囲みはチームの活動を中心に行う時間

活 動 と 内 容		「開かれた個」の支援	時
1 「人をつつむ形－世界の家めぐり－」を通読し、二読目の課題について話し合う。 (1) 筆者が紹介するモンゴル、チュニジア、セネガルの三つの家の事例について、感想を書きまとめる。 ○ 自分の理想の家との比較をもとに、いちばん気に入った家はどれか根拠を明らかにしてまとめること (2) 二読目の課題について話し合う。 ○ 世界中の家の中からどうして三つの家を選んだのか、筆者が選材した理由に課題をもつこと		※ 前半の二事例と頭括文を省いた文章の提示 (関心・意欲・態度)	2
		※ 気に入った家が同じメンバーのチームを編制 (行動力)	①
2 筆者の選材の理由をチームで読み取る。 (1) モンゴルとチュニジアの家を比較しながら読む。 ○ 二つの家の共通性からチームの考えをまとめること (2) モンゴルとセネガルの家を比較しながら読む。 ○ 二つの家の共通性からチームの考えをまとめること (3) チュニジアとセネガルの家を比較しながら読む。 ○ 二つの家の共通性からチームの考えをまとめること (4) 筆者が三つの家を選んだ理由について、チームで話し合う。 ○ 三つの家の共通性からチームの考えをまとめること (5) 筆者の選材の理由をチームで読み取る。 ○ 三つの家のそれぞれに「材料」「気候」「人々のくらし」という視点が共通していることをとらえること		※ 原典『世界あちこちゆかいな家めぐり』の提示 (関心・意欲・態度)	①
		※ 気に入った家が異なるメンバーのチームを編制 (行動力)	5
3 前半の二つの事例の役割についてチームで読み取る。 (1) ボリビアとルーマニアの事例を比較して読む。 ○ 三つの視点の共通性を確かめること (2) ボリビアとルーマニアの事例の役割について読み取る。 ○ 前半の二事例と後半の三事例の関係を考え、「書き出し－事例－中括－事例」という文章の構成をとらえること		※ 頭括文の一部を提示 (読む力)	①
		※ 教科書の挿絵等、補助資料を部分的に提示 (読む力)	①
		※ 事柄を個でまとめる付箋紙の準備 (読む力)	①
		※ 事柄をチームで比較するホワイトボードの準備 (行動力)	①
		※ 頭括文の全体、前半の二つの事例の提示 (読む力)	①
			本時
		※ 気に入った家が異なるメンバーのチームを編制 (行動力)	2
		※ 既習の説明文「じどう車くらべ」の比較提示 (読む力)	①

本時の目標

- 『どの家も、「地元にあるざいりょう」を使い、「その土地の気候」に合わせて、「人々のくらしにべんり」なようにつくられている。』ことを、事例に書かれている事柄と照応しながら読み取ることができる。
- ボリビア、ルーマニアの事例に出合い、三つの事例との共通性を探そうとする意欲を高めたり、事例と事例の関係に課題をもったりすることができる。
- ◎ 個で見付けた共通性をチームで認め合ったり、筆者の視点と事柄の照応が難しい事例について、チームで考えようとしたりすることができる。

本時の展開

活動と内容

子どもの思考の流れ

1 筆者が三つの事例を選んだ理由について、チームで追究してきた成果を確かめ、本時学習のめあてについて話し合う。

○ 筆者の選材の視点への関心と全体交流への意欲を高めること

※ 三つの家の共通性をチームでいくつ見付けたか発問し、頭括文の省かれた箇所の数と比較させる。

めあて 筆者が三つの家をえらんだ理由について発表し合い、答えと文章をくらべてたしかめよう。

2 筆者が三つの事例を選んだ理由について、読み確かめる。

(1) チームで追究してきた筆者の選材の視点について聞き合う。

○ 他のチームの考えと自分のチームの考えの違いをとらえ、筆者が三つの事例を選んだ理由を知りたいという意欲を高めること

※ どの事柄を根拠にしたのか共通理解できるように拡大教材文を準備し、それぞれのチームの発言内容をプラス面で評価する。

(2) 頭括文の全体を知り、三つの視点で書かれているかチームで読み確かめる。

○ 『どの家も、「地元にある材料」で、「その土地の気候に合わせて」「人々のくらしにべんりなように」つくられている。』といえるか、事例の段落の中から事柄を取り出して照応すること

セネガル	チュニジア	モンゴル	☆事例	☆筆者の選材の視点	☆チームで追究してきた選材の視点
みき ローブの さん生えて いるマング	あな 地面 しつくい	羊の毛で 作った フェルト	きびしい 冬の寒さ	ざいりょう の気候	どの家も、 ()を使い、 ()に合わせて、 ()につくられています。
暑い地方	雨が少ない	夏は五十度 に近く、冬 はれい度よ り下がる	羊や馬が食 べる草が生 える所に移 動できる	その土地 の暮らしに べんり	
飲み水として 利用する	家が新しい	家族がふえ てく新しい 部屋ができ あがる			

※ 三つの視点との照応が難しい事柄について、全体に取り上げる。

3 本時学習のまとめとこれからの学習について話し合う。

○ 『どの家も「地元にある材料」で、「その土地の気候に合わせて」「人々のくらしにべんり」なようにつくられている。』ことを確かめ、ボリビアとルーマニアの家も三つの視点で書かれているだろうという見通しをもつこと

※ ボリビアとルーマニアの家の文章と写真を提示する。

- ・ ぼくたちのチームは、五つの共通点を見つけたよ。

- ・ 他のチームはいくつ見つけたのかな。

- ・ 筆者が三つの家を選んだ理由を早く知りたいな。

- ・ わたしたちのチームは、どの家も「人に便利に」つくられていると思います。

- ・ どの家も「人をつつむ形」を工夫してつくられていると思います。

- ・ なるほど、「材料」「気候」、「くらしに便利」の三つの視点で選んだんだね。

- ・ チュニジアの家の「材料」って何だろう。書かれていないよ。

- ・ きつと地面が材料になるんだと思うよ。

- ・ セネガルの家は、「気候」のことが書かれていないよ。

- ・ マングローブの説明の中に「暑い地方」と書かれているよ。

- ・ ボリビアとルーマニアの家も紹介されていたんだね。きつと「材料」「気候」「便利」の三つの視点で書かれていると思います。

チームで地域の働きや取組のよさを様々な視点から判断する社会科学学習

第4学年1組 社会科学学習指導案

指導者 山田 耕司

小 単 元 掘割のめぐるまち 水とともに生きる人々

～よかばんも～柳川市、よかろうが福岡県～

単 元 目 標

豊かな 学力	○ 柳川市民は生活を充実・発展させるために、受け継がれた掘割を保護し、様々な産業に活用していることをとらえることができる。(知識・技能) ○ 柳川市を活性化させるために、様々な産業で掘割を保護・活用する取組から地域への思いや願いを考えることができる。(思考力・判断力・表現力) ○ 柳川市との生活の違いに関心を持ち、現在も掘割を活用する理由を追究する学習問題を設定し、地域資源を大切にしようとするすることができる。(関心・意欲・態度)
人と 働く力	◎ 柳川市の人々が抱える様々な問題に対応し、解決している働きから、自らも地域を愛する人たちに共感し、発展させる取組を合意形成することができる。(調整力)

単 元 計 画

(全9時間) ※太枠囲みはチームの活動を中心に行う時間

活 動 と 内 容	「開かれた個」の支援	配時
1 福岡市と柳川市の人々の生活を調べ、掘割がどのように生活に活用されているのか追究する学習問題を話し合う。 (1) わがまち福岡市と県内の低い地域にある柳川市の位置関係や人々の生活の様子を比較して調べる。 ○ 柳川市の人々の生活の様子や位置関係をとらえること (2) 農業や水産業、観光業に掘割がどのように保護活用されているのか調べ、伝える学習問題を話し合う。 ○ 柳川市の農業や水産業、観光業に掘割がかかわっていることに気付くとともに、他市町民は柳川市の掘割に対する関心が低いことをとらえること	※ 福岡市と柳川市の土地利用図、人々の生活の様子の写真資料や観光収入の資料提示(知識・理解) ※ 柳川市の土地利用図、農水産物の提示(関心・意欲・態度) ※ 農水産物の適した土壌や水質の資料提示(思考・判断・表現)	3 ② ①
2 掘割が様々な産業の発展のために、どのように保護・活用されているのか見学や資料から調べ、伝える内容を話し合う。 (1) 柳川市の掘割がどのように様々な産業の発展に活かされているのか、同質チームで「伝統」「農業」「水産業」の視点から調べる。 ○ 柳川市の人々が筑紫平野の低く平らな土地のよさを活用したり、水害に見舞われやすい問題を克服したりして産業に従事していることをとらえること	※ 柳川市の掘割や田畑の見学、観光資源やその取組み資料提示(知識・理解) ※ ごみや排水で汚れた掘割を原状に戻した人々の取組の資料提示(思考・判断・表現)	4 ③
(2) 農業や漁業にも地域資源として保護・活用している掘割のよさが一番分かるパンフレットの見出しを異質チームで考え、地域の特色や人々の思いについて話し合う。 ○ 柳川の人々の掘割に対する保護・活用する取組が、農業や水産業、観光業の発展のために相互にかかわり、柳川市や筑後平野の人々の生活を支えていることをとらえること	※ 生活を充実・発展させるために、自然や産業を観光資源として発信しているパンフレットやポスター等の資料提示(思考・判断・表現)	① 本 時
3 柳川市の掘割を保護・活用している人々の営みや願いをパンフレットに表す。 ○ 柳川市の人々が掘割の保護・活用を中心に、観光客を集め、農業や水産業を発展させるために取り組んでいる様子をパンフレットにまとめること	※ 柳川市役所、農業、水産業、観光業が一体となって柳川市のよさを表現している資料提示(調整力)	2

本時の目標

- 柳川の人々の掘割に対する保護・活用する取組が、農業や水産業、観光業の発展のために相互にかかわり、柳川市や筑後平野の人々の生活を支えていることをとらえることができる。
- ◎ 各産業になくてはならない掘割のよさについて、同質チームで考えた見出しをもとに、異質チームで相応しい見出しにまとめることができる。

本時の展開

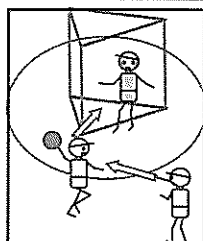
活動と内容	子どもの思考の流れ
1 柳川市の掘割のよさを他市町の人々に伝えるためにどのような見出しがふさわしいのか調べ、考えるめあてを話し合う。 ○ 掘割を今後も活用できるようにするためにどのようなことを伝えるべきか、「伝統」「農業」「水産業」の3つの視点から同質チーム編制し、追究内容や考えたことを話し合う見通しをもつこと ※ 各産業が掘割を保護育成している活動が分かる写真や地図、柳川市のよさを付箋にまとめた児童のホワイトボードを提示する。 農水産業、観光業の中心を担う掘割 めあて 柳川市の掘割のよさを伝えるために、どのような見出しにすべきか、それぞれの視点から考えたことを話し合おう。 2 掘割を保護・活用することのよさを伝え、広めるために、どのような見出しにすべきか話し合う。 (1) 異質チームで、掘割の保護・活用の意味や必要性を広める見出しについて話し合う。 ○ 掘割の保護・活用の取組を自然条件や社会的条件、経済的条件から考えて、その意味や市民の願いをとらえること ※ 同質チームでまとめた付箋から見出しをまとめやすいようにホワイトボードを用い、3つの視点から評価し合う。 (2) 異質チーム毎に考えた見出しを全体交流で比較、関連し、柳川市民の掘割に対する取組から相応しい見出しについて話し合う。 ○ 柳川市の掘割のよさについて、全体交流で比較、関連し、掘割を保護・活用することが福岡市や県民の生活を支えていることに気付くこと ※ 掘割の保護・活用と他地域とのかかわりについてとらえやすいように、有明海漁連が筑後川上流域で森林資源の保護育成している資料や福岡市民が筑後川の水を利用している写真資料を掲示する。 3 本時学習を通して、チームで学習してきたよさや今までの学習を振り返って気付いたことを話し合う。 ○ 自然条件や社会条件などのよさをチームで意味付けできた本時学習のよさについて気付くこと ※ 本時学習で活用したホワイトボードを提示する。	子どもの思考の流れ ・ 掘割の川下りから柳川の町を楽しめます。 ・ 柳川市は掘割を活用して多くの農作物を生産しています。海苔づくりに豊かな水と栄養は欠かせない。 ・ どんな見出しにすれば柳川市の掘割に関心をもってくれるかな。 ・ 今まで調べたことをもとに仲間と分担して見出しを考えよう。 ・ 僕たちは柳川市民の掘割にかけの思いを見出しにしたいな。 ・ 掘割は鰻、海苔など水産物と関係ある見出しにしよう。 ・ 掘割がないと柳川が成り立たない。柳川市民の宝物が見出しだ。 ・ 米や大豆、い草や果物から自然と農業のよさを見出しに表そう。 ・ 柳川市の掘割は、筑後地方になくてはならない宝物にしました。 ・ 柳川市の掘割ですが、福岡市や県民の生活に大変かかわっています。もつと関心をもたないといけません。 ・ みんなのまとめから柳川のよさを考えた見出しになったね。 ・ 役割分担して内容をみんなで話し合ったから解決できたよ。

チームで作戦を考え、連係による攻防で動きとコミュニケーションを高める体育科学習 第5学年1組 体育科学習指導案

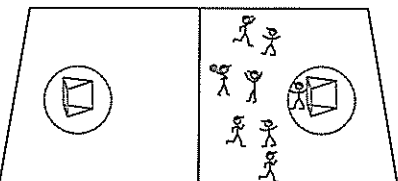
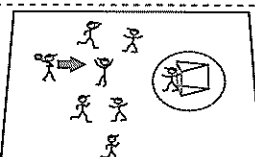
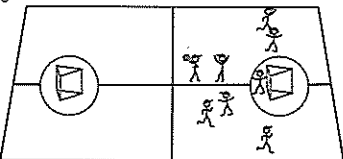
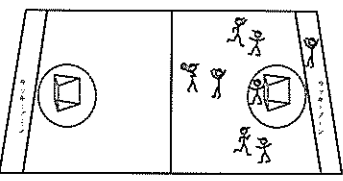
指導者 緒 方 勝 彦

単 元 みんなでチャンスメイク!トライアングルハンドボール (ボール運動)

単 元 目 標

豊かな 学力	○ ゴール (得点) につながるボール操作やボールを持たない動きを状況に応じて行うことができる。 (技能) ○ 課題に応じた動きや作戦を、作戦ボードや動きの交流を通して考えることができる。 (思考・判断) ○ 得点するためにチームで役割を分担して、進んで仲間と運動をしようとする。 (態度)	
人と 働く力	◎ 仲間と課題的コミュニケーション・情的コミュニケーションを行いながら、ゴールする作戦の動きを練習することができる。 (行動力)	

単 元 計 画 (全9時間) ※ 太枠囲みはチームの活動を中心に行う時間

活 動 と 内 容	「開かれた個」の支援	時
1 トライアングルハンドボールで試しのゲームを行い、得点するための課題を話し合う。 ○ チームの仲間とパスをつないで得点をしたいという思いと、今のチームの課題を把握すること 	※ 得点するために協力や役割分担が必要となるように教材化したボール運動の体験 (技能) ※ 課題に気付くルールや評価の場の設定 (態度)	2
2 戦術的気付きや作戦を話し合い、動きを高めながらトライアングルハンドボールをする。 (1) 数的優位な状況でボールをまわす動きを考えて修正ゲームをする。 【修正ゲーム1】 3対2ゲーム ○ 基本的なボール操作と、連係する動きができるようになること  (2) 空間的優位の状況で、たくさん得点する作戦をチームで話し合い、作戦を活かしてゲームをする。 ○ 得点につながる連係の作戦を考え、協力してその動きを行うこと  【修正ゲーム2】 縦グリッドゲーム  【修正ゲーム3】 ボーナストライゲーム	※ 戦術的な気付きを促す段階的な3つの修正ゲームの提示と、チームワーク1・2の設定 (技能) ③ ※ チームで決定した作戦を活かす練習時間の設定 (行動力) ※ 可視化・操作化・構造化が可能なグリッド作戦ボードの活用と、各チームによるオリジナル作戦の決定 (思考・判断) ② ※ 作戦評価表によるチームの作戦遂行状況の評価 (行動力) 本時2 / 2	5
3 5の1トライアングルハンドボール大会を開き、これまで高めてきた動きの成果について話し合う。 (1) 5の1トライアングルハンドボール大会をする。 ○ チームでつくってきた作戦や身に付けた動きを発揮してトライアングルハンドボールのゲームをすること (2) チームや一人一人の動きの高まりについて話し合い、評価をする。 ○ 自分やチームの仲間の動きの高まりと学び方のよさについて実感、共感すること	※ 高めた動きを発揮するトライアングルハンドボール大会の設定 (技能) ① ※ 学習の足跡としての掲示物の活用 (思考・判断) ※ 大会表彰式の位置付けと、チームの仲間や学級全体で高まりを相互評価し合う場の設定 (態度) ①	2

本時の目標

- 優位状況をつくって得点するための効果的な作戦をチームで決定し、ゲーム状況に応じたボール操作やボールを持たないときの動きでゲームをすることができる。
- ◎ チームの仲間と課題的コミュニケーション、情的コミュニケーションを行いながら、協力して動きを高めようとするすることができる。

本時の展開

活動と内容

1 試しのゲームを通してチームの課題について振り返り、本時のめあてについて話し合う。

(1) ラッキーゾーンのあるコートで、試しのゲームをする。

○ 工夫して攻撃することで得点を増やすことができる状況を理解すること

※ ラッキーゾーンのある修正ゲームを提示する。

(2) 試しのゲームを通して気付いたことを出し合い、本時のめあてについて話し合う。

○ 本時のコートで使う作戦についての見通しをもつこと

※ 前時までの作戦ストックから、連係を意識させる。

めあて 有利な状況をつくる攻撃の作戦を話し合い、ボーナスストライクゲームをしよう。

2 チームで得点するための動きを話し合い、トライアングルハンドボールのゲーム（ボーナスストライクゲーム）をする。

(1) 優位状況をつくってチームで得点する作戦を話し合う。

○ ボールを持っている人、持たない人の動きを考えて、攻撃の役割や手順を決めること

※ 話し合いと動きの思考が効果的に進むためにグリッド作戦ボードを活用し、全員発言で作戦の具体を決定させる。

今日の作戦

成功回数

リターン

正T

〈グリッド作戦ボードを用いて全員発言〉 〈作戦遂行と評価〉

(2) チームで考えた攻撃の作戦を意識して、トライアングルハンドボールのゲーム（ボーナスストライクゲーム）をする。

○ ボールを持つ人、持たない人の動きを全員が意識してゲームを行うこと

※ グリッド作戦ボードを活用し、作戦チェック表で評価させる。

3 学習のまとめを行い、得点するための動きについて話し合う。

○ 連携（ボールを持たない動き）の大切さと、スペースの使い方を理解すること

※ 適切な相互評価や教師評価を行い、楽しさを実感させる。

子どもの思考の流れ

- ・ 前の時間はグリッドのあるコートで攻撃の仕方を工夫した。
- ・ 今日はコートにラッキーゾーンがある。ルールをうまく使って勝ちたいな。
- ・ 有利な状況をチームのみんなで作って攻撃しよう。
- ・ 今日チームの仲間と協力して、たくさん点数を入れるぞ。
- ・ グリッド作戦ボードを使って攻撃の作戦の話し合いだ。私はどんな役割をしようかな。
- ・ 必ずフリーができるように、ボールを持たない時は動こう。
- ・ 話し合ったことを動しながら練習で試してみよう。
- ・ 作戦実行を頑張る。
- ・ 実際のゲームだ。リターンの作戦を忘れずにゲームをしよう。
- ・ 作戦が成功しているか、チェックしよう。作戦をみんなが意識できていたかな。
- ・ 攻撃するためには、ボールを持つ人だけでなくボールを持たない人の動きが大切だ。
- ・ 今日のリターン作戦はなかなかよかった。よかった動きは次の時間も使おう。

チームで選材や構成の効果を話し合い、思いが伝わる文章へと高め合う国語科学習
第6学年2組 国語科学習指導案

指導者 岡田 充 弘

単 元 **どんな構成で書こう わたしの未来宣言文**

単 元 目 標

豊かな 学力	○ 目的に応じた構成の効果を考えて文章に書くことができる。(書く能力) ○ 自分自身の宣言の内容やその理由が読み手に伝わるように、文章の修正箇所を具体的に指摘することができる。(書く能力) ○ 読み手に伝わる文章を書くために、意欲的にモデルを分析したり、資料を集めたり記述したりすることができる。(関心・意欲・態度)
人と 働く力	◎ 思いがより伝わる文章を書くために選材や構成について話し合い、自分の考えを伝えたり友達のを認めたりして、自分の文章に活かすことができる。(対話力)

単 元 計 画

(全 11 時間) ※ 太枠囲みはチームの活動を中心に行う時間

活 動 と 内 容	「開かれた個」の支援	時
1 小学校生活の思い出について発表し合い、伝えたい思いやその伝え方について話し合う。 (1) 学校生活の思い出や学んだことについて話し合う。 ○ 卒業を目前に控えた今の自分の思いを整理して伝えたい内容をもつこと (2) どのように整理して伝えたらよいか話し合う。 ○ 自分の思いを伝えるための書き表し方について課題をもつこと	※ 表現主題と表現対象を具体化し意欲付けを図るための行事の記録写真や実態調査結果の提示 (関心・意欲・態度) ※ 方法意識を具体化するための発表する場の提示 (書く能力)	3 ② ①
2 チームで課題解決の方途を考え、自分の思いを読み手に伝える文章に表す。 (1) 宣言文につながる材料を集める(取材)。 ○ 成長、努力など表現主題に照応する視点をとらえること (2) 集めた材料から表現主題に合う材料を選ぶ(選材)。 ○ 集めた材料から宣言文に合う材料を分類する視点や取捨選択する視点をとらえること (3) 選んだ材料の構成を決定する(構成)。 ○ 読み手に宣言文の内容が伝わる構成をとらえること (4) 宣言文を書き、チームで読み返し、より読み手に伝わるように文章を書き替える(記述・推敲)。 ○ モデル文の構成や書きぶりから、より読み手に伝わる文章の記述や推敲の視点をとらえること	※ 表現対象と表現主題を共有するチームの編制 (関心・意欲・態度) ※ 「原因、結果」「過去、未来」「できた、できなかった」などの視点が入った材料モデルの提示 (書く能力) ※ 資料の重要度や構成の効果についての考えを整理するモデル、グラフ、分析シートの活用 (対話力)	6 ② ① 本時 ① ②
3 書き上げた宣言文を読み合う。 (1) 書き上げた宣言文を保護者に発表する。 ○ 読み手に伝えることができた実感を味わうこと (2) 自分や友達の宣言文についてよさを話し合う(評価)。 ○ 宣言する内容と合っているかを判断する際の選材、構成、書きぶりの視点をとらえること	※ 意欲を高めるための発表会場の設定 (関心・意欲・態度) ※ 分析する視点を具体化した評価カードの提示 (書く能力)	2 ① ①

本時の目標

- モデルの材料を分けたり選んだりする活動を通して、宣言したい内容が読み手に伝わる材料を選ぶ視点をとらせ、自分の宣言文に合う材料を選択することができる。
- ◎ 宣言文の表現主題に応じた材料の分け方、選び方についてチームで多様に考えを出し合い、認め合うことができる。

本時の展開

活動と内容

- 1 これまでに集めた宣言文に用いられそうな材料を読み合って気付いたことについて話し合う。
 - 宣言文を書くためには、伝えたいことに合う材料を選ぶ必要があることに気付くこと
 - ※ 選択の必要性に気付かせるために、教師が作成した「材料カード」と「材料をすべて用いた宣言文」を提示する。

めあて 宣言したい内容が読み手に伝わるような材料の選び方をチームで話し合い、自分が使う材料を決めよう。
- 2 提示されたモデルの材料のうちどの材料を選ぶか出し合い、選んだ理由について話し合う。
 - (1) モデルの材料から宣言文に合うものをチームで選び、選んだ理由を話し合う。
 - モデルの宣言文に合う材料の取り出し方が何通りも存在することに気付くこと
 - ※ 宣言文に合う材料とその理由を可視化するために構成シートに事例を並べさせ、理由を書き込ませる。
 - (2) チームで見つけた材料の選択例と選択した理由について全体で話し合う。
 - 用いる材料とその順序によって伝わる内容が異なることをとらえること

事例⑧ 事例⑥ 事例②	事例⑧ 事例⑨ 事例⑦	事例⑩ 事例⑤ 事例④	事例③ 事例② 事例①	事例③ 事例② 事例①
③ 何を考えようか ② なでなで ① 現在の自分	③ 必要が ② 足るが ① 将来の自分	③ がんが ② かんが ① 過去の自分	③ 学ん ② でき ① 過去の自分	事例③ 事例② 事例① 事例⑥ 事例⑤ 事例④ 事例⑨ 事例⑧ 事例⑦ 事例⑩ 事例⑪ 事例⑫

- ※ 取り上げた材料に着目させ、共通点をまとめることで材料の構成モデルとして提示する。
- 3 自分の宣言文に用いる材料とその順序をソロで決定する。
 - どの材料をどの順序で用いれば自分の宣言文に合うか、材料の構成をとらえること
 - ※ 自分の構成を可視化できるようにするために、モデルの構成に合わせて選んだ材料の順序を操作できる台紙を配付する。

子どもの思考の流れ

- ・ たくさん材料を集めたけれど、全部を使うわけにはいかないな。どの材料を選んだら、宣言したいことが伝わるかな。
- ・ モデルを使って、事例の選び方と並べ方を友達と考えたら、自分の宣言文に必要な材料が選べそうだ。
- ・ 先生の宣言したい内容に合う材料は、「リレー」と「鍛錬遠足」だと思うよ。
- ・ わたしは「将来の夢」を選んだら宣言の目的が伝わると思うよ。
- ・ 「転校しても頑張る」ことが宣言の内容なので、「これまで頑張ってきたこと」と「頑張ってきたこと」を選ぶとよいと思うよ。
- ・ 選んだ材料は違うけれど、〇〇さんの選んだ材料も宣言する内容が伝わると思うよ。
- ・ 宣言したい内容が異なると、選ぶ材料が変わるんだな。
- ・ 選ぶ材料が同じでも用いる順序が違っていると伝わるものも変わるよ。
- ・ 自分の宣言に合う事例と順序を決定することができたよ。
- ・ 次は全体の構成を考えて書き上げよう。

視聴覚情報や教育機器等を使って、進んで言葉で伝え合う国語科学習

国語4グループ 国語科学習指導案

指導者 松 尾 京 子

題 材 おもいでカルタを つくろう

グループの実態

4グループの子どもたちは、相手を意識して話したり、場所や状況に応じて表現を変えて意思伝達したりすることは難しいが、動画や写真等の視覚的情報を提示して、相手意識や目的意識をはっきりさせると、意欲的に話したり書いたりすることができる。また、場面を想起することは難しいが、視覚的な手掛かりがあれば、その時の場面をつないで、言葉で表現することができつつある。

題 材 目 標

主体性	○ 1年間の学校行事のことを思い出して、進んでカルタの絵札にする写真を選び、読み札を書こうとする姿
自己 発揮性	○ 写真や映像などの視聴覚情報やパソコンなどの教育機器等を使って、学校行事のことについて想起し、そのことについて言葉集めをしたり、言葉のリズムを意識してカルタの読み札を書いたりしている姿
成就性	○ 学校行事を振り返って、自分のカルタができたことやみんなでカルタをして遊んだことを喜んでいる姿

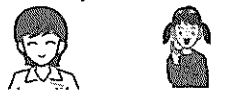
題 材 計 画 (全6時間)

段階	活 動 と 内 容		個の活動を促す支援	時
動機	1 カルタ遊びや1年間の学校生活を振り返り、思い出カルタを作るという本時のめあてについて話し合う。 ○ これまでの学校生活を思い出して、楽しかったことや頑張ったことをカルタにして、みんなで楽しむという学習のめあてや見通しをもつこと		※ プレゼンテーションを使った学校行事を振り返る場の設定 ※ 思い出カルタのモデル紹介や遊ぶ場の設定	2
	2 思い出カルタを作る。 (1) 1学期の学校行事を振り返り、絵札（写真）を選んで、読み札を書く。		※ 電子黒板を使ったカルタの作り方の提示 ※ 集団で活動する場と個別の場の設定	3 ②
熱中	a グループ	b グループ	※ 活動の見通しをもたせるための手順表の準備 ※ グループ別の支援（a グループ） ・教師とのやりとりを聞き返すための IC レコーダーの活用 ・動画による行事の提示（b グループ） ・表現の工夫をするための写真と文字によるプレゼンテーションの活用 ・言葉カードの準備	① 本 時
	○動画や写真を見て、自分が体験したことを想起して、「～している」「～した」等の言葉で表現して読み札を作るという作り方がわかること			
	(2) 2学期、3学期の学校行事を振り返り、絵札（写真）を選んで、読み札を書く。			
	a グループ	b グループ		
	○学校行事で体験したことやその時に思ったことを想起して、決められた文頭の文字から始めるという読み札の作り方をとらえること			
	○学校行事に関連する言葉集めをして、その言葉を組み合わせて5，7，5の言葉の文字数を意識した読み札の作り方をとらえること			
発展	3 他の国語グループの友だちを招待してカルタ会を行い学習の感想を話し合う。 ○ カルタを作ってみんなで楽しむことができたことの満足感や活動の達成感を味わうこと		※ カルタについて紹介する場の設定 ※ カルタ作りができたことへの賞賛の声かけ	1

本時の目標

- 3学期の行事について、カルタにしたい写真を選んだり、その行事について読み札を書いたりするなど自分から進んでカルタ作りに取り組むことができる。(主体性)
- 映像や写真等の視聴覚情報やパソコン等の教育機器等を活用しながら、文頭に書く文字から読み札の文を考えたり、言葉のリズムを考えて読み札を書いたりすることができる。(自己発揮性)
- (aグループ) 文頭の言葉から文を考え、進んで読み札を書くことができる。
- (bグループ) 学校行事に関連する言葉を複数集めたり、5, 7, 5の言葉の文字数を考えて読み札を書いたりすることができる。
- 言葉を集めたり、言葉のリズムを楽しんだりしながらカルタができたことを喜び、カルタ作りの感想を話すことができる。(成就性)

本時の展開

活動と内容		個の活動を促す支援
1 これまでの思い出カルタ作りについて見聞きし、2, 3学期の行事について思い出カルタを書くことを確認し、学習のめあてや活動の手順について話し合う。 ○ 2学期や3学期の行事について振り返り、行事の写真を選んで読み札を書くというカルタ作りの見通しをもつこと めあて 二がっきや 三がっきの おもいでカルタの しゃしんを えらんで ぶんを かこう。 2 2学期や3学期の行事の写真を選んで(絵札)、読み札を書く。 (1) 2学期の行事について、カルタにしたい写真を選び、教師と話をし、読み札を書く。		1 活動への興味・関心を喚起させて見通しをもたせるための支援 ※ 電子黒板を使ったカルタの読み札の紹介 ※ タブレット端末による手順の説明
aグループ ○体験したことを動画を見ながら想起し、したことやその時の気持ちを書くことがわかること	bグループ ○読み札に書きたいことを教師に話し、5, 7, 5の言葉の文字数で文を書くことがわかること	2 思い出カルタを作るための支援 ※ 学校行事について教師と話す場の設定 ※ パソコン操作で困ったときのヒントカードの準備
(2) 3学期の行事について、写真を選び、教師とやりとりをして、読み札を作る。		※ 読み札を作るためのグループ別の支援
aグループ ○学校行事で体験したことに関係する言葉を想起して、ア行から始まる絵札を作るなど決められた言葉から始まるように、読み札の文をとらえること	bグループ ○「芋掘り」「さつまいも」など学校行事に関連する言葉集めをして、その言葉を組み合わせ、5, 7, 5の言葉の文字数で読み札の文をとらえること	(aグループ) ※ パソコンを使った活動の様子を表した動画の提示 ※ 書きたいことの写真を選ぶ活動の設定
(bグループ) ※ 言葉を集めたり、文字数を工夫したりするためのプレゼンテーションの活用 ※ 行事に関する言葉のヒントカードの準備		3 活動の満足感を味わわせるための支援 ※ 作品を紹介するための実物投影機の使用
持久走大会では、どこを走ったの? 運動場だよ。  何を掘ったのかな? さつまいもだよ。  じきゅうそう たいかいだよ たのしかったね うんとしじょうを はしたよ。 いもほりだ ちゅうがくせいと いっしょだよ 動画・写真→教師とのやりとり→文章化 プレゼンテーション→文章化		
3 実物投影機を使ってカルタを紹介し合い、みんなでカルタ遊びをして、本時学習の感想を話し合う。 ○ 友達とカルタ遊びができたことの満足感やカルタ作りの達成感を味わうこと		

全体講演

▼ 講師紹介

杉田 洋 (すぎた ひろし)

- ・ 文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官
- ・ 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官
- ・ 日本特別活動学会理事



▼ 教職経歴等

- 学生時代に青少年の健全育成を中心としたボランティア活動に没頭する。
このことにより、埼玉県からアメリカ、カナダに派遣される。
(これらの経験から教職を目指すことになる。)
- 埼玉県浦和市立小学校(昭和55年4月～平成10年3月 4校を経験) 18年間
- 浦和市教育委員会指導主事(平成10年4月～13年3月)
- さいたま市教育委員会主任指導主事(平成13年4月～16年3月)
- 現職(平成16年4月～)
- 文部省刊行「小学校特別活動指導資料」作成協力者(平成6年)
- 小学校学習指導要領特別活動編・解説作成協力者(平成10年～11年)

● 主な著書

よりよい人間関係を築く特別活動 図書文化

特別活動の教育技術 小学館

COMPACT64 教室環境づくり 小学館

学級活動指導法セミナー(中学年)子どもがもえる活動づくり 明治図書

● 主な編著書・監修書

子どもの心を育てつなぐ特別活動 -道徳的实践へのアプローチ- 文溪堂

特別活動で子どもが変わる! ~新しい評価と指導のモデル集~ 小学館

担任がしなければならない学級づくりの仕事12か月(小学校低学年・中学年・高学年編) 明治図書

改訂対応小学校学級活動のファックス資料集(低学年・中学年・高学年編) 明治図書

担任がしなければならない授業づくりの仕事12か月(小学校低学年・中学年・高学年編) 明治図書

担任がしなければならない保護者対応の仕事 明治図書

小学校担任のための生徒指導提要解説 明治図書

クラブ活動アイディアブック1巻～5巻(卓球・科学・サッカー・料理・バドミントン) フレーベル館

研究紀要の部



研究紀要目次

◎ 研究主題構想 7 4

・「開かれた個」を育てる学習指導の創造

－ チームを活かした学習過程の工夫 －

国語科学習の構想	82
・ 伝え合う楽しさを共有する国語科学習	
・ よりよい文章へと高め合う国語科学習	
社会科学習の構想	90
・ 社会形成者として判断する社会科学習	
・ 社会の一員として意思決定する社会科学習	
算数科学習の構想	98
・ 数理を合意形成する算数科学習	
・ 数理をつくり合う算数科学習	
・ 考えを数理に高め合う算数科学習	
理科学習の構想	110
・ 自然事象のきまりを客観的に見出す理科学習	
生活科学習の構想	114
・ 自分の気づきを友達と共有する生活科学習	
音楽科学習の構想	118
・ 音楽とのかかわりをともに深める音楽科学習	
図画工作科学習の構想	122
・ 友達と共に柔軟に造形表現する図画工作科学習	
体育科学習の構想	126
・ とともに動きを築く体育科学習	
・ 動きを築き合う体育科学習	
道徳学習の構想	134
・ 仲間とともによりよい自己像を求める道徳学習	
外国語活動の構想	138
・ 仲間と会話をつくりだす外国語活動	
特別活動の構想	142
・ 仲間とともに生活づくりに参画する学級活動	

◎ 特別支援教育部主題構想 1 4 6

・生活を豊かにする子どもを育む学習指導の創造

－ 個別の指導計画をもとにした課題別グループの編制 －

国語科学習の構想	150
・ 進んで言葉を伝え合う国語科学習	
生活単元学習の構想	154
・ 一人一人がよさを発揮し合う生活単元学習	
体育科学習の構想	158
・ 身体感覚を身に付ける体育科学習	

◎ 帰国子女教育部主題構想 1 6 2

・海外生活経験に自信をもつ子どもを育てる帰国子女教育

－ 滞在国の経験を生かす国際交流タイムを通して －

◎ 養護部主題構想 1 6 4

・自他の心を見つめてよりよい人間関係を築く高学年学級活動

－ 適切な自己表現を導き出すアサーション活動の工夫 －

「開かれた個」を育てる学習指導の創造 ～チームを活かした学習過程の工夫～

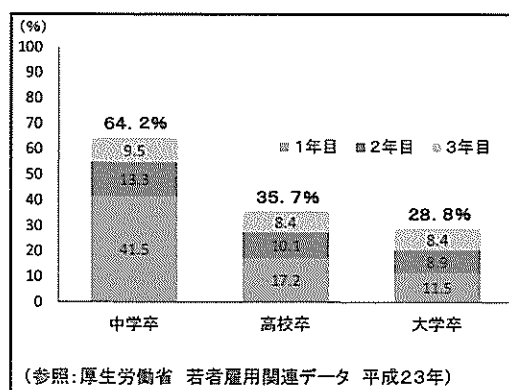
主題設定の理由



10年後の未来に、社会に貢献できる人材の 育成を目指して

○ 日本の若者の悩みとその背景

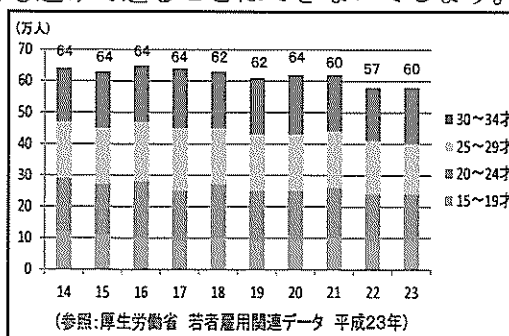
厚生労働省のまとめによると、大学を卒業して就職しても、約3割の若者が離職する時代と言われています(図1)。若者たちはなぜ、仕事を辞めてしまうのでしょうか。社会にでた多くの若者たちの悩みは、自分の仕事に満足できないことや、他者とうまく協調して仕事ができないということのようなのです。個人の能力は高いにもかかわらず、就職してからはそれを実感することができず、「こんなはずではなかった」と自信をなくしたり、「だれも自分の価値を認めてくれない」と社会のせいにしてしまうのです。



【図1】新入社員の離職率

インターネットやコンビニエンスストアが出現した豊かな社会に生まれ、加えて一家庭あたりの子どもの人数が減り、親が一人の子どもにかかる時間や費用も増えました。そうした環境で育った若者は、人に言われる前に自分から動く、自分から創造していくという経験が乏しくなりがちです。その結果、近年の大学生や新社会人に対しては、学校や職場において指導する側から指導される若者の方へ上手に働きかけなければ関係がうまくいかないという困難な状況が生じています。また、仕事の仕方においては、マニュアル化を好むという傾向も見られます。その反面、与えられた問題を解くのは得意けれど、解法の見当が付かないような難問に挑戦したり、自分から課題を見つけたり、つくり出したりしていくのが得意ではないことが指摘されています。これは、受験などでの評価の観点が知識的なもの中心になっていたのではないかという教育の反省も避けて通ることはできないでしょう。

近年は自尊感情の低下や鬱状態、他者軽視などが若者の傾向として指摘されています。ニートと呼ばれる若者が増加し、働くことを通して世の中に貢献したり、自分の生きがいを見出したりする機会を失っている人が増えています(図2)。少子高齢化がますます加速していく日本において、若者が自分の力に自信をもち、様々な人と力を合わせながら働くことのできる社会をつくるのが今、切実に求められているのです。



【図2】過去10年間のニート人口の推移

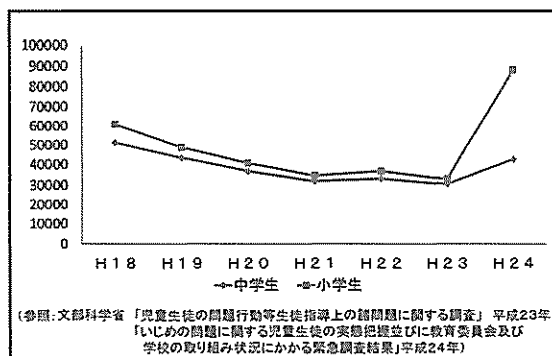
○ 子どもたちが、学校に望んでいること

現在の学校現場に目を向けてみると、「いじめ」や「学級崩壊」の問題が後を絶ちません。文部科学省は、今年度の「いじめ問題に関する全国緊急調査」の結果を公表しました。小学校でのいじめの認知件数は、8万件を超え、昨年度の2.7倍となりました（図3）。この結果は、何を物語っているのでしょうか。それは、今年急にいじめが増えたということではなく、これまで私たち大人が、多くの子どもたちのサインを見過ごし、解決できずにいたといわざるをえないのではないのでしょうか。

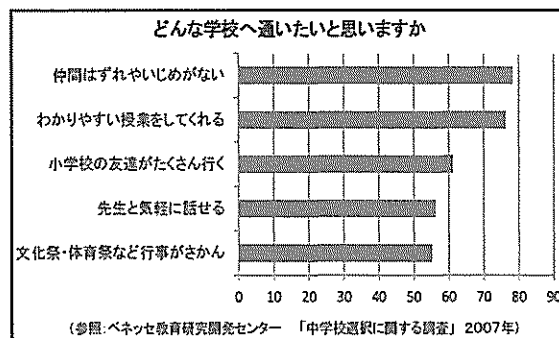
では、実際に子どもたちは、学校に何を求めているのでしょうか。小学校6年生を対象にした「どんな中学校へ進学したいですか」という調査報告では、「仲間はずれやいじめがない」という項目が最も多く、「授業がわかりやすい」という項目を上回りました（図4）。子どもたちは、勉強がわかるようになりたいと思って学校に来ています。しかし、それ以上に人間関係が大事だと思っているのです。

中部大学准教授 三島浩路氏は、この「人間関係」と「学ぶ意欲や学力」について興味深い見解を示しています。これまでは、良好な人間関係が子どもたちの学ぶ意欲を高め、学力の向上につながると考えられてきました。しかし、学校の成績がよいにしろ、悪いにしろ成績の類似する子どもが仲間になりやすいという現象がみられ、これまでの因果関係が逆転して、学力や学ぶ意欲が友人関係を決定付けるということがわかってきたのです。教育現場では、学ぶ意欲や学力に影響を与えるものとして不登校の問題をはじめとする学校適応の問題や友人関係をとらえることが多くありました。しかし、発想を変えて、学ぶ意欲や学力を向上させることが、よりよい友人関係や学校適応により影響を与えると考えるべきではないのでしょうか。

つまり、「人間関係」と「学力の向上」は密接な関係にあり、学力の向上を図ることで、同時によりよい人間関係を築くことが可能なのです。これまでは、道徳の時間や特別活動を中心に子どもの心と人間関係を育てることに取り組んできました。しかし、社会の変化とともにますます人間関係が希薄になっていく中で、教師が行うべき学級経営や生徒指導の機能はもはや特化された時間だけで行うのではなく、全教育活動において行わなければなりません。その中核は授業です。私たち教師は既存の「授業観」を変え、学力の向上とともに子どもの心と人間関係を育むための時間として授業を行う必要があるのです。それが他者との集団の中で、自分の力を発揮し、社会に貢献することのできる「開かれた個」の育成につながるのです。



【図3 いじめに関する調査結果報告】



【図4 中学校進学に関する調査報告】

これからの学校教育の目標は、他者とともに健全な社会をつくっていく人材育成の視点が大切なのです。私たちは今の教育現場の課題解決に応えるとともに、子どもたちが10年後の未来にどんな社会人になってほしいかを思い描いて、その実現を目指す研究に取り組みます。



「開かれた個」を育てる学習指導とは

○ 「開かれた個」とは

「開かれた個」とは、自己を確立しつつ、他者を受容し、多様な価値観をもつ人々と共に思考し、協力・協働しながら課題を解決し、新たな価値を生み出しながら社会に貢献することができる個人です。
(文部科学省 コミュニケーション教育推進会議より)

「開かれた個」を子どもの姿として考えると、まず自己をしっかりと見つめつつ、周囲の友達や家族、地域の人などと力を合わせながら、社会や自然にも積極的にかかわり、様々な「集団」の中で自分の力を発揮して貢献しようとする姿であると考えます(図5)。私たちは、そのために欠かせない資質・能力を大きく次のように分析しました。

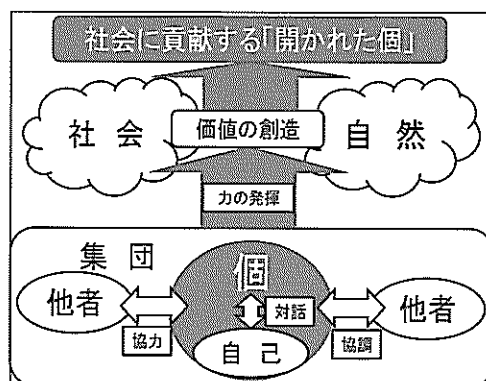
- 他者とかかわるための積極的態度や受容的態度
- 新しい価値を創造するための確かな知識や思考力
- 状況に応じて柔軟に対応できる対人的な判断力・調整力
- 他者と意思疎通を図るコミュニケーション力
- 自分が何をすべきか考え実行する自制心や行動力

これらを、「生きる力」として規定されている学力の観点や、経済産業省から提唱されている「社会人基礎力」などの概念と照らし合わせると、(図6)のように、「豊かな学力」と「人と働く力」に整理されと考えました。

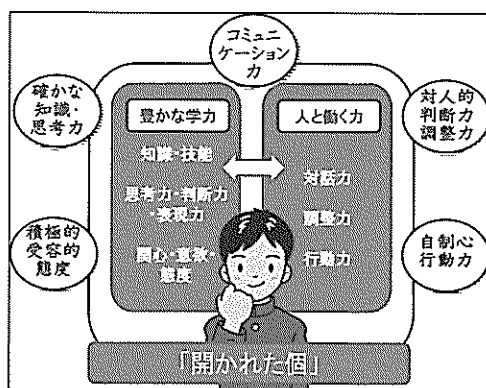
「豊かな学力」とは、これまでの学力観に加えて、「人とともに学ぶ」ことや「何かのために学ぶ」ことを想定した、コミュニケーション豊かな、心の支えのある学力です。

また、「人と働く力」は、経済産業省から提唱された「社会人基礎力」の主要な柱の1つである「チームで働く力」の下位項目を参考にして規定しています(図7)。他者との人間関係を築いていくための資質・能力として、集団の中で自己を見つめ、自分をコントロールする心の育成も「開かれた個」の育成には重要です。

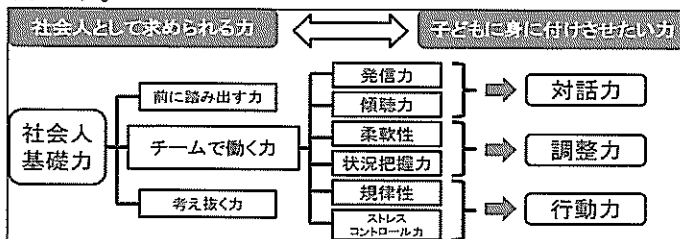
「開かれた個」が育つためには、他者と共に思考し、課題を解決するための「豊かな学力」と、他者の考えを受け入れ、協働的に活動するための「人と働く力」の両面が必要であり、それが相互に影響し合って「開かれた個」としての人格が形成されと考えました。そのことが、現在も、また将来においてもよりよい人間関係を築きながら、力を発揮できる人材の育成につながるのです。



【図5 開かれた個の概念図】

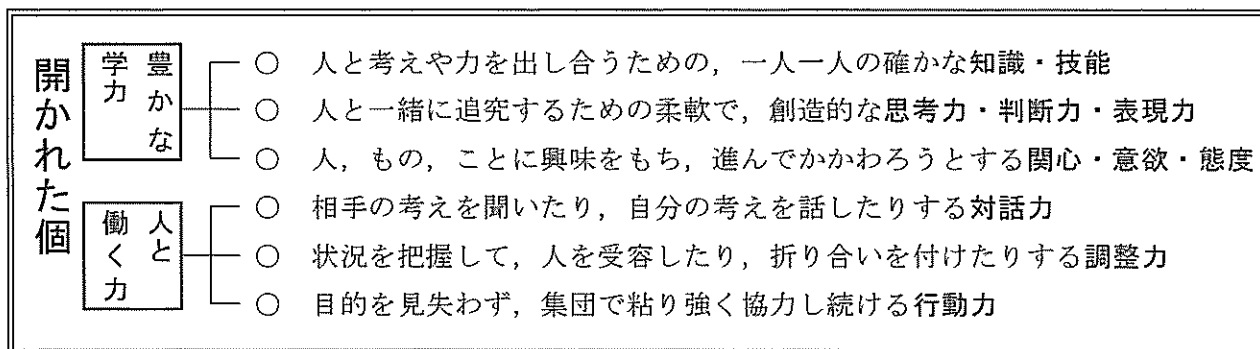


【図6 「豊かな学力」と「人と働く力」】



【図7 「人と働く力」の下位能力の理論的背景】

「豊かな学力」と「人と働く力」を、下位の資質・能力に分けると、下のようになります。



○ 「開かれた個」を育てる学習指導とは

「開かれた個」を育てる学習指導とは、一人一人が豊かな学力を身に付け、他者とともに課題解決する活動を通して、人と協力することのよさを感じ、集団や社会の中で自分の力を発揮できる個を育てることを目指す学習指導のことです。

「開かれた個」を育てる学習指導は、集団の中での他者とのかわりを通して行います。その学習のあり方は、特別活動における望ましい集団活動の条件を参考に考えています。

- ア 学習の目標を全員でつくり、その目標について全員が共通の理解をもっていること
- イ 学習の目標を達成するための方法や手段を全員で考え、話し合い、協力して実践できること
- ウ 一人一人が役割を分担し、その役割を全員が共通理解し、自分の役割や責任を果たすとともに、学習の目標についてふり返り、生かすことができること

さらに、そうした学習を通して次のような集団の質的な高まりが期待されます。

- エ 一人一人の自発的な思いや願いが尊重され、互いの心理的な結びつきが強くなる。
- オ 成員相互の間に所属感や所属意識、連帯感や連帯意識が生まれる。
- カ 集団の中で、互いのよさを認め合うことができ、自由な意見交換や相互の関係が助長される。

各教科等の学習では、教科固有の学習内容を身に付けることが大切です。その内容は「豊かな学力」とも合致しています。私たちはこうした、集団の中で個々の力を伸ばす学習指導のあり方を全教科等を通じて行い、「開かれた個」を育てようとしています。私たちが全教科等で「開かれた個」の育成に取り組むのは、授業を通して人間関係を育みたいと考えるからです。「人と働く」ための資質・能力は、人間関係を通して育まれます。他者と協調しながら、自分を発揮し、社会に貢献できる人材を育てることは、教科等の学習内容を身に付けながら、同時に教室の中に良好な人間関係をつくりだし、よりよい人間関係を自分でつくっていくことのできる人間を育てることになるのです。

「開かれた個」を育てる学習指導は、子どもが集団での学習経験を通して、個々の学力が身に付くことで、よい人間関係をつくることができ、その人間関係を活かしてさらに高い学力が身に付くという相互作用が働き、学力と人間関係の育成を一体として目指す学習指導のことです。



チームを活かした学習過程の工夫とは

○ チームとは

チームとは、集団の1つであり、次の3要素を満たしているものです。

----- チームの要素 -----

- ① 達成すべき目標が存在すること
- ② 成員同士が協力し合って課題や作業に取り組むとともに、目標達成のために互いに依存し合う関係にあること
- ③ 各個人に果たすべき役割があること

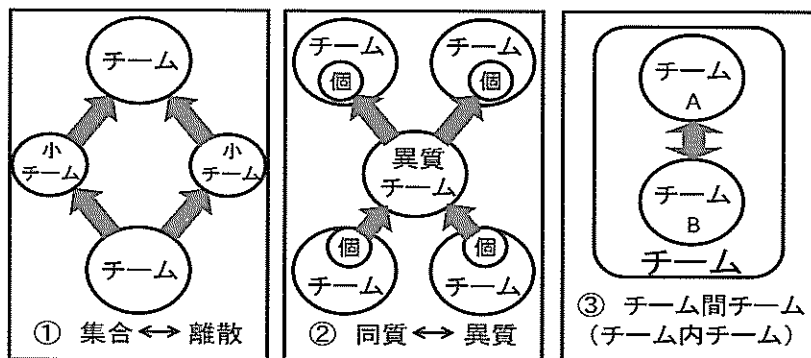
チームでは、自分一人で課題や作業の遂行が完結するのではなく、他の成員とコミュニケーションを取り合い、相互作用のあり方も多様に変化させ、あくまで協力し合いながら課題や作業を遂行することが成員に求められます。さらに、チームの目標を達成するために、個に応じた役割を与え、それを十分に果たせるような技能を発揮することを求めます。つまり、チームは他者と協力しながら「個」の力を発揮し、積極的に貢献することを促進する機能をもっているのです。

○ チームを活かすとは

チームを活かすとは、目標を共有する成員間での活発なコミュニケーションや、互いに依存し合うかかわり合いを意図的に仕組むことです。

モーガンらは、「チームで任務を遂行する際、成員が取り組む活動は、タスクワークとチームワークの2つに大別される」と指摘しています。タスクワークとは、メンバー一人一人が取り組む業務の中で行うことであり、個の活動です。それに対して、チームワークとは、他者と一緒に、かかわりあい、協調しながら行う集団の活動です。私たちはチームという概念を学習指導の中に導入し、子どもの意識が個と集団を行き来しながら、個の力を伸ばしつつ、目標が達成される仕組みをつくります。

私たちが考えるチームは、必ずしも固定的なメンバーとは限りません。むしろ、集合と離散を繰り返したり、同質と異質を行き来したりする幅広い可能性を含めた集団としてチームをとらえています。それは、チームにどのような目標をもたせるかによって成員が変わる方が効果的なことがあるからです。



【図8 チームの様々な様相】

○ チームを活かした学習過程とは

チームを活かした学習過程の工夫とは、子どもの発達段階と教科等の特色から、チームの活動を単元や1単位時間のプロセスにどのように取り入れ、どのような学習活動や支援を具体的にを行うかを子どもの意識の流れを軸に考え授業を組み立てることです。

チームを中心として学習が進んでいく「学習過程」を構想していく上で、まず単元の中での工夫を考えます。教科等の特色や学習内容、子どもの発達段階に応じて、チームで行う活動の取り入れ方を変えていきます。これは、その教科等の目標から、「人と働く力」として上げている対話力、調整力、行動力などが教科等の目標に成り得る場合と、直接はそうならない場合があるためです。さらに教科等の特徴に応じて、目標像として身に付けさせたい「人と働く力」も軽重を付けることが考えられます。既成の概念にとらわれず柔軟に発想していくことが必要です。

さらに1単位時間での「学習過程」も工夫します。チームを活かして、「開かれた個」としての豊かな学力と人と働く力を育てるには、3つの視点からの具体的な授業レベルでの工夫が必要です。

★ ― 具体的な方途その1：明確なチームの目標の設定

チームの目標は、成員が努力を結集して実現しようと意図するものでないといけません。では、そうしたチームの目標としてふさわしいものは、どんな目標でしょうか。グループダイナミクス理論についての研究者A・ザンダーは、それは「解決のゴールが明確で、かつ適度な困難さのある目標（わかりやすく魅力的な目標）」だと述べています。授業者は、学習内容の獲得を含んだチームの目標を子どもに意識させます。目標設定の上で大切なことは、集団で取り組むことで作業を効率化するのではなく、難題を解決したり、新しいことを創造したりすることを目指した目標にすることです。または「みんなの力が伸びること」「みんなが力を発揮すること」を目標にすることです。こうした学習像を子どもと教師が共有することで、子どもが主体者である学習を展開することができ、一人一人に豊かな学力を身に付けた自信や、チームに役立ったという有用感をもたせることが期待できます。

★★ ― 具体的な方途その2：チームとソロの活動を組み合わせた活動構成

授業者は学習過程の構成において、チームの活動とソロ（個）の活動をどの場面で、どのように展開するかを構想します。チームの活動とソロの活動の接続には、基本的に次の4つがあります。

	ソ ロ → チーム	チーム → ソ ロ	チーム → チーム	ソ ロ → ソ ロ
子ども の意識	個で追究したことを集団で出し合い、 <u>違いや共通点</u> を見つけようとする。	集団で追究すべきことを確認し、個の <u>役割に応じて遂行</u> しようとする。	集団で追究したことから生まれた <u>新たな課題</u> を、集団で解決しようとする。	個で追究したことを <u>発展させて</u> 、さらに役割に応じて遂行しようとする。

大切なことは、子どもの意識が個と集団を往復し、最終的には個として豊かな学力として学習内容を身に付けたり、人と働く力を身に付けたりすることを想定することです。

例えば、通常は目標が設定された後、それぞれが個で自分の考えをつくり、それをもちよって交流する集団の活動が行われるという活動構成が多いでしょう。しかし、授業の導入の段階にチームの活動を位置付け、あえて困難さを共有させたり、展開段階で質的に高まるチームの活動を繰り返し位置付けたり、さらには授業の終末の段階にチームの活動を位置付けて成果を確かめたり、次の目標を考えたりということなどを構想します。

★★★ 具体的な方途その3：シンキングツールの活用

チームで問題を解決しようとするとき、私たちはお互いに様々なアイデアを出し合うことによって、よりよい解決を図ることができます。そのための手がかりとなるのがシンキングツールです。学習の中で思考する内容は、教科等によって違いがあります。その教科等で大切にしたい内容から発想して、以下のような視点からシンキングツールを活用する手だてを構想します。

- 可視化・・・一人一人の考えを目に見えるようにして、共有できるようにします。
- 操作化・・・考えを分類したり、並べ替えたりと、操作することで整理できるようにします。
- 構造化・・・整理したものから、関係を導き出したり、新たな観点を発見したりします。

シンキングツールの活用で大切なことは、個の思考と集団の思考が共存し、その変化や高まりが見えることです。個で考えたことが反映され、集団の考えが生成されたり深まったりします。そのことを通して、またさらに個の考えが深まるための手だてでなければなりません。

シンキングツールは、メンバー間のコミュニケーションを生み出し、解決に向かって思考を活性化させるための道具です。子どもは、考える手がかりを共有することにより、積極的に仲間と意見を交えようとするのです。授業者は教科等の学習内容や思考場面で必要となる思考様式などから、どんなツールを持ち込めば、子どもが豊かな学力や人と働く力を身に付けることができるかを考えて手だてを仕組みます。

他にも、チームを活かした学習を行う上で、次のような点に留意することが大切です。

○ 1時間の学習の順序と学び方を大切に

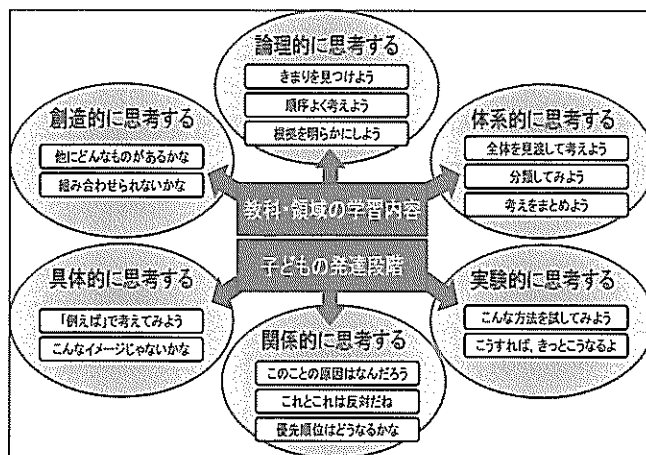
時間の区切りをはっきりさせ、メリハリを付けることです。そして、子どもに自分の活動のイメージをもたせることです。「5分間でしましょう」というように具体的に時間を管理しない授業は、リズムが生まれず、だらだらとしがちです。時間を区切る、時刻がわかる工夫が必要です。

○ チームの課題は全員参加が可能なものに

チームの目標は教師が与えるのか、子どもがつくるのかという点は発達段階や教科等の内容に応じて工夫が必要です。大事なことは、少し難しいかなと思われる目標をチームの目標として意識できることです。そして、その解決においては、どの子も発言権が平等にあり、尊重されていることが大切です。チームでの学び合いは「両刃の剣」であり、行い方によってはチームで学習することで喜びを感じることもあれば、悲しい思いをすることもあります。全員が達成感や満足感を感じるために、話し合いのルールや順序などに平等性を保障する工夫が必要です。

○ チームの人数を偶数から奇数へ

チームと呼ぶ集団の単位は、ペア（2人組）から、4～5人組、学級全員まで多様に認めて考えます。しかし、基本的には3人以上がチームであり、低学年においてはその基礎としてペアの形態もあります。特に、人数が奇数になる場合は、コミュニケーションの関係が変わるので意図的な工夫が必要です。



【図9 シンキングツールを発想する際の思考様式】

研究の年次計画



これから先，この研究はどのように深化・発展していくのでしょうか

ここに述べた今年度の研究は，学習指導の構想が中心です。しかし，私たちが目指す「開かれた個」の育成は各教科等における1単位時間や1単元レベルでは達成しうるものではなく，年間を通した学習の意図的・計画的な積み上げや教科等間の関係を考えたバランスがあって初めて為し得るものであると考えています。よって，単元のみならず日常的な指導や教育課程全体を通した戦略的な構想が必要となります。

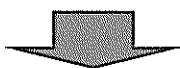
そこで，本校は研究の年次計画を作成し，今後5年間にわたって段階的に研究を深めていこうと考えています。今年度の研究を活かして，来年度はチームを活かした単元での仕組みや各教科の担う役割の軽重を考えていきます。そして，3年次以降は重点単元の設定など，教育課程の研究に取り組む予定です。

平成24年度（第1年次）

主 題：「開かれた個」を育てる学習指導の創造

副主題：チームを活かした学習過程の工夫

「開かれた個」として目指す姿を明らかにし，個と集団の学習を通して，豊かな学力や人と働く力が現れるための授業づくりを中心に研究する年次です。教科等の実証単元で身に付けるべき豊かな学力と，人と働く力として目指す資質・能力を考えます。そして，教材化と学習過程を中心とした学習の仕組みや評価方法を明らかにすることを研究の重点にします。

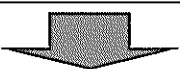


平成25年度（第2年次）

主 題：「開かれた個」を育てる学習指導の創造

副主題：発達段階と教科等の特色を体系化したチーム学習の展開

「開かれた個」を育てるための学習過程が明らかになったところで，発達段階や各教科等の内容から目指す姿の系統性や関係性を中心に研究する年次です。低・中・高の学年段階によって，各教科等の豊かな学力はどう高まっていくのか，人と働く力はどのような段階をふむのか。教科等の担う役割を明確にして，「開かれた個」が総合的に育つ仕組みを研究の重点にします。



平成26年度（第3年次）～

主 題：「開かれた個」を育てる教育課程の創造

副主題：チームを活かす重点単元の設定と評価の工夫

「開かれた個」を育てるための年間計画を見通した重点単元の設定や，学級経営における日常的な指導を含めた教育課程のあり方を中心に研究する年次です。「開かれた個」としての育ちを教師も子どもも自覚できる中・長期的な評価システムの構築にも取り組みます。

【図10 研究年次計画構想】

伝え合う楽しさを共有する国語科学習

国語科部 大久保 良 博

1 国語科における「開かれた個」とは

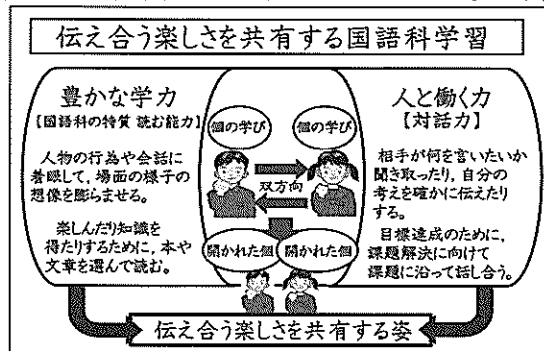
都市化、情報化、少子高齢化などの社会変化は、様々な立場の人々の間の円滑なコミュニケーションを困難にしている。都市化に伴って増加した隣人や見知らぬ人との意思疎通、情報化による情報機器を介しての間接的な意思疎通、少子高齢化により変容した異なる世代との意思疎通など、人間関係の希薄化ゆえに、立場の異なる人を尊重しながら、コミュニケーションを図ることが重要である。これからの学校教育においては、集団の中で自分の意見をわかりやすく整理して的確に伝える発信力や相手が話しやすい環境をつくり、適切な質問で相手の意見を引き出す傾聴力をはじめ、柔軟性や情況把握力を備えた「開かれた個」を育てることが求められる。国語科はその中心を担う教科として、学び合う集団づくりの土台となる対話力の育成をリードしていく大切な使命がある。

これまでの学校教育では、先進的な知識の吸収に偏っていたり、進学や入試を目的とした知識志向が強かったりしたため、互いに知識を共有したり、そこから新しいものを生み出したりするという機会は少なかった。これからの国語科では、個の読みの創造から、他者と関係を結び、読みを共有しながら他者と協働して読みを深める学習が大切になる。様々な立場に立って自分なりに思い描いた考えを他者に提示したり、相手の考えの根拠に思いを巡らしたりしながら、「開かれた個」として他者と読みを伝え合うための対話力を育む学習が望まれる。

2 主題の意味

伝え合う楽しさとは、自分もっている知識や技能を駆使して自分の思いや考えを相手に伝えようと努力し、それらが伝わったときに味わう喜びや感動である。伝え合う楽しさを味わわせるためには、子どもの課題意識を大切にした動機付けの工夫と人とかかわる活動とが相互に作用し合うことが必要である。伝え合う楽しさを共有するとは、自分と他者とが互いの思いや考えを相手に伝えるために、伝え方を工夫したり評価したりしながら、伝わったときに湧き上がる喜びや感動をともに味わうことである。共有する楽しさは、両者の発見や考えに共通点や相違点を見出したときに生まれると考える。

伝え合う楽しさを共有する国語科学習とは、個で創造した読みや考えを他者に発信したり、他者の読みや考えを受信したりする双方向的な言語活動において、両者の読みの共通点や相違点を見出すことで、自分の読みの確かさを感じたり、それまで気付かなかった新たな読みを創造したりして達成感や満足感を味わう学習のことである。伝え合う楽しさを共有する学習においては、よりよく読むための方法を出し合ったり、表現するために自分たちのイメージを突き合わせたりしながら、表現や読みの課題を解決していく姿をめざすべきである。



【図1 伝え合う楽しさを共有する姿】

○ 伝え合う楽しさを共有する国語科学習で目指す姿

【豊かな学力】

- 人物の行動や会話、優れた叙述に着目し、想像を広げて読むことができる。（読む能力）
- 古典を読んだり紹介したりして、伝統的な言語文化に触れることの楽しさや昔の人のものの見方や考え方を味わうことができる。（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）
- 進んで昔話を見つけたり紹介したりして読書を楽しむことができる。（関心・意欲・態度）

【人と働く力】

- ◎ 読みの課題の解決に向けて、自分の考えを伝えたり、友達の考えを聞いたりしながら、考えを一つにまとめたり、よりよい考えを創り出したりすることができる。（対話力）

ペアでの紹介活動を位置付けた学習過程

国語科部 大久保 良 博

3 副主題の説明

ペアでの紹介活動とは、子どもたちが、文章を読み、興味を感じたり、伝えたいと思ったりしたことを、ペアの友達や他のペアと紹介し合い、互いに読書への関心を高めていく学習のことである。低学年国語科では、「読んだ本について好きなところを紹介し合う」言語活動を通して読書を楽しんだり、「昔話や神話・伝承などの本や文章を聞いたり発表し合ったり」する指導事項がある。我が国の伝統的な言語文化である昔話や神話・伝承を読み、自分たちで見つけたお話のおもしろさを友達に紹介することによって、自分たちのお話に対する思いを深める言語活動である。紹介し合うことを通して、自らの読書生活を豊かにするとともに、昔話や神話・伝承を読みたい気持ちを友達と共有して読書の輪を広げていくことができると考える。ペアでの紹介活動を位置付けた学習過程とは、お話を読んで伝えたいと感じた発見やおもしろいと感じた独特な表現を、同じお話を読んだ友達と伝え合って共有し、他者によりよく伝える内容や方法について話し合いながら、自分たちの「とっておき」を創り上げていく過程のことである。この過程は、「伝えたい対象に出会い追究する学習課題に気づく段階」、「伝えたいとっておきをペアの友達とつくる段階」「伝えたいとっておきを発信し、自分たちの学習の成果をあげよう段階」の3つの段階で構成される。そのためには、チームの活かし方や明確な目標設定、チームワーク、シンキングツールなどを取り入れた学習過程の工夫が必要である。

4 具体的な方途

(1) チームの活かし方

国語科学習においては、個やペアによる読みの創造、他のペアとの磨き合い、学級全体での交流といった目的や段階に応じたチームによる学習が必要である。

【表1 国語科学習におけるチームの考え方】

チーム形態	チーム構成員	チームの機能
ペア	同じお話を選んで読んだ友達	伝える内容や方法を創り上げる想像・創作機能
ペア間	同じテーマを選んで読んだ友達	ペアで創ったものを伝え合い磨き合う評価機能
学級全体	同じ追究課題を解決する友達	読みの課題の設定や解決を行う課題解決機能

以上のようなチームを、学習内容に応じて効果的に位置付けることが大切である。

(2) 学習過程の工夫

ペアでの紹介活動を位置付けた学習過程は表2のようになる。追究課題を解決しながら伝え合う楽しさを共有するためには、明確な目標設定、伝え合う対象の位置付け、シンキングツールの活用などが主な手だてとなる。

【表2 ペアでの紹介活動を位置付けた学習過程の工夫】

段階	気づく段階	つくる段階	あげよう段階
	伝える対象に出会い課題に気付く	伝える内容をつくり、伝える方法について話し合う	伝える対象に発信し、学習への達成感をあげよう
	ソロ	ソロ→ペア ペア→等質ペア・異質ペア	ペア→学級集団→ソロ
学習活動	未知の文章との出会い(昔話・神話等)を探してみよう。ほかに面白いお話があるよ。○○が出てくるお話を探してみよう。課題意識の投げかけ。読み聞かせボランティア。お話を聞かせて。よし、○○なお話を見つけて読んでみよう。	とっておきA → とっておきB → ペアによるお話紹介づくり。シンキングツールの活用・可視化・操作化・構造化。ペア間による評価・読みたいシールの活用。	学級全体集団による伝える対象への発信。こんなお話見つけたよ。ソロによる学習の振り返り。いっしょに楽しく読みたいな。他にもたくさんお話を読みたいな。
手だて	見つけたとっておきを伝えたいという活動意欲をもたせるための課題の提示	見つけたとっておきを伝えるために、ペアでよりよい内容や方法をつくり出すシンキングツールの活用	見つけたとっておきを伝え、読書のよさや活動への達成感をあげようための発信の場の設定

(1) 単元でめざす姿

第1学年 単元

みつけよう、つたえよう、
おはなしの とっておき
～むかしばなしがいっぱい～

- 登場人物の言動に着眼してあらすじを読み取り、好きな場面を中心に創造を広げながら読むことができる。(読む能力)
- 昔話の読み聞かせを聞いたり読んだりして見つけたとおきのおもしろさを紹介することができる。(伝統的な言語文化に関する事項)
- 進んで昔話を見つれたり紹介したりして伝統的な言語文化に触れ、読書を楽しむことができる。(関・意・態)
- ◎ 友達と話し合いながら、お話紹介をつくることができる。(対話力)

(2) 学習の流れと考察

気づく段階：1～3/10時

おうちの方の読み聞かせを聞いたり、お話を見つけて読んだりして、学習の見通しについて話し合う。

- (1) 学級ボランティアのおうちの方から、昔話や、神話、伝承の読み聞かせを聞く。
- (2) おうちの方のおすすめのお話を見つけて読む。



写真1 読み聞かせのお話と似たお話を見つけて読むA児

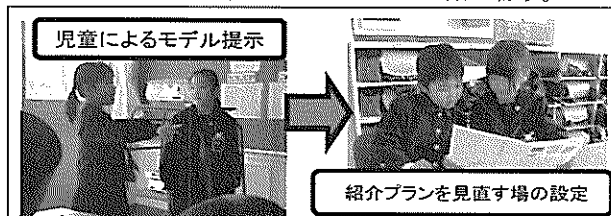
わたしは、「かちかち山」のおはなしをよんでもらいました。とてもやさしいうさぎが出てきて、おばあさんのかたきをとってあげました。ほかにも「うさぎ」が出てくるのがあったら、よんでみたいです。

資料1 読み聞かせ後のA児の感想

つくる段階：4～7/10時

ペアの友達とお話の「とっておき」を伝え合い、おうちの方たちに紹介するためのプランをつくる。

- (1) 選んだお話の「とっておき」を同じテーマの友達と伝え合う。
- (2) みんなで出し合った「とっておき」を、ペアでおうちの方たちに伝えることについて話し合う。



A児：〇〇さんたちは、一番好きなうさぎの紹介をしていたね。
B児：ぼくたちも、ずるがしこいうさぎっていうことにしよう。
A児：どこに入れる。
B児：音読の前がいい。こんなうさぎを見つけたって言う。

資料2 モデルを見て自分たちの紹介を見直すA児ペア

気づく段階では、昔話や神話などのお話に出合わせて、お話の楽しさに触れたり、自分もお話をさがして読みたいという意欲を高めたりすることをねらいとしている。そのために、まず、学級の保護者に読み聞かせのボランティアを募り、子どもたちに4つのお話の読み聞かせを行う機会を設定した。お話はそれぞれ、「かちかち山」「鶴の恩返し」「ももたろう」「一休さん」である。読み聞かせの終わりに読み手であるお母さん方から、「他にも〇〇が出てくるお話があったら教えて下さいね。」という課題を話してもらい、子どもたちに今後の学習に対する課題意識をもたせた。(資料1) また、次の時間には、4つのテーマに関連したお話10編を含む昔話コーナーを教室に設置し、自由によむ活動を仕組んだ。A児は写真1のように「うさぎ」が出てくるお話「うさぎの商売」を見つけて読み、お話のあらすじをつかむとともに、聞いたお話と大きく違う点に気づき、見つけたお話に関心を高めた。

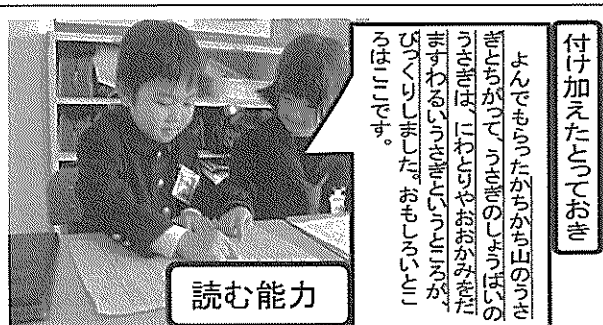
考察1

子どもたちに今後の学習への課題意識をもたせる上で、読み聞かせボランティアを募りお話を聞いたことが有効であったと考える。それは、資料1の自分もお話を見つけて読んでみたいというA児の感想や、2つのお話を比べて「悪いうさぎもいる」という違いに気づきお話に興味をもった姿(関心・意欲・態度)から判断することができる。

つくる段階では、同じテーマのお話を見つけて読んだ友達とペアを組み、おうちの方たちに紹介する「1の1おはなしおんがえし会」を開くために、お話紹介をつくることをねらいとしている。そのために、ペアでお互いが見つけた「とっておき」を出し合ったり、一緒に紹介の練習をしたりする活動を設定した。その際、とっておきのおもしろさが伝わる紹介にするという内的動機がペアで共有化できるために、また1年生という発達段階を考慮して、「よみたいシール」という評価機能を用いた目標設定を行った。シンキングツールとして、見つけた「とっておき」をどんな順番でどのように紹介するかを選択・決定するための紹介プランを活用させた。また、紹介プランを付加修正するための材料として、紹介モデルの提示を行った。(資料2)

考察2

読み聞かせてもらったお話と見つけたお話の違いを読み取り、お話紹介をつくるという「読む能力」を高める上で、「よみたいシール」による目標設定を行ったこと、紹介プランを活用したことは有効であったと考える。それは、お話のおもしろさがよりよく伝わるために、とっておきを付け加えよう



読む能力

よんでもうたかち山のお話
うさぎは、にわとりやおおかみなど
をすわらせて、おもしろいお話が
びくびくしました。おもしろいこ
ろは、ここです。

付け加えたところ

A児：最後に、どんなうさぎかというのを入れたほうが
いいよ。
B児：そうだね。「かちかち山」と違って、悪いうさ
ぎってことを入れたらおもしろいかもね。
A児：じゃあ、ここに（紹介の言葉を）書くね。

資料3 読みたいシール獲得のために紹介プランを見直す姿



人と働く力(対話力)

①うさぎが、にわとりを
だますところをよんだ
ほうがいいよ。

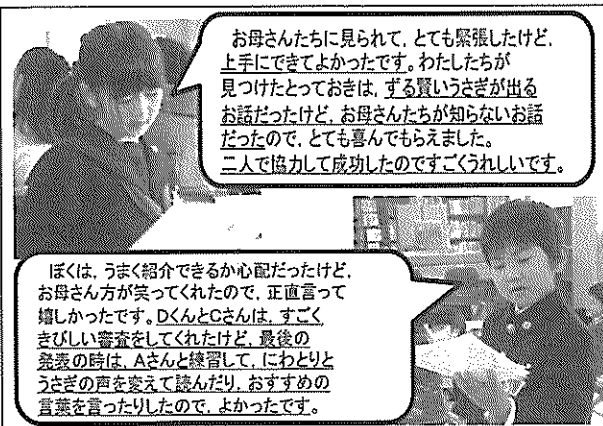
③そしたら、わたしが、
にわとりをよむね。

②じゃあ、ぼくが
うさぎのところを
よむよ。

写真2 役割を分担して音読しようとするペアの姿

あじわう段階：8～10/10時

おうちの方たちにお話の恩返しをする「1の1おは
なしおんがえし会」を行う。

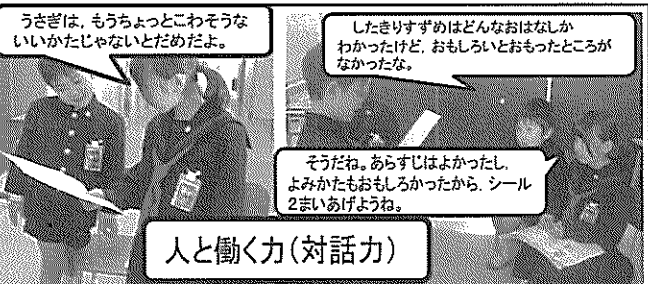


資料5 お話会を終えてのA児たちの感想

お母さんたちに見られて、とても緊張したけど、
上手にできてよかったです。わたしたちが
見つけたとっておきは、ずる賢いうさぎが出る
お話だったけど、お母さんたちが知らないお話
だったので、とても喜んでくれました。
二人で協力して成功したのですごくうれしいです。

ぼくは、うまく紹介できるか心配だったけど、
お母さんが笑ってくれたので、正直言って
嬉しかったです。DちゃんとCさんは、すごく
きびしい審査をしてくれたけど、最後の
発表の時は、Aさんと練習して、にわとり
うさぎの声を覚えて読んで、おすすめ
の言葉を言ったりしたので、良かったです。

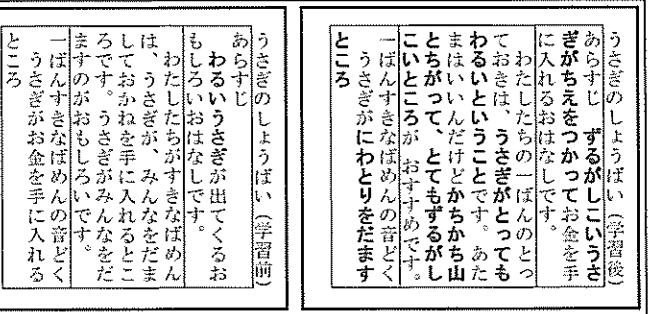
としてお話を読み直したり、紹介プランに取り入れたりし
ようとしている姿からうかがえる。また、同じお話を読んで
も、お互いにおもしろいと感じるところが違うことに気付い
たり、自分では気付かなかったお話のおもしろさに気付い
たりしながら（資料3）いっしょにお話を紹介しようとする姿（写
真2～4）から、言語に関する知識・理解・技能や人と働く
力の中の対話力が高まったことをうかがうことができる。



人と働く力(対話力)

写真3 発表練習の姿

写真4 他チームと評価し合う姿



資料4 学習前後のA児ペアの紹介プランの比較

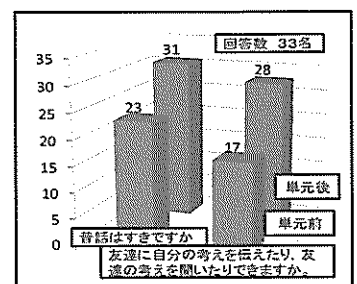
あじわう段階では、子どもたちが、おうちの方に見付けた
お話のとおきを紹介するという単元を貫く課題を解決す
ることをねらいとしている。そのために、読み聞かせをし
てくれたボランティアの方を始め、すべての保護者に、お話の
とおきをおきを伝える機会を設定した。子どもたちが2つのペ
アで協力して、つくってきたお話紹介プランをもとに、とっ
ておきのおもしろさを伝える姿が見られた。

考察3

昔話のおもしろさや独特の語り口調や表現に気付き、それ
らのよさを味わいながら伝統的な言語文化に親しむという豊
かな学力を育む上で、「お話恩返し会」が有効であったと考
える。これは、紹介プランを作成し、ペアで練習したり、他
のペアと互いの紹介を見合って評価したりしながらチームで
の学びを積み上げてきたことが有効に働いたからである。資
料5に見られるようにお話恩返し会（チームワーク）を位置
付けることによって、友達との協力で成功したことを喜ぶ達
成感や、自分たちの学習の成果が相手に伝わった達成感を味
わう姿が見られた（関心・意欲・態度、人と働く力）。

【全体考察】

考察1と考察2からわかるようにお話のとおきをおきを伝えたいという課題意識を
もって進んでお話紹介をつくらうとする姿が見られた（関心・意欲・態度、知識・
理解・技能）。また、考察3から、ペアやチームの友達と協力してお話紹介をする姿
とともに達成感を味わう姿から人と働く力が高まったととらえることができる。こ
れは、ペアで紹介プランをつくり、他のペアとチームを組んで互いの紹介を見合う
活動が有効だったからであると考えられる。単元前と比較すると、学級全体として資料
6からわかるように、友達とお話を読んだり表現したりすることに興味をもち、人
と働く力の高まりが見られた。このことから、ペアでの紹介活動を位置付けた学習
過程が有効に働き、伝え合う楽しさを共有する子どもが育ったと言える。



資料6 人と働く力の変容

よりよい文章へと高め合う国語科学習

国語科部 岡田 充 弘

1 国語科における「開かれた個」とは

情報の伝達手段が発達した現代社会では、多様なメディアを介して必要な情報を発信したり受信したりすることが容易にできる。しかし、信憑性に欠ける情報を手にする危険性や送り手の真意が曲解して伝わるといった、コミュニケーションが上手く機能しない危険性もはらんでいる。情報を受信する際は、情報の信頼性や発信者の意図を見抜き、適切に判断する必要がある。発信する際は、正確に内容を伝えるために、相手意識をもって構成や書きぶりを熟考して発信する必要がある。即ち、自分の考えをつくった上で、他者を尊重しながらコミュニケーションを図ることが重要である。

社会の要請や国語科学習の特質を鑑みたとき、国語科学習は、言語の教育としての立場を一層重視していかなければならない。言葉を通して的確に理解し論理的に考える思考力、わかりやすいように的確に伝える発信力である。そのために、今の自分自身の状況を客観的に分析する状況把握力をはじめ、相手の考えを引き出そうとする傾聴力、自分の考えをよりよいものへとつくりかえていく柔軟性を備えた「開かれた個」を育てることが求められる。国語科学習を通して、調整力の育成を図り、学び合う集団づくりを目指していく。

これまでの学校教育では、進学や入試を目的とした知識志向が強かったため、知識を共有し合ったり、新しいものを生み出したりする機会は少なかった。これからの国語科学習では、受信や発信を適切に行うことを通して他者と知識や考えを共有し合い新しいものを生み出していく協働的な学習を仕組んでいく。論理的な文章を書くことは、言葉を用いて明快に表現したり伝達したりする力をつけること、即ち、言葉を通じてよりよく考える力を養うことである。情報の収集、精査した情報を根拠にした考えの生成、考えを的確に伝えるための意図的構成、記述と推敲の全過程において自分の考えと強い相手意識をもった「開かれた個」として他者と考えをかかわらせる調整力を育む学習が望まれる。

2 主題の意味

よりよい文章とは、自分の思いや考えを読み手に的確に伝えることができる文章のことである。それは、筋の通った論の展開の文章であることは大前提として、文章に用いる情報や構成、書きぶりなどの効果を意図して書かれた文章を指す。よりよい文章へと高め合うとは、集材、選材、構成、記述の場面で、同じ思いや考え、あるいは異なる思いや考えをもつ者同士で編制した集団の中で、役割を分担したり考えを話し合ったりして、資料を選び直したり、文章を書き替えたりすることである。その視点には、①誤字・脱字の訂正と原稿用紙の書き方の確認、②用いた言葉や資料の吟味、③構成の吟味、の3つがある。文章を書く際、思いが強いために主観的になってしまう傾向にある。自分が書いた文章を他者と読み合うことで、客観的に言葉を選んだり、構成の効果を考えて文を組み立てたりすることができる。よりよい文章へと高め合う国語科学習とは、個で創造した文章や考えを友達と協働してよりよいものにしていくことを通して、自分の考えに自信をもったり、一人では気付けなかった考えに気付いたりすることができた成就感を味わったりする学習のことである。

○ よりよい文章へと高め合う国語科学習で目指す姿

【豊かな学力】

- 目的や意図に応じ、文章全体の効果を考えて文章に書くことができる。 (書く能力)
- 書く目的や意図に応じた文章構成になっているかどうかについて、修正すべき内容と書き換えの具体例を指摘することができる。 (書く能力)
- 進んで情報の収集・選択や文章に書き表すことができる。 (関心・意欲・態度)

【人と働く力】

- ◎ 考えがより伝わる文章を書くために、友達の助言を受け入れたり、友達の考えのよさを認めたりして自分の文章を練り上げることができる。 (調整力)

表現モデルの分析・決定場面を設定した活動構成

国語科部 岡田 充 弘

3 副主題の説明

表現モデルとは、文章を書く際に用いる資料や全体構成、書きぶりなどの参考物のことである。表現モデルの分析・決定場面とは、文章に適した資料や構成、書きぶりを考える際に、複数のモデルから1つを選ぶ状況のことである。選ぶ際には、複数の視点でそれぞれのモデルのよさや不十分さを吟味し、相対的に最も適しているものを選ぶ。表現モデルの分析・決定場面を設定した活動構成とは、文章を書く際の過程の中で、集材・選材場面と、構成、記述場面において、複数のモデルのよさや不十分さを比較して最も適しているものを選ぶ活動を意図的に仕組むことである。一人で書いた文章は独りよがりなものになることがあり、その原因が資料の選択にあるのか、構成にあるのか、自分では判断がつかないこともよくある。また、目的を共有していない者同士での相互評価は、有益な助言に至らないことも多い。そこで、文章を書くそれぞれの工程で、友達と最適なものを選ぶ活動を仕組む。そうすることで、表現物のゴール像と作成過程をはっきりさせて活動することができ、書くことの内容を確実に獲得できる。そのためには、チームの活かし方や明確な目標設定、考えを合意形成するシンキングツールを取り入れた学習過程の工夫が必要である。

4 具体的な方途

(1) チームの活かし方
国語科の書くことの学習においては、ソロとチームとを往復するような学習が必要である。国語科学習において考えられるソロとチームは以下ようになる。

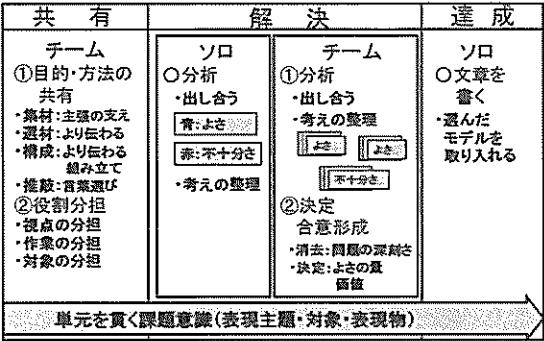
【表1 国語科学習におけるソロとチームの考え方】

形態	機能
ソロ	表現主題と表現対象を明確にもち、チームの成員として視点と追究対象を分担し、分析を行う。
チーム1	表現主題が同じ者同士で編制する。主題を支える情報の集材、選材、構成の吟味を行い、主張をつくる。
チーム2	表現対象が同じ者同士で編制する。記述する際の留意点の話し合いや推敲を行う。
学級全体	書き上げた作文を発表したり、読み手に伝わる文章を書く留意点を整理したりする。

以上のようなソロとチームを学習過程の中に効果的に設定していくことが大切になる。チームでの分析・決定活動を旺盛にするためには、個で行うよりも集団で行うことのよさ（情報量の多さ、分析の視点の多さに伴う量と質の高まり）をとらえさせることが重要である。

(2) 学習過程の工夫
表現モデルの分析・決定場面を設定した活動構成は、図1のようになる。学習過程のそれぞれの段階において、明確な目標設定、チームとソロの活動の位置付け、シンキングツールの活用などが主な手だてとなる。特に、チームとソロを往復する活動構成を工夫する。

チームで共有した目標達成のために、①表現物や資料を分析する役割を分担する【チームワーク①】、②個で分析した結果を持ち寄り、チームで最適なものを話し合っ



【図1 チームとソロを往復する活動構成】

(1) 単元でめざす姿

第6学年 単元

思いを伝えよう！ わたしたちの平和宣言

- 情報の選択や構成を考えて意見文を書くことができる。(書く能力)
- 戦争や平和についての考えを伝える目的で書かれた文章を、より読み手に伝わるように、修正箇所を具体的に指摘できる。(書く能力)
- 読み手に伝わる意見文を書くために、意欲的に情報を収集したり、モデル意見文の構成を分析したりすることができる。(関心・意欲・態度)
- ◎ より伝わる文章を書くために、友達の考えのよさを認め、受け入れて自分の文章を練り上げることができる。(調整力)

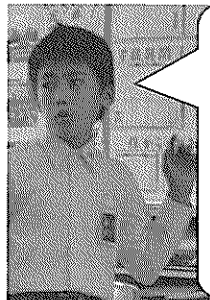
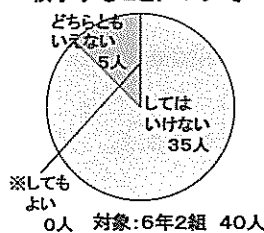
(2) 学習の流れと考察

導入段階：1～4/12時

資料を見て、戦争や平和について考えたことを話し合い、学習の見通しをもつ。

- (1) 戦争についての意識調査の結果や世界の紛争の現状が表された資料を見て感じたことを文章に表す。
- (2) 広島市平和宣言を読んで感じたことを話し合う。
- (3) 平和について何を誰に伝えたいか発表する。

戦争することについて



「戦争はいいけど、子どもでも分らないのになぜ世界から争いをなくならないのだろう。」

資料1 戦争についての意識調査とその反応

誰に	何を
親、地域に住む大人に	戦争の恐ろしさや無意味さを伝えたい
友達や下学年の人たちに	核兵器の恐ろしさや核兵器を手放す手伝い
広島を観光している人に	平和の大切さを伝えたい

資料2 誰に何を伝えたいかを記述したノートの記述

展開段階：5～10/12時

チームで協力し、平和について訴える意見文を書く。

- (1) 伝えたい内容と必要な情報の収集についてチームで話し合い、情報を収集する。
- (2) 文章の構成について話し合い、文章を表す。
- (3) より読み手に伝わるように文章を書き替える。

伝える情報	伝える相手	伝える方法
平和は大切なことだ、戦争は怖いことだ、核兵器は危険な武器だ、世界は平和でいいところだ、平和を維持するために努力しよう	世界の人々	平和を維持するために努力しよう
平和は大切なことだ、戦争は怖いことだ、核兵器は危険な武器だ、世界は平和でいいところだ、平和を維持するために努力しよう	世界の人々	平和を維持するために努力しよう
平和は大切なことだ、戦争は怖いことだ、核兵器は危険な武器だ、世界は平和でいいところだ、平和を維持するために努力しよう	世界の人々	平和を維持するために努力しよう
平和は大切なことだ、戦争は怖いことだ、核兵器は危険な武器だ、世界は平和でいいところだ、平和を維持するために努力しよう	世界の人々	平和を維持するために努力しよう

資料3 チームの意見文の構成メモ

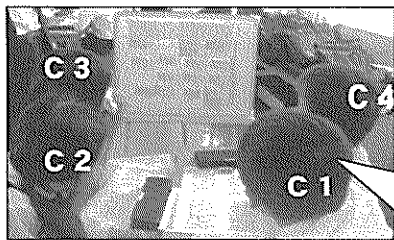
導入段階では、戦争や平和について関心をもたせ、自分の考えをもたせることをねらいとしている。そのために、まず、戦争が世界各地で現在続いていることを表す資料と学級の子どもたちの戦争に関する意識調査の提示を行った。子どもたちは、日本は平和だが、世界では争いが続いていること、このままではまた大きな戦争が起きてしまうかもしれないという危機感をもつことができた。次に、広島市平和宣言を提示した。子どもたちは、戦争を体験していない自分たちが思いを受け継いで平和の大切さを伝えていく必要があることをとらえることができた。最後に、戦争について各自で調べる時間を与えた後、誰にどのような思いを伝えたいか考える活動を仕組んだ。子どもたちは、「現在の大人たちに(表現対象)核兵器を手放させるために、核兵器の恐ろしさを伝えたい(表現主題)」という課題意識をもつことができた。

考察1

表現主題と表現対象を明確にもたせるために、世界情勢や自分たちの意識調査結果、広島市平和宣言文の資料を提示し、誰に何を伝えたいか考えさせたことは、表現主題をもたせる上では有効であったと考える。それは、自分たちは誰一人として戦争を肯定していないが世界の多くの場所で争いが起きているという現実の把握のために資料提示が上手く働いていたからである。しかし、表現対象をもたせる上では課題が残った。それは、意識調査のデータが自分たちのみであり、他者との違いが見えにくかったことが原因であると考えられる。

展開段階では、読み手に伝わる意見文をチームで協力して書くことをねらいとしている。そのために、まず、「何を」「誰に」伝えたいか、同じ思いの子ども同士でチームを編制した。次に、考えを支える情報を4種類決めさせ、各自1つずつ分担して集材し、文章を書く活動を仕組んだ。選材の際は同一テーマについて複数の資料を提示し、チームで選ぶ活動を、構成を考える際は、4つの意見文のモデルから読み手に伝わる意見文を1つ決定する活動を仕組んだ。

選材場面では、複数提示された資料をチームで分析し、より伝わるものを「見やすさ」「詳しさ」「考えとの関連」の観点から選ぶことができた。資料のモデルには、写真、グラフ、表をそれぞれ2種類ずつ提示し、①モデル文のまとまりの内容に適したものを写真、グラフ、表から選ばせる、②写真、グラフ、表の内いずれの資料が読み手に伝わるか選ぶ、という手順で行った。3つのまとまりとも内容に適したモデル資料を選ぶことができ、自分たちの資料選びに活かすこと



それぞれが分析したモデル意見文のよさを十分さすため、チームのモデルを合意し合う（調整力）

写真1 チームで最適なモデルを選ぼう。

C1: どう思う？
C2: 全員よさを見つけているAがいいと思う。
C1: C3さんはどう思いますか？
C3: C2さんの「よさが一番多いA」に賛成です。
C4: AとDは考えが最初と最後に書かれていて、理由も3つ書かれているのでAかDがいいです。
C1: 僕はAがいいです。Dも反対意見が書かれていていいけれど、Aには「緑のダム」のよさが順に重要なものになるように挙げられているからです。
C4: Aのモデルがいいね。ほか達の文章に活かそう。
全員: 賛成。（Aに決定）（調整力）

資料4 チームでモデルを選ぶ話し合いの記録

発展段階: 11～12/12時

チームで書いた平和の大切さを訴える意見文をもとに平和宣言文を作り、発表する。

- (1) 完成した文章を友達と読み合い、感想を伝え合う。
- (2) チームの平和宣言を発表する。

てのと 平係争分が避かたは訴し核で人用うりかをすともば尊よ原
いすこを自和をいのもけらち私訪えい兵原は類いにつら背し
くると自分に作をすつて仲がたれて兵器爆あがたしき向けか
ここを覚達でろ自ぐこい直友ちてい器がをり滅第なきてし
とと大しのきう分そとくり達にいまない体まん三け二合は、
をで切行ると自ばでとのとでますのけ験せで次れ度ついそ
に自動と努力にはい手対きせがかなしん。いたま界戦ま恐
こ平し分か思力があなうを立ん。い被も広う大進争そせろ
に和てとらいます避るい考さすことい被も広う大進争そせろ
に誓いな同戦ます。こよ力をのど、ま爆の島と戦歩をのんし
（豊かな学力）世わかくが。とよ力をのど、ま爆の島と戦歩をのんし
す。をり起でり、う一てもれ界人か、いがし起恐い
つ合いき世よそか人暴はに自いも起兵なさとか
くお相る界いし。一力自、平身恐か過き器いを正ら
つう手こを関て自人を分私和がろに言てをよ語面目

資料5 C1児のチームの平和宣言文(C1児記述範囲)



な伝もみよ伝さ宣
りわ書んかえん言ほく
ましきなたつれの人を達
まし文直でたててに
した章し何でての
。にて度す。く

資料6 平和宣言を終えたC1児の感想

ができた。

記述場面では、読み手に伝わる構成の効果を考えて4つのモデルを、「事例同士の関係」「事例と結論のつながり」「文章全体のつながり」「事例の価値」の4つの視点で分担し、ソロで分析することができた。その後、グラフを用いてチームに必要なモデルを1つ決定することができた。

考察2

意見文を選ばせる際、ソロで分析した後チームで決定する活動を仕組んだことは説得力のある構成をとらえる上で有効であったと考える。その根拠は、資料4の合意形成する発言の内容に事例の順序の効果や反対意見を入れる効果を述べた発言が見られたからである。しかし、文章を読み終えるのに時間がかかり、分析まで至らなかった児童もいた。類型化した項目の構成の効果を吟味させるための手だてとして、モデルの文章を構成図に表したものを補助資料として提示し、全員にモデルの構成をとらえさせる必要があった。

発展段階では、チームで作った意見文をもとにチームの平和宣言文を書き、読み手に伝えることをねらいとしている。そのために、それぞれの担当した事例を端的にまとめ、構成メモを参考に構成を話し合う活動を行った。子どもたちは、自分の担当した文章の要点をまとめ、チームの考えを伝えるためにどのように文章を書き直したらよいか話し合い、それ

ぞれの文章を書き替えることができた。そして、チームで分担して文章を読んだり4人で声を合わせて読んだりして強弱を付け、自分たちの考えを伝えることができた。

考察3

平和宣言文を書かせる上で、あまり同士のつながりを表した表現モデルと比較させたことは、読み手に伝わる文章の構成をとらえさせる上で有効であったと考える。これは、

モデルの文章とチームの文章の構成の共通点を取り出す活動が有効に働いたからである。資料6に見られるように、平和宣言文を書く際、よりよい文章の構成を話し合っ文章を書き上げた（調整力）よさを味わっている姿が見られた。しかし、実際の宣言場面では、訴えかけようとする姿が弱く、課題として残った。その理由として、宣言文は発表のためではなく、読ませる目的で書いていたためと考えている。

【全体考察】

考察1と考察2からわかるように、戦争や平和についてチームで、資料の選定や文章構成などに留意して書き上げる姿が見られた。また、考察3から、説得力のある構成で自分たちの宣言文を書き上げることで、読み手に伝わる文章構成をとらえられたということが出来る。これはシンキングツールを用いてのソロとチームの活動が有効だったからと考える。単元前と比較すると、学級全体として資料7からわかるように人と働く力と、説得力のある文章構成についてとらえるという豊かな学力の向上が見られた。このことから、ソロとチームにおけるそれぞれの手だてが有効に働き、開かれた個が育ったと言える

チームで話し合いたいと感じている



社会形成者として判断する社会科学習

社会科部 山 田 耕 司

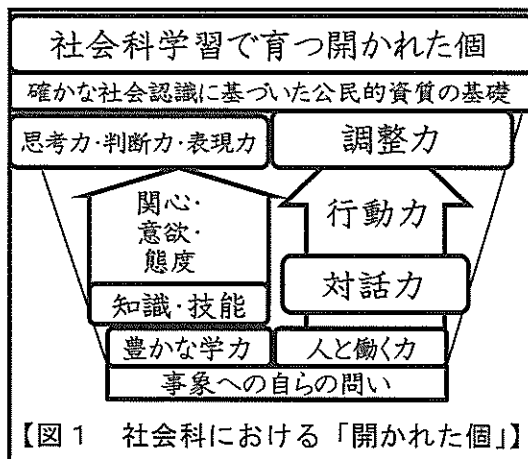
1 社会科における「開かれた個」とは

社会科では、子どもが調べて考えることによって社会認識を深めるとともに、よりよい社会をつくらうとする意欲と、そのためにどうすべきか考え取り組むことができる態度の育成を目指している。つまり、社会的事象に対して興味、関心をもち、自ら問いをもち、社会的事象の事実を確実にとらえ、学習内容を活用して、自分や社会のあり方を導き出す子どもを目指している。それは、「開かれた個」として、他者と身近な社会の課題の解決に主体的に参画し、その発展に貢献しようとするようになる。

我が地域や国の社会的事象の特色や相互の関連について確実にとらえること（知識・技能）は国土や地域社会への理解と愛情を育むもの（関心・意欲・態度）につながる。また、他者と伝え合ったり吟味し合ったりすることは、目的や理由、因果関係（判断力、表現力）を考えることにつながる。

さらに、自他の考えを様々な視点から付加修正しながら創り出し（対話力）、社会的事象に対する特色や関連、意味を考え、よりよい社会のあり方を見出す力を育てることが大切である。そのために、自分たちが立てた目標に向かって取り組み（行動力）、他者や社会、自然や環境と協調できる力（調整力）、を育てることが望まれる。

社会の要請や社会科学習の特質から、一人一人の学習を通して「子どもなりの見方・考え方」が醸成され、共有する場が重要になる。「開かれた個」を育むために社会科学習は、自他とともに問題解決的な活動を通して、「社会認識（豊かな学力）」を獲得し、社会科の究極の目標である「公民的資質」を養う必要がある（図1）。



【図1 社会科における「開かれた個」】

2 主題の意味

社会形成者とは、我が国や地域の人々の願いをかなえる社会を実現するために、他者や自然と協調しながら行動しようとする者である。**社会形成者として判断する**とは、我が国や地域社会の一員として、他者や社会、自然などを考慮して自他と折り合いを付けながら合意形成を図っていくことである。

社会形成者として判断する社会科学習とは、問題解決的な学習を通して、他者とともに様々な見方や考え方を明確にし、合意形成してよりよい社会の働きや取組を考えていく学習である。

社会科は、確かな「社会認識」をもとに「公民的資質」を養うために問題解決を図る教科である。よって「開かれた個」を育てる学習指導においては、地域社会や我が国の社会事象の仕組みや働きについて理解し、チームで考えを交流しながら、社会や自分のあり方を創造する姿を目指すべきである。

○ 社会形成者として判断する社会科学習で目指す姿

【豊かな学力】

- 我が国や地域社会の社会的事象の特色や相互の関連を、様々な資料による追究や聞き取りなどの具体的活動をもとに、とらえることができる。（知識・技能）
- 我が国や地域の人々の生活を守り、支える仕組みや働きを複数の視点から特色付けたり、関連付けたりして考え、説明することができる。（思考力・判断力・表現力）
- 自分とかわりが深い社会的事象に関心をもち、問いに対して見通しをもって追究し、追究内容を生かして、よりよい社会に向け、働きかけることができる。（関心・意欲・態度）

【人と働く力】

- ◎ 地域の人々の思いや願いをかなえる社会を実現するために、他者や社会、自然や環境と協調しながら、合意形成することができる。（調整力）

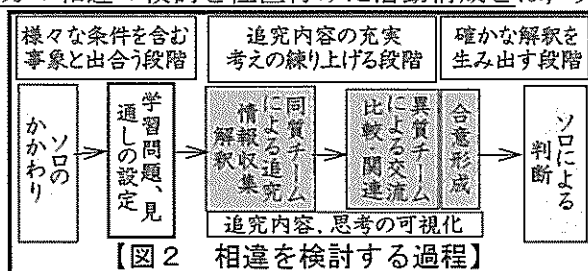
見方や考え方の相違の検討を位置付けた活動構成

社会科部 山 田 耕 司

3 副主題の説明

見方や考え方の相違とは、人々の組織的な営みにおける事柄や出来事を自然、経済など複数の条件や立場から関連付けた解釈の違いである。見方や考え方の相違の検討を位置付けた活動構成とは、具体的活動、資料追究をもとに、同様な解釈のチームが考えを練り上げ、異なる解釈のチームと考えの違いを明確にし、解釈を新たに生み出す場を位置付けた活動構成である。まず、様々な条件や立場がある社会的事象に興味・関心をもつ。次に、体験的活動や具体的資料などから情報収集、読み取りをして追究内容や思考を可視化する。社会的事象の特色や意味を比較したり、関連付けたりする。そして、相違点から互いの解釈を吟味し、合意形成する(図2)。この一連の活動を位置付けることにより社会形成者として判断することができると考える。

効果的に見方や考え方の相違を検討するには、チームの活かし方やシンキングツールなどを取り入れた学習過程の工夫が必要である。



4 具体的な方途

(1) チームの活かし方

社会科学学習においては、ソロによる「一人一人の見方・考え方」とチームによる「他者との判断力の醸成」との連続発展が求められている。社会科学学習においてチームは以下のように考えられる。その際、追究の見通しや考えが同質、異質の小集団を以下の点に留意して編制する。

【表1 同質や異質のチームを活かした活動構成】

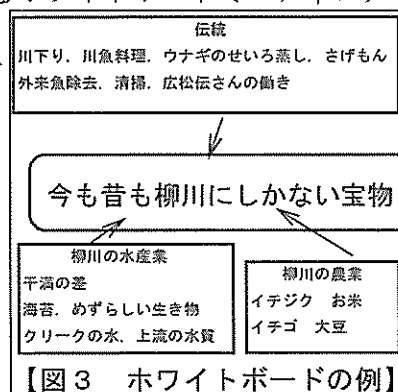
	同質チーム(同じ見通し、視点や考え)	異質チーム(異なる見通し、視点や考え)
チームの目的	○ 既習内容について補完したり、自分の考えを積極的に友達に伝えたりする。 ○ 役割分担し、追究する。	○ 自分の考えを積極的に他の友達と交換し合い、吟味し合う。 ○ 自他の見方・考え方を生かして考える。
チームの価値	○ 学習内容や考えを詳細に教えられる。 ○ 付加して共有することができる。 ○ 友達の考えを付加強化して生かせる。	○ 自他の考えの共通点や差異点をとらえ、分かりやすく吟味したことを表現できる。 ○ 自分の考えに友達の考えを生かせる。
段階	展開段階(問題追究場面)	展開場面(交流場面)～終末場面

(2) 学習過程の工夫

○ 追究内容や事象の仕組みを関係付け、可視化や操作化ができるホワイトボードミーティング
ホワイトボードミーティングとは、自他の考えの根拠を付箋にまとめ、ホワイトボードに關係付けて意味を明確にし、捨象・抽象することで新たな価値を見出す交流をすることである。

- ① 多様な条件や立場がある社会的事象を役割分担し、追究した事象相互の関連や特色、意味を同質チームでまとめる。
- ② 事象の特色や関連、意味の根拠を明確にして結論付ける。
- ③ それぞれが追究した様々な仕組みや取組を異質チームで主張し、補い合って、互いの解釈を吟味し、合意形成を生み出す。

この過程により、事象の事実と価値をとらえ、多様な考えを導き出すことで社会形成者として判断することに効果があると考えられる。



【図3 ホワイトボードの例】

第4学年 小単元

150万人の命を守る

福岡市消防局の人々

～ふさわしい消防車配置を考えよう～

(1) 単元でめざす姿

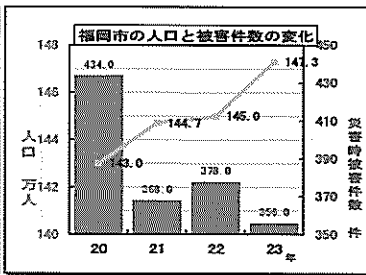
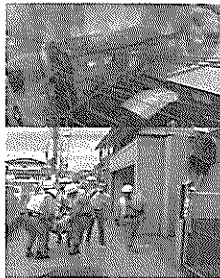
- 福岡市消防局は市民を守るために、地域に対応した取組、関係諸機関との連携や啓発に取り組んでいることをとらえることができる。(知識・技能)
- 消防署の人々が様々な災害に対処するために、地域の人々や関係諸機関と連携を取り合っていることと自分のかかわりを考えることができる。(思・判・表)
- 福岡市で火災被害が減少していることに関心をもち、早期到着、消火・救助できる取り組みを追究する学習問題を設定し、見通しを立てて追究することができるとともに、地域の災害対策の意識を高めることができる。(関・意・態)
- ◎ 消防局が地域の特色に対応し、解決している働きから、自らも地域を災害から守るために、各署の消防車配置を話し合い合意形成することができる。(調整力)

(2) 学習の流れと考察

導入段階：1～2／8時

福岡市の災害状況の様子を調べ、消防局の人々が早期対応できる理由を追究する学習問題を話し合う。

- (1) 災害の恐ろしさ、防火施設・設備について調べる。
- (2) 人口増加に反し、火災発生、災害時被害件数が減少傾向の理由について調べる学習問題を話し合う。



資料1 消防署員の救助活動と福岡市の人口と被害件数

展開段階：3～6／8時

各消防署や関係諸機関の連携の意味について見学や資料から調べ、話し合う。

- (1) 消防局の人々が迅速に駆けつけ、消火する取組を見学したり、資料から調べたりする。
- (2) 関係諸機関との連携により災害復旧活動していることについて調べ、意味を話し合う。

私たちは、福岡市民150万人のために、様々な災害を考えて準備したり訓練したりしています。どこにどんな建物があるかも日頃から勉強しています。水道局やガス会社とも連絡し合って早く消せるようにしています。



福岡市中央区は人々や小さな川が多く、込み入っているのに、なぜ、火事でも水害でも早く対応することができるんですか。

写真1 消防局の人々のおかげでくらしが守られている。

発展段階：7～8／8時

福岡市各消防局の自然条件から地域に相応しい消防車を考え、本小単元の学習をまとめる。

導入段階では、様々な災害から被害を最小限に抑えられる理由を調べる学習問題を設定することをねらいとしている。

そのためにまず、建物の延焼速度や浸水被害の様子から災害の恐怖に気づき、福岡市の火災状況についてとらえさせた。次に、福岡市人口と火災発生、災害被害件数のグラフを比較提示した(資料1)。子どもたちは、福岡市の人口が増加しているのに、福岡市消防局の人々が火災や水害など様々な災害に対して被害を最小限にしていることをとらえた。そして、「福岡市消防局の人々は、どのように150万人の市民を様々な災害から守るのか調べよう。」と学習問題を設定できた。

考察1

人口増加の中、火災や自然災害からの被害を最小限に抑えられている理由を追究する学習問題を設定させる上で、風水害や人口増加と被害減少のグラフを比較提示させたことが有効であったと考える。それは、前時までに命や財産、記憶を奪う火災や自然災害の恐ろしさをとらえ、人口増加に反して災害被害が減少しているずれが有効に働いたからと考える。

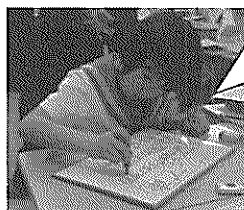
展開段階では、消防局の人々が役割分担し、関係諸機関と連携して、いつでも緊急時に対処をとらえることをねらいとしている。そのために、まず、福岡市周辺の地域ごとの子どもでチームを編制し、各地域で災害被害件数が減少している理由を役割分担して追究させた。次に、消防署の施設や設備、災害に備えてどのような働きをしているのか見学させた。子どもたちは、早期到着、消火・救助が困難な福岡市で、消防署の人々が様々な災害に対応できるために、どのような工夫や努力をしているのかとらえることができた。さらに、災害を最小限に抑えるため、どのような願いをもって取り組んでいるのか聞き取りをした。そして、水道局やガス会社などの関連諸機関との連携の理由をとらえることができた。

考察2

同質チームで早期到着、消火・救助の営みを見学や聞き取りしたことは有効であったと考える。これは、写真1に見られるように、消防署の人々の工夫や努力だけでなく地域社会の人々への思いに触れたことが有効に働いたからである。また、関係諸機関と消防局の関連を意味付ける姿が見られた。

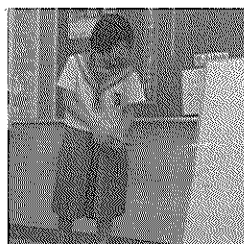
発展段階では、各消防署に配置された消防車の違いから地域の特色にあった配置を考えて迅速に災害に対応する消防局の人々の思いや願いをとらえるとともに、地域の特色をとらえ、防災の意識を高めていくことをねらいとしている。

- (1) 福岡市の各消防署周辺の自然条件や人々の生活の様子や消防車の特徴を調べる。



福岡市中央区は、ビルやマンションなどの高い建物が多いから、はしご車は欠かせない。
高いところまで水をたくさんかけなければいけないからポンプ車もいるね。

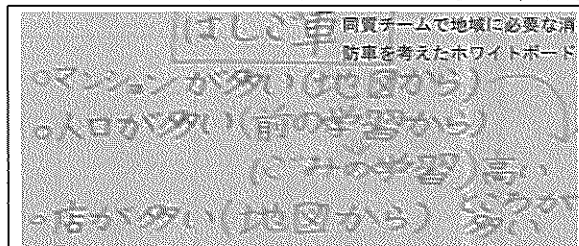
写真2 各地域に相応しい消防車配置を考えよう。



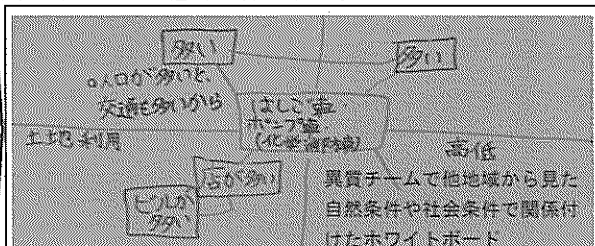
福岡市中央区は、高い建物が多いから、はしご車は欠かせない。だけど狭い路地がたくさんあるから大きな車は入っていけないので、消火栓もたくさんいると思いました。

写真3 チームで考えた消防車配置を話し合おう

- (2) それぞれが調べた消防局のよさをもとに、相応しい見出しやテーマの意味を話し合う。



異質チームとのホワイトボードミーティング



資料2 同質チームによる消防車配置の価値から異質チームによる事象の関係付けの変化



高い建物が多いところにははしご車を配置しますが、福岡市には高い建物がとても多いです。そこで火事の際には協力し合って出動しています。消防車配置を考えることは地域を知ることだよ。自分の命を守ることにつながるよ。

写真4 地域について話し合うことは自分の命を守ること。



福岡市南区は一戸建てが多いし、那珂川があるから、ポンプ車は欠かせないと思っていました。だけどA君が消火栓も道にあることを調べていたので、ホースもたくさん必要なことが分かりました。地域チームで学習することで、地域のことをもっと知ることができました。

写真5 学習ノートにチームのよさをまとめたよ。

そのために、まず各消防署に配置されてある消防車の写真を提示した。各地域のチームで、自然条件や人々の混み具合、土地利用の条件などを考慮して各消防署に相応しい消防車配置を考えるといった明確で難易度のあるチームの目標を設定させた。子どもたちは、既習経験をもとに、チームで追究した各地域の自然条件、消防署や関連諸機関との連携を考え、「地域にぴったり合う消防車配置」を考える目標を設定した。

次に、チームで地図や資料をもとに考えを付加したり関係付けたりしながら、ホワイトボードに構造的に書き込んだりした(写真2)。各地域の自然条件と消防車の特徴を関係付けながら分類し、相応しい消防車配置を考えた。その消防車配置の意味と各地域の自然条件を関係付けていった。そして、吟味した消防車配置を全体で交流し合った(写真3)。チームで協力しながらどのように関係付けたのか、その意味を全体で地図や提示資料を使って紹介した。各チーム、互いの地域の自然条件を考えながら消防車配置に対して資料から客観的に評価し合い、付加修正を行った(資料2)。

最後に、本時学習をもとに、消防局の働きを知るだけでなく、自分の地域を知り、身を守ることによさについて消防局の方から話していただいた(写真4)。チームの友達と協力し合って、消防車配置を比較したり関係付けたりしながらつくることができたのか、チームの役割分担がどのように機能したのか学習ノートに評価し合った(写真5)。

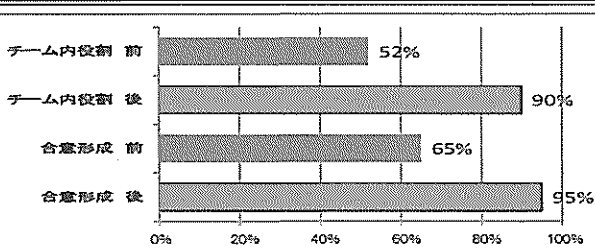
考察3

地域の特色を考慮した消防局の働きをチームで吟味し合いながらとらえさせる上で、ホワイトボードを使って事象相互に関係付けさせる活動を設定したことが有効であったと考える。これは、目標設定が有効に働いたからである。ホワイトボードミーティングを位置付けることによって、チーム内の考えを可視化、操作化、構造化できた(資料2)。

ここでは、事象の意味から価値を生み出す姿が見られた。また、その過程でまとめ方だけでなく考えの付加修正からもチームで学び合うよさも見られた(写真5)。これが社会形成者として判断している姿だと考えることができる。さらに、作業の効率化を図る方途を究明したいと考えている。

【全体考察】

考察1と考察2からわかるように消防局の人々が様々な問題を解決している働きから、自らも社会的な事象に積極的にかかわり、チームで関係を見出そうとする姿が見られた(調整力)。また、考察3から、消防局のよりよい取組に向けて、チームで考えを付加修正し、高め合って吟味しているととらえることができる(思考・判断・表現)。これは、チームによる問題解決活動が有効だったと考える。また、



資料3 本小単元前と後の「開かれた個」の育成
チームにおける役割をとらえ、考えを補完し合い高めめられたと考える(資料3)。このことから、ホワイトボードミーティングにより、社会的な事象の見方や考え方の相違を検討する活動が有効に働き、協調力が育ったと言える。

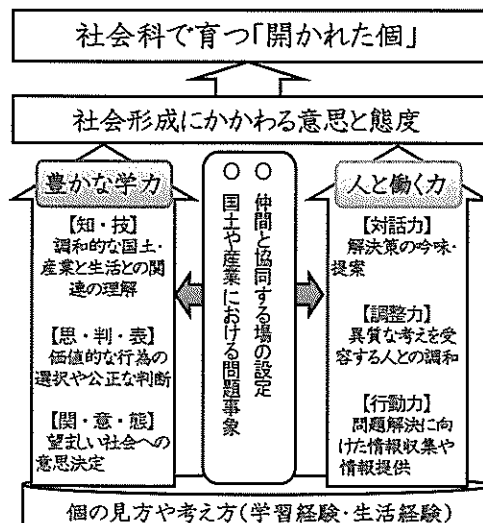
社会の一員として意思決定する社会科学習

社会科部 藤岡太郎

1 社会科における「開かれた個」とは

グローバル化が一層進み、多様な価値観が存在する現代において、自分と他者や自然、環境や文化などと相互のかかわりを大切にする生き方が求められる。

社会科では、自分と他者や自然、環境や文化などと相互にかかわりながら生活を営んでいることに気づき、当事者意識をもって社会の発展に貢献しようとする個を育てることが大切であると考え。具体的には、①社会的事象の発展の過程や仕組みについて必要な情報を収集・選択して調べ、国民生活との関連をとらえること、②社会問題に対する価値的な考えや行為を選択し、公正に判断すること、③望ましい社会のあり方について、多様な解釈や価値観を認め、解決策を意思決定していく姿である。このような子どもには、問題の解決のために、自分はどうにかかわればよいかといった思考の筋道を経て、よりよい解決策を協働で練り上げていく人と働く力が必要である。ここでいう協働とは、目標を共有する友達と、目標の達成に向かってともに知恵を出し合うことを指す。つまり、よりよい解決策を求めて、友達とともに情報を収集・提供したりする行動力を育成することが重要である。そのためには、社会的事象と生活とのかかわりを自覚させ、社会の仕組みの追究の場と解決策とともに検討する場の設定が必要となる。以上の力を育てることで、望ましい社会の実現に向かって人とかかわりを深め、社会の一員として主体的な意思と態度を身に付けた「開かれた個」が育つと考える(図1)。



2 主題の意味

社会の一員とは、市民社会の一人としての市民、国家の成員としての国民、国際社会に生きる日本人という性格を併せもつ公民としての自覚をもった個である。社会の一員として意思決定するとは、自分と他者、自然、環境や文化との調和を図る社会の実現に向かって、公民としての自覚をもった社会の形成者の一人として、国土の環境や産業が抱く問題の原因や解決の仕方を追究し、望ましい社会のあり方を多面的に考えたり公正に判断したりすることである。社会の一員として意思決定する社会科学習とは、考えや立場が同じ相手、または違う相手と考えを吟味し合いながら、地域社会や国家の発展に向かって判断したり行動したりする意思と態度を身に付ける学習のことである。子どもたちが自分を取り巻く社会の問題に対して友達と考えを吟味し合い、価値判断や意思決定する場を設定することにより、よりよい社会の形成にかかわるための豊かな学力と仲間と協働して思考し続ける行動力が高まると考える。

○ 社会の一員として意思決定する社会科学習で目指す姿

【豊かな学力】

- 情報を収集・選択し、国土や産業と生活との関連をとらえることができる。(知識・技能)
- 望ましい社会のあり方を自分と他者との調和や環境・自然の活用、克服という視点から多面的に追究し、公正に判断することができる。(思考力・判断力・表現力)
- 望ましい社会について、価値的な解決策を提案することができる。(関心・意欲・態度)

【人と働く力】

- ◎ 望ましい社会の実現に向かって、立場の異なる友達と協働し、価値的な考えをつくり出すことができる。(行動力)

同質追究と異質追究を往復する活動構成

社会科部 藤岡太郎

3 副主題の説明

同質追究と異質追究を往復するとは、追究対象や視点が同じ集団の友達や追究の対象や視点が異なる友達と考えを比較・関連付け・総合して考え、社会的事象が抱える問題の解決策を繰り返し高め合うことである。同質追究と異質追究を往復する活動構成とは、単元の展開段階と終末段階における、社会とのかかわりを判断する過程において、①社会的事象との出会いからつかんだ課題に対する考えを同質の友達と共有する活動、②異質の友達と考えを比較・関連付けして考える活動、③再び同質の友達と交流結果を総合して考える活動の3つの活動を連続的に位置付けることである。なお、この3つの活動は、個やチームの考えを矯正するものではなく、強化する活動として位置付ける。このことにより、課題に対する考えを自他の考えのよさを取り入れた考えに高め、自らの価値としてつかませていくことができると考える。活動構成の内容を以下のように考える（表1）。

【表1 活動の内容】

活動構成	内 容
共有	追究対象や視点が同質の集団を形成し、課題に対する個の考えを出し合い、解決の方向性を話し合う。
比較・関連付け	追究対象や視点が異なる集団を形成して、考えを相互に比べたり、つなげたりして話し合い、考えを多面的に吟味し、強化するための視点を見出す。
総合	同質の集団で、交流の結果をもとに、個やチームの考えを見直し、収集した情報やとらえた観点からチームの考えを公正に判断する。

4 具体的な方途

(1) チームの活かし方

社会科では、自己の見方や考え方を他者とのかかわりによって深化させ、自他の考えのよさを取り入れた公正な判断を行う姿を重視する。また、友達と協働しながら粘り強く追究し続ける行動力の育成も重視している。そのためには、ソロの活動と質的な違いのあるチーム相互の活動を往復させながら高める必要があると考える。社会科ではソロとチームのあり方を以下のように考える（表2）。

【表2 社会科のソロとチームのねらいと活動】

形 態	ねらい	活 動 内 容
ソロ	導入 個別化	○ 課題に対して観察・調査し、自分なりの考えを書き表す。
	終末 価値形成	○ 交流によってとらえ直した視点から判断、意思決定をする。
チーム	同質 考え方の深化	○ 考えを出し合い共有する。考えをまとめて公正に判断する。
	異質 見方の広がり	○ 考えを比較し、共通点や差異点を見出す。

(2) 学習過程の工夫

課題に対する見方を広げたり、考え方を深めたりして、よりよい社会の実現といった観点から自分なりの価値として判断できるようにするために、同質追究と異質追究を往復する活動を展開段階から終末段階に連続的に位置付け、以下のような認識過程をたどる（表3）。

【表3 活動構成の中のソロとチームの位置付け】

活動構成	共有	比較・関連付け	総合
形態	同質チーム	異質チーム	同質チーム→ソロ
認識過程	具体的な観察・調査結果の出し合いにより、事実をとらえる。	他者と考えを比較して共通点や差異点を見出し、社会の仕組みをとらえる。	考えを総合し、課題に対して、チームや自分なりの判断、意思決定をする。
学習段階	展開段階①	展開段階②	展開段階③→終末段階

第5学年 小単元 どうする! 将来の日本の工業 ～外国との関係から考える 自動車工業の行方～

(1) 単元でめざす姿

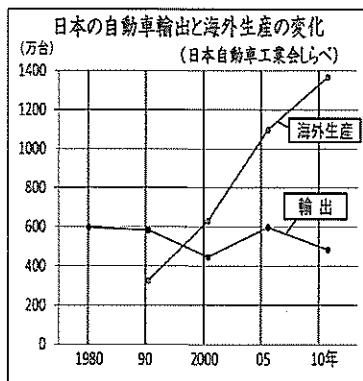
- 資料から貿易や運輸についての情報を集め、貿易や運輸の働きが工業生産を支えていることを理解することができる。(知識・技能)
- 我が国の工業は貿易や現地生産で発展していることや、これからの社会のあり方を多面的に考え、判断することができる。(思・判・表)
- 我が国の工業を支える貿易や運輸の働きに関心をもち、これからの発展について意欲的に考え提案することができる。(関・意・態)
- ◎ これからの自動車工業はどうあるべきかについて、他者の解釈や価値観を受容して価値的な考えをつくることができる。(行動力)

(2) 学習の流れと考察

導入段階：1～2/7時

日本の工業生産における貿易の様子を調べ、海外生産が増えてきている理由を追究する学習問題を話し合う。

- (1) これまでの我が国の工業生産における貿易と現在の貿易の様子を調べ、貿易の働きについて話し合う。
- (2) 我が国の貿易の特色から、現地生産が増えてきた理由を調べる学習問題について話し合う。



A児 日本は、ほとんど地下資源を輸入して日本の工業は、加工貿易によって発展してきたことがわかりました。～中略～
その中でも、自動車の国内生産や輸出が多いことがわかりました。でも、なぜ輸出よりも、海外生産が増えてきたのか調べたい。

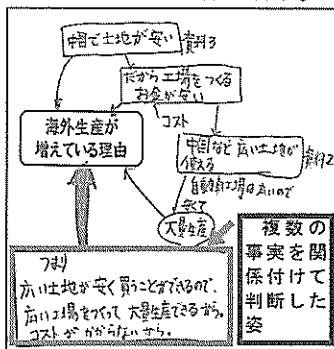
資料1 提示した資料

資料2 A児の感想

展開段階：3～4/7時

追究の見通しに沿って、海外生産が増えてきた理由を調べ、話し合う。

- (1) 追究の見通しに沿って、海外生産が増えてきた理由を調べる。
- (2) 資料を根拠に、特に中国を舞台に海外生産が増えている理由を話し合う。



資料3 A児の追究結果

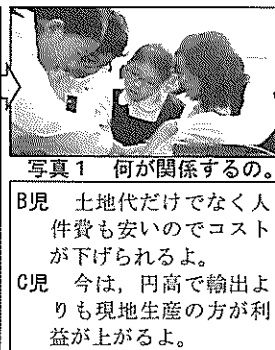


写真1 何が関係するの。

B児 土地代だけでなく人件費も安いのでコストが下げられるよ。
C児 今は、円高で輸出よりも現地生産の方が利益が上がるよ。

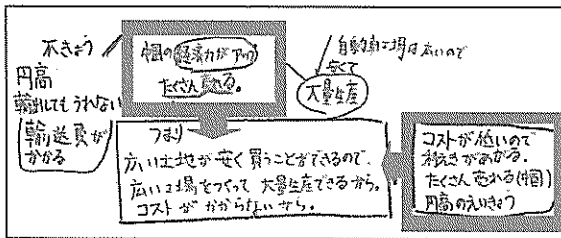
資料4 チームの関係付け

導入段階では、我が国の自動車生産において、海外生産が増えてきた理由を追究する学習問題を設定することをねらいとしている。そのためにまず、これまでの我が国の工業生産を支えてきた貿易の働きを追究する場を設定した。A児は、資源が乏しい我が国が、原料を輸入し、製品につくりかえて輸出する加工貿易によって工業を発展させてきたことをとらえた。そこで、我が国の自動車工業において、1990年代まで国内生産や輸出が増加している資料を提示した後に、海外生産が急激に伸びてきた資料を提示した(資料1)。A児は、加工貿易の特色とのずれに疑問を抱き、海外生産が増えてきた理由を追究する学習問題を設定することができた。

考察1

学習問題を設定させる上で、貿易の特色を過去と現在の視点から追究できる資料提示が有効であったと考える。それは、A児が、我が国の工業が加工貿易により発展してきたにもかかわらず、海外生産に転じたのかを追究する意識をもった姿から読み取れる(資料2)。課題は、我が国の工業生産を自動車工業に焦点化する資料提示が必要であったと考える。

展開段階では、我が国の自動車生産において、海外生産が増えてきた理由を人件費や土地代、円高による景気などの、価格と費用の面からとらえ、その結果、我が国の工業が発展し、国民生活を支えていることをとらえることをねらいとしている。そのためにまず、追究の視点に沿った個別追究の場を設定し、情報収集と考えを図示させた。A児は、個別追究によって、土地代と工場建設の立地条件を関係付け、大量生産が可能なることから海外生産が増えてきた理由を説明することができた(資料3)。しかし、この段階では、立地条件から見た低コストの実現という一面的な見方であるため、人件費や輸送費用など、追究の視点が異なる異質チームを形成して、追究結果を出し合い、関係付けて話し合う場を設定した(写真1)。異質追究の子どもの中には、同じコスト面に着目して追究した子どももいたが、チームの話し合いの場において、子どもたちは、人件費の面から低コストの実現を説明したり、さらには、円高不況と輸送費を関係付け、海外生産の意味を説明したりした(資料4)。その後、チームの話し合いで得た事実をもとに考えを再表現する場を設定し、我が国の自動車生産において、海外生産が増えてきた理由を自己決定し、判断させた。A児は、人件費や電気代などのコスト面や円高の影響、さらに中国の景気の上昇を、利益と結び付け、海外生産の意味を判断した(資料5)。



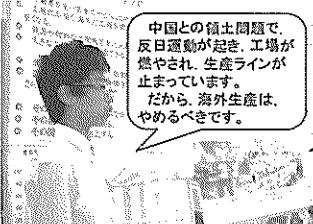
資料5 再表現したA児のノート

発展段階：6～7/7時

我が国の自動車工業が発展し、国民生活が豊かになるために、海外生産を進めるべきかについて話し合う。

根拠①(事実)
資料2(反日運動のニュース)
領土問題で、工場が燃やされ、生産ラインが止まっています。
だから、海外生産は、やめるべきです。

根拠②(事実)
①でも、資料
国内の自動車関連工場が、減っています。失業率も上がっています。



資料6 共有した事実

写真2 進めるべきではない。

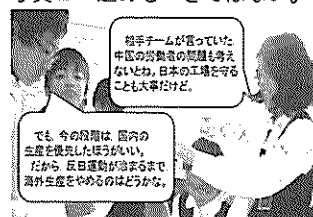
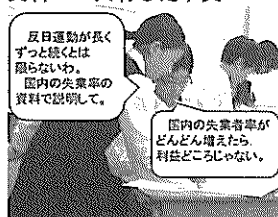
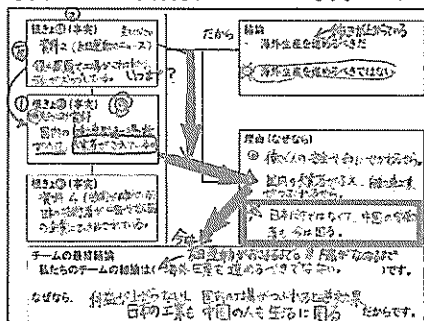


写真3 この資料使って！

写真4 チームで話し合おう。



B児 反日運動もいつ治まるかわからない。
A児 海外生産して利益があっても、国内の工場が減り失業率が上がれば意味ない。
C児 今は、国内が大事だよ。

資料7 話し合い後の判断根拠マップの結果とやりとり

A児 賛成チームと話し合っ、中国の労働者のことも考えることが大事だと思います。～中略～これからは、相手の国も国内のことも考えた工業が大事だと思います。

資料8 学習後のA児の感想

考察2

海外生産が増えてきた理由を多面的にとらえさせる上で、個別による追究の場と異質チームによる話し合いの場、及び判断する場の設定は有効であったと考える。それは、資料5に見られるように事実を付加し、コストや景気などの経済的側面を利益の向上と関係付け、海外生産の意味を判断する姿が見られたからである。

発展段階では、当事者の立場から、我が国の自動車工業は、海外生産を進めるべきか否かについて考えることを通して、これからの自動車工業のあり方を判断することをねらいとしている。そのためにまず、海外生産が我が国の経済や自分の生活に及ぼす影響調べさせた上で、これからの自動車工業生産のあり方を追究する目標を設定し追究活動を行わせた。まず、個の考えを立場が同じ同質チームで共有する活動、次いで、立場の異なる異質チームと交流し、考えを比較・関連付ける活動、さらに、同質チームで交流結果をまとめて、考えをとらえ直す活動を連続させる場を位置付けた。A児のチームは、海外生産を進めるべきではない根拠となる事実を出し合い、共有した(資料6)。その後、A児は共有した事実を根拠に他チームに考えを説明した(写真2)。しかし、反日運動の期間に関する質問を受け、返答に困った。そこで、チームの友達の手持ち資料の提供により、海外生産が進む中で、国内の工場数が減少し、それに伴って自動車関連の失業者が増えているという事実をとらえ、国内生産を充実させるという考えに着目した(写真3)。また、異質チームとの交流によってとらえた現地で働く中国人労働者の保障という視点と国内生産の充実の視点から考えを見直し、判断根拠マップを活用しながら「今の段階では」と条件を付与して最終的な判断を行うことができた(写真4、資料7)。

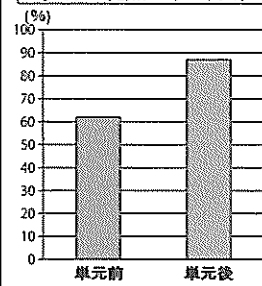
考察3

当事者の立場から、これからの自動車工業のあり方を判断させる上で、同質追究と異質追究を往復する活動を位置付けたことが有効であったと考える。それは、資料7のチームの最終結論に見られるように、「反日運動」や「円高の影響」を結論に付加した姿があったとともに、資料8から、立場の異なるチームの意見を受容し、これからの自動車工業の行方を共存・共栄の視点から判断している姿が読み取れるからである(社会的な判断力、行動力)。今後、豊かな学力を高めるために、手持ち資料を予め共有しておくことで、判断の根拠となる事実の妥当性を吟味することができると考える。

【全体考察】

考察3からわかるように、当事者の立場からこれからの自動車工業生産のあり方を多面的に判断する姿が見られた。また、資料9から、思考力・判断力・表現力を中心とした豊かな学力、行動力を中心とした人と働く力の高まりが見られた。これは、自分の生活にかかわり深い社会的事象を取り上げ、友達と考えを共有したり、比較・関連付けたりする「同質追究と異質追究を往復する活動構成」が有効に働き、社会の一員として意志決定する姿が育ったと言える。

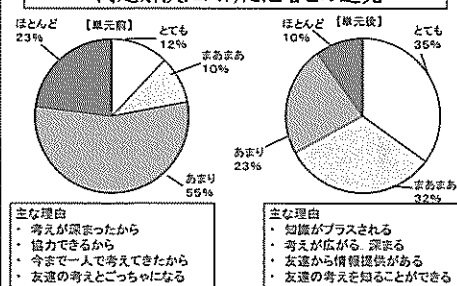
思考力・判断力・表現力 多様な視点からの判断



資料9 社会科における「開かれた個」の変容

人と働く力(行動力を中心に)N=39人

問題解決に向けた他者との追究



数理を合意形成する算数科学習

算数科部 森 将 和

1 算数科における「開かれた個」とは

現代の知識基盤社会における多種多様な知識の量の増加により、問題解決に必要な知識や技能をすべて一人では担うことができなくなっている。これからの教育においては、知識や技能を身に付けるための学習から、子どもが学習の主役となり、自ら考え、判断し、表現しながら友とともに学び合う学習へといった教育観の転換が求められている。集団において、相互理解を深め、共感しながら、人間関係やチームワークを形成し、正解のない課題や経験したことのない問題について、対話をして情報を共有し、自ら深く考え、相互に考えを伝え、深め合いつつ、合意形成・課題解決することが極めて重要だと考える。

そのような状況の中、算数科の学習においても、グループで協力して、一つの考えをつくり上げる学習が望まれている。算数科の改訂の基本方針に、「根拠を明らかにして筋道立てて体系的に考えることや、言葉や数、式、図、表、グラフなどの相互の関連を理解し、それらを適切に用いて問題を解決したり、自分の考えをわかりやすく説明したり、互いに自分の考えを表現し伝え合ったりすることなどの指導を充実する。」とあり、これは豊かな学力である数学的な思考力・表現力の育成を指していることがうかがえる。しかし、これまでの算数科学習においては、自力解決で言葉や数、式、図、表などを用いて、自分の考えを表現することを重視してきた反面、友達にわかりやすく説明したり、グループで考えを伝え合ったりすることは不十分であったと考える。そこで、これからの算数科学習は、これまでの自力解決だけでなく、友達に自分の考えを伝え、認め合う学習に重点をおいた学習が必要であり、これこそが算数科における人と働く力の中の調整力であると考えられる。

これらのことから、算数科における「開かれた個」とは、数学的な思考力・判断力・表現力を含めた「豊かな学力」と友達に自分の考えを伝え、認め合う「人と働く力（調整力）」を備えもった個であると考えられる。

2 主題の意味

数理とは、個の解決方法や結果を他に説明し、吟味することを通して、チーム全員が認めた解決方法や結果である。数理を合意形成するとは、問題事象に対して、チーム内で解決方法や解決した結果を出し合い、チームで解決方法、結果を吟味し合い、解決方法や結果をチーム内で共通認識することである。数理を合意形成する算数科学習とは、チーム内で問題事象に対して方法の見通しをもち、主体的に問題解決を行い、その解決方法、結果をチームで出し合い、共通点や差異点からの交流を行うことで、チームごとに問題事象に適した数理を見出す学習である。数理の合意形成を図る学習においては、自分の意見をわかりやすく伝え、「簡潔」「明瞭」「的確」などの観点から、考えをよりよいものに練り上げる調整力を駆使して、子どもたちがチームで一つの課題に対して、協力して数理をつくりあげる学習を目指していく。

○ 数理を合意形成する算数科学習で目指す姿

【豊かな学力】

- 数量や図形についての概念、性質などについて理解し、処理に関わる技能を身に付けることができる。（知識・技能）
- 自分の考えを絵、図、言葉、式などを使って整理したり、自分の考えを説明したりしながら考えと考えを比較、分類、関連付けを図ることができる。（思考力・判断力・表現力）
- 課題意識をもち、進んで数学的な事象についての問題を解決しようとすることができる。（関心・意欲・態度）

【人と働く力】

- ◎ 追究し合った内容や方法を出し合い、「簡潔」「明瞭」「的確」などの視点で吟味し合うことを通して、よりよい一つの解決方法を導くことができる。（調整力）

複数の解決方法や解がある問題を追究する学習過程

算数科部 森 将 和

3 副主題の説明

複数の解決方法や解がある問題とは、一つの問題に対して、既習の数学的な考え方や方法を用いれば、解決方法を複数導き出したり、オープンエンド的に解を複数見つけたりすることができる問題事象のことである。複数の解決方法や解がある問題を追究するとは、一つの問題事象を通して、導き出された多様な解決方法や解をペアやチーム、学級全体で相互に比較検討しながら、多様な考えを理解したり、多様な考えから導き出される知識を理解したり、考えと考えを関係付けたりすることである。複数の解決方法や解がある問題を追究する学習過程とは、提示した問題事象について、これまでの知識や技能と比較し、既習の数学的な見方や表現方法を活用して、複数の解決方法や解をつくり出したり、ペアやチームで新たな数理を導き出したりする過程のことである。このような学習過程を仕組むことは、算数科で目指す豊かな学力や人と働く力である「簡潔」「明瞭」「的確」などの視点で吟味し合うことを通して、よりよい一つの解決方法を導くことができる調整力を身に付ける上でも有効であると考えられる。そのためには、チームの活かし方や明確な目標設定、チームワーク、シンキングツールなどを取り入れた学習過程の工夫が必要である。

4 具体的な方途

(1) チームの活かし方

算数科学習では、チームでの共通の目標をもたせることを重視して、チームの活動を行う。また、個それぞれが獲得した数理を活用して、チームでの目標のもとにソロ→チームの活動を意欲的に行いながら、調整力を育てることも重視している。そこで、単元の展開段階や発展段階にチームを活かした活動を位置付ける。また算数科は、児童一人ひとりそれぞれが身に付けるべき学習内容が明確である。そのことを踏まえ、算数科でのチーム編制は、児童の既習のレディネスを十分に把握するとともに、人と働く力に関する自己評価、教師の評価をもとに編制する。

構成メンバー	次の3つの観点からクラスをA, B, C, Dの4つの群に分け、各グループに4つの群からそれぞれ1名ずつが入るメンバーとする。 ○その学習をするに当たって身に付けておかなければならない内容や方法の理解度を見るレディネステスト ○人と働く力における自己評価アンケート（質問項目10） ○教師による人と働く力における評価（評価項目10）※学習の様子や発言から
--------	--

(2) 学習過程の工夫

複数の解決方法や解がある問題を追究する学習過程においては、複数の解法や解を見つけることができる問題設定と、具体的な時間を設定することに重点を置く。この問題設定と時間設定を学習内容と子どもの実態から、達成が難しい設定にすることで、一人では難しいが、チームで協力すればできるという目標や「チームで○分」というゴールが明確な目標となる。明確な目標の設定やソロとチームの位置付け、シンキングツールの活用を表のように位置付ける。

学習過程	問題の把握	目標の共有	自力解決	チーム解決	解決の整理
学習形態	学級全体	チームⅠ	ソロ	チームⅡ	全体
学習活動	本時追究する問題を把握する。 ・今日はどんな問題かな。 ・前の時間とどこが違うかな。	①の活動をしたり、チームで話し合ったりして、本時の活動を見通す。 ・こうやればできそう。 ・きっとこの方法が一番簡単だ。	チームでの目標をもとに自己追究する。 ・ぼくはこの方法でやろう。 ・わたしは、この問題を解こう。	自力解決での追究方法を出し合い、グループで一つの考えにまとめる。 ・考えを出し合おう。 ・みんなの考えで同じところはどこだろう。 ・違うところはどこだろう。	全体で本時のまとめを行う。 ・グループの学習を通して新しく分かったことは～です。
手だての工夫	解決方法や解が多様にある事象の提示	チームで目標を設定することができるための問題設定や時間設定	多様な解決方法や表現方法を表すことができるための表現カード	チームで可視化、操作化できるボードを活用して、複数の追究結果を比較、検討し合う。	本時の学習のまとめとグループ交流の視点での自己評価を行わせる。

【表1 複数の解決方法や解がある問題を追究する学習過程】

第6学年 単元
立体の体積～チームで立体の
体積研究をしよう～

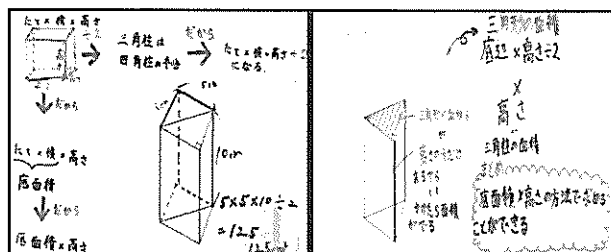
(1) 単元でめざす姿

- 角柱や円柱の体積は、「底面積×高さ」で一般化できることを理解することができる。(知識・技能)
- 直方体の体積を求める公式から類推して、角柱や円柱の体積を求める公式を導くことができる。(思・判・表)
- 角柱、円柱の体積の大きさに興味や関心をもち、意欲的に体積を求めることができる。(関・意・態)
- ◎ 考えを出し合ったり、一人ひとりの考えの共通点や差異点に着目したりして、チームの考えを分類・整理することができる。(調整力)

(2) 学習の流れと考察

導入段階：1～2/7時

チームで底面が直角三角形の三角柱の体積の求め方を調べる。



【倍積変形の考え】

【底面積×高さの考え】

資料1 2つの解決方法をまとめたチームの解決ボード



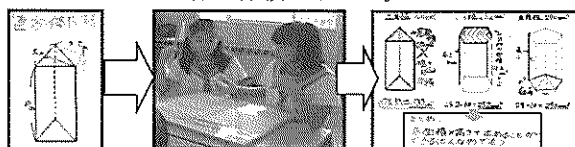
私たちのチームは、三角柱2つをくっつけて直方体にして求める方法と、底面積の高さ分で求める方法の2つの方法を見つけられました。

写真1 見つけた解決方法を発表し、交流し合おう。

展開段階：3～4/7時

チームで四角柱や五角柱、六角柱などの角柱や円柱などの立体の体積を求めるとともに、チームで角柱の体積の求め方の共通点について話し合う。

- (1) チームでいろいろな形の四角柱や五角柱、六角柱などの角柱の立体の体積を求める。



資料2 ソロ→チームの活動

- (2) チームでいろいろな形の円柱の立体の体積を求める。

発展段階：5～6/6時

チームで複数の複合立体の体積を求めたり、学習し

導入段階では、底面が直角三角形の三角柱の体積の求め方は、底面積×高さの考えと倍積変形の考えの2つの方法で求めることができることに気付かせることをねらいとしている。そのために、4人のチームをつくり、既習の立方体、直方体の体積の求め方をもとに、三角柱の体積を求める活動からチームで考えを出し合う活動を位置付けた。子どもたちは、自己追究して見つけた三角柱の体積の求め方をチームで出し合い、共通点や差異点から考えを分類し、資料1のように2つの考えをチームのボードにまとめた。写真1のようにチームの考えとしてチーム間交流で考えを発表した。

考察1

チームで自己追究した考えを出し合い、同じ考えと違う考えをチームで整理する子どもたちの姿【調整力】を見ることができた。これは、自己追究するソロ→チームで考えを出し合い、考えを共有するチームの活動を位置付けたことが有効であったと考える。また、チームで倍積変形の考えと底面積×高さの考えの2つの考えを導き出し、2つの違いをとらえることができた。【思考力・判断力・表現力】これは、資料1にあるようなチームで共有することができるボードの活用や追究結果を書き込むことができる図形カードの活用が有効に働いたためであると考えられる。

展開段階では、四角柱や五角柱、円柱などの立体の体積は、底面積×高さで一般化できることをとらえさせることをねらいとしている。そのために、導入段階と同じ4人のチームで、四角柱、五角柱、六角柱などの体積を自己追究で求める活動からチームで考えを出し合う活動を位置付けた。子どもたちは、写真2のように意欲的に体積の求め方を自己追究した。そして、自己追究して見つけた角柱や円柱の体積の求め方をチームで出し合い、共通点や差異点から考えを分類し、資料2のように求め方をチームのボードにまとめた。

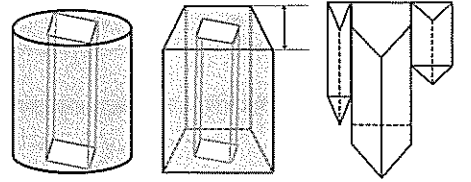
考察2

導入段階と同様、チームで自己追究した考えを出し合い、同じ考えと違う考えをチームで整理する子どもたちの姿を見ることができた。これは、導入段階と同じ、自己追究するソロ→チームで考えを出し合い、考えを共有するチームの活動を位置付けたことが有効であったと考える。

発展段階では、複合立体の形に応じて「分割」「補完」「移動」の3つの方法を使い分けると早く簡単に求積することができることをとらえさせることやチーム内で、一人ひとりの

たことを活かして体積の学習を研究ノートにまとめた
りする。

- (1) 複数の複合立体の中で、分割、補完、移動の3つ
の視点から簡単に求められる立体を調べる。

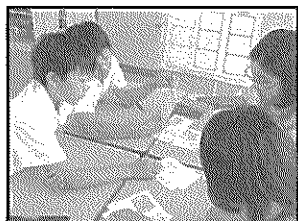


資料3 提示した複合立体図形9種類の中の3種類

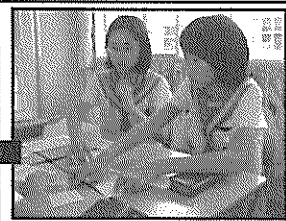
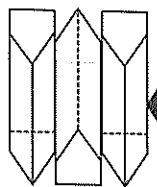
チームの目標

- ・「分割」「補完」「移動」
のどれが簡単か調べる。
- ・合計10000cm³になる組
み合わせを調べる
- ・20分で解決する。

考えの共通点や差異点に着目して分類・整理したりして、チ
ームとしての結論を導くことができることをねらいとしてい
る。そのために、チームで9種類の立体図形を求積し、20分
で解決して、「分割」「補完」「移動」の複数の解決方法の中
からそれぞれの立体図形に適した解法を見
つけ、合計で10000cm³になる組み合わせを見つ
ける課題を提示した。(目標の設定) また、
導入、展開段階と同様、チームとソロの活
動の位置付けやチームで共有することがで
きるボード、追究結果を書き込むことがで
きる図形カードの活用を行った。(シンキン
グツール) 子どもたちは、資料4のように、



- C1: この図形は、分けて考える方法が簡単だと
思うけど、どう思う。
C2: 分けて考える方法でもできるけど、この図
形は、3つの五角柱の底面の形が同じなので
移動して3つの図形を縦に並べて、計算する
と早く求めることができるんじゃないかな。
C3: そうだね。移動する方法が簡単そうだね。やってみよう。

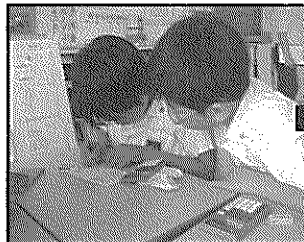


調整力

※ 調整力

豊かな学力

資料4 チームIでの子どもたちの発言の様子【人と働く力→調整力】



- C4: この図形は、このように太きな
円柱から中の四角柱を後から引
く方法が使えらと思うけど、ど
うかな。
C5: そうだね。この方法を使うと、
これまで学習した方法が使えて、
簡単に求めることができるね。



調整力
豊かな学力

チームワークIで、9種類の
立体図形を「分割」「補完」「移
動」の3つの考えのどの方法
を使えば、効率よく求めるこ
とができそうか話し合った。
また、資料6のようにチーム
で出し合った考えをボードに
整理したり計算方法が正しい
か確かめ合ったりした。

考察3

資料4のように意欲的に話
し合う姿を見ることができた。
これは、提示した課題がチ
ームの適度な困難のある目標と
して有効であったからである。

資料5 ソロでの子どもたちのアドバイスの様子

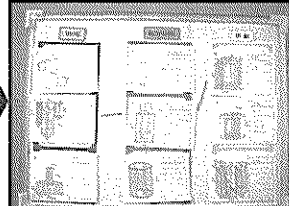
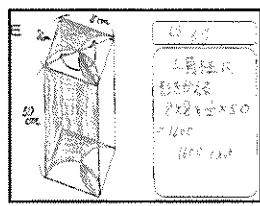


- C6: あれ、どの組み合わせも10000cm³
にならないよ。
C7: 計算ミスをしているかもしれ
ないからみんなで計算し直そう。
C8: 私はこの図形を調べてみるね。
C9: この図形の計算が違っていいよ。



調整力

資料6 ボードを使って、考えを整理し、まとめよう。



資料7 追究した図形カードとチームで整理したボード

- (2) チームで、学習を整理した研究ノートを作成する。

また、資料5には最適な求積方法をとらえる姿【豊かな学力】
(思考力・判断力)が見られた。これは、チームで目標を共
有するチームI→自己追究するソロの活動を位置付けたこと
が有効であったと考える。資料6にあるようにチームでの話
し合いで目標を達成している姿【調整力】も見ることができ
た。これは、資料7にあるチームで追究結果や追究方法を共
有することができるボードの活用や追究結果を書き込むこ
とができる図形カードの活用が有効に働いたためである。

【全体考察】

考察1, 2からわかるようにチームで自己追究した考えを出し合い、同じ考えと
違う考えをチームで整理する子どもたちの姿【調整力】を見ることができた。また、
考察3からは追究する図形の形と追究方法の関係についてチームで関係付ける姿【調
整力】も見られた。「友達と考えを交流し合って、よりよい考えにまとめることが
できますか。」というアンケートの結果を単元前後で比較すると、学級全体として資料
8からわかるように調整力の高まりが見られた。また、学習後の学力の高まりについて
は、資料8 単元前後によるアンケート結果
資料8のように立体の形に応じて、最適な方法を選んで、求積することができている姿に表れている。これらのことから、
複数の解決方法や解がある問題提示の設定が有効に働き、豊かな学力と人と働く力である調整力が育ったと言える。

友達と考えを交流し合って、
よりよい考えにまとめることができますか。

単元後	よくできる 36	できる 54	あまり できない 8
単元前	よくできる 26	できる 59	あまり できない 15

資料8 単元前後によるアンケート結果

数理をつくり合う算数科学習

算数科部 二 串 英 一

1 算数科における「開かれた個」とは

グローバル化が進むこれからの知識基盤社会を主体的に生きることが、自分とは異なる価値観、文化などをもつ立場の人と互いの知恵を出し合って新しい文化や価値をつくることである。そのために必要な資質は、自他の考えに折り合いを付けて互いの考えをよりよくしようとする態度と、互いの考えの折り合わせ方である。つまり、これから出会う、正解がなかったり経験したことがなかったりする課題に対して、自らがもつ見方や考え、知識、技能から解決に使えるものを選んだり組み合わせたりして考えをつくり、それを出し合って新しい知恵や価値を生み出していく力が必要である。

これまでの算数科学習を振り返ると、個に焦点を当てて個自らが数理をつくり出す過程を重視してきた。この過程では、個の考えを全体の中で考えの一般化に向けて練り上げてきたが、その場に所属する個全員が納得して自らの考えを練り上げて数理をつくり上げていたかどうかは疑問が残る。

そこで、集団を形成する個全員が納得して自らの考えを練り上げて数理をつくり上げていくこと、そのことを自覚する学習が、これからの算数科教育において求められる。そのためには、自らの考えを他者に積極的に発信し、考えの立ち位置を明らかにすること、自らの考えを誰もが納得するものにすることが必要である。これらのことから、算数科における「開かれた個」とは、他者と考えを交わし合うために意欲的に既習の数理を活用する個である（豊かな学力）。また、自分と他者の考えの共通点や差異点を的確にとらえて考えを強化・修正し、よりよいものにつくりあげる個（人と働く力）である。



【図1 算数科学習における「開かれた個」】

2 主題の意味

数理とは、他者と共有した解決方法と内容である。数理をつくり合うとは、個の解決方法と内容を、算数のよさ（簡潔・明瞭・的確など）や解決の目的を観点として意欲的に話し合い、誰もが納得するもの、他の場面でも使用可能なものとして他者と共有化することである。数理をつくり合う過程において頻繁に自他の考えの比較が行われることで、互いに筋道を立て合いながら数理が練り上げられていく。また、数理は獲得場面だけでなく、適用・活用場面においても合意形成される。それは、数理の適用・活用の仕方について共有化するということである。数理をつくり合う算数科学習とは、①課題を共有すること、②課題の解決のために考えを比較する観点が定まっていること、③問題解決に貢献したことを実感することの3つの条件を満たす学習のことである。そのためには、解決意欲を強くもつ問題事象の設定と、自分の考えを明確にして他者と考えを練り上げる場の設定が必要である。

○ 数理をつくり合う算数科学習で目指す姿

【豊かな学力】

- 自分も他者も納得する考えや考え方を身に付けて、場面に応じて発揮することができる。
(知識・技能)
- 知識や技能、数学的な見方・考え方を結び付けて考えをつくったり、他者にわかりやすく説明したり、他者の考えを解釈したりすることができる。
(思考力・判断力・表現力)
- 解決すべきことをとらえ、もっている知識や技能、数学的な見方・考え方を使って意欲的に解決しようとするすることができる。
(関心・意欲・態度)

【人と働く力】

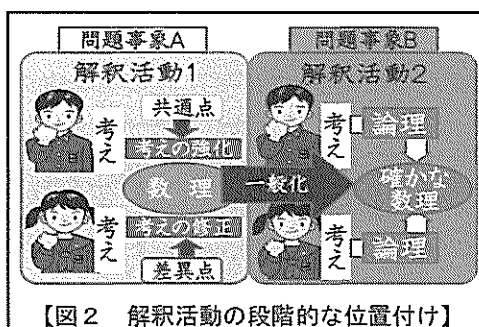
- ◎ 自分と他者の考えの共通点や差異点を的確にとらえて互いの考えを強化・修正したり、折り合いを付けたりすることができる。
(調整力)

解釈活動を段階的に位置付けた学習過程

算数科部 二 串 英 一

3 副主題の説明

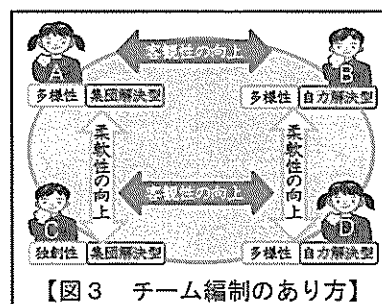
解釈活動とは、チームのメンバーそれぞれの考えの共通点や差異点を見出し、共通点についてはそれぞれの考えを強化すること、差異点についてはそれぞれの考えを修正したり補ったりして、数理につくり上げることである。解釈活動を段階的に位置付けた学習過程とは、まずは問題事象Aにおいて各々の考えを比較して共通点や差異点を見出して考えを強化・修正・補填して数理につくり上げることが目的とした解釈活動①を設定し、その後、追加の問題事象Bにおいて「一般化」の観点でチーム内で確かな数理につくり上げることが目的とした解釈活動②を設定する学習のことである。このような学習過程を成立させるためには、チームの活かし方、チームのメンバーが意欲的に解決を図る目標設定、目標達成に向けたチームの活動、チームで共有するシンキングツールを取り入れることが必要である。



4 具体的な方途

(1) チームの活かし方

算数科では、ソロとチームが往復する学習が求められる。それは、ソロは一人一人が考えをつくりたり確かめたりすることが目的であり、チームは共通の目標達成に向かってつくった考えを出し合ってよりよいものにつくり上げることが目的であるからである。チームによる学習を続けることでチームは成長し、このことが一人一人の数理の確かな獲得・活用につながる。また、算数科は系統性の強い教科である。そのため、既習の数理が単元当初から活用できる内容については、単元を通してチームを編制して学習を進めることで、これまでの学習よりも一人一人に確かな数理の獲得・活用を望むことができ、チーム内で自分の考えを十分に発揮することが期待できる。本研究では、思考面からみた思考の多様性と独創性、解決の仕方からみた集団解決型と自力解決型の2つの側面からそれぞれ2名ずつの計4人でチームを編制する。



(2) 学習過程の工夫

解釈活動を段階的に位置付けた一単位時間の学習過程は、右表の通りである。それぞれの段階において、明確な目標設定、ソロとチームの位置付け、シンキングツールの活用が主な手だてとなる。明確な目標設定においては、最適な解決方法を見出すことを目標に位置付ける。ソロとチームの位置付けにおいては、導入段階ではチームで目標を共有し、目標達成に基づいてメンバーの役割を分担する。展開段階では、ソロで考えをつくり出した後、チームで考えを整理する。発展段階では、追加問題事象においてチームで考えをより確かなものにする。シンキングツールについては、チームで考えを分類・整理するチーム思考マトリックスを用いる。

【表 解釈活動を段階的に位置付けた学習過程】

段階	導入	展開	発展
学習活動	チーム 試しの活動 ↓ 目標の共有 ↓ 役割分担	ソロ ↓ チーム シンキングツール ↓ 数理の共有①	チーム シンキングツール ↓ 考えを確かにする ↓ 数理の共有②
手だて	※ 一人では解決できない問題事象の提示	※ 最適な考えをつくり出すシンキングツールの活用	※ より最適な考えをつくり出す問題事象の提示

(1) 単元でめざす姿

第5学年 単元

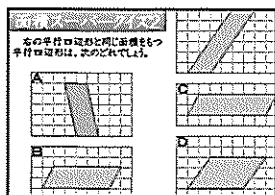
チームで解こう！
面積スーパークイズ
～図形の面積～

- 自他共に納得する求積方法を獲得し、場面に応じて発揮することができる。(知識・技能)
- 底辺や高さなどの構成要素や関係、図形の操作に着目して、クイズを解くことができる。(思・判・表)
- 意欲的に既習の求積方法を用いることができる。(関・意・態)
- ◎ 自他の考えを比較し、そのよさを認めつつ、最適な考えを見出すことができる。(調整力)

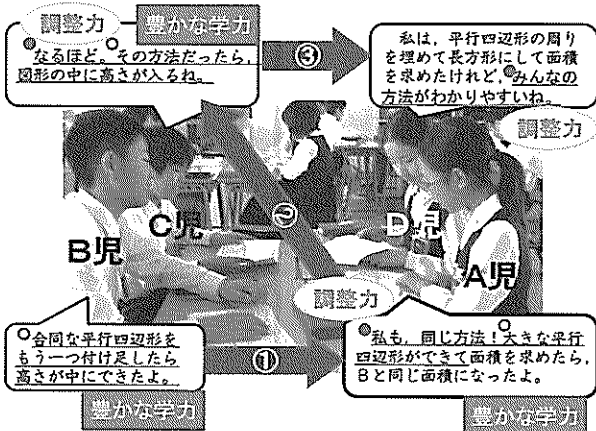
(2) 学習の流れと考察

導入段階：1～3/10時

平行四辺形の面積に関するクイズを解き合い、面積の求め方を公式に表す。



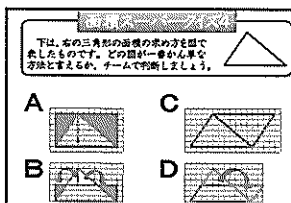
- (1) 高さが図形の中に位置付くクイズを解く。
- (2) 高さが図形の外に位置付くクイズを解く。



資料1 合同な図形を付け足す方法のよさに気付く話し合い

展開段階：4～6/10時

三角形の面積に関するクイズを解き合い、面積の求め方を公式に表す。



- (1) 高さが図形の中に位置付くクイズを解く。



資料2 Bが簡単だと提案するA児

	A児	B児	C児	D児
A	△	△	△	△
B	△	△	△	△
C	△	△	△	△
D	△	△	△	△

資料3 Bのよさを整理する話し合い

資料5 チーム思考マトリックスの変容

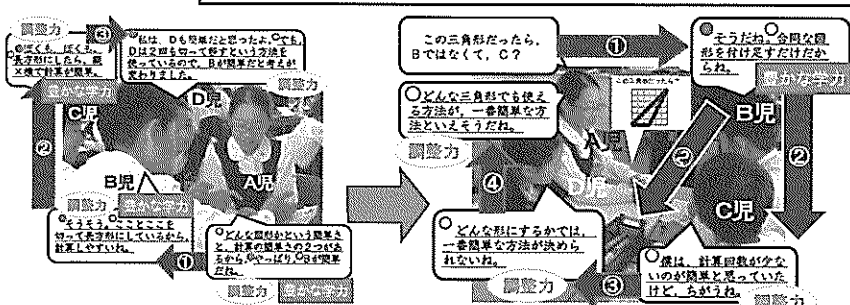
資料4 Cのよさに気付く話し合い

導入段階では、平行四辺形の面積の求め方をチームで考え、求積方法には数種類の等積変形があることを理解し、図形に応じて使いやすい方法を用いることをねらいとしている。そのために、同じ面積をもつ図形や一番最適な方法を見つけるクイズを設定した。子どもたちは、図形の外に高さが位置付く平行四辺形であっても、高さを図形の中に位置付けるために等積変形を使って長方形に変えたり、合同な図形をもう一つ付け加えて2倍の大きさの平行四辺形にしたりして、同じ面積をもつ2つの平行四辺形を見つけた。

考察1

自他の考えの共通点を見出し、納得して自分の考えを強化させる上で、同じ面積をもつ図形を見つさせたことが有効であったと考える。これは、他者とのズレ、既習とのズレの同化・調節をねらった問題設定が有効に働いたからである。資料1にある○及び●に見られるように、A児のチームではB児の発言を皮切りに、B児→A児→C児と自分と友だちの考えの共通点を強化する形で発言をつないでいる姿、自分の考えとは違うものの、A児、B児、C児の考えを聞いてそのよさをとらえる姿、前に発言した友だちの考えに同意して自分の考えを述べる姿が見られた(調整力)。

展開段階では、三角形の面積の求め方をチームで考え、求積方法には数種類の等積変形や倍積変形があることを理解し、図形に応じて使いやすい方法を用いることをねらいとしている。そのために、導入段階と同様のクイズ内容を設定した。子どもたちは、まず、変形の容易さや計算回数(式の数)を観点として一番簡単な方法を判断した。しかし、高さが外に位置付く三角形にも使える方法は、合同な図形を付け足す方法であることに気が付き、どのような三角形でも使える方法が一番簡単な方法であると判断した。



どの図形も、これまで習ったことのある長方形や平行四辺形
 になおして計算することができる。

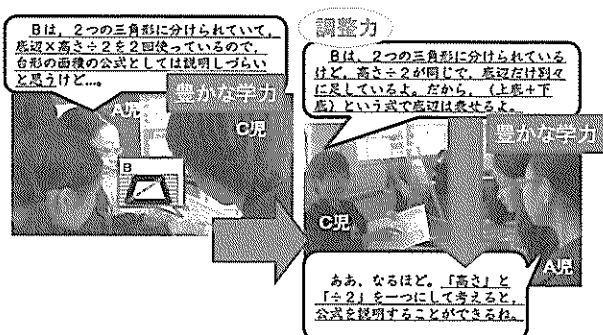
・高さが図形の中にある三角形も、合同な図形をつけたして
 $\div 2$ をする方法は高さが図形の中にできるのが便利だし、かんたん。

資料6 A児の学習後の感想

(2) 高さが図形の外に位置付くクイズを解く。

発展段階：7～10/10時

台形・ひし形・多角形の面積に関するクイズを解き、台形・ひし形の面積の求め方を公式に表し、多角形の面積の求め方を一般化する。



資料7 チーム思考マトリックスを用いたチームの活動②

チーム思考マトリックス	A児	B児	C児	D児
A	△	△		△
B	△	△	△	△
C	△	△	△	△
D	△	△	△	△

資料8 チーム思考マトリックスの変容

考えが違ったら、「なぜ？」と思って話し合うのが楽しかったです。考えが違っていても友だちの考えをよく聞くと、自分とは考えの使い方が違うところがよくわかりました。そこに納得することがあったので、自分の考えを変えることができました。(A児)

私は、今まで友達と考えが違うと、「え、どうしよう。」と不安になっていました。でも、チームのみんなと考えを出し合うことで、同じところが見つかることと安心することができるようになりました。友達に考えに納得することが多くて、「あ、そんなふうに考えたらよくわかる」と思いました。(D児)

資料9 A児及びD児の単元後の感想

考察2

導入段階同様、自他の考えの共通点を見出し、納得して自分の考えを強化させる上で、複数の方法から題意に適したものをを見つける問題設定が有効であったと考える。これは、チーム活動①において解の見通しを共有する場を設定したこと、ソロ活動において一人一人が全ての解決方法を経験したことが有効に働いたからである。資料2及び3の●に見られるように、一人の発言を皮切りに他者の考えに同意して自分の考えを述べる姿が見られた(調整力)。また、獲得した数理を一般化させる上で、始めの問題で獲得した数理が使えない問題設定が有効であったと考える。これは、教材のズレの同化・調節をねらいとした追加事象の設定と、チーム思考マトリックスを用いた考えの分類・整理が有効に働いたからである(資料5)。資料2, 3の○及び4に見られるように、公式の使いやすさと計算回数を観点に、一番簡単な方法を判断する姿(豊かな学力)と、資料4の○及び6に見られるように、一番簡単な方法の判断基準をどのような図形にも使えるという観点に変える姿が見られた(調整力)。

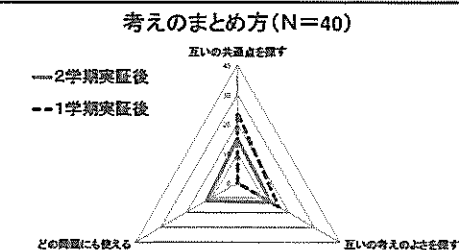
発展段階では、台形やひし形、多角形などの求め方のうち、公式を説明するのに最適な方法を見つけることをねらいとしている。そのために、求積公式を先に提示して、図形と式を結び付けるクイズを設定した。子どもたちは、台形において「(上底+下底)」「高さ」「 $\div 2$ 」の3つを観点として、次の2つの方法が公式を説明するのに最適な方法と判断した。一つは、合同な台形をもう一つ付け足して平行四辺形をつくる方法、もう一つは、高さが半分になる直線で分割し、分割した上の部分を移動させて平行四辺形をつくる方法である。

考察3

自他の考えの差異点を見出し、納得して自分の考えを修正する上で、複数の方法から題意に適したものをを見つける問題設定が有効であったと考える。これは、チーム思考マトリックスを用いて結果を整理し、差異点についてその理由を話し合うチーム活動②が有効に働いたからである。資料7及び8に見られるように、同じ対象を分担したA児とC児が、互いの考えの違いに気付き、「高さ」と「 $\div 2$ 」を合わせるところに納得している姿が見られた(調整力)。また、チームで学習する価値を感じさせる上で、単元を通して他者、既習、教材の3つのズレの同化・調節をねらいとした問題設定が有効であったと考える。これは、思考面と解決の仕方によるチーム編制が有効に働いたからである。資料9に見られるように、考えを比べる楽しさや安心感を感じる姿、考えを整理することをとらえた姿も見られた。

【全体考察】

考察2からは考えのよさや自他の考えの共通点から、考察3からは考えが違うときにはお互いが納得する部分から、チームで最適な考えを見つける姿が見られた(豊かな学力【思考・判断・表現】、人と働く力【調整力】)。これは、考えの共通点や差異点に着目して数理を獲得する解釈活動①と、獲得した数理を揺さぶって一般化する解釈活動②を位置付けた「解釈活動を段階的に位置付けた学習過程」が有効であったからと考える。資料10からは、考えを整理するときに折り合いを付ける方法のよさを感じ始めている姿が見てとれる。これらのことから、「豊かな学力」と「調整力」が育ったと言える。



資料10 考えのまとめ方の類型

考えを数理に高め合う算数科学習

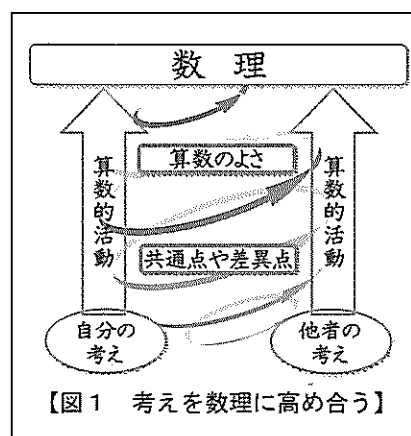
算数科部 伯 川 康 洋

1 算数科における「開かれた個」とは

自分で設定した問題を解決するために、多様な考えを認め合いながら価値ある数理に高めて、みんなで納得して活用できるように活動する個人である。21 世紀は、新しい知識・情報・技術が社会のあらゆる領域での活動の基盤として重要性を増す知識基盤社会と言われている。知識基盤社会化やグローバル化は、国際競争を加速させる一方、異なる文化や文明との共存や国際協力の必要性を増大させている。このような社会においては、自分とは異なる考えを認めたり自分の考えを主張したりしながらよりよいものを創造していくことが大切になる。算数科では、これまでも考えを表現することを重視してきた。しかし、子どもにとっては目の前の問題を解決することや答えを求めることが目的になっていて、表現が自己完結に終始する傾向が見られた。自分だけがわかる独りよがりの表現や記述でよしとされ、理解は浅いものでしかなかった。意味の理解が不十分で、数学的な問題をよみ取ったり既習を柔軟に活用したりする力は不十分だった。これからは、相手に考えをわかってもらえるように多様な表現を用いて説明したり友達の考えを納得しながら聴いたりできる力を身に付けることが大切となる。自分の考えを一方的に説明するだけでなく、友達の考えを認めたり友達の理解を助けるように説明したりすることで、より深く理解することができる。算数が得意な子どもも苦手な子どもも納得できる数理へと考えを高めていくことが大切なのである。そのためには、相手や目的に応じて、考えを認め合い、よりよい考えにしようとは他者とかがかわることが必要である。算数科では、問題解決の過程を通して、表現しながら考え、友達の考えを認めながら数理に高め合う学習が望まれている。

2 主題の意味

考えとは、数学的な問題解決の過程においてつくられる個人の解決方法や着眼点、その根拠などである。これらは、既習や生活経験と結び付いて、問題解決に活かされているものである。問題を解決できる方法だけではなく、不十分な方法も認められるようにしなければならない。数理とは、数学的な概念及び原理、法則のことである。これらは、抽象化され、一般化されている。子どもにとって、それらは教え込まれるものではなく、算数的活動によってつくられた考えをよりよくしたものである。考えを数理に高め合うとは、問題解決の過程でつくられた個人の考えを他者と比べることで、考えの共通点や差異点を認め合うとともに、いつでも活用できる数学的なよさ（一般性）を感じ、納得できるよりよい考えとして強化することである（図1）。



【図1 考えを数理に高め合う】

○ 考えを数理に高め合う算数科学習で目指す姿

【豊かな学力】

- 数学的な問題を解決するための方法や内容を既習と関連付けて想起したり、実際に解決したりして新たな方法や内容を身に付けることができる。（知識・技能）
- 目的に応じて、具体物を操作したり絵図や式、言葉に表したりして、既習をもとに多様な問題を解決できる一般性の高い考えをつくることことができる。（思考力・判断力・表現力）
- 数学的な事象に進んでかかわり、数学的な要素や問題を見つけて、問題を解決しようとするところことができる。（関心・意欲・態度）

【人と働く力】

- ◎ 問題解決のためにつくられた考えを他者と比べて、その共通点や差異点に気づき、算数のよさ（一般性）を観点にしてよりよい考えに整理することができる。（調整力）

つくりかえる活動から解釈し合う活動へとつなぐ学習過程

算数科部 伯 川 康 洋

3 副主題の説明

つくりかえる活動とは、与えられた問題（原問題）を自分で解決できるように、問題の要素に着目し、それらを変えながら複数の問題をつくる活動である。解釈し合う活動とは、自他の考えの過程や根拠を説明し合い、妥当性や一般性など算数のよさの観点から吟味し合う活動である。つくりかえる活動から解釈し合う活動へとつなぐ学習過程とは、原問題を多様につくりかえて学習の目標を共有化する場面、つくりかえた複数の問題をチームで分担して追究し、自他の考えを吟味し合う解決の場面、考えを強化する達成の場面を、一単位時間に位置付けることである。そして、問題を解決した考えを他の問題でも活用できる一般性の高い数理として獲得させるようにする。これまでの算数科の学習では、与えられた問題を解決させ、数理を獲得させる指導を行ってきた。これでは受け身の学習となり、練習問題でしか一般化が図られなかった。意味理解が不十分な子どもは、形式的な処理だけを獲得しかねない。もっといつでも活用できる一般性を意識した算数の学習が展開される必要がある。そこで、場面や数値などを柔軟につくりかえた問題を解決させることで、どれも解決できる考えを求めたいという目標を設定させ、主体的な活動を期待することができる。原問題が複数の問題となるため、その対象を分担する必要性が生まれる。解決の対象や方法を比べ、考えの妥当性や一般性を話し合うことで、考えを数理に高めていく。そのとき、考えを可視化し比べるシンキングツールが必要となる。

4 具体的な方途

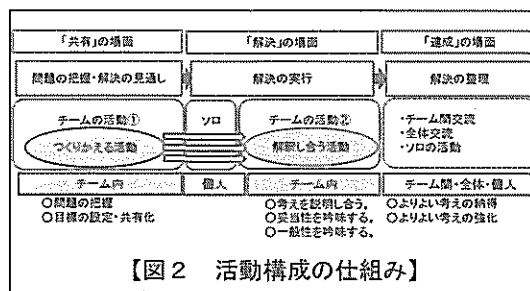
(1) チームの活かし方

一単位時間においては、目標を共有化する「チームの活動」→分担して追究する「ソロ（個人）の活動」→算数のよさから話し合う「チームの活動」を連続させることにより、個人が他者とかかわりながら問題を把握し、解決し、整理することができる。さらに、チーム間や全体での交流を仕組むことで、よりよい考えを数理として強化したり一般化したりすることができる。単元を通してチームを編制したり個人の問題解決をチームに活かしたりするなど内容や活動に応じた工夫が考えられる。

(2) 学習過程の工夫

○ チームで要素をつくりかえる活動と考えを解釈し合う活動を位置付けた活動構成

「共有」の場面において、与えられた問題の条件を整理して問題をつくりかえるチームの活動①を位置付ける。このことによって、問題を複数にして、問題の構造をとらえることができる。また、「解決」の場面においては、個人（ソロ）の活動のあとに、友達のことを解釈し合うチームの活動②を位置付ける。このことにより、目標を確かめ、解決が正しかったのか、不十分さはないのかを互いに確かめ合うことができる。さらに、チーム間や全体交流によってよりよい考えを強化して、数理に高め合うことができる（図2）。



○ 数学的な要素の関係を妥当性・一般性から吟味するチーム活動表（シンキングツール）

チームの活動②において、自分や友達の考えを共有するために、その過程や根拠を説明し合い、妥当性や一般性の観点から吟味するチームの活動や考えをチーム活動表にまとめるようにする。チーム活動表には、次の3つの価値がある。一人一人の考えを可視化できること、複数の考えを共通点や差異点に着目させながら妥当性の観点から吟味できること、複数の考えをまとめて比較して一般性に気付くことができることである。このチーム活動表を用いることにより、考えを数理に高め合うことができる（図3）。

チーム活動表			
分担	問題	考え方	OK
見つけたきまりは、			

【図3 シンキングツール】

(1) 単元でめざす姿

第4学年 単元

いろいろな分数を チームでつくり、 きまりを見つけよう

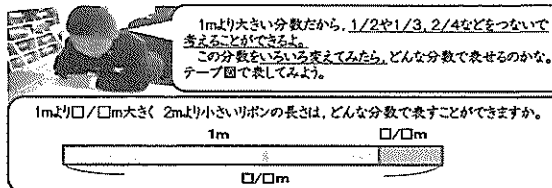
- 1より大きい分数の表し方や加法・減法の仕方を進んで調べることができる。 (関・意・態)
- 1より大きい分数の表し方や計算の意味を理解することができる。 (知識・技能)
- 単位分数のいくつ分に着目していろいろな分数の表し方や大きさ、計算の仕方を表現することができる。 (思・判・表)
- ◎ 自分や友達が調べた分数について共通点や差異点を話し合い、表し方や計算のきまりを見つけることができる。 (調整力)

(2) 学習の流れと考察

導入段階：1～2／9時

1より大きい分数の大きさを、単位分数カードとテープ図を使ってつくり、その表し方を調べるとともに、仮分数や真分数、帯分数について知る。

- (1) 1より大きい分数の表し方を調べる。
- (2) 仮分数を整数と真分数で表す方法を調べる。

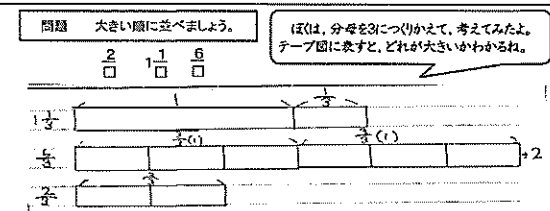


資料1 分数の大きさをつくる単位分数カード

展開段階：3～4／9時

分数の相等関係や大小関係について、いろいろな大きさの分数をつくりながら、単位分数カードとテープ図を用いて比べる。

- (1) 整数と同値の仮分数の関係を調べる。
- (2) 分数の相等関係や大小関係を調べる。



資料2 つくりかえた分数の大きさを説明するテープ図

発展段階：5～9／9時

分数のたし算とひき算の計算の仕方について、いろいろな分数の計算をつくりながら、単位分数カードとテープ図を用いて調べる。

- (1) (真分数) + (真分数) の計算の仕方を調べる。
- (2) (仮分数) - (真分数) の計算の仕方を調べる。
- (3) (帯分数) - (真分数) や (整数) - (真分数) の計算の仕方を調べる。
- (4) 帯分数同士のたし算やひき算の仕方を調べる。

導入段階では、1より大きい分数の表し方を、既習の分数の表し方と関連付けて理解させることをねらいとしている。1よりも大きい分数をいろいろつくり、テープ図で表す活動を位置付けた。子どもたちは、分数が1を等分した単位分数がいくつあるかを表しているという既習を活かして分数の表し方を考えた。単位分数カードを使って分数の大きさをつくり、その表し方を考え、確かめた。

考察1

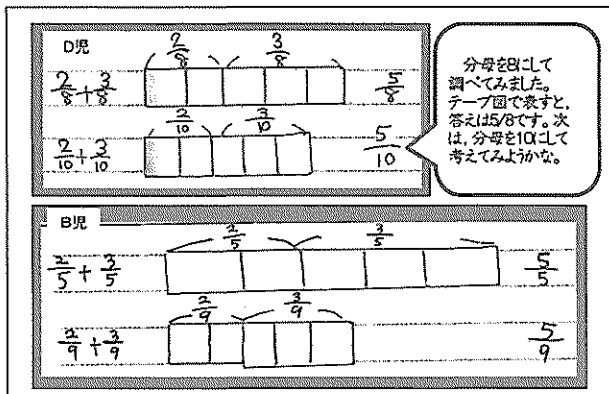
1より大きい分数の大きさについての表し方を理解させる上で、いろいろな分数の大きさをテープ図に表しながら追究させたことが有効であった。これは、資料1の下線部のように、問題を自分でつくりかえて1と1/2や1/3といった既習の真分数をつなげた大きさを表すという具体的な目標設定が有効に働いていたからである。

展開段階では、分数の相等関係や大小関係を理解させることをねらいとしている。そのために、□を用いて分母の数値を自由に変えられる原問題を提示し、いろいろな大きさの分数を追究させた。子どもたちは、自分が分担した分数の大きさをテープ図に表しながら比べ、それをチームで説明し合い、納得していた。ソロの活動をチームで話し合い、「分数の大きさは分子を比べればよい」という数理に高め合った。

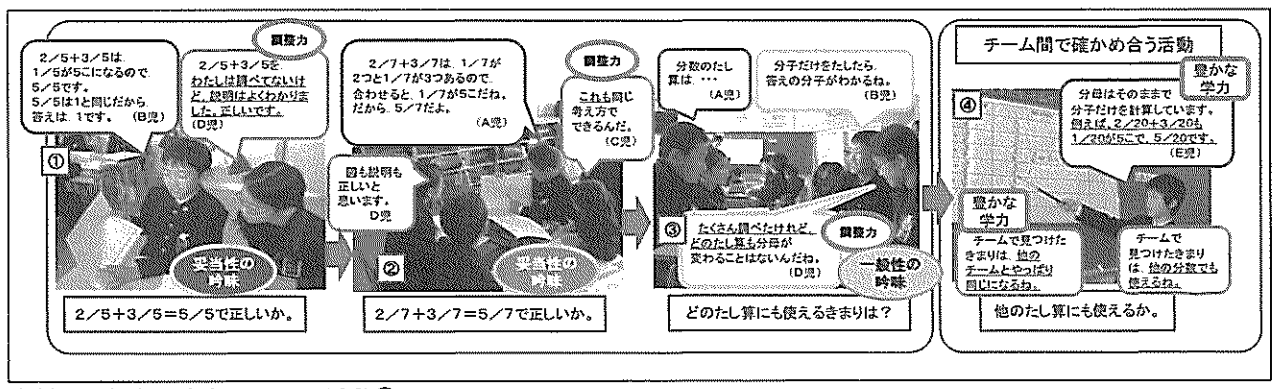
考察2

分数の大きさの相等・大小関係を理解させる上で、いろいろな分数の大きさをテープ図で表して、チームで説明し合ったことが有効であった。資料2のように、自分が追究した分数の大きさ比べをチームの友達にわかりやすく説明し、納得し合うことができた。いろいろな分数の大きさをテープ図で具体的に表したことが大小判断の根拠になったからである。

発展段階では、分数のたし算とひき算の計算の仕方の理解をねらいとしている。第5時、真分数同士のたし算の学習において、共有の場面では、 $2/\square + 3/\square$ となる原問題を提示し、□に数をあてはめて分数のたし算の要素をつくりかえるチームの活動①を位置付けた。子どもたちは、 $2/8 + 3/8$ や $2/10 + 3/10$ 、 $2/5 + 3/5$ など分母の数値を変えてたくさんの分数のたし算をつくり出した。次に、それをチームで話し合い、追究する対象を分担した。解決の場面では、たし算の仕方をテープ図で表現するソロの活動と解釈し合うチームの活動②を位置付けた。子どもたちは、数値が違いたし算を一人一人が分担してテープ図に表しながら追究していた。テープ図に分数の大きさを表して、単位分数のいくつ分を確かめて、分



資料3 つくりかえた分数のたし算を追跡するソロの活動



資料4 解釈し合うチームの活動②

チーム活動表			
分組	つくりかえた分数のたし算	考え方と答え	OK
A児	$\frac{2}{4} + \frac{3}{4}$	$\frac{2}{4} + \frac{3}{4} = \frac{5}{4}$ $\frac{1}{4}$ が5に1つ	OK
B児	$\frac{2}{5} + \frac{3}{5}$	$\frac{2}{5} + \frac{3}{5} = \frac{5}{5} = 1$ $\frac{1}{5}$ が5に1つ	OK
C児	$\frac{2}{6} + \frac{3}{6}$	$\frac{2}{6} + \frac{3}{6} = \frac{5}{6}$ $\frac{1}{6}$ が5に1つ	OK
D児	$\frac{2}{8} + \frac{3}{8}$	$\frac{2}{8} + \frac{3}{8} = \frac{5}{8}$ $\frac{1}{8}$ が5に1つ	OK
C児	$\frac{2}{3} + \frac{3}{3}$	$\frac{2}{3} + \frac{3}{3} = \frac{5}{3}$ $\frac{1}{3}$ が5に1つ	OK
A児	$\frac{2}{7} + \frac{3}{7}$	$\frac{2}{7} + \frac{3}{7} = \frac{5}{7}$ $\frac{1}{7}$ が5に1つ	OK
B児	$\frac{2}{9} + \frac{3}{9}$	$\frac{2}{9} + \frac{3}{9} = \frac{5}{9}$ $\frac{1}{9}$ が5に1つ	OK
D児	$\frac{2}{10} + \frac{3}{10}$	$\frac{2}{10} + \frac{3}{10} = \frac{5}{10}$ $\frac{1}{10}$ が5に1つ	OK

計算の仕方のきまりは、
分母が同じ場合は、分子だけをたしたら、答えの分子が出る。

資料5 妥当性と共通性から考えを整理するチーム活動表

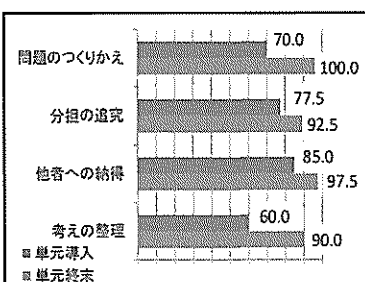
数のたし算の仕方を考えていた。そして、シンキングツールであるチーム活動表に、追究の結果を書き込み、それが正しいことを説明し合った。全員が納得できれば、OKを書いて、友達の考えを確かめていた。一般性からの吟味の場面では、いくつかの計算の仕方から「分子だけを計算する」というきまりを話し合ってみつけた。追究したことをもとに、他のたし算にも使えるよりよい考えに高め合った。達成の場面の全体交流では、チームで調べた分数のたし算やその考え方、きまりを確かめ合うことで、チーム間で納得し、よりよい考えを強化していた。適用問題を提示することで、それらの数理を活用して解き、よりよい考えを一般化し、定着させていた。次時のひき算や帯分数の計算についても同様にチームで分担して追究し、話し合っ、計算のきまりに高めた。

考察3

分数の計算の仕方を理解させる上で、以下の3点が有効であった。1つは、原問題をつくりかえて多様な分数の計算を考えさせたことである。資料3のように解決できそうなたし算の問題を選ば姿が見られた。既習を活用すればできそうだと具体的な目標設定が有効に働いたからである。2つは、つくりかえた問題を調べるソロの活動と解釈し合うチームの活動②である。ソロの活動では、つくりかえた問題をテープ図に表しながら複数解決することができた。解釈し合うチームの活動②では、資料4①のD児のように自分が調べていない考え方も妥当性から吟味して、納得する姿が見られた。2つの活動では、自分の追究を根拠に他の考えを類推することが有効に働いたと考える。3つは、シンキングツールとしてのチーム活動表である。資料5③のように追究した複数の考えを一般性の観点から話し合ったことが、どの問題も解決できるきまりを見つけることにつながった。これは、追究した考えを納得できる数理に高め合っている姿であると考えられる。

【全体考察】

考察1では、チームで共有化した1より大きい分数の表し方についての問題を既習と関連付けて追究しようとする姿が見られた。考察2では、いろいろな分数の相等、大小関係をテープ図で表現して判断し、その根拠を説明し合う姿が見られた。また、考察3では、お互いに分担して追究した結果を解釈して、計算のきまりを数理として見つける姿が見られた。資料6から、問題の主體的な把握と追究、他者への納得と考えの整理が高まっていることがわかる。これらは、問題を解決するために考えをつくり、互いの考えを認め合い、納得しながらよりよい考えにしている姿である。つくりかえる活動と解釈し合う活動が有効に働き、考えを数理に高め合う子どもを育てることにつながった。これは、豊かな学力が身に付き、自力追究において発揮されていることと、他者と考えを比べ、納得できる考えに整理する調整力が高まっていることを示している。



【資料6 子どもの変容】

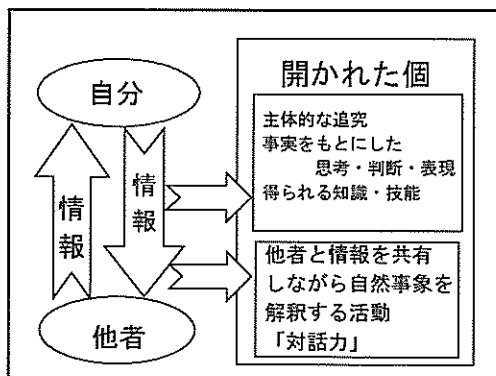
自然事象のきまりを客観的に見出す理科学習

理科部 今村 光宏

1 理科における「開かれた個」とは

21世紀は新しい知識・情報・技術が社会のあらゆる領域での活動の基盤として重要性を増す「知識基盤社会」の時代である。科学はその社会の中で重要な役割を果たしており、現在も日々刷新されている。全ての人は日常生活の中で科学技術と関わることになり、幅広い知識と柔軟な思考力・判断力が求められる。小学校理科の役割として、全ての子どもに自然事象に関する知識を豊かな体験を通して十分に発達させる機会を提供する重要な役割がある。また、理科の学習には自然や科学の価値を大切にしながら確かな知識を論理的に構築していく態度や習慣を育むことが求められている。

これまでに創り上げられてきた科学は、事実をもとに矛盾のない解釈を加え、それが広く認められたものである。科学において客観性のきまりを見出していくことは、このような過程を踏まえても重要なことである。そこには他者の存在が不可欠であり、様々な視点から矛盾がなく、誰もが納得する考えに高まったときにきまりとして認められる。このことから、「開かれた個」を育てるために理科で身に付ける力は、自ら自然事象に働きかけ（関心・意欲・態度）、情報を取得し、それを既存の知識と関係付け新たな考えを構築していく（思考力・判断力）、他者に伝わるように表現すること（表現力）、その結果得られる確かな知識、技能であると考え。また、事実をもとに自分がつくった考えを他者に伝えることや、他者の考えを受け入れた上で自分の考えと比較し、検討を加えること（対話力）が必要になる。



【図1 理科学習における「開かれた個」】

2 主題の意味

自然事象のきまりとは、自然の事物の性質や、現象の規則性のことである。自然事象のきまりを客観的に見出すとは、仮説をもとに観察・実験を行った結果をもとに見出した性質や規則性を集団の中で出し合い、自分の解釈に検討を加え誰もが認める考えに高めていくことである。そこには子どもたち一人一人が自分の考えをもつことが必須となる。その考えをお互いに出し合い、検討していくことで考えが客観的になるのである。自然事象のきまりを客観的に見出す理科学習とは、集団での学習の中で、自然事象の性質や規則性についての体験や知識を付加したり、修正したりしながら問題解決のための視点を増やし、解決方法や解釈について討論する中で、自然事象に対する考えを矛盾のないものに高めていくことである。そこには、相手の考えを肯定的に受け取ること、あるいは批判的な立場であっても相手の考えを聞き、自分の考えと併せて科学的に根拠がある考えに高めていくことが必要となる。

○ 自然事象のきまりを客観的に見出す理科学習で目指す姿

【豊かな学力】

- 体験を通して自然事象の性質や規則性について理解することができる。（知識・技能）
- 問題を解決するために、仮説をもとに解決方法を見出し、観察・実験の結果から情報を取捨選択し、自然事象のきまりを図や言葉で表現することができる。（思考力・判断力・表現力）
- 自然事象について明らかにすべき問題を共有し、追究し続けることができる。（関心・意欲・態度）

【人と働く力】

- ◎ 自分の考えを実物や図、言葉を適切に使用しながら話し、友達の考えを受け入れながら客観的に考えをつくることことができる。（対話力）

チーム・プロセスを位置付けた学習の展開

理科部 今村 光宏

3 副主題の説明

チーム・プロセスとは、「モニタリング」、「フィードバック」、「支援」、「相互調整」の過程のことである。理科学習の中ではこの過程を、①ほかのメンバー実験の状況や、チーム全体で問題解決の達成状況を確認する「モニタリング」、②モニタリングで把握した事柄を他のメンバーに伝えたり、実験がうまくいっていない、考えがまとまっていないメンバーにいかにして解決すべきか、情報や提案の交換をしたりする「アドバイス」、③各自の考察の共通点から客観的にきまりを見つける「相互調整」と位置付ける。チーム・プロセスを位置付けた学習の展開とは、個が見出した考えや進捗状況を報告し合い、問題があればチーム内で必要なアドバイスを行いながら新たな解決の方向性を決定し、客観的にきまりを見出す学習のことである。このような過程を経ることは、問題解決の活動によって子どもが習得する方法や手続きと、結果及び概念を包含する科学的な見方や考え方を身に付ける上でも意義があると考えられる。そのためにはチームに共通した目的をもたせること、自ら解決の方向性を見出す活動構成、事象の規則性や性質を可視化する思考の手がかりが必要である。

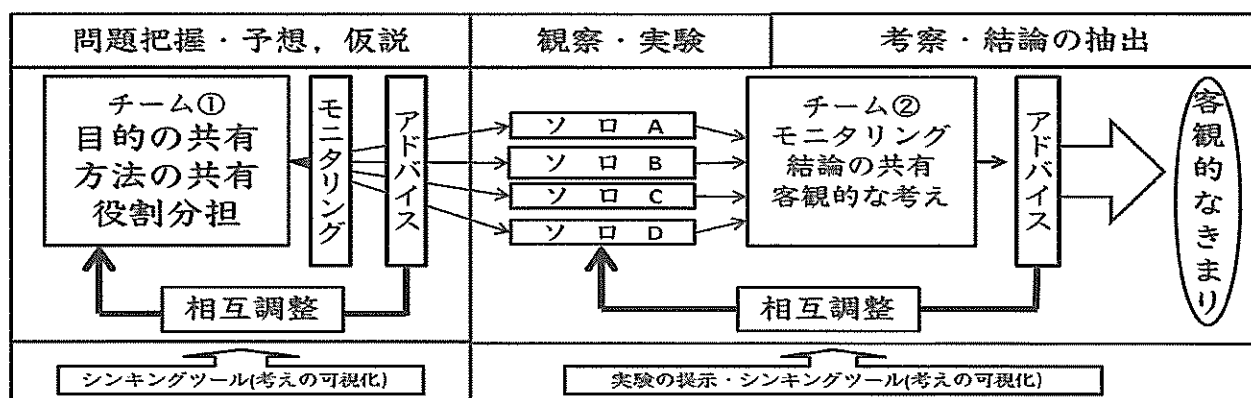
4 具体的な方途

(1) チームの活かし方

チームの編制
チームでの活動は身に付けた知識や技能を使い問題を解決していく場面で編制する。共通の問題を解決する目標は同じで、追究する対象の異なる異質チームを編制し、各個人の追究から見出したきまりの共通点に着目して客観的なきまりを見出していく。
教材の選定
チームの中で多様な解決方法があり、既習を適用することで解決することができる教材を設定する。チーム内では問題を解決する目的を共有し、多様な方法で解決していくことになる。

(2) 学習過程の工夫

理科学習においては、ソロとチームの往還性を重視した学習過程が重要である。理科学習における学習過程を以下のように考える。



【図2 チーム・プロセスを位置付けた学習過程】

チーム①では各自の予想と方法を出し合い、その妥当性について検討を行う。お互いの考えを共有し、より確かな方法を見出すことができる。その方法をもとにソロで観察・実験を行い、個としてのきまりを見出す。観察・実験場面では各チームから同様の方法を行うメンバーで行うこともある。チーム②では、各自で見出したきまりを出し合い、その妥当性について検討する。共通点に着目した検討を行い、客観的なきまりを見出していく。

第3学年 単元

チームで発見
電気の通り道

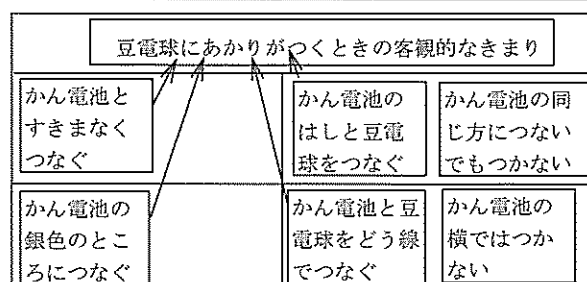
(1) 単元でめざす姿

- 1つの輪のように回路がつながったときに電気が通ることや金属は電気を通すことを理解する姿 (知識・技能)
- あかりがつくときとつかないとき、電気を通すものと通さないものの比較から、回路についてのきまりを見出し表現する姿 (思・判・表)
- あかりをつける回路のきまりを意欲的に調べる姿 (関・意・態)
- ◎ 自分のデータをチームに提供し、友達の考えと合わせて回路についてのきまりを見出す姿 (対話力)

(2) 学習の流れと考察

導入段階：1～2／8時

豆電球にあかりがつくときのつなぎ方を調べる。



資料1 共通点を見出すチームボード

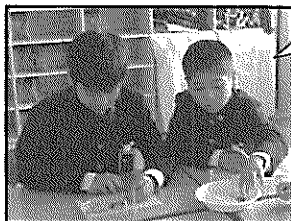
- C1 乾電池の銀色のところとソケットの導線がくっついていたらついたよ。
- C2 ぼくも同じで、すき間がないようにつないだらあかりがついたよ。
- C3 どのつなぎ方も、すき間がないようにつないだら豆電球にあかりがつくんだね。

資料2 グループでの話し合いの様子

展開段階：3～6／8時

電気を通すものと通さないものについて調べる。

- (1) 回路の1部にものを挟み電気が通るものがあることを調べるためのテスターを作る。
- (2) チームで役割分担を行い、電気を通すものについての共通点について調べる。



鉄のようなものは電気を通すみたいだよ。

写真1 電気を通すものと通さないものがあるよ。

鉄やアルミニウムは電気を通し、紙やプラスチックは電気を通さない。(個人)

鉄などの金属は電気を通して、金属以外は電気を通さない。(グループ)

資料3 個人の考察とグループでの考察

導入段階では、豆電球にあかりをつけるためのつなぎ方の規則性をとらえることをねらいとしている。そのために、まず、豆電球にあかりをつけるための試行活動を行った(写真1)。次にあかりをつけることができた子どもたちに、つなぎ方の共通点についてグループの中で話し合う活動を位置付けた。話し合いの中では、それぞれのつなぎ方を見比べて、どれも乾電池と導線、豆電球が隙間なくつながっているときにあかりがつくことを複数のデータから資料2のように客観的にとらえることができた。

考察1

豆電球にあかりがつくつなぎ方の規則性をとらえさせる上で、試行したことをもとに、グループでつなぎ方を見比べ、どのつなぎ方にも共通していることを話し合う活動を位置付けたことが有効であったと考える。また、各自の考えを書き、共通したものを1つに集めてきまりを見出すボード(資料1)の活用が有効であったと考える。それは、資料2のようにどのつなぎ方でも乾電池と豆電球がすき間なく1つにつながったことを共通点として見出し、きまりとして共通理解している発言からわかる。

展開段階では、電気を通すものと通さないものの規則性をとらえることをねらいとしている。そのために、素材が違うものにテスターで電気が通るかどうか調べる活動(写真2)を行った。様々な素材について調べた結果を個人、グループで分類し共通点と差異点について話し合う活動を位置付けた。その際には導入段階と同じチームボードを活用させ、共通点と差異点を明らかにしながらみんなが認める規則性を明らかにすることができた。

考察2

電気を通すものと通さないものの規則性を見出す上で、個人で追究したことを出し合い、結果の分類とチームボードを使った考察についての話し合いが有効であったと考える。このことは、個人の考察と、グループで話し合っ共通したことについての考察とを比較したときの考えの高まり(資料3)からわかる(思考力・判断力・表現力)。このように、単元を通して常にグループの中での話し合い、みんなが納得できるものをきまりとする学び方を位置付けた。このような過程を取り入れることで、客観性があるきまりを見出すことができた。と考える。

発展段階：7～8／8時

身の回りのものが金属であるかどうか調べる。

- (1) チームで、隙間があいた回路にものを挟んであかりをつける活動を行う。
- (2) 身の回りの金属かどうかわからないものについて、判別する実験を行う。



金属は電気を通すはずなのにこれは通らないよ。
電気を通すことができるよい方法はないかな。

写真2 金属のはずなのに電気が通らないよ。

1 進捗状況の報告(モニタリング)

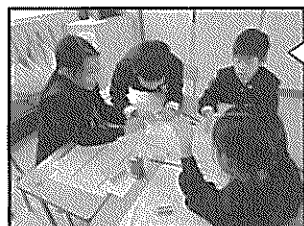
- C1 銀紙はついたけど金紙はだめだったよ。
- C2 アルミ缶はつく場所とつかない場所があるよ。
- C3 モールは外側は電気が通らなかったけど中の針金のところがつくよ。
- C4 釘はさびたところはだめだけど、銀色のところはつくよ。
- C5 さびを落としたら電気を通すようになるんじゃないかな。他のものも色をはがしてなかったからいけないんじゃないかな。(アドバイス)
- C6 きっとそうだよ、みんなもやすりで削ってみよう。

2 新たな役割を分担しての追究 (相互調整)

↓

けずって色や膜をはがして金属の部分に導線をつないだら電気が通るよ。(客観性のあるきまり)

資料4 チームでの活動の様子



せーので回路のすき間にものをはさんで電気を通してみよう。
やったー、豆電球にあかりがついたよ。

写真3 やった、あかりがついたよ。

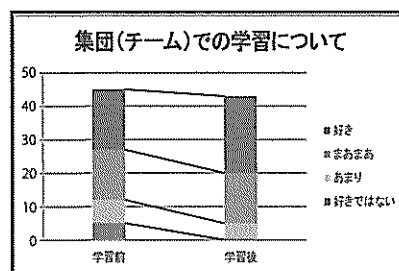
発展段階では、金属には電気が通ることをとらえている子どもたちが、身の回りの様々なものが金属なのかどうか判断することをねらいとしている。そのために、まず、4人組のチームを編制し、隙間が4つ空いた大きな回路にあかりをつけるという課題を設定した。また、回路に挟むものとしてスチール缶、アルミ缶、モール、金紙、銀紙、CD、磁石、さびた釘、光沢のある石、タイルの10種類を準備した。この回路は4つの隙間があるため、全員が1つの隙間を担当し、ものを挟んで電気を通さなければあかりをつけることができない。また、提示するものとして、被膜をはがさなければ電気を通すことができなかったり、金属かどうか迷ったりするものを選択した。子どもたちは簡単には電気を通すことができない状況と、電気を通すかどうかわからないものについて、ソロで調べる方法を試していった。ここで一度実験の進捗状況について話し合う場を設定した。チームの中で分担して調べたものについて実際に実験を見せながら情報を出し合い(モニタリング)、あかりをつけることができない子どもは友達の情報から被膜をはがすという新しい実験方法を受け入れ(アドバイス)、それぞれに新しい役割分担を行いながら(相互調整)再度実験を行った(資料4)。その結果、被膜をはがすと金属が露出して電気を通すことができることや、いくらこすってもあかりがつかないものは金属ではないということ、みんなが認める客観的なきまりであると判断することができた。その後、それぞれが見つけた金属を回路の隙間にはさんで豆電球にあかりをつけることができた。

考察3

隙間に挟むものを見つけ、金属には電気が通るというきまりを使い、豆電球にあかりをつけるという目的を達成する上で、チームでの活動を仕組んだことが有効に働いた。また、チーム内にモニタリング、アドバイス、相互調整という機能をもたせたことも有効であったと考える。それは、金属かどうか判別が難しいものについて役割分担して調べる必要性和資料4のように、被膜がある金属に電気を通すという課題について、チームで話し合っ得た情報から実験方法を見直し、一人では困難であった被膜や色をはがして電気を通すということも見出したことからわかる(思考力・判断力・表現力)。また、資料4から各ソロの追究をチームにもち帰り、実物や表現物を見せながら、チームの中で進捗状況の確認と新たな追究の方法を見出す仕組みをもたせたことも有効に働いたと考える。

【全体考察】

考察2と考察3からわかるように、各グループできまりを客観的に見出していく姿や、困難な問題を解決するために友達の考えを受け入れ新たな解決方法を見出しながら問題を解決していく姿が見られた。これは、自分の考えをチームの仲間提供し、また、友達の考えを受け入れながら自分の考えを見直し、新たな追究方法で解決していくことができたからである(対話力)。ここでは、自分の考えだけでなく友達からも認められる客観性のあるきまりを見出すことができていく(思考力・判断力・表現力)。資料5のグラフは、集団(チーム)で学習することに対する意識を単元前と単元後でアンケート調査した結果である。単元前には集団(チーム)での学習にあまり肯定的ではなかった子どもが減少し、好感が上がっていることがわかる。このことから、共通の目的をもった問題解決の過程に、チームに自分の考えを進んで提供し、友達の考えを受け入れながら新たな追究を行う「開かれた個」が育ったと言える。



資料5 学習前後の子どもの意識

自分の気付きを友達と共有する生活科学習

生活科部 福 原 伸 治

1 生活科における「開かれた個」とは

生活科では、子どもたちが学習や生活において豊かな生活を営む生活者としての資質や能力及び態度を育成することを重視している。それは、「開かれた個」における自己を確立することや、他者を受容し、新たな価値を生み出しながら社会に貢献することに資することになる。

身近な環境や自分自身がもっているよさに気付くこと（知識・技能）は、自己肯定感を感じるだけでなく、自らに自信をもって生活することができるという意味での自己を確立することにつながる。自分が気付いたことと社会や自然を関係付けることで、見方や考え方を確かにすること（思考力）ができる。さらに、自分の気付きを伝える相手を選び、他者と伝え合うこと（判断力・表現力）で、自分の思いや考えを相手に伝える喜びを知ることは、新たな価値を生み出すための基礎となる。活動を行うために、身近な対象と出会い、その面白さや不思議さに気付き、もっとかかわろうとすること（関心・意欲・態度）は、社会のために自分のよさを進んで活かすことにつながる。生活科においては、特に自分の思いや願いを大切にしながら、他者とかかわり合うことで、よりよい生活を追究しようとする（対話力）で、他者を受容しつつ、新たな価値を生み出すことができるようになる。

周囲の意見や考えに対して、おかしいと思いつつも、それに従ってしまい、自分自身を見失いがちな人間が増えていることが指摘されている。自分の力で学習や生活、精神を自立させられるような子どもを育てることは、個を開く前提条件となる「自己肯定感」をもたせる上で必須だといえる。

2 主題の意味

自分の気付きとは、身近なひと、もの、ことと出会い、おもしろさや不思議さを感じたことから、さらに追究することで得られる新たな見方や考え方のことである。自分の気付きを友達と共有するとは、同じ追究課題や学習の目標をもった友達へ、課題を解決するために必要だと考えた見方や考え方を教えたり、友達の見方や考え方を受け入れたりすることで、お互いに納得した解決方法を得ることである。自分の気付きを共有する生活科学習とは、身近なひと、もの、こととのかかわりから見出した自分の新たな気付きを、友達の気付きを受け入れることでさらに質を高めながら、自分に対する自信をもつことができるようになる学びの姿のことである。

今の生活科においては、いろいろな単元に関連させながら、身近な人と伝え合うことができるようになることが求められている。これは、これから子どもたちに対して、他者を受容し、多様な価値観をもつ人々と共に思考できるようになるために、低学年からその基礎を養っていかないとはいえない。さらに、「開かれた個」を育てるためには、これまでも生活科で行われてきた自立への基礎を養うことを重視しながらも、協力・協働できる子どもを育てるために、低学年で個から集団へと意識させるための学習方法の在り方を明らかにしなければならない。

○ 自分の気付きを友達と共有する生活科学習で目指す姿

【豊かな学力】

- 具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人、社会、自然とのかかわり及び自分自身のよさなどについて気付くことができる。（知識・技能）
- 具体的な活動や体験に対して、自分の思いや願いを活かして、友達の考えのよさを取り入れて考えたり、工夫したりして、素直に表現することができる。（思考力・判断力・表現力）
- 身近なひと、もの、ことや自分自身に関心をもち、進んで友達と交流しながら、自分たちが追究している課題を解決しようとする（関心・意欲・態度）

【人と働く力】

- ◎ 自分の思いや願いをもとにしたこだわりを大切に、友達と自分の考えを出し合いながら、お互いのよさについて気付くことができる。（対話力）

2種類の小単元を組み合わせた単元構成

生活科部 福原伸治

3 副主題の説明

2種類の小単元とは、これまでも行われてきた自分の思いや願いをもとに、個の活動を中心とした小単元1と、友達と交流する中で集団の活動を中心とした小単元2のことである。2種類の小単元を組み合わせるとは、個を中心とした小単元1で、身近なひとやもの、ことと出会い、自分の思いや願いをもとに自分の気づきの質を高め、そのあとに集団を中心とした活動による小単元2を行い、自分の気づきを活かしつつ、友達の気づきと比べながら、さらに質を高めていくことである。

2種類の小単元を組み合わせた単元構成とは、生活科特有の個を大切にする基本を押さえながら、低学年における集団の学びを系統的に考え、子どもたちがお互いのよさを感じて、さらに納得して協力しながら学習を進めることができるような手だてを行うことである。この工夫は、どの単元でもできるというものではないし、1年生と2年生では、学習に対する子どもの実態にも差があるので、小単元1と小単元2の軽重の付け方も変わってくる。具体的には、1年生の1学期の段階では、まだ小単元1の学習に重きを置き、小単元2の集団を中心とした活動は少しだけにする。2年生の3学期の段階では、友達の考えを受け入れ、さらに自分の考えをふり返ることもできるようになっているので、小単元2に重きを置き、集団を中心とした活動に重きを置いた学習活動を仕組む。

また、集団を中心とした活動におけるチームの形は、隣り合う二人で交流するペアチームから始め、次に隣り合うペアチーム同士で交流するといったように、少しずつチームを広げていく。

【表1 小単元1と小単元2の重点の度合いとチームの内容について】

	1年生			2年生		
	1学期	2学期	3学期	1学期	2学期	3学期
	小単元1			小単元2		
	ペアチーム	ペア同士で交流		課題別チーム	課題別チーム 役割チーム	

4 具体的な方途

(1) チームの活かし方

小単元2において、表1に示したような形で、チームの対象となる仲間を徐々に広げていくようにする。低学年の実態として、単元の中でやりたいと思った対象はほとんど変化することがないので、単元の最初に組んだチームが、そのまま単元の最後まで同じ仲間として続いていく。2年生から始まる課題別チームとは、小単元1において自分が追究したいと考えた対象が同じもの同士でチームを組んでいくことである。そのため、それぞれが考えている目標は完全には一致しないが、同じことについて追究しているので、友達と交流することで調べるための方法が参考になったり、気付いた内容が自分にとって有用であったりすることが多くなる。2年生の後半から課題別チームに併せて行う役割チームとは、自分たちとは異なる対象について追究していて、それぞれのチームの中で同じ役割をもっている友達と集まり交流することで、これまで自分たちがもっていなかった観点からもう一度活動をふり返ることができるようになる。

(2) 学習過程の工夫

○ 個から集団へとつながる目標設定の条件について

小単元1の目標：自分と対象とのかかわりがわかりやすく、既習の経験が活かせる活動ができる。

小単元2の目標：身近な人たちとのかかわりから、相手意識をもって伝える活動ができる。

○ チームとソロの組み合わせについて

1年生では、ソロ→チームの流れでソロの活動に力を入れていく。2年生の後半には、チームの中からソロとして他の友達と交流して、もう一度チームに戻り、得た情報を還元する。

第2学年 小単元

みつけたよ 町の いいところ ～つたえようあらつ新聞～

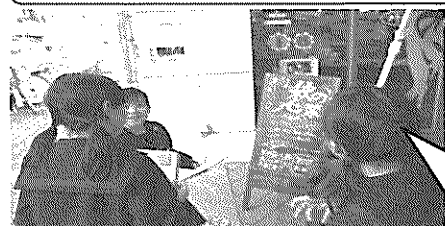
(1) 単元でめざす姿

- 秋になって町の様子が変化していることに気づき、身近な人に合わせて伝えることができる。(知識・技能)
- 身近な人に合わせた情報や表現方法を決められる。(思・判・表)
- 町の人たちのやさしさに気づき、身近な人たちにも自分が見つけたことを知らせていこうとすることができる。(関・意・態)
- ◎ チームの友達と町の中で気付いたことを話し合いながら、お互いの考えを受け入れて新聞づくりに活かすことができる。(対話力)

(2) 学習の流れと考察

導入段階：1～2/8時

町たんけんしたことをもとに、秋になって町の様子がどのように変化したのかについて話し合う。



秋のパン祭
だって！
おいしそう。
どんな
パンが
あるかな？

写真1 秋のおすすめがたくさん見つかったよ

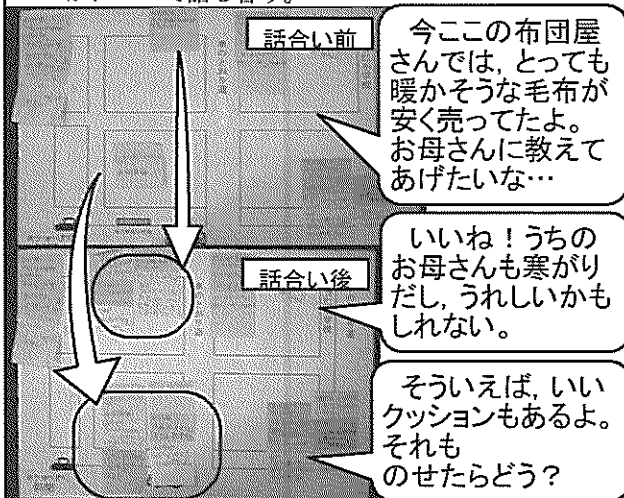
あらつ町の人のためやお母さんお父さんのためにあらつのしょうぼうし
せんどのしょうぼうしやみつのしょうぼう
しがひと自見ただけで分かるな新聞を
作りたいです

資料1 新聞づくりで相手意識をもった感想

展開段階：3～6/8時

チームの中で、新聞に載せて紹介する場所について話し合い、再度町たんけんを行って、自分の役割に合わせた活動を行う。

(1) 試しの町たんけんをして、どこを新聞に載せるのかについて話し合う。



資料2 気づきを受け入れカードを増やしたボード

導入段階では、季節によって町の様子が変化していることに気づき、新聞で家の人や、町の他の人々に知らせることに意欲をもつことをねらいとしている。そのために、試しの町たんけんを行い、変化していたことについて話し合わせた。子どもたちは、5月に行った町たんけんのときと比べながら、秋限定の商品(写真1)や、寒さを防ぐための商品などが並んでいることに気づき、たくさんの発見ができたことに自信をもつことができた。そこで、次の手だてとして、「あらつ新聞」で、自分のお勧めを紹介する活動を提示し、それぞれのチームごとに、どのように活動を進めていきたいかについて話し合わせた。

考察1

子どもたちに町の変化を伝えたいという意欲をもたせる上で、試しの活動として町たんけんを仕組み、あらつ新聞という活動を提示したことは有効であったと考える。

それは、資料1の子どもの感想からわかるように、町の様子の中から子どもたちの関心に合わせた変化があったことや、新聞という身近にあり、1人1人の思いや考えが活かされる手だてがうまく働いていたからである。

展開段階では、自分が伝えたいと思ったことを友達に認めてもらえることの喜びに気づき、さらに取材して町の中にあるおすすめのところを紹介していこうとする意欲をもつことをねらいとしている。そのために、自分たちが調べたことを出し合い、どんなお店や場所を紹介したいと思ったかについて、見つけたカードをチームのマップボードに貼り付け、話し合う活動を行った。子どもたちは、アートギャラリーやパン屋さんなどについて、そろった意見を出すことができていた。(写真1)布団屋さんについては、1人の子どもだけが取り上げていただけだった。そこで、自分が見つけた布団屋さんの面白いところをみんなにカードも使いながら紹介した。チームの仲間は、それを聞いて見つけたカードを追加し、ぜひ新聞に載せて紹介しようということになった(写真2)。

各チームの中では、自分の得意なところで力を発揮できるように新聞における係を決めていた。(資料2)。そこで、各チームで話し合ったことから、同じ係のメンバーで話し合い、自分たちが係として、どんなことに気を付ければ、チームの中で活躍できるかについて話し合わせた。資料3にあるように、題名や文章、絵、インタビューといった係をそれぞれ受け持つことで、自分がどんな視点で再度取材をしたり、

(2) 再度たんけんして、情報を出し合う。

文がはんだたらおしえてあげる。さしはにスあけ
とつねとおしえてあげる。さしはにスあけ
てゐるか見る。字がきたなかつたらやりなおす。
ようにいう。どを正しくつかでゐるか見る。
なら、てゐるかんじを正しくつかでゐるか見る。おなじ言葉が
くりかえしてないか見る。

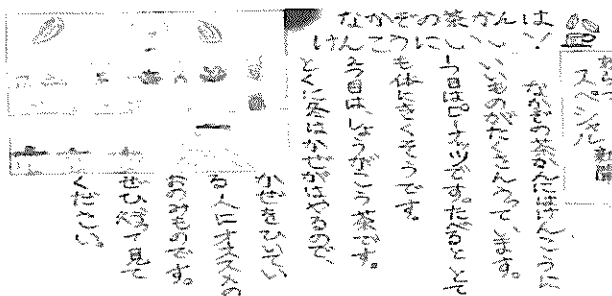
資料3 係チームで集まり役割を書いたノート

発展段階：7～8／8時

自分たちで立てた計画に合わせて、再度新聞の取材
を行い、新聞を完成させる。



写真2 秋におすすめの商品はなんですか？



資料4 チームで作った新聞の一部

友達が書いた新聞をチェックしたりするのかについて明らか
にすることができていた。各係ごとで集まったチームの中で、
たくさんの情報を得て、さらに自分たちのチームへもち帰り、
他の班がもっている情報についても話を聞いて、自分たちの
新聞に活かす姿も見られた。

考察2

自分の考えを伝え、それを友達に認めてもらう喜びを感じ
させる上で、町たんけんを再度取材するための計画を話し合
う活動は有効に機能したといえる。それは、資料2のチーム
ボードの変容からもいえる。また、係を決め、チームの中で
の有用感を高めたことで、他の教科で学んだことも活かして
活動を進める姿も見られた。

発展段階では、自分たちがお互いに納得して立てた計画に
沿って、再度取材を行うことができたよさを感じ、自分たち
だけの新聞を作ることができることをねらいとしている。そ
のために、チームの計画に合わせた取材活動を設定した。子
どもたちは、自分の役割を意識しながら、インタビューしたり
、メモをとったりしながら、新聞に必要な情報を集めるこ
とができていた。

取材後、新聞を書くときには、それぞれ自分が担当するペ
ージを話し合い、個別で書いていった。書き終わった後に、
係としての観点から、お互いのページをチェックした。題名
係は、相手に読みたいと思わせる言葉になっているかについ
てチェックしたり、インタビュー係は、お店の人の話が正し
く書かれているかチェックしたりというように進めていっ
た。チェックが終わった新聞は、家の人や取材でお世話にな
ったお店の人、また、町の回覧板などに載せてもらって、た
くさんの人に読んでもらうことができた。

考察3

子どもたちに自分たちで立てた計画のよさを感じさせたり
、友達と協力したからよりよい新聞を作ることができたと
気付かせたりするために、チームによる再度の取材活動の設
定と新聞づくりの活動は有効に機能したといえる。それは、
資料4にもあるように、それぞれの役割が明確で、自分たち
の力で作ることができるような新聞の形をとったことが、内
容にも反映できていることから分かる。さらに、町の人や家
の人からの評価を受けた上で、今までお世話になった人など
へ紹介する活動もできればよかった。

【全体考察】

考察1からもわかるように、もっと町の魅力を見つけて、身近な人に伝えていこうとする意欲をもたせることができ
た姿となった（関心・意欲・態度）。また、考察2から、町たんけんの計画をチームボードをもとに話し合わせたこと
で、自分の気付きを受け入れてもらったり、相手の気付きを受け入れたりすることができるようになった（対話力）。
これらの活動の中で、相手の気付きのいいところを考え、新聞づくりにどうすれば活かすことができるかについて、話
し合って決めることができるようになった（思考力・判断力・表現力）。このような姿が見られたのは、事前に小単
元1として、自分の気付きから追究していく学習を充分に行って、町のよさについて1人1人が気付きの質を高めてい
たことが、小单元2で活かされたからだといえる。それは、子どもたちがチームの中で自分だけが気付いていることで、
自信をなくすのではなく、友達にもそのよさを伝えようとしていた姿からとらえることができる。

このように、チームの中でお互いの気付きを共有することができ
るようになるためには、日常的な学びの形として、友達のいいとこ
ろを一言で記録していく「いいねカード」も有効であった（資料5）。
活動が終わるごとに、学習の中で友達のよかったところを一言で残
していく活動を積み上げていくことで、相手を受け入れ、自分も受
け入れられることが身に付いていくようになった。

さび だいきをきめるときに
みんながあつ新聞をきめるときに
「スペイン新聞がいいんじゃない」といアイデア
を言ってくれたことです。

資料5 いいねカードの記述

音楽とのかかわりをともに深める音楽科学習

音楽科部 高 武 龍 彦

1 音楽科における「開かれた個」とは

音楽科は、音楽に存在する美的価値を見出し、追究していくことを大切にしている教科であり、その追究過程においては、「自分」と音楽とのかかわり、「自分」と「他者」とのかかわりによって活動が成立するものが大半を占め、そのかかわりによって、音楽の美的価値を見出すとともに、社会性も身に付けることができる。

音楽表現は個人でも成り立つが、他者を意識して表現することによって、目的意識をもつことができ、個人では追究することができなかった新たな音楽美を見出すことができる。つまり、「開かれた個」として音楽表現を行うためには、音楽に対して自分の思いや意図をもち（関心・意欲・態度）、創意工夫するための豊かな発想（思考力・判断力・表現力）を活かすとともに、表現するための音楽的な技能（知識・理解）を身に付けることが必要である。このような音楽表現を追究し、音楽美を見出そうとする過程の中で、他者とかかわりをもつことによって、見出そうとする音楽美は高まったものになっていく。そのためには、自分や他者の表現について音楽や言葉で表し（対話力）、自分の表現にはない、他者の表現の素晴らしさを受け入れ（調整力）、自分の表現に取り入れようとする（行動力）ことが大切である。音楽科においては、特に音や言葉（対話力）でかかわりを生み出すことによって、美的情操を養うとともに、社会性を身に付けることができ、豊かな人間性を育むことができる。

2 主題の意味

音楽とのかかわりとは、音楽を表現したり、鑑賞したりなど、音楽活動を通して、音楽に対する新たな美的価値や音楽活動に必要な技能を見出すことである。音楽とのかかわりをともに深めるとは、思いや意図をもって表現したり、楽曲の特徴や演奏のよさを理解して聴いたりしたことを、音楽や言葉、表現物を用いて、「他者」とコミュニケーションを図りながら、新たな音楽の美的価値を見出したり、技能をさらに高めたりすることである。音楽の美的価値を追究していくにあたっては、音楽に対する知識や理解を深めたり、音楽的な技能を高めたりすることが必要である。音楽に対する美的価値の追究は「個」でも可能であるが、「他者」とかかわり、お互いの考えや表現を表出することによって、「個」の創造性が高まり、音楽に対する知識や理解、音楽的な技能はさらに高まっていく。音楽とのかかわりをともに深める音楽科学習とは、「個」で追究する活動と、「他者」とやりとりしながら追究する活動によって生まれるかかわりのサイクルを通して、音楽に対する新たな美的価値や音楽活動に必要な技能を見出すことである。「個」で音楽とかかわり、そのかかわりをもとに「他者」とかかわる、このかかわりのサイクルを繰り返していくことで、「個」の音楽に対する思いや願いが明らかになり、友達の表現を交流し合うことで、表現するための技能を身に付けることができる。つまりかかわりのサイクルを生み出すことによって、最終的に「個」の美的追究を促すことができる。

○ 音楽とのかかわりをともに深める音楽科学習で目指す姿

【豊かな学力】

- 楽曲に対する理解を深め、自分や友達の表現をとらえて、表現を工夫したり、表現に必要な音楽的な技能を身に付けたりすることができる。（知識・技能）
- 友達と表現を聴き比べたり、試したりして、音楽的要素を焦点化して、表現を工夫することができる。（思考力・判断力・表現力）
- 友達の発想のよさを認め合い、思いや意図をもって曲想にふさわしい表現をしようとすることができる。（関心・意欲・態度）

【人と働く力】

- ◎ 楽曲や表現がもつ美しさやよさを伝え合い、協力して一つの音楽をつくり上げようとすることができる。（対話力）

感覚にうったえかける身体表現を位置付けた活動構成

音楽科部 高 武 龍 彦

3 副主題の説明

感覚にうったえかける身体表現を位置付けた活動構成とは、一人一人が描いた思いや願いを具体物として可視化することで目指す表現をチームで共有し、体全体を使って感覚的に音楽をとらえたり、音楽に働きかけたりする活動を学習過程の各段階に意図的に取り入れた学習のことである。音楽科の学習では、音楽表現がもつ楽しさやよさ、美しさを感じ取り、追究していくことが大切である。特に、低学年においては、自分の思いや願いをもった表現を、友達とかかわり合い表現し合うことによって、友達の思いや願いを知り、自分の表現に対する思いや願いをさらに深めていくことが必要である。しかし、子どもは未分化な部分があるので、自分が音楽からとらえたことと表現することが、必ずしも一致しない。そこで、感じ取ったことや表現したいことを体全体を使って表出し、感覚的に働きかけることによって表現を高めていく。これは、音楽科として身に付けさせたい内容をとらえるとともに、社会性や協調性を育み、音楽との関わりを深める上でも意義深い。そのためには、具体的な表現像を明確にした目標設定の工夫と、チームでの活動の位置付けを工夫した活動構成、思考の手がかりとなるシンキングツールが必要である。

4 具体的な方途

(1) チームの活かし方

音楽科学習におけるチームとは、ペアや小集団、学級全体が考えられる。ペアでの活動は主に低学年で取り入れ、お互いの表現や考え方のよさや違いを認め合うことを重点とする。小集団での活動は中学年、高学年で取り入れる。ペアでの活動のように、お互いの表現や考え方のよさや違いを認め合うことに加えて、お互いの表現の向上に向けた相互評価を行う。学級全体では、ペアや小集団で見出した考えや表現を合わせて、一つのものへと合わせていく。ここでは、お互いの意見や表現をじっくり聴くとともに、自分の考えや表現を目指す一つのものへとどのように調和させていくか調整力を活用する必要がある。このように、学年の発達段階に応じてチームでの活動形態を工夫するとともに、チームでの活動を題材の中で、どのように取り入れていくかを工夫することによって、音楽とのかかわりを深めるとともに、他者とのかかわりも自然に深めていくことができる。

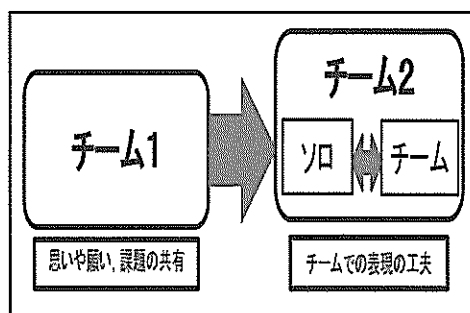
(2) 学習過程の工夫

○ チームとソロを行き来する活動構成

音楽科では、表現に対する共通の表現像をもち、その表現像に向かってそれぞれが考えた表現の工夫をもちよって、表現を高めていくことが大切である。最初のチームでは、チーム一人一人の思いを共有し、全員が共通した表現像をもつ。次にソロとチームを行き来しながら、個人で表現の工夫を試したり、ペアや小集団で表現を聴き合ったり、試したりして、自分たちが目指す表現像に近づく表現をチームで追究する。このような活動構成の工夫によって、明確な表現像が明らかになり、思いや意図が活かされた表現を追究することができる。

○ 思いを可視化する身体表現

チームでの表現を高めていくためには、一人一人の思いを具体化し、共通のゴール像をもつことが大切である。そこで、一人一人の思いを身体表現し、具体化する。その具体化された身体表現をもとに、音楽を形づくっている要素のかかわり合いをとらえた身体表現へと高めていく。このような身体表現を高める活動を行うことによって、感覚的に音楽をとらえたことが可視化され、歌唱や器楽などの音楽表現の高まりへとつながっていく。



【図1 活動構成の仕組み】

(1) 題材でめざす姿

第1学年 題材

うたで みんなの
フルーツケーキを
つくろう

- 歌詞の内容に合う歌い方をつくることができる。(知識・技能)
- 拍の取り方を歌いながら選択したり、強弱や速さの組み合わせ方を試したりして、表現を工夫することができる。(思・判・表)
- 試行錯誤しながらリズムづくりや歌い方の工夫に取り組むことができる。(関・意・態)
- ◎ 友達が考えたリズムや歌い方を、交互唱しながら聴き合い、模倣して歌ったり、身体表現したりすることができる。(対話力)

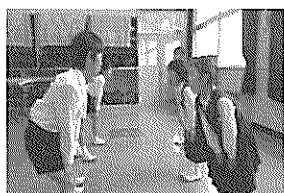
(2) 学習の流れと考察

導入段階： 1／3時

手拍子や膝打ちなどをしながら、様々な交互唱の形態で「フルーツケーキ」を歌う。



【ソロで膝打ち】



【男女ペアで膝打ち】

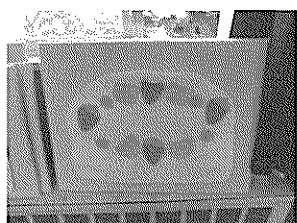
写真1 身体表現しながら、いろいろな交互唱で歌おう。

展開段階： 2／3時

ケーキ屋さんになって、注文されたフルーツケーキになるように後半の歌詞を置き換えて、3拍子の拍の流れにのり、交互唱で「フルーツケーキ」を歌う。



【チームでつくる】

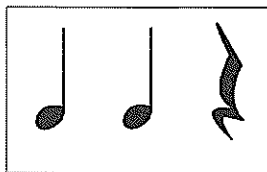


【ケーキの表現像】

写真2 どんなフルーツケーキになるかな。

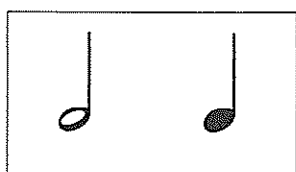


写真3 手拍子やボードで試してみよう。



な

し



な

し

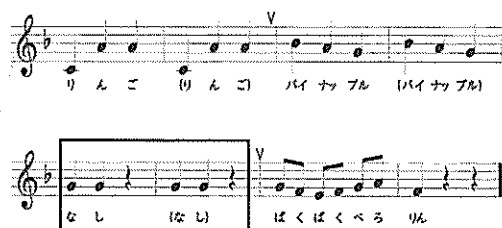
資料1 ソロでのリズムづくり(「なし」の場合)

導入段階では、3拍子の拍の流れをとらえ、交互唱の楽しさを感じることをねらいとしている。そのために手拍子や膝打ちなどの身体表現を取り入れ、様々な交互唱の形態での歌唱活動を位置付けた。子どもは、写真1のように、手拍子や膝打ちなどの身体表現を行いながら3拍子の拍の流れをとらえ、教師と子ども、男子と女子など、様々な交互唱の形態で歌うことを楽しむことができた。

考察1

手拍子や膝打ちをしながら、3拍子の拍の流れにのって、友達と楽しく交互唱する子どもの姿(関心・意欲・態度)が見られた。これは、身体表現を取り入れ、様々な交互唱の形態で歌唱する活動を位置付けたことが有効に働いていたからである。

展開段階では、3音以外の言葉でも、リズムをつくりかえることによって3拍子の拍の流れにのることができることをとらえ、ソロやチームで考えたリズムを試行錯誤して、交互唱で歌うことができるようになることをねらいとしている。そのために、子どもがケーキ屋さんになって、注文された歌のフルーツケーキをつくる場面設定を行った。子どもは、わたされた注文票を見て、これまで歌ってきたフルーツのリズムとの違いに気付き、3拍子の拍の流れにのって歌うためには、リズムをつくりかえる必要があることに気付いた。次に、チームで表現像を共有するチーム1→自分が担当するフルーツのリズムを考えるソロと、ソロで考えたリズムをチームで試行錯誤するチームを行き来するチーム2(活動構成の工夫)を行った。そのために、チーム1では、チームでの表現像を可視化するためのボードを準備した。子どもは写真2のように、歌に合わせて、自分が担当するフルーツをどのような順番で、どこに置けばよいか確認することができた。次に、ソロでリズムを考える際には、四分音符、四分休符、二分音符でつくられた3拍子のリズムカードを準備し、導入段階で取り入れた手拍子や膝打ちなどの身体表現でリズムを試す活動を設定した。子どもは、自分が担当するフルーツのリズムに合うカードを選択し、写真3のように、手拍子したり、ボードにフルーツを並べながら歌ったりして、そのリズムに合うように言葉を当てはめることができた。資料1は子どもがソロで考えた「なし」のリズムである。(思考・判断・表現)さらに、チームのそれぞれが担当したフルーツのリズムをチームで交流し合い、後半部分のリズムを考え、自分たちのチームの「フルーツケーキ」をつくることができた。



C1: わたしは「なし」を「なし」ってのばすのと、「なし」って切るリズムを考えたんだけど・・・

C2: どちらも3拍子に合うね。
「なし」のほうがかわいい感じがするね。

資料2 チーム2での表現の工夫の様子



ボードのケーキに歌いながらフルーツをおく。
A児: リンゴ
B児: パイナップル
C児: なし

写真4 ボードにフルーツを置きながら歌ってみよう。



C3: 置きながら歌うと、3拍子に合わなくなるところがあったね。
C4: 手拍子しよう。

写真5 今の歌い方でよかったかな。

発展段階: 3/3時

それぞれのチームの歌を発表し、全員で交互唱する。

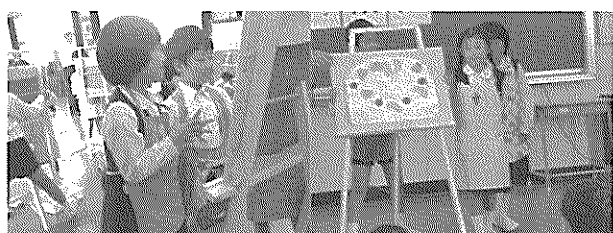


写真6 チームのみんなで歌えたよ。

みんなで、自分たちの「フルーツケーキ」をつくることができて、うれしかったです。わたしがつくったリズムで歌ってもらってうれしかったです。

資料3 題材終了後の子どもの振り返り

考察2

チームで交互唱の表現を追究させる上で、チームとソロを活かした活動構成が有効であったと考える。これは、チームとソロ、それぞれの活動と子どもの思考が関連し合っていたからである。写真2のように、チーム1では、チームの表現像を確かめ合ったことで、チームの目標が明確になった。またチーム2においては、資料1に見られるようにソロでの活動において、自分の担当のフルーツのリズムを試行錯誤しながらつくることで、自分なりの考えをもつことができた。さらに、資料2のC2の発言のように、他者から意見をもらうことによって、自分の考えを強化することができている(対話力)。これは活動構成の工夫だけでなく、身体表現しながら表現することによって、3拍子の拍の流れを可視化しながら、表現する活動も有効であったと考える。写真5はチームで表現を行った際の不十分な部分を、もう一度手拍子して、確認し合っている場面である。身体表現を行いながら歌うことで、3拍子の拍の流れを自らとらえようとする姿と考える。

発展段階では、それぞれのチームのフルーツケーキを発表し、チームで一つの表現をつくり上げた達成感を感じることをねらいとしている。そのために、それぞれのチームの表現をもう一度見直す場と、全体で発表する場を設定した。写真6のように、これまでの学習で経験したチームでのかわり方や身体表現しながら歌うことを活かして、表現を見直すことができた。また、全体場で発表することで、自分たちのチームの表現のよさを認めてもらったり、歌ってもらったりすることで、達成感を感じることもできた。

考察3

子どもたちに達成感を感じさせる上で、全体で発表し合う場を設定したことが有効であったと考える。これは、チームで自分たちの表現をつくり上げるという目標設定が有効に働いたからである。写真6に見られるように、発表の場を設定することによって、前時までの学習を活かしながら表現を練り合う姿が見られた。

【全体考察】

考察1からわかるように、友達とかかわり合いながら、自ら進んで表現する姿が見られた(関心・意欲・態度)。これは、身体表現しながら歌う活動を設定し、一つの表現になる楽しさを感じ取ることができたからだと考える。また、考察2から、友達とかかわり合いながら、音楽と深くかかわる姿が見られた。これは、音や音楽、身体表現を通して自分の思いを表したことで、チームとソロを組み合わせた活動構成が有効に働いたからだと考える(対話力)。資料4は、題材前と題材後のアンケートの結果である、この結果から、チームでの活動によって友達とかかわりを深めるとともに、音楽ともかかわりを深めていったと考えることができる。

自分が思ったことや、考えを伝えられましたか。(33人)

題材前	題材後
55%	94%
(18人)	(31人)

資料4 アンケートの結果

友達と共に柔軟に造形表現する図画工作科学習

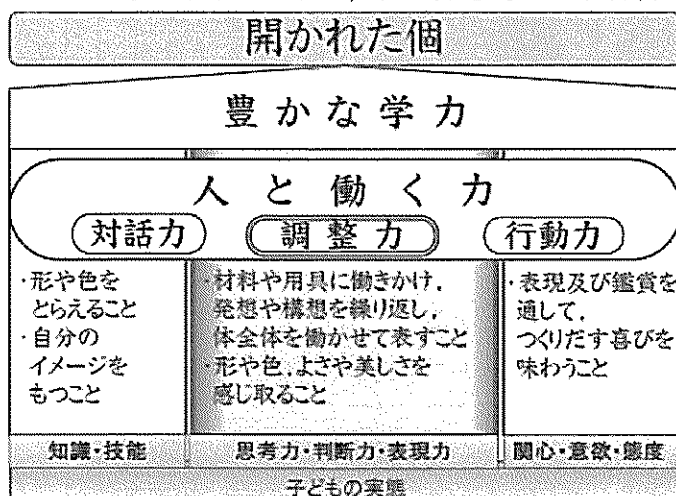
図画工作科部 合 田 賢 治

1 図画工作科における「開かれた個」とは

変化の激しい社会の中では、次代を担う子どもたちが困難に直面することも少なくない。そのため、他者や社会の中で切磋琢磨しつつも、一人だけで解決しようとせず、柔軟に考え、友達と対話し協調しながら、様々な発想を活かしつつ解決策を見出すことのできる豊かな感性を育てていくことが大切である。開かれた個を育てる図画工作科の学習指導においては、共有する表現主題に向かって、他と協調しながら自分の表現を見つめ、相互鑑賞を通してお互いの発想・構想・表現のよさや面白さを採り入れ、個の表現を高めていく姿をめざすべきである。

開かれた個を育てるために、思考力・判断力・表現力を身に付けさせることは最も大切であると考え。表現の活動においては、材料に働きかけ、形や色をとらえ、そこから生まれる自分なりのイメージを基に、思いのままに発想や構想を繰り返し、体全体を働かせながら創造的な技能などを発揮していったり、自分の表したいことを、形や色、イメージなどを手がかりに、表し方を考えたり材料や用具を用いたりしながら作品に表していく。鑑賞の活動においては、形や色、作品などのよさや美しさを能動的に感じ取っていく。

表現主題を共有し、納得できる表現を追求するためには行動力が必要である。相互鑑賞でお互いのアイデアを紹介し合うためには対話力が欠かせない。また、共同製作等において友達と表現を調和させるには調整力が必要である。開かれた個の育成のためには、図画工作科において自分とは異なる他者を認識し、理解することや、自己の存在を見つめ、思考することが必要である。自分らしさを表現しながらも友達のアイデアのよさを採り入れるためには、特に調整力が大切であると考え。



【図1 図画工作科における「開かれた個」】

2 主題の意味

柔軟に造形表現するとは、感じたこと、想像したこと、見たこと、伝え合いたいことなどの表したいことを表しながらも、新たな発想や構想を活かし、よりよいものを目指して行き戻りしながら、つくりかえていくことである。友達と共に柔軟に造形表現するとは、鑑賞活動を通して友達と積極的に交流し、お互いのアイデアのよさを採り入れ、表現と鑑賞を連続させながら自分らしい表現を翻案（アレンジ）することである。共同製作においては、それぞれのアイデアを活かして自分らしく表すとともに、友達調整したり、折り合いをつけて周りとの表現を調和させるための表現の翻案をすることも必要になってくる。そこで、よりよいものを目指して積極的につくりかえることが大切であると考え。

○ しなやかに造形表現する図画工作科学習で目指す姿

【豊かな学力】

- 形や色などをとらえること、及び自分のイメージをもつことができる。 （知識・技能）
- 想像力を働かせて発想や構想し、様々な表し方を工夫したり、作品のよさや美しさを感じ取ることができる。 （思考力・判断力・表現力）
- 創造的に表現や鑑賞をし、つくりだす喜びを味わうことができる。 （関心・意欲・態度）

【人と働く力】

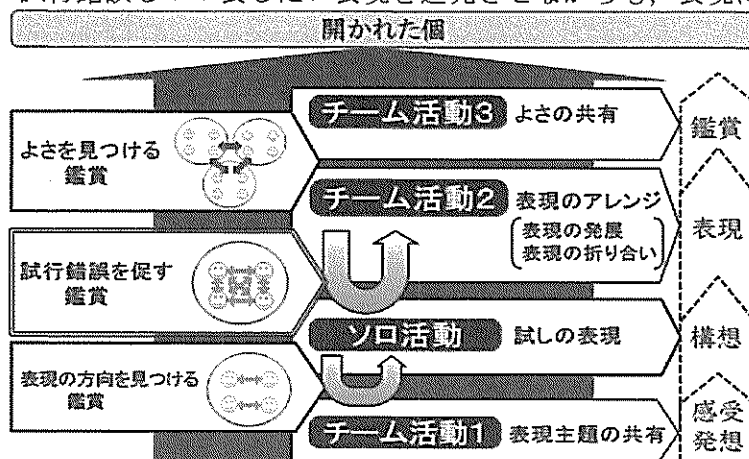
- ◎ 友達のアイデアのよさを採り入れ、つくりかえることができる。 （調整力）

ソロとチームを効果的に組み合わせた学習過程

図画工作科部 合 田 賢 治

3 副主題の説明

ソロとチームとは、表現活動を行う個々と同じ表現主題の実現に向けて編制された小集団のことである。ソロとチームを効果的に組み合わせるとは、五感を通して情報をやり取りさせ、表現と鑑賞を一体化して、ソロ活動とチーム活動とを活発に行き来させ表現を高めることである。個の表現を自分のチームの表現と比較し、よさを採り入れ、全体を調和させるために折り合いをつけたり、新たな発想を引き出し発展させたりする表現のアレンジをすることで、個とともにチームの表現を高めるためには鑑賞活動の位置付けが必然となる。鑑賞の交流の範囲は、第一段階はチーム内の一部の友達同士であり、第二段階はチーム内、第三段階はチーム間で行うことができると考える。特にチーム内で、一人一人の発想のよさが生かされるように試行錯誤しつつ表したい表現を追究させながらも、表現に折り合いをつけたり発展させたりしていく第二段階での鑑賞が大切である。個々がアイデアを出し合い、特徴のある表現を生み出し高め合うことは、表現意欲を刺激し創造性を高める。さらに一人では思い付かないような新たな発想を引き出し、全体の表現を高めることに有効に働くと考える。また、お互いの表現を調和させるために自分らしい表現をアレンジして柔軟につくりかえることは、他者認識、自己認識の力などコミュニケーション能力の育成にもつながると考える。



【図2 ソロとチームを効果的に組み合わせた学習過程】

4 具体的な方途

(1) 学習過程の工夫

まず、感受・発想段階のチーム活動では、表すものの別に分かれたチーム内で交流しながらテーマに沿って発想する。次に構想段階のソロ活動で、個々で試しの表現を行う。さらに表現段階のチーム活動ではそれぞれが見つけたアイデアを鑑賞によって調整し、試行錯誤しながらよりよい表現を追究していく。表現しながらも段階的に相互鑑賞することでよさや面白さを採り入れていく。鑑賞段階のチーム活動でお互いの表現のよさに目を向ける。

(2) シンキングツールの工夫

表したいことを工作に表すことにおいては、表したいこととは表現するテーマや操作した際の動きの面白さなどの創造的な技能を生かした工夫が主である。そこで、動きがにつながるかどうか確かめられるように「動きの連続性」の目標を設定する。更にイメージは容易でも表すのは難しい「動きの大きさ」を目標にして考えさせる。チームごとに2つの目標がクリアできるように、ICTを活用したシンキングツールを用いて確認しながらアイデアを具体化することができると考える。

表現過程	活動の様相	価値
鑑賞段階	チーム	お互いの表現のよさに目を向け、つくりだす喜びを味わうことができる。
表現段階	チーム	友達のアイディアを採り入れ、試行錯誤しながらよりよいものにつくりかえることができる。
構想段階	ソロ	一人一人が思いついたアイデアを試し、イメージを具体化することができる。
感受・発想段階	チーム	表現主題を共有し、様々な考えから発想を展開することができる。

【図3 活動の様相と価値】

第5学年 題材

スローモーションで
表そう!
～スポーツの決定的瞬間～

(1) 題材でめざす姿

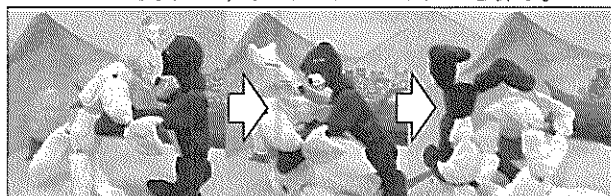
- 身に付けてきた造形や彩色の経験をもとに、自分のつくりたいものの具体的なイメージをもち、表現することができる。(創造的な技能)
- 材料・用具の使い方、動きの出し方、場面のつなげ方について試行錯誤しながら考え、様々な表し方を工夫したり、作品のよさや美しさを感じ取ったりすることができる。(発想・構想、鑑賞の能力)
- 材料や用具の特徴を考えてつくった経験を生かし、楽しんで場面を表現することができる。(関心・意欲・態度)
- ◎ 友達のアイデアのよさを採り入れ、つくりかえながら表現を調和させることができる。(調整力)

(2) 学習の流れと考察

導入段階：1／9時

「スローモーションで表そう！スポーツの決定的瞬間」について意見を出し合う。

- (1) スポーツの決定的瞬間をアニメーションにした参考作品を見て、表す場面の方向性について話し合う。
- (2) 同様のイメージをもった友達とチームをつくり、テーマを決めて、担当ごとにアイデアを練る。



キツネと熊が組み
合って(柔道)

引っ張りながら
体重を移動させ

投げ飛ばす
(巴投げが決まる)

資料1 参考アニメーション



本当に動いて
るみたい。

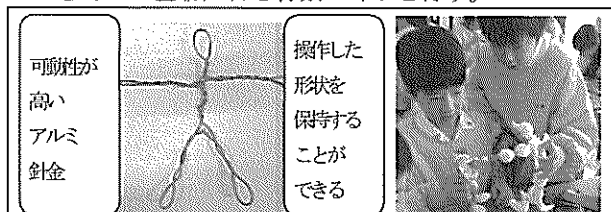
ぼくも動物が登場するアニメーションをつくりたいと思います。スポーツはサッカーにしたいです。決定的瞬間は、シュートシーンにしようと思います。

写真1 早くつくりたいね。資料2 導入時のA児の感想

展開段階：2～6／9時

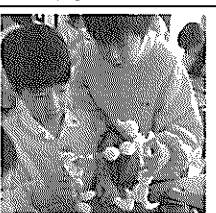
チームで協力して登場人物と背景をつくる。

- (1) 自分のつくりたい決定的瞬間場面について、絵や言葉に表してみる。
- (2) 担当間でアイデアを交流する。
- (3) 厚紙や色画用紙、紙粘土、針金などの材料の特徴を考えて登場人物と背景づくりを行う。



可動性が
高い
アルミ
針金

操作した
形状を
保持する
ことが
できる



資料3 針金芯材

写真2 腕の高さを合わせよう。

導入段階では、自分たちがイメージした決定的瞬間をアニメーションにするという目的を共有し、どんな動きのテーマで場面を連続させるか構想することをねらいとしている。そのためにわかりやすく、活動の見通しが立てやすい参考作品の提示を行い、100枚以上の静止画をコマ送りすることでアニメーションができるということを子どもに理解させた。子どもたちはわずか数秒のアニメーションを繰り返し見て、登場人物の動きを確かめていた。

考察1

どのような作品をつくるのかという具体的なイメージを湧かせるために、登場人物の体が自由に大きく動き、少しずつ動きが連続するように動かしながら撮影した参考作品(写真1)を最初に提示したことが有効であったと考える。それは、資料2のように水泳、やり投げ、バスケットボール、卓球、テニス、野球、サッカー、アーチェリーなどの具体的な動きをイメージしたテーマを決めて構想していることから見ることができる。

展開段階では、登場人物の動きの大きさや勢い、連続性に絞ってアイデアを考えさせ、表現に活かすことをねらいとしている。そのために、動きの大きさと勢い、前後のつながりに限定した構想活動の設定を行った。その際、シンキングツールとして、簡単に形が変えられそのまゝの形状を保持できるアルミ製の針金芯材(資料3)を提示した。子どもたちは動きを確かめながら操作することができた。さらに紙粘土で肉付けさせていくときは、体の動きをつくることができるように、関節部分が可動するように粘土をつけさせた。子どもたちは、いろいろな動きを確かめた後、関節部分に厚く粘土がつかないように気をつけながら肉付けすることができた。

考察2

可視性のあるモデルを使って動きを試してみたり、チーム内で動きの大きさと勢い、連続性について交流させたりしたことが有効であったと考える。それは、登場人物を組み合わせさせて動きを調整しようとする姿(写真2)や動きの連続性をストーリーの流れに沿って確かめている姿から見て取れる。

発展段階では、それぞれの担当でつくった登場人物を配置し、少しずつ動かしながら撮影した。その際、目標に向けて構想するチーム活動1、試しながら表現するソロ活動、相互鑑賞しながらアイデアを調和させるチーム活動2、互いの表

発展段階：7～9／9時

撮影してアニメーションをつくり、お互いの作品のよさや面白さについて話し合う。

- (1) 動きが連続するようにそれぞれがつくった登場人物を配置し、少しずつ動かしながら撮影する。
- (2) それぞれのチームで表現意図を説明し合いながら鑑賞し、違いやよさを認め合いながら話し合う。

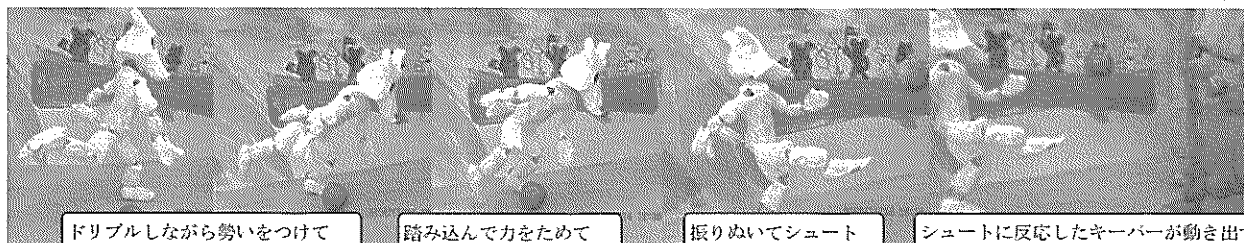


資料4 チーム活動1の姿

資料5 ソロ活動の姿

資料6 チーム活動2の姿

資料7 チーム活動3の姿



資料8 動物サッカーチームのシュートシーン

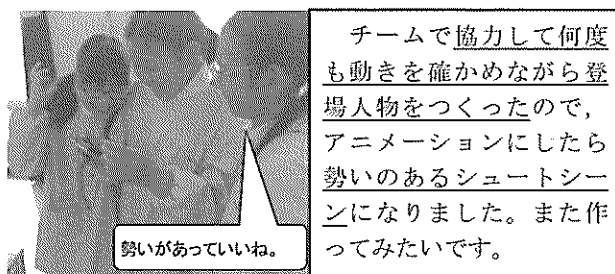


写真3 動きが面白い。

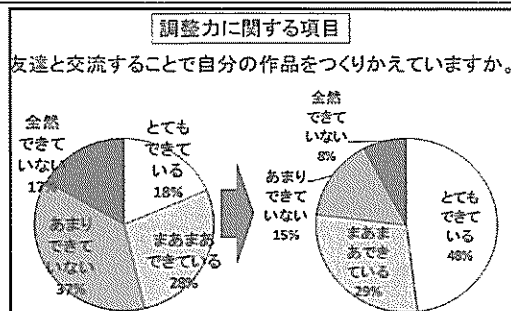
資料9 B児の感想

考察3

チームごとに動きを確認させたり、シンキングツールとしてデジタルカメラを用いて連続性を確認させたりしたことが資料8のダイナミックな作品づくりに有効であったと考える。これは、思いつかなかったアイデアにふれることによって発想が刺激されたり、つながりを考えたり動きの大きさを図ったりするための基準が明確になったりしたためである。しかし、チームとしての意識はあったが個としての意識が弱く課題として残った。その理由として、それぞれが独立した表現を行っていなかったためだと考える。

【全体考察】

考察2と考察3からわかるように、担当ごとにチームのテーマに沿った特徴のある表現を構想し、鑑賞し合いながら、試行錯誤してチームの表現を追究する姿が見られた。(思考力・判断力・表現力、対話力、調整力、行動力) これは、表現と鑑賞を一体的に行う活動構成が有効であったからだと考える。また、完成したアニメーションは、大きく勢いのある表現や前後の場面をつなげるために動きに気を付けてつくったことがわかる。このことから、アイデアの具体化を確認することができ、チームで発想を刺激するICTを活用した相互鑑賞が有効に働き、開かれた個の育成につながったと言える。



資料10 調整力の変容

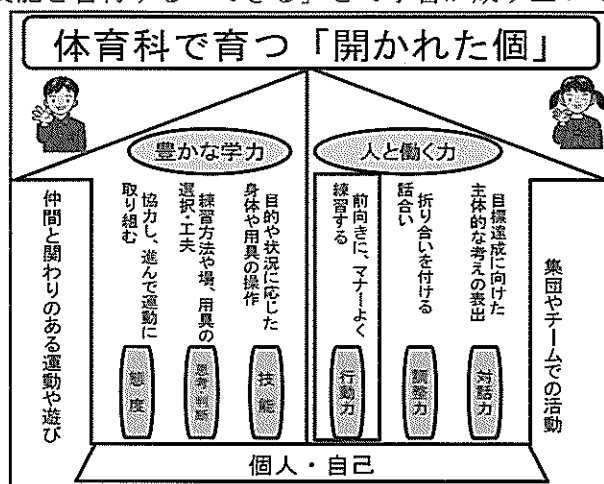
ともに動きを築く体育科学習

体育科部 緒 方 勝 彦

1 体育科における「開かれた個」とは

体育科が担う役割は、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを目指す資質や能力の基礎を養うことである。そのために学力として、運動を通して基礎的な知識及び技能を習得させ、これらを活用して課題を解決するための思考力・判断力・表現力を身に付けなければならない。言語活動を伴い運動知識を理解する「わかる」と、運動技能を習得する「できる」とで学習が成り立っており、仲間と「かかわる」ことを通して体を動かす楽しさを追究する教科である。

また、先に述べた「豊かな学力」は、仲間とかかわることで効果的に育まれる教科特性をもつ。とりわけ、前向きに練習をするという「人と働く力」としての「行動力」が目指されるべきである。仲間とのかかわりで生じる「課題的・情的コミュニケーション」を大切に、動きが「わかる・できる」楽しさを身に付けてこそ、生涯にわたり運動に親しむ子どもが育つとともに、本校が目指す社会に貢献する「開かれた個」としての人格が、体育科の中で形成されと考える。すなわち、仲間とマナーよく練習に取り組む行動力を高めることが、運動の楽しさを実感することにつながるのである。



【図1 体育科で育つ「開かれた個」】

2 主題の意味

体育科は、大きく個人的運動と集団的運動の2つの領域を有する特徴がある。どちらの領域においてもチームワークを位置付け、ともに運動する仲間（チーム）と運動者（ソロ）を高めていく学習を目指していく。ともに動きを築くとは、必然性をもって運動や遊びに浸りながら、機械的に身体やものを操作するのではなく、運動場面の状況に応じた動きや意図的な動きを教材や他者とのかかわりの中で見出し、身体を操作することである。ともに動きを築く体育科学習とは、目標達成のために仲間と論理的に思考・判断したり、知識を使ったりして身体やものの操作を見出し、身に付ける学習である。そこでは、子どもが自己実現するために、教材や他者、自分とのかかわりが密に行われ、言語活動を介して表現する姿が見られる。そのためには、課題が明確で、身に付ける動きが運動のもつ機能的特性を味わいながら追究できるものであること（わかる楽しさ）、論理的な思考と実践的な動きを通して、実用的な動きを身に付けるものであること（できる楽しさ）、集団のもっている知識や動きを交流し、より価値あるものにしながら所属感や達成感を味わうものであること（かかわる楽しさ）が必要である。

○ ともに動きを築く体育科学習で目指す姿

【豊かな学力】

- 目的や状況に応じて身体を効果的に使ったりものを操作したりすることができる。（技能）
- 目標達成につながる練習方法や場、用具を選択・工夫したり、動きのポイントを友達と伝え合ったりすることができる。（思考・判断）
- 仲間と励まし合い助け合いながら、進んで運動することができる。（態度）

【人と働く力】

- ◎ 運動の目的達成に向けて、仲間と課題的コミュニケーションや情的コミュニケーションを行いながら、前向きにマナーよく練習することができる。（行動力）

戦術アプローチモデルを取り入れた学習の展開

体育科部 緒 方 勝 彦

3 副主題の説明

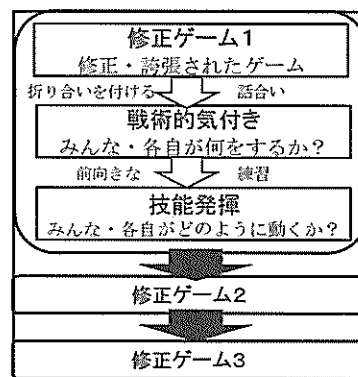
戦術アプローチモデルを取り入れた学習の展開とは、サポートにつながる戦術的気付きを促すゲームを段階的に提示し、それをもとに、メンバーが役割を意識して動きを高めていく学習である。ボール運動領域の学習では、ボールを操作する動きとともにボールを持たない人の動きが重要であり、攻撃優位状況をつくり出すためには、作戦を論理的に考え、役割を意識してチームで動かなければならない。そこで、戦術的気付きを3段階に分け、単元の展開段階に修正ゲームとして取り入れ、技能発揮を促すのである。

修正ゲーム1：数的優位状況に気付かせ、できるようにする。

修正ゲーム2：空間的優位状況に気付かせ、できるようにする。

修正ゲーム3：優位状況を論理的につくことに気付かせ、できるようにする。

戦術的気付きや技能発揮を促すことは、体育科で必要な技能や思考・判断を高めるとともに、仲間と前向きに練習に取り組む行動力を育み、ともに動きを築く子どもを育てる上で意義がある。そのために、明確な目標設定、段階的にサポートの動きが身に付くチームとソロの活動を組み合わせた活動構成、作戦と動きのつながりを可視化できるシンキングツールの活用が必要である。

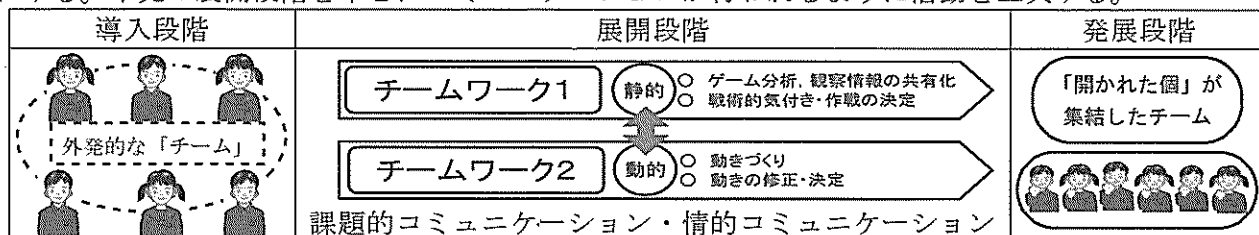


【図2 戦術アプローチによる学習モデル】

4 具体的な方途

(1) チームの活かし方

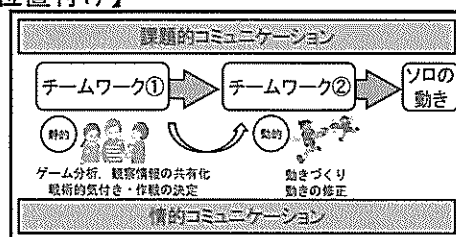
ボール運動領域で、作戦（目標）を明確にして、双方向性のコミュニケーションを行う「チーム」にする。単元の展開段階を中心にコミュニケーションが行われるように活動を工夫する。



【図3 単元におけるチームワークの位置付け】

(2) 学習過程の工夫

まず試しのゲームをもとに動きを分析し、チームの動きが高まるように観察情報を共有化して、作戦を静的に話し合い（チームワーク1）、実際に動きながら動的に作戦にもとづく動きづくりを行う（チームワーク2）。この活動を繰り返すことで、行動力と体育科の内容としての動きが高まっていく（図4）。



【図4 チームワークの仕組み】

本時で共有化を図る作戦や動きをボードで操作して可視化するシンキングツールを用いる（図5）。マグネットで操作性をもたせ、構造的に動きを思考することで動きの手順や役割が明確になり、得点のための論理的思考にもとづいた動きが可能となる。ツールに向かい合うことはコミュニケーション能力の育成にもつながり、チェック表も添えることで、作戦遂行状況が評価できる。



【図5 シンキングツール】

(1) 単元でめざす姿

第5学年 単元

つないでトライ!

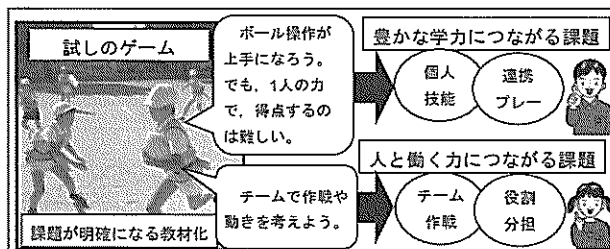
ラグビー
(ボール運動)

- トライにつながるボール操作やボールを持たない動きを、状況に応じて行うことができる。(技能)
- 戦術的課題に応じた動きや作戦を、作戦ボードや動きの交流を通して考えることができる。(思考・判断)
- 役割を分担して、進んで仲間と運動をしようとする。(態度)
- ◎ 仲間と課題的・情的コミュニケーションを行いながら、作戦を遂行するための練習を行うことができる。(行動力)

(2) 学習の流れと考察

導入段階： 1～2/9時

ラグビーに出合って試しのゲームを行い、得点するための課題について話し合う。



資料1 試しのゲームでの課題づくり

展開段階： 3～7/9時

戦術的気付きや作戦を話し合い、動きを高めながらラグビーをする。

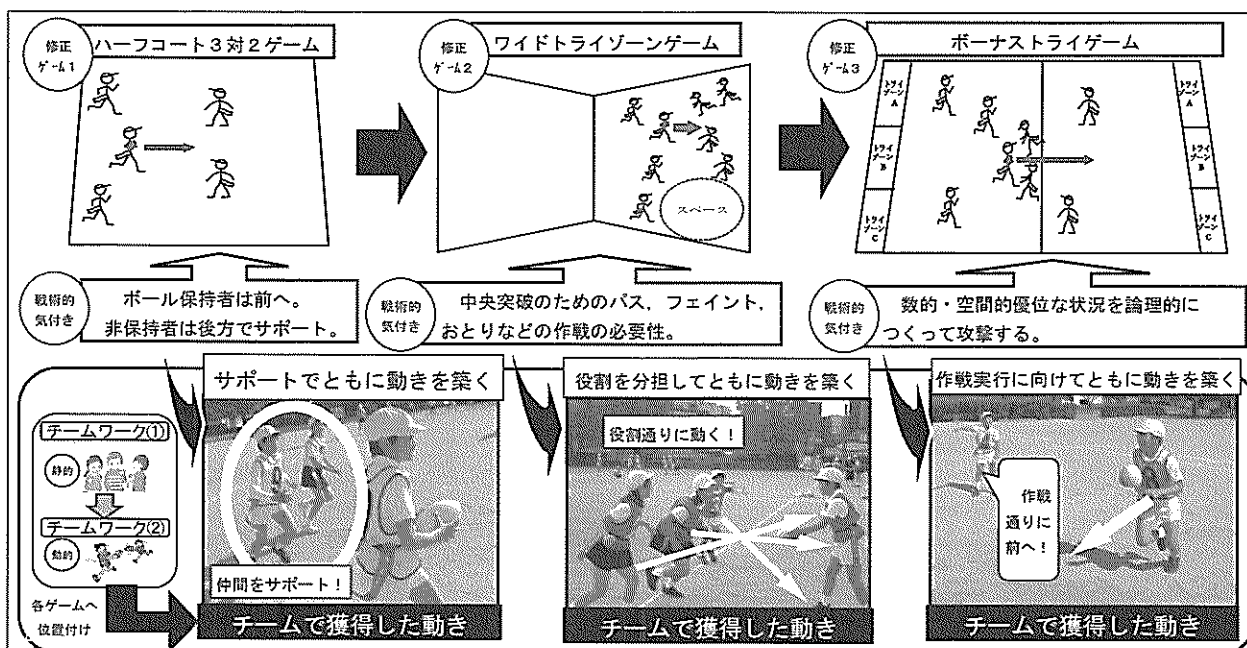
- (1) 数的優位な状況でボールを運ぶ、つなぐ動きを考えて修正ゲームをする。
- (2) 空間的優位の状況で、たくさん得点する作戦をチームで話し合い、作戦を活かしてゲームをする。

導入段階では、ラグビーに出合って、トライするための自分たちのチームの課題をもち、たくさん得点(トライ)したいという思いを膨らませることをねらいとしている。そのためにチームで協力して、一人一人の動きを高めていくことが大切なことに気付かせる試しのゲームを行った。このことで子どもは、協力してプレーをすることの大切さに気付き、「チームで作戦を考えてゲームをしたい。」という思いをもった。その時の子どもの思考を示したのが資料1である。

考察1

豊かな学力・人と働く力につながる課題に気付かせる上で、試しのゲームをさせたことが有効であったと考える。それは、資料1のように協力や役割分担が必要となる運動教材の提示とルール設定が上手く働いていたからである。

展開段階では、作戦や動きの習得、動きの状況判断を高めることをねらいとしている。そのために、戦術的気付きを促し、戦術的課題が鮮明になるように修正したゲームを段階的に3つ提示し、シンキングツールであるグリッド作戦ボードで動きや作戦を考えさせ、実際のゲームで達成具合を評価させた。このことで子どもは、チームの中で双方向の課題的コミュニケーションと情的コミュニケーションを旺盛に行い、技能の獲得を行うことができた。それが資料2・3である。



資料2 段階的な修正ゲームの提示と表出した動き



資料3 チームワークを通じたコミュニケーション



資料4 役割と動きを可視化した作戦ボードと実際の動き

発展段階: 8~9/9時

5の1タグラグビー大会を開き、これまで高めてきた動きの成果について話し合う。

- (1) 5の1タグラグビー大会をする。
- (2) チームや一人一人の動きの高まりについて話し合い、評価をする。

みんなでボードに集まり、オリジナル作戦を練りました。そして、作戦ができたなら、試して練習しながらまた話し合いました。作戦が成功するとみんなで喜び合って楽しかったです。攻撃するための役割や協力の大切さが分かったし、チームのみんなで敵がいけないスペースを探して攻撃することができました。

資料5 大会を終えて、わかる・できる・かかわるを実感している児童の感想

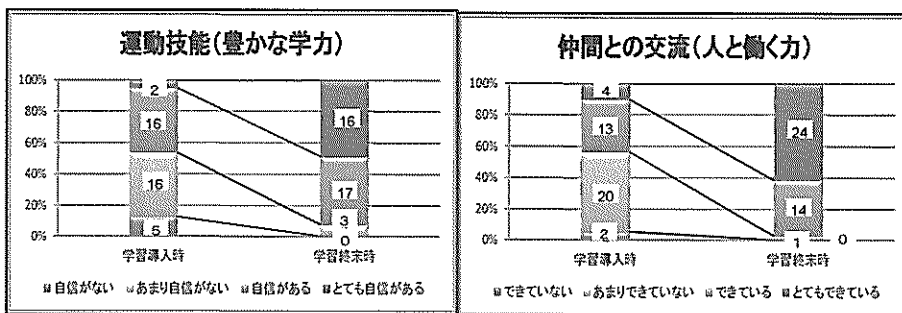
発展段階では、これまで高めてきた動きの成果を出して、自分のチームや相手のチームの特徴に応じた作戦を立ててゲームをすることをねらいとしている。そのためにメインゲームでの総当たり大会を行った。子どもは、これまで身に付けた動きを発揮して、大会を楽しむことができた。そして、大会を終えてともに動きを築いたことへの高まりを実感しているのが資料5である。

考察3

ともに動きを築いたよさを実感させる上で、総当たりの大会を行うとともに、動きの高まりについて評価させたことが有効に働いたと考える。また、戦術的気付きを促し、戦術的課題が鮮明になるように修正したゲームを段階的に提示したことで、子どもは動きに自信をもてるようになるとともに、チームへの意識が高まったからだと考える。

【全体考察】

考察2・3からわかるように、子どもは課題的・情動的コミュニケーションを行い、動きを身に付ける姿が見られた。これは、チームで作戦を考えて実行するというゴール像を設定し、可視化・操作化の可能なシンキングツールを用いた2つのチームワークの展開が有効だったと考える。単元前と比較し、学級全体で動きの獲得とチーム意識の高まりを感じていると言える(資料6)。このことから、戦術的気付きを促し戦術的課題が鮮明になる修正ゲームを段階的に提示する学習モデルが有効に働き、ともに動きを築くことができたと言える。



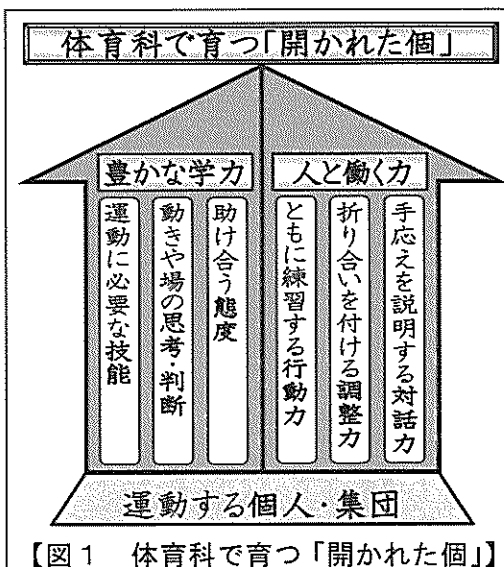
資料6 豊かな学力としての技能、人と働く力としての行動力の変容

動きを築き合う体育科学習

体育科部 平井源樹

1 体育科における「開かれた個」とは

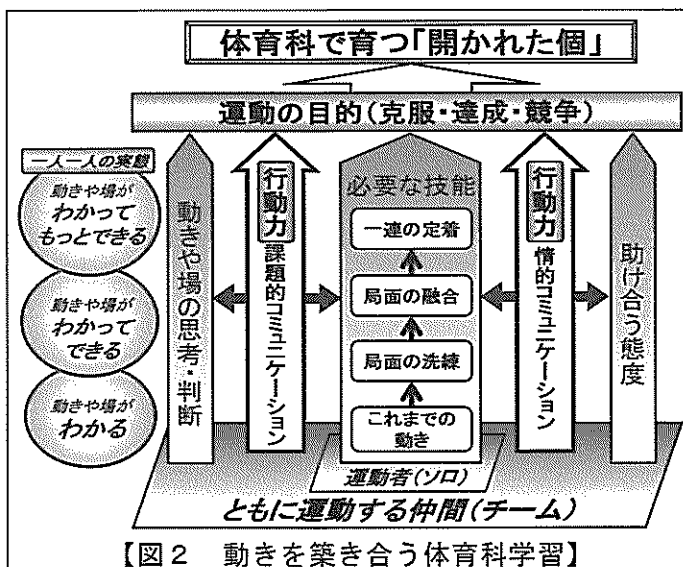
体育科が担う役割は、豊かなスポーツライフをめざす資質や能力の基礎を養うことである。そのために、基礎的な技能を習得させるとともに、課題を解決するための思考力、判断力を身に付けなければならない。また、言語活動を伴った運動知識を理解する「わかる」と、運動技能を習得する「できる」とで学習が成り立っており、仲間と「かかわる」ことを通して体を動かす楽しさを追究する教科である。このことから、仲間とのかかわりの中で動きに気付き、わかり、できるようになる「行動力」が目指されるべきである。仲間とのかかわりで生じる「課題的コミュニケーション」と「情的コミュニケーション」を大切にし、動きが「わかる・できる」楽しさを身に付けてこそ、生涯にわたり運動に親しむ子どもが育つと考える。このようにして、本校が目指す、社会に貢献する「開かれた個」としての人格が、体育科の中で形成されていくと考える（図1）。



【図1 体育科で育つ「開かれた個」】

2 主題の意味

個人種目型の運動領域では、ともに運動する仲間（チーム）と、運動者（ソロ）を高め合う学習を目指す。動きとは、目的に合うように、身体を操作したり変化させたりすることである。動きを築き合う体育科学習とは、ともに運動する仲間と課題的コミュニケーションと情的コミュニケーションを行いながら、一人一人の動きや場の実態を「わかる」「わかってできる」「わかってもっとできる」に段階的に高めていくことである。（図2）。課題的コミュニケーションは一人一人の技能と思考・判断を、情的コミュニケーションは一人一人の技能と態度を相乗的に高めながら、仲間とともに「わかる」と「できる」をつないでいく大切な行動力となる。



【図2 動きを築き合う体育科学習】

○ 動きを築き合う体育科学習で目指す姿

【豊かな学力】

- 目的や状況に応じて身体を操作したり変化させたりすることができる。（技能）
- 自分の実態に合った運動の課題をとらえ、練習の場を選んだり工夫したりしながら、動きの高め方を考えることができる。（思考・判断）
- 仲間と励まし合ったり助け合ったりしながら、進んで運動することができる。（態度）

【人と働く力】

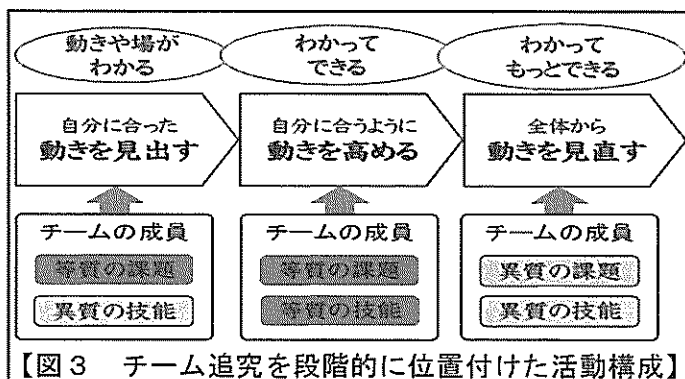
- ◎ 運動の目的達成に向けて、仲間と課題的コミュニケーションや情的コミュニケーションを行いながら、一人一人の動きを高め続けることができる。（行動力）

チーム追究を段階的に位置付けた活動構成

体育科部 平井源樹

3 副主題の説明

チーム追究とは、役割を分担して動きを観察し、高まりや課題、練習の方向性を見出すことである。体育科の学習では、自分の動きを見取ることが困難であるため、仲間との観察が有効に働く。このチーム追究を繰り返し行うことで、一人一人に合った動き方や運動の場が見出され明確になることが期待できる。チーム追究を段階的に位置付けた活動構成とは、動きや場についての「わかる」「できる」が転移するように、チームの成員の構成を変えながら、単元の展開段階にチーム追究を位置付けた活動構成のことである（図3）。「動きを見出す場面」では、同じ課題、違う技能で構成して、得意な子が苦手な子に教えることをきっかけに、動きや場がわかるようにする。「動きを高める場面」では、同じ課題、同じ技能で構成し、わかったことを活用して練習しながら、わかってできるようにする。「動きを見直す場面」では、違う課題、違う技能で構成して、新たな課題を見出し解決しながら、動きをさらに高める。こうすることで、成員同士のコミュニケーションも活発になり、豊かな学力とともに人と働く力も高めることができる。



【図3 チーム追究を段階的に位置付けた活動構成】

4 具体的な方途

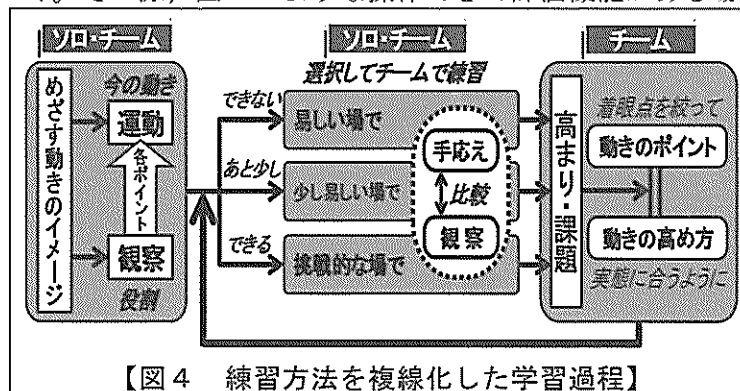
(1) チームの活かし方

単元の展開段階のチーム編制を、下表のような価値をもたせて行う。

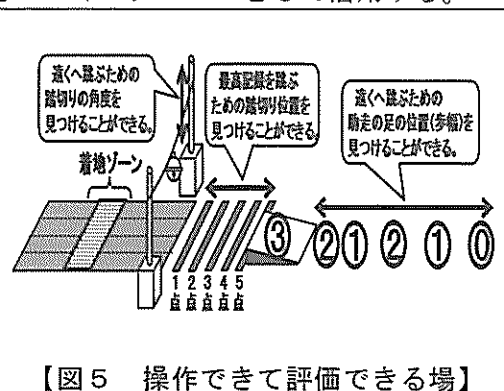
場面	動きを見出す場面	動きを高める場面	動きを見直す場面
形態	等質の課題、異質の技能	等質の課題・技能	異質の課題・技能
価値	得意な子が苦手な子に教えることをきっかけに、動きや場について「わかる」を共有することができる。	成員の立場が近いので運動量が保障でき、見出したことを活かして練習し「わかってできる」に高めることができる。	様々な立場から見直すことができるので、新たな課題を見つけて修正しながら、動きをさらに高めることができる。

(2) 学習過程の工夫

個人種目型の運動では、自分で運動感覚を見出す運動者としてのソロ、運動者と観察者が一体となって高まりや課題を見出すチームが、同時に存在しながら追究を行う。特に、単元展開段階では、一人一人の実態に応じて動きが高まるように、図4のような複線化した学習過程で一単位時間を行っていく。その際、図5のような操作できて評価機能がある場をシンキングツールとして活用する。



【図4 練習方法を複線化した学習過程】



【図5 操作できて評価できる場】

(1) 単元でめざす姿

第3学年 単元

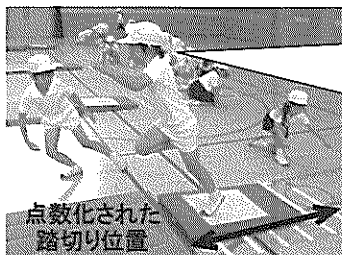
チーム対抗ねらい幅跳び
(走・跳の運動)

- 短い助走から調子よく踏み切って遠くへ跳ぶことができる。(技能)
- 自分の実態に合った運動の課題をとらえ、練習の場を選んだり工夫したりしながら、動きの高め方を考えることができる。(思・判)
- 仲間と励まし合いながら、進んで運動することができる。(態度)
- ◎ 仲間と課題的コミュニケーションと情的コミュニケーションを行いながら、一人一人の動きを高め続けることができる。(行動力)

(2) 学習の流れと考察

導入段階：1～2/7時

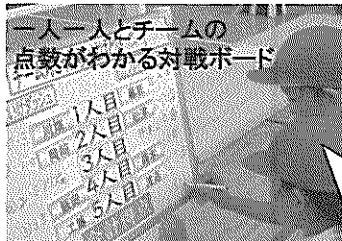
最初のねらい幅跳び行い、体感したことや楽しんだことをもとに、学習の見通しについて話し合う。



利き足を見つけて、リズムに乗った気持ちよい助走をすると、遠くに跳べそう。練習してもっと遠くへ跳べるようになって、よい点数をとりたくな。

豊かな学力につながる「個人技能」の課題

資料1 ねらい幅跳びに出合っの課題



チーム同士で競争するとはらはらどきどきしてもっと楽しくなるね。対抗戦で勝つために、チームで協力して、みんなが少しでも遠くへ跳べるようにしたいね。

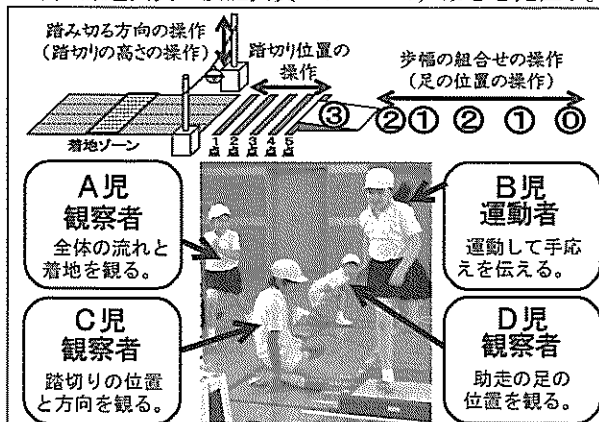
人と働く力につながる「仲間との行動力」の課題

資料2 チーム対抗戦をやってみての課題

展開段階：3～5/7時

チームで一人一人の練習にかかわって、一人一人の動きを高めながら、チーム対抗ねらい幅跳びを行う。

- (1) 課題等質・技能異質のチームで、動きを見出す。
- (2) 課題等質・技能等質のチームで、動きを高める。
- (3) 課題異質・技能異質のチームで、動きを見直す。



資料3 抽出チームの成員と役割分担

導入段階では、ねらい幅跳びと出合わせて、チームで一人一人の動きを高めながら、チーム対抗戦を楽しむ学習の見通しをもたせることをねらいとしている。そのために、まず、点数化された踏み切り位置を選んで、着地位置をねらって跳ぶねらい幅跳びに出合させた。少しでも高い点数を跳ぼうと、利き足を見つたり、いろいろな助走のリズムを試したりして挑戦しながら、ねらい幅跳びを楽しむ姿が見られた。その時の子どもの思考を示したのが資料1である。そして、チーム全員の合計得点で競争するチーム対抗戦を行わせた。チームの勝利をめざして、集中して跳ぶ姿、仲間が跳ぶ姿を一生懸命応援する姿が見られた。その時の子どもの思考を示したのが資料2である。

考察1

豊かな学力としての「技能」につながる課題、人と働く力としての「仲間との行動力」につながる課題をもたせる上で、ねらい幅跳びと出合させたこと、チーム対抗リズム高跳びを行わせたことが有効であったと考える。それは、資料1のように点数化された踏み切り位置を選んで跳ぶ運動教材の提示、資料2のようにチーム全員の合計点数をもとに勝敗を競い合うルール設定が上手く働いていたからであると考えられる。

展開段階では、チーム対抗戦で勝つために、チームで一人一人の遠くへ跳ぶ動きを高めることねらいとしている。そのために、動きが段階的に高まるようにチーム成員の構成を変えながら、チーム追究をさせた。動きを見直す場面では、B児のチーム(資料3)は、運動の手応えがよくなかったら、一人一人のよかった動きをストックした「動きの財産表」から代替案を選んで練習した。運動の手応えがよくなったら、具体的に設置用具(メジャー、フープ)を操作しながら練習した。運動者の実態に合わせてチームで適切な練習方法を選んでシンキングツールを活用することで、課題的コミュニケーションと情的コミュニケーションを活発に行いながら、遠くへ跳ぶ動きを高める姿が見られた。それが、資料4である。

考察2

仲間と遠くへ跳ぶ動きを高める上で、仲間と観察しながら課題や高まりに応じて練習方法を選んで追究させたことが有効であったと考える。それは、運動者B児の課題や高まりに応じて練習方法を選択した姿(資料4)、チーム全員が課題的コミュニケーションと情的コミュニケーションを行った姿(資料4)、実際にB児が遠くへ跳ぶ動きを高めた姿(資料5)、A児とB児がチームでの追究に有能感と「わかる・できる」を実感した姿(資料6)からうかがうことができる。

ソロ・チーム
これまでの記録で気持ちよく跳ぶ練習

手応えがよくなかったら

観察

手応えがよくなったら

ソロ・チーム
新たに自分の記録を伸ばす練習

2点を跳べるけどどこちないから、歩幅の組合せを選び直そう。

B児

D児

動きの財産表

A児

課題的コミュニケーション

いいリズムでフワッと跳べているよ。歩幅の組合せは「広い・狭い・広い・広い」がいいみたい。

A児

B児

やったー、Bさん！何回やっても2点が気持ちよく跳べるようになったじゃない。

A児

B児

情的コミュニケーション

手応えがよかったなら、足の位置をここに変えた方がいいね。

B児

C児

D児

フープ

メジャー

課題的コミュニケーション

今の足の位置だと踏切りが強いよ。もう少しで3点も跳べそう。

B児

A児

C児

3点が跳べるようになったね。対抗戦でもこの調子だよ。

B児

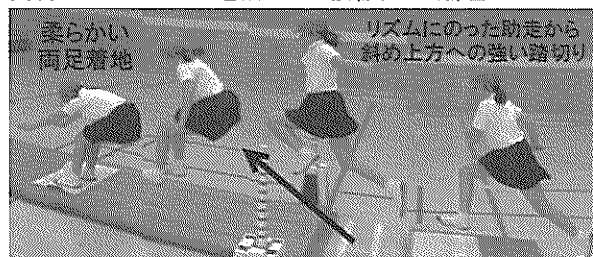
A児

C児

D児

情的コミュニケーション

資料4 ソロ・チームを活かした複線化した練習



資料5 第5時後のB児の高まった遠くへ跳ぶ動き

(A児) 自分が4点を跳べるようになったことよりも、Bさんが3点跳べるようになったのが、とてもうれしかった。対抗戦でも勝てたし、みんなで協力して練習することは、とてもすごいと思った。

(B児) Aさんが「広い・狭い・広い・広い」の歩幅を勧めてくれたので、気持ちいいリズムで跳べるようになった。そして、C君とD君がわたしのちょうどよい足の位置を見つけてくれたので3点も跳べるようになった。対抗戦も勝てたのでとてもうれしかった。

資料6 第5時後のA児とB児の感想

発展段階：6～7/7時

チームの成長を実感しながら、チーム対抗ねらい幅跳び総当り戦を行う。

総当り戦で、C1チーム全員が自分の最高の点数で何回も成功させることができました。C2みんながアピールポイントで言っていたように、チームのみんなと何回も話し合っ

資料7 C児の総当り戦後の感想

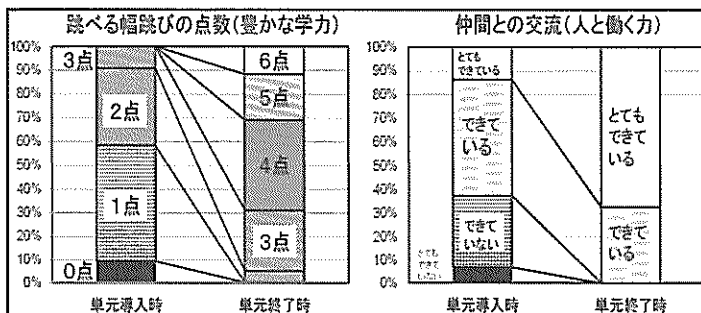
発展段階では、チーム対抗ねらい幅跳び総当り戦を行って、チームの成長を実感することをねらいとしている。そのために、対戦前にチームで一人一人のアピールポイントを交流させた。チームで高めた動きを発揮する姿、仲間の動きの高まりや取組の成果を喜び合う姿が見られた。

考察3

チームの成長を実感させる上で、アピールポイントの交流が有効であったと考える。それは、一人一人が動きを高めた資料7C1の姿、そのためにチームの仲間とコミュニケーションを行った資料7C2の姿として表れていた。

【全体考察】

考察2からわかるように、チーム全員が課題的コミュニケーションと情的コミュニケーションを活発に行いながら、動きを高めた姿が見られた。学級全体としても、豊かな学力としての技能、人と働く力としての仲間との行動力を高めた姿をうかがうことができる(資料8)。このことから、動きや場が「わかる」「できる」を転移するように段階的にチームをつくって練習する「チーム追究を段階的に位置付けた活動構成」が有効に働き、動きを築き合うことができたと言える。



資料8 体育科における豊かな学力と人と働く力の変容

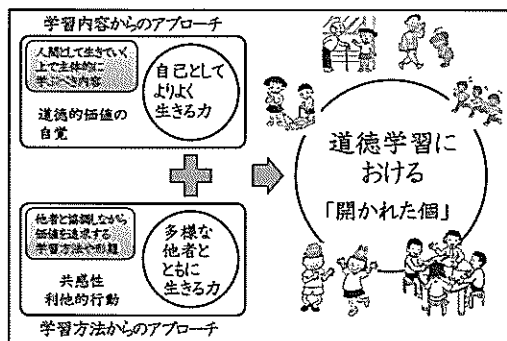
仲間とともによりよい自己像を求める道徳学習

道徳部 三 浦 研 一

1 道徳学習における「開かれた個」とは

21世紀は、「知識基盤社会」と言われ、そのような社会の変化に伴い、人間らしい気持ちが薄らいでいると感じられるような問題が、子どもたちを取り巻いているのが現状である。これから子どもたちを待ち受ける社会は、人間にとって新しい未知の状況へと突き進んでいく社会であるといえる。そのような社会の中では、様々な事象に対する道徳的な妥当性を自分自身で判断し、よりよい行為を選択していかななくてはならない。このような時代背景を考えたとき、道徳の時間を要として、子どもたちの心に道徳的価値の重要性をより明確にさせ、道徳的実践力を育てることが強く求められるのである。

社会の要請や道徳学習の特質を鑑みたとき、道徳学習は、子ども一人一人がよりよい生き方を求め、実践しようとする人間を育成することをねらわなくてはならない。従って、子どもたちが道徳的価値の大切さや重要性を自覚し、人間としての生き方を主体的に考え、求めていこうとすることが大切になってくる（学習内容からのアプローチ）。一方、道徳学習では、他者と協調しながら価値を追求する学習スタイルであることが多い。そこでは、共感性や利他的行動などといった資質が育まれる（学習方法からのアプローチ）。このことから、道徳学習における「開かれた個」とは、学習内容からのアプローチと学習方法からのアプローチが両輪となって、図1にあるように、「自己としてよりよく生きる力（豊かな学力）」と「多様な他者とともに生きる力（対話力）」を身に付けた子どもであると考えられる。



【図1 道徳学習における「開かれた個」】

2 主題の意味

よりよい自己像とは、かけがえのないただ一人の存在である自分を大切にし、かけがえのない存在である他者との関係の中で生きていくことのよさや大切さをとらえた姿のことである。仲間とともによりよい自己像を求めるとは、かけがえのない自分、かけがえのない他者を深く感じ、その両者がともによりよく生きていくための生き方を考え、価値を実現するための適切な行動を希求していくことである。一人一人が価値を実現しようとこれからの自己像をつくり出すことは、集団として望ましい価値観を追求していくことにつながる。その中で、子ども一人一人が高まり、集団の質も向上していく。つまり、個の高まりと集団の高まりを大切にするのである。仲間とともによりよい自己像を求める道徳学習とは、自分らしいものの見方や考え方を大切にすることで、ねらいとする道徳的価値に照らし合わせ、自分の考え方や行動のあり方を意欲的に探り、これからの自分のあるべき姿を他者とのかわりの中でつくり出していく学習のことである。子どもたちが道徳的問題に対して明らかになった価値観から自己を深く見つめることができれば、自分自身への見方が変わり、自分自身への見方が自己強化につながれば、その行動も変容していくと考えられる。

○ 仲間とともによりよい自己像を求める道徳学習で目指す姿

【豊かな学力】

- 道徳的価値の大切さを理解し、自分とのかかわりでとらえることを通して、よりよい生き方を希求することができる。（道徳的実践力）

【人と働く力】

- ◎ 道徳的問題を共有する仲間と協同（協働）しながら、自他の考えを深めたり、新たにつくり出したりすることができる。（対話力）

協同的な対話活動を位置付けた学習過程

道徳部 三 浦 研 一

3 副主題の説明

協同的な対話活動とは、問題意識を共有し、他者とかかわり合うことを通して、これまでの自分にはなかった見方・考え方に出会い、自分自身の中に新たな見方・考え方が形成されていく活動のことである。協同的な対話活動を位置付けた学習過程とは、友達とともに考えてみたいことを共有しながら、よりよい道徳の見方・考え方・感じ方について見直し、自他ともによりよく生きるための価値観をつくり出させるための過程のことである。この過程は、「追求すべき道徳的問題に気付く段階」、「自分の価値観を他者とともに深める段階」、「高まった価値観からこれまでの自分を見つめる段階」の3つの段階から構成されている。そのためには、チームの活かし方や、明確な目標設定、チームワーク、シンキングツールなどを取り入れた学習過程の工夫が必要である。

4 具体的な方途

(1) チームの活かし方

道徳学習では、ソロとチームとを往復するような学習が求められる。道徳学習において考えられるチームは以下になる。

【表1 道徳学習におけるチームの考え方】

ペア	対話力に重点を置き、互いの考えの共通点や差異点を認め合いながら考えをつくり出す。
小集団	調整力に重点を置き、考え方の違いを乗り越え、複数の観点から考えの妥当性について検討する。
学級全体	ペアや小集団での話し合いでつくり出した考えが、さらに大きな集団（学級）でも通用するかについて話し合う。

以上のようなチームを、学習する内容によって効果的に位置付けていくことが大切になる。子どもたちの問題意識が明確な場合は、目的的にチームが編制される。一方、子どもの生活体験がバラバラで問題意識が薄い場合には、方法的にチームが編制される。

(2) 学習過程の工夫

協同的な対話活動を位置付けた学習過程は、以下の表2のようになる。それぞれの段階において、明確な目標設定、ソロとチームの位置付け、シンキングツールの活用などが主な手だてとなる。

【表2 協同的な対話活動を位置付けた学習過程の工夫】

段階	気付く段階		深める段階		見つめる段階			
	対話への構え		発見		受容		自己変革	
学 習 活 動	ソロ		ソロ→チーム		チーム		ソロ	
	経	※ 他者と話し合えば解決の方向性を見出すことができる事象の提示		※ 他者とともに最適な考えをつくり出すシンキングツールの活用		※ これまでの自分を見つめ価値観の再構成		

(3) 主人公たちが顔を見合わせにっこりとほほえんだ理由についてペアで話し合い、全体で交流する。【チーム】

さらに、各自が道徳ノートに記述した考えをもとに、ペアでの対話活動を位置付けていった。そのときのA児とB児の対話活動の様子が資料4の発言記録である。

A児の発言	B児の発言
A 1 二人とも昼休み遊ばないでみんなのためにがんばっていたから。	B 1 ぼくはなぜかという、みんなが直してくれたから、本係もみんなもうれしくなるからだと思う。そうすると昼休みもあるから。
A 2 どうする。	B 2 いつもありがとうございます。いつも昼休み遊んでいる人も感謝している。迷ったもん。
A 3 みんなのことを考えているから、「本係さんががんばっているね」と言われるのが一番うれしい。	B 3 二人とも昼休み遊ばないでみんなのためにがんばっていたから。「いつもありがとう」が一番うれしかったと思う。
A 4 みんなのことを考えてやっていたんだもんね。	B 4 そうだね。いつも昼休みをなくして、みんなのために本を整理しているから。

資料4 ペアによる対話活動でのA児とB児の発言記録



写真3 2人がうれしい気持ちになったのは…。

係の仕事をがんばっていて、そのがんばりをみんなからほめてもらうとうれしい気持ちになって、もっとがんばろうって力がわいてきます。自分が書いた学級新聞を、友達が楽しそうに読んでくれるのを見ると、「やってよかった」という気持ちになって、もっと新聞を書こうと思ったことがあります。

豊かな学力

資料5 終末段階でのA児の振り返り

事後指導

係活動や当番活動などにおいて、「働いてよかった」と感じた体験について生活記録文に書きまとめ、交流する。

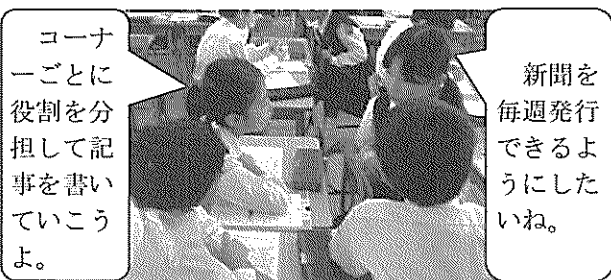


写真4 力を合わせて新聞を毎週発行しよう。

ペアによる対話活動後、全体での価値の追求把握を行う話し合い活動を行った。そのときの様子が写真3である。最後に、これまでの自分について振り返る活動を設定した。そのときのA児の振り返りが資料5である。

考察2

まず、子ども一人一人に対して、自分の考えを道徳ノートにつくらせ、その後ペアでの対話活動を設定したことは、道徳的な見方や考え方を広げたり、深めたりする上で有効であった。それは、前頁資料3のノート記述をもとにした、資料4の話し合いの様子からうかがうことができる。中でも、資料4の波線部には、自分の考えを相手に伝えたり、相手の考えを聞いたりする姿が現れている（対話力）。そして、その後の全体交流の場面では、写真3の吹き出し部分のように学習内容である本時のねらいとする道徳的価値の大切さについて把握している姿が見られた（豊かな学力）。このことから、全体交流が有効であったことがわかる。最後に、終末段階において、これまでの自分を振り返る活動を設定したことは有効であった。それは、資料5の中に、「把握した価値の大切さ」と「価値を自分とのかかわりでとらえている」の2点が表れているからである（豊かな学力）。しかし、対話力に直接的にかかわる手だてについて課題が残った。

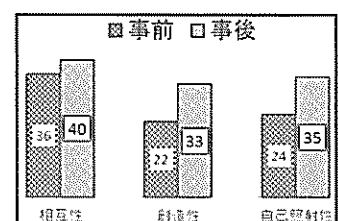
事後指導の段階では、自分の仕事への取り組み方について振り返ることをねらいとしている。そのために、係活動での目標設定の時間を設定していった。そのときの子どもたちの様子が写真4である。

考察3

係活動ごとに目標を設定し、評価する活動を位置付けていったことは自分の仕事の取り組み方を振り返らせる上で有効であった。それは、写真4の吹き出し部分にもあるように、係のメンバーがそれぞれに仕事に率先して取り組む姿が見られたからである。

【全体考察】

考察2からわかるように、子どもたちの姿から自分の考えを相手に話したり、相手の考えを聞いたりする姿が見られた（対話力）。これは、ペアによる対話活動を位置付けたことが効果的であったからである。さらに、事前と事後にペアでの活動のよさについて自己評価をさせたところ、右のような結果になった。また、対話力を発揮しながらの話し合いを通して、ねらいとする価値を把握する姿（豊かな学力）も見られた。このことから、協同的な対話活動を取り入れた学習過程の有効性が明らかになった。

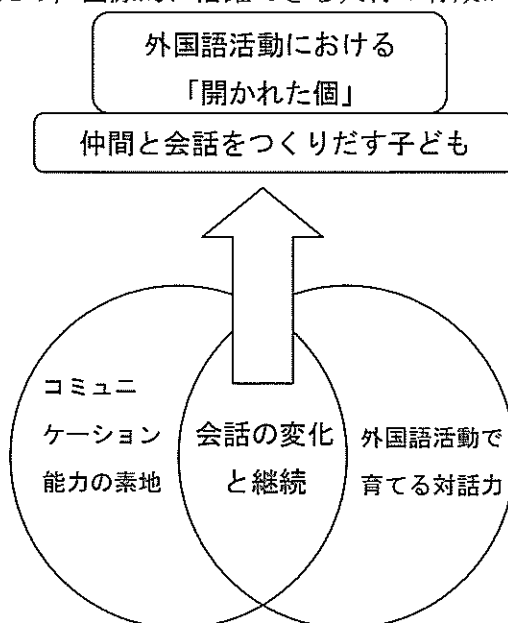


仲間と会話をつくりだす外国語活動

外国語活動部 棚 町 尚 子

1 外国語活動における「開かれた個」とは

現代の社会や経済はグローバル化が進み、多文化共生社会といえることができる。そして国際的なつながりや協力が重視されるようになってきている。そのため、国際的に活躍できる人材の育成が求められ、学校教育においても外国語教育を充実させることが重要視されている。平成20年の学習指導要領改訂で新設され、平成23年度より完全実施された外国語活動にはこのような社会を生き抜き、社会に貢献することができる日本人の育成への期待が込められていると言える。外国語活動に求められるものはグローバル社会に生きる子どもたちが誰とでもコミュニケーションをしようとする力を養うことである。自分から相手に働きかけたり、相手からの働きかけに反応したりすることである。そのためには、相手や話題への興味・関心をもつ柔軟な心や相手とコミュニケーションをしようとする意欲があること（情意面）、コミュニケーションをするために使えるような表現や方法を駆使してコミュニケーションを成立させようをすること（態度面）を育てていく必要がある。つまりコミュニケーションへの関心・意欲・態度とコミュニケーションを成立させるための対話力であると考えられる。



【図1 外国語活動における「開かれた個」】

2 主題の意味

会話をつくりだすとは、自分が伝えたいことを伝えたり相手に尋ねたりするために、①これまでに慣れ親しんだ外国語表現や表現方法の中から使えるようなものを選択して組み合わせること、②その表現や表現方法を使ってコミュニケーションをすることである。仲間と会話をつくりだすとは、これまでに慣れ親しんだ様々な表現や表現方法の中から話題に合っているもの、知りたいことを尋ねるために必要なものを選び、組み合わせる際に、なぜその表現がふさわしいのか、なぜその順序がいいと考えるのかなどについて仲間と話し合って決めていくことである。仲間と一緒に考えていくことで互いに教え合ったりチームの中でシミュレーションをしたりして、表現や表現方法の根拠を明確にしてコミュニケーションをすることができる。このような活動を繰り返していくことで会話を楽しむ体験を積み重ね、外国語活動の目標であるコミュニケーション能力の素地と、自分の伝えたいことを適切な表現を使って相手に伝えたり、相手が伝えようとしていることを聞いて受け入れようとしたりする対話力を身に付けていくことができると考える。

○ 仲間と会話をつくりだす外国語活動で目指す姿

【豊かな学力】

- これまでに慣れ親しんだ表現や表現方法からコミュニケーションの場にふさわしい表現や表現方法を選択することができる。（思考力・判断力・表現力）
- これまでに慣れ親しんだ表現や表現方法を駆使してコミュニケーションをしようとすることができる。（関心・意欲・態度）

【人と働く力】

- ◎ 友達と適切な表現や方法を話し合って、コミュニケーションを継続させようとすることができる。（対話力）

表現や表現方法を選択する活動を位置付けた学習過程の工夫

外国語活動部 棚 町 尚 子

3 副主題の説明

表現や表現方法とは、外国語でコミュニケーションを成立させるために必要な言語や非言語である。

表現や表現方法を選択するとは、これまでに慣れ親しんできた表現や表現方法の中から、相手に伝えたいことや教えてほしいことについて、自分が伝えたいことを伝えるために合っているものを選び、組み合わせしていくことである。そうすることで、新たに必要な表現も見えてくる。

表現や表現方法を選択する活動を位置付けた学習過程とは、コミュニケーションをするために必要な表現や表現方法を友達と話し合っって選択する活動を導入段階の後に位置付けたものである。導入段階でコミュニケーションに意欲や興味を抱いている子どもたちに、相手に伝えるために必要な表現や表現方法を選択させることで、会話の目的や内容が明確になり、外国語によるコミュニケーションが活発になると考える。選択するために話し合うことは以下の内容である。

①やり取りする情報	(例) 料金, 目的地までの行き方 など
②使える外国語の表現	(例) How much? How can I get to ~? など
③コミュニケーションの方法	(例) ジェスチャー, 指さし, 繰り返し など

A L TやJ T Eに加えて子ども同士のかかわりを通して表現の仕方を知ったり, 表現の仕方を変化させたり, 新しい情報を得たり, 評価をし合ったりすることができる。その体験が次はどのような表現を使って楽しいコミュニケーションにしていきたいかという動機につながることから, コミュニケーションを活発にすることができると考える。

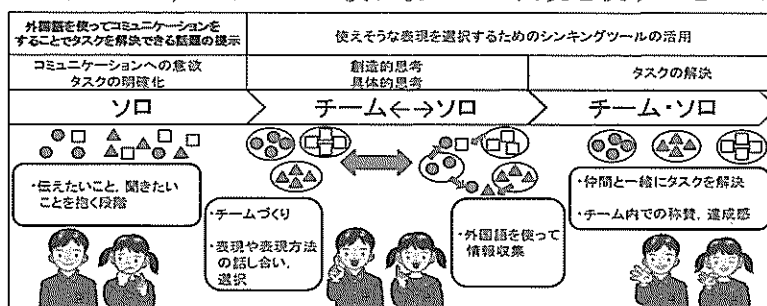
4 具体的な方途

(1) チームの活かし方

外国語活動では, 話し合う内容や解決する目的などに応じて構成を柔軟に変えていくことでコミュニケーションが活発になると考える。その際, チームワークとソロの活動を組み合わせることで情報の差を活かしたコミュニケーションをさせることができると考える。チームを活かした活動は①興味がある内容, 知りたい内容が似ているメンバーでチームをつくり, その情報を得るために必要な表現について話し合う (チームワーク)。②一人一人がコミュニケーションをして情報を集める (ソロの活動)。③それぞれが持ち寄った情報を集約してチームのタスクを解決する (チームワーク)。表現や表現方法を考えたり情報を共有してタスクを解決したりする場面でチームワークを行うことで, 仲間とともに活動するよさを味わわせることができると考える。

(2) 学習過程の工夫

表現や表現方法を選択してコミュニケーションをする学習過程では, 話題やコミュニケーションに必要な表現, 表現方法を可視化することが大切になる。そこで情報を整理・共有するコミュニケーションノートを位置付ける。会話の場面やそこで必要となるであろう表現にはどのようなものがあるかを整理したり, 集めた情報を共有したりすることで, これまでに慣れ親しんだ表現を使うことができるようにする。個の考えや収集した情報が集まり, チームで互いの意見や情報を共有していくことから, チームでの協働を実感することができると考える。音声面を重視する外国語活動において, 可視化された情報や伝達を助けるものが加わることでコミュニケーションが活発になると考える。



【図2 コミュニケーションに必要な表現や表現方法を選択する活動を位置付けた学習過程】

第6学年 単元

チームでシンガポール 1日プランを提案しよう ～How can I get to～?～

(1) 単元でめざす姿

- 1日プランの作成に必要な情報を集めるために使えるような表現を、チームの中で相談、選択することができる。(思・判・表)
- 任された役割をもとに、情報コーナーで質問してプラン作成のために必要な情報を集めようとするすることができる。(関・意・態)
- ◎ 特色のある1日プランや使えるような表現や表現方法をチームで話し合い、協力して情報を集めてプランをつくることができる。(対話力)

(2) 学習の流れと考察

導入段階：1 / 4時

附属小の友達に、ALTの故郷であるシンガポール1日旅行プランを提案するためのテーマを決める。

- (1) ALTにシンガポールの観光名所やおすすめの食べ物についての話を聞く。
- (2) チームでテーマや内容を話し合っってプランの完成に必要な情報を集めるための役割分担をする。



写真1 チームでプランの詳しい内容を決めよう。

展開段階：2～3 / 4時

チームのテーマに合った観光地や宿泊地を選ぶため、情報コーナーで入場料や宿泊費、交通手段や時間などをチームのメンバーで分担して調べる。

- (1) 情報を集めるために必要な表現を選ぶ。
 - ① プラン作成のために使える表現を出し合う。
 - ② チームのテーマに合った観光名所や食事の情報を集めるための役割分担をする。
- (2) 情報コーナーに質問に行く。
 - ③ 情報コーナーで料金などを質問して調べる。
 - ④ わかったことをチームで共有し、プランを作成する。

Do you like ~?
This is ~.
How much? いくらですか。
How long? 時間はどれくらいかかりますか。
Where is ~? ~はどこですか。
How can I get to ~? 行き方を教えてください。
Singapore Zoo Merlion Park

資料1 提示したセンテンスカード

- ① 提示された表現から必要なものを話し合っって選択
- ② チーム内で役割分担
- ③ 役割分担をもとに情報収集

導入段階では、同じような考えをもった友達とチームをつくり、1日プランのテーマやプラン提案のために必要な情報を話し合うことをねらいとしている。そのためにまず、子どもたちがシンガポールに興味をもてるようALTにシンガポールの観光地や人気のある食べ物などを紹介してもらう時間を位置付けた。そして附属小の他学年にプランを紹介するという相手の明確化と、プラン作成の参考になる資料の提示を行った。子どもは、チームごとに「格安プラン」や「グルメツアー」など、相手が興味をもちそうなタイトルを考え、その条件にあった内容にするために訪れる場所、食べ物、宿泊地などの候補を決め、限られた時間の中で誰がどの情報を集めてくるか役割分担をすることができていた。

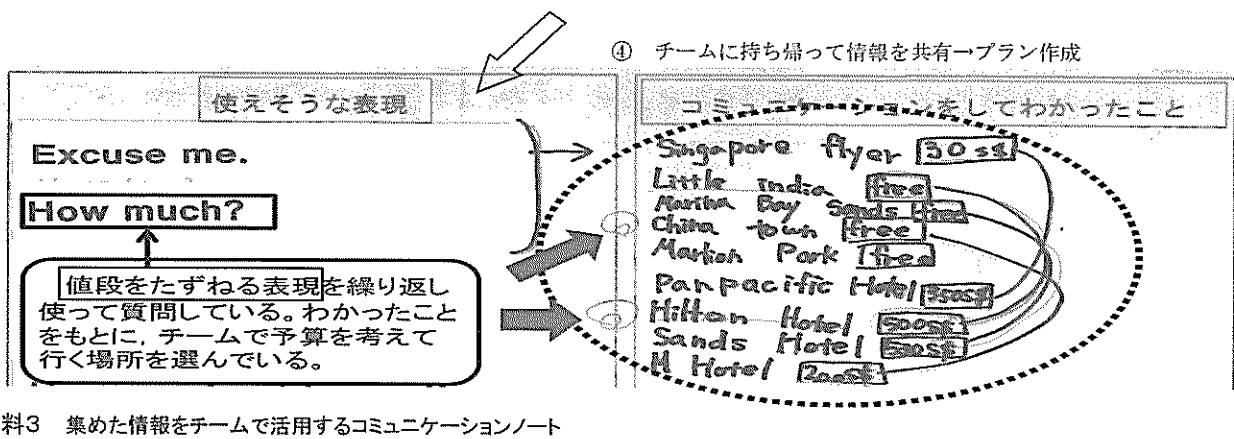
考察1

チームのプランを決定させる上で、ALTの話を参考に観光地や食べ物などシンガポールの特色のあるものを多数提示したことが有効であったと考える。それは、写真1のようにチームで話し合っってテーマにあったものを選び、他チームとの違いが明確化したからである。しかし、チームの達成度を明確にする点では課題が残った。それは、プランを立てる際の条件設定に上限金額や時間、訪れる場所の数などの指定がなかったためと考えている。

展開段階では、メンバー一人一人がプラン作成に必要な情報を集めるために情報コーナーで会話し、わかったことをチームで共有することをねらいとしている。そのために、チームのプラン、自分の役割、情報コーナーでの会話で手がかりとなる表現を視覚化し、わかったことを記録するコミュニケーションノートの提示をした。食べ物や観光地の写真も提示し、会話の手がかりとすることができるようにした。

- C1: ぼくたちが集める情報は、動物園の入場料と食べ物の値段だね。
- C2: ぼくたちはホテルへの行き方と、値段だね。
- C1: ぼくはHow much?のカードだけでいいかな。
- C2: ぼくは行き方を聞いてこないといけないうけど。行き方は英語でどう聞いたらいいのかな。←対話力
- C3: How can I get to ~?だよ。←豊かな学力
- C2: そうだね。ありがとう。それから、料金を聞けばいいね。←対話力
- C4: C1さん、料金は私がメモするからね。どれが一番安く食べられるお得な料理なのかな。

資料2 プランに必要な情報を収集するための作戦タイム



資料3 集めた情報をチームで活用するコミュニケーションノート

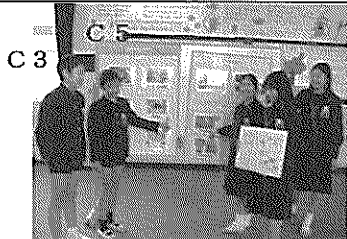
発展段階：4 / 4時

チームごとのテーマにあわせた1日観光プランをALTや他のチームに紹介してそれぞれのプランの特色や工夫されているところを伝え合い、みんなに見てもらえる場所に掲示する。

- (1) チームごとに、プランのテーマと内容をALTや他のチームにプレゼンテーション形式で紹介する。
- (2) チームのプランについて良いところや工夫点を伝え合ったりALTによる評価を聞いたりする。

C1:これから

「ゆっくり
食べて楽しめる
シンガポール
プラン」を紹介
します。



C2: First, we go to

Universal Studios Singapore.

C2 C1 C4

C3: Please go by taxi.

C4: We eat Chicken rice and drink lime juice.

C5: Next, we go to China town.

C1: That's all. Thank you.

写真2 チームのおすすめ1日プランを紹介しよう。

英語で説明できるか不安に思ったけど、友達に練習を聞いてもらったり教えてもらったりしているうちに英語で言うことができるようになりました。自分も↑シンガポール旅行をしてみたいです。

対話力

資料4 プラン紹介練習後の児童の感想

豊かな学力

情報を教える役の子どもも、各コーナーをチームで担当し、メンバー同士で確認し合いながら料金や時間などを質問に応じて正確に教えることができていた。

考察2

仲間と会話をつくり出す外国語活動において、コミュニケーションの内容を可視化したことが有効であったと考える。また、資料3に見られるようにコミュニケーションノートを位置付けることで、自分が情報を得るために必要な表現を確かめて意欲的に質問する姿が見られた。しかし、想定していた表現だけでは不十分な状況で何とかコミュニケーションを継続させようとする点については、ノートの表現にとらわれすぎてしまい上手く引き出すことができなかったと考える。

発展段階では、チームのプランの特色が伝わるように、メンバー全員で役割分担して紹介することをねらいとしている。子どもは、チーム内で役割分担をして「シンガポール1日プラン」の特色やおすすめポイントを紹介することができていた。他の学年の友達に紹介する前に、シンガポール出身であるALTに各チームのプランのよさや工夫点を評価してもらうようにしたことで、どのチームも英語を使ってプランの内容を紹介しようと力を合わせる事ができていた。

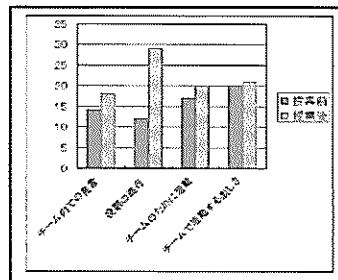
考察3

メンバーが集めてきたたくさんの情報の中から、チームのプラン作成に必要なものを集約していく活動を行ったことが有効であったと考える。これは他学年にプランを紹介するという目標像を明確にもたせたことが有効に働いたからである。発表の準備ではチームのプランの特色が伝わるような表現や表現方法を出し合い、写真2のようにプランを紹介することができた。条件が似ている選択肢を多くすることでより活発に情報の比較や内容を話し合う姿が見られると考える。

【全体考察】

考察1と考察2からわかるように、必要な情報を集めるために、チーム内で活発に話し合ったり（対話力）一人一人が外国語を使って質問したり答えたりしている姿（豊かな学力）が見られた。それは、どの表現を使って質問したらよいか、複数ある選択肢の中から話し合っ選んだりチーム内で試しに行ってみたりすることができていたためととらえることができる。これは、チームごとに特色のあるプランを作成することにしたこと、メンバー一人一人が役割分担をして情報を集める活動を位置付けたことが有効だったからであると考えられる。考察3から、集めた情報を使って1日プランを紹介する活動を位置付けたことで、単元前と比較すると、学級全体としてチームの中で発言したり自分が任された役割を果たしたりすることができ

ていることがわかる（資料5）。このことから、チームで使える表現や表現方法を話し合う対話力や活発なコミュニケーションをする豊かな学力を基盤とした外国語活動における「開かれた個」が育ったと言える。



資料5 児童の意識の変化

仲間とともに生活づくりに参画する学級活動

特別活動部 谷 岡 良 寛

1 学級活動における「開かれた個」とは

現在の子どもたちの現状を見ると、都市化、少子高齢化、地域社会における交流場面の減少などにより、他者との人間関係を築く機会が少なく、社会性を身に付けることが困難になっている。それに伴い、他者と折り合いを付けたり、他者の考えを受け入れたりする場面が減少している。このような現状を受け、これからの子どもたちには、他者と協調し、自分たちの生活を自らの手で作り出していく経験を積み重ねていくことが必要であると考え。また、学級活動においても、よりよい人間関係を築く力、社会に参画する態度、自治的能力の育成が重視されている。

学級活動における「開かれた個」とは、自己中心的な「閉じた個」ではなく、集団から認められ、集団の中で自らのよさをよりよく発揮し、他者と協調できるような個である。このような「開かれた個」を育てるために学級活動においては、学級目標を達成するという、共通の目的に向かって、互いの考えや活動を補完し合いながら課題解決を図っていくことが大切である。このような活動を展開していくことで、個が集団の一員としての自覚をもち、自己のよさを集団の中で発揮しようとする態度が育てられると考える。そこで、学級活動の話合い活動においては、自他の考えの共通性や相違性に気づき、よりよい考えに高めるために折り合いを付けていく力を育てていく。また、実践活動においては、それぞれの役割や立場を認め合い、連携を図りながら実践していく力を育てていく。このように、学級活動では、「開かれた個」を育てるために、特に「調整力」の育成に重点をおいた活動づくりを進めていく。そのためには、相互に考えを伝えることができるような場面づくりの手だてや、考えを高めていくための活動過程を考えていくことが必要であると考え。

2 主題の意味

仲間とは、同じ目標を共有し、日々の生活を送っている友達のことである。仲間とともにとは、同じ目標に向かって互いにかかわりを持ちながら、考えや行動を補完し合える個と個、個と集団、集団と集団との関係である。仲間とともに生活づくりに参画するとは、自分が所属する集団である学級や学校を、よりよくするという共通の目標のもと、活動の企画・立案から準備・実践まで主体的にかかわり、役割を分担し、自分たちの日常的な活動を協力しながら作り出していくことである。その中で子どもたちは、自分たちの生活を自分たちの手で作り出したという、達成感や有用感を味わうことができるのである。そこで、学級や学校の生活づくりに参画する学級活動においては、集団の課題を他者とかかわりながら、解決していくことで個と個、個と集団、集団と集団の関係を強めていくことが大切であると考え。また、自分たちの生活をよりよくしていくための具体的な方法を主体的に考え、自治的な話合いによって集団決定し、実践に結び付けていくことが大切であると考え。このように、他者と協力しながら学級や学校の生活づくりに参画することで、互いの考えを認め、折り合いを付けていく力や、学級のために自分の力を発揮し、友達とともに実践していく力を育てることが、学級活動においては大切である。そこで、仲間とともに生活づくりに参画する学級活動で目指す姿は、次のような姿だと考える。

○ 仲間とともに生活づくりに参画する学級活動で目指す姿

【豊かな学力】

- 学級や学校をよりよくするために、共通の目標に向かって、互いの考えのよさを活かしながら、解決方法を集団決定することができる。 (思考力・判断力)
- 集団決定した内容を、役割分担しながら、協働で実践することができる。 (実践力)

【人と働く力】

- ◎ 自分が所属する学級や学校をよりよくするために、互いの考えを活かし、折り合いを付けながら解決方法を見つけ出すことができる。 (調整力)

小集団での相互交流を取り入れた活動過程

特別活動部 谷 岡 良 寛

3 副主題の説明

小集団とは、学級や学校の課題を解決する過程において、課題解決のために考えをつくったり、練り上げたりするために、必要に応じて組織された、3～5人の子どもたちの集まりのことである。

小集団での相互交流とは、学級目標を達成するために、同じ目標をもった小集団が、小集団の中で1つの考えをつくったり、互いの考えを小集団相互で活かし合いながら、解決方法や活動内容を付加修正していくことである。本研究においては、学級目標に向かう集団活動の過程で、目的に応じて小集団を編成し、小集団が互いの考えを活かしながら、学級の諸問題を解決していく。こうすることで、個が集団を強く意識し、集団の一員として自己の役割を果たすことができるようになる。このことは、学級目標に向かって活動する学級活動の豊かな学力を育てるとともに、主体的に集団にかかわり、ともに課題を解決しようとする、人と働く力を育てる上でも意義深いと考える。そのためには、課題解決における過程において、どのように小集団での相互交流を取り入れるか、また、その中で、互いの考えを共有するためのシンキングツールの活かし方を考えることが必要である。

4 具体的な方途

(1) チームの活かし方

学級活動におけるチームとは、学級目標を達成するという共通の目的に向かって互いに考えや活動を補完し合いながら課題解決を図っていく集団のことである。学級活動においては、課題解決の場面により、学級全体を1つのチームとしてとらえたり、課題解決のために役割分担された小集団をチームとしてとらえたりすることも考えられる。この小集団チームや学級全体チームを活かすには、どちらも、明確な活動目標の設定が不可欠である。

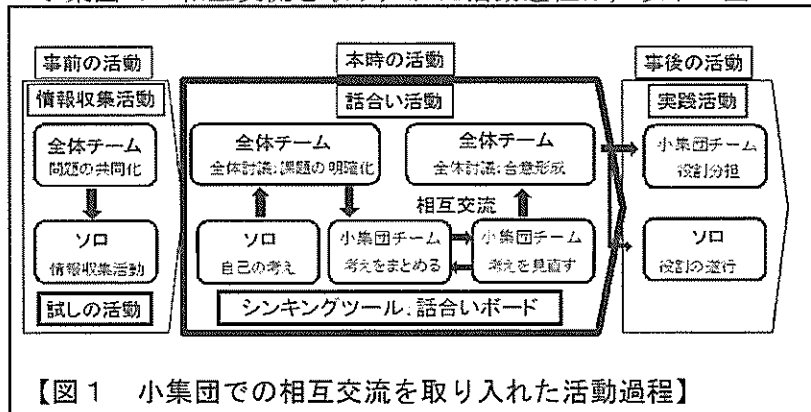
【表1 学級活動におけるソロとチームの考え方】

個の考えをつくる ソロ活動	集団の一員としての自覚をもち、集団の課題解決のために進んで自分の考えをつくり、他者に伝えようとする。 (対話力)
考えを吟味する 小集団チーム	3～5人で構成し、個々の考えをもとに集団としての考えを、話し合いのめあてを視点として折り合いを付けてつくりあげる。 (調整力)
集団の合意形成を図る 学級全体チーム	ソロや小集団での話し合いでつくり出された考えを学級集団として実践していくための集団決定を図る。 (行動力)

以上のようなチームを、活動する内容によって、事前・本時・事後の一連の活動に位置付け、個と集団、集団と集団が常にかかわり合いながら活動が展開されていくようにしていくことが大切である。

(2) 活動過程の工夫

小集団での相互交流を取り入れた活動過程は、以下の図1のようになる。



【図1 小集団での相互交流を取り入れた活動過程】

活動過程のそれぞれの段階において、ソロとチームの取り入れ方やシンキングツールの活用などが主な手だてとなる。

ソロと小集団と全体が常にかかわり合いながら一連の活動が展開していくような活動過程を設定する。その過程の中に、小集団と小集団が意図的にかかわり、課題解決のための方法を練り上げていく話し合いの場を設定していく。

第3学年 題材

サンフラワーズのサークル
活動をみんなで楽しもう

(1) 題材でめざす姿

- 学級内サークル活動を組織し、楽しく活動するための約束を、互いの考えを活かしながら集団決定することができる。(思考力・判断力)
- 集団決定した約束をもとに、サークル活動を行い、学級生活を楽しくすることができる。(実践力)
- ◎ サークル活動をもっと楽しくするための約束を互いの考えを活かし、折り合いを付けながらつくり出すことができる。(調整力)

(2) 学習の流れと考察

導入段階：1／3時（学級活動＋課外）

個人の希望をもとにサークルを組織し、試しの活動を行い、気付いたことをまとめることで、サークル活動に必要な約束を話し合う。

- (1) 自分の希望のサークルや必要だと思うサークル活動の約束を話し合う。
- (2) 試しのサークル活動を行うとともに、もっとクラブ活動を楽しむための約束を話し合う。



写真1 サークルは楽しいね。

サークル活動を
もっと楽しくする
ために、週に一回
じゃなくして回数
を増やせないかな。

自分の好きな
サークルで、
みんなと活動
すると、とても
楽しく活動が
できるね。



写真2 工夫できそうだね。

展開段階：2／3時

サークル活動をもっと楽しくするための約束について、話し合いのめあてにそって、同じサークルの友達と小集団チームで話し合ったり、学級全体チームで話し合ったりすることで集団決定する。

- (1) チームごとに一人一人が考えたもっと楽しくなるためのサークル活動の約束を話し合う。
- (2) チーム内で集団決定したサークル活動の約束を全体で出し合い、話し合いながら集団決定する。



写真3 この約束に賛成です。

ぼくは、活動日を
増やすことに賛成です。
わけは、活動日を
増やすと活動が
たくさんできる
ので楽しいからです。

導入段階では、自分たちの学級内サークルを組織し、試しのサークル活動を通して、自分たちでサークル活動を運営していこうとする意欲を高めることをねらいとしている。サンフラワーズのサークル活動とは、子どもの興味、関心に応じた活動を同好の友達とともに昼休みを使って行う、自発的で創造的な活動である。サンフラワーズのサークル活動を行うにあたっては、はじめに、学級全体でサークル活動の基本的な約束をつくり、確認することで活動を開始した。子どもたちは、自分の選んだサークルで楽しく活動を行っていった。この活動は、初めにつくった基本的な約束をもとに行う試しの活動である。この試しの活動を一定の期間実施し、サークル活動を楽しませるとともに、活動を通して気付いた点をそれぞれのサークルノートに書き込ませた。その後、もっと楽しくするための新しい約束の考えを学級全体に出し合わせることで、学級全体で解決しようとする問題の共同化を図った。

考察1

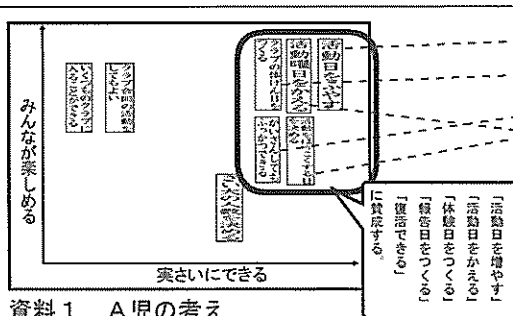
子どもたちに、自分の学級生活を楽しくするための活動として、試しのサークル活動（写真1）を行わせたことは、クラブ活動をもっと楽しく実践していこうという問題意識をもたせるのに有効であったと考える（実践力）。それは、実際に試しの活動を行う中で生じた切実な問題点を感じることで、もっと楽しくするために約束をつくりかえたいという願いをもった姿（写真2）が見られたからである。

展開段階では、もっとサークル活動を楽しむための約束について学級全体で話し合い、集団決定することができることをねらいとしている。そのために、本時の活動においては、ソロの考えを小集団チームで出し合い、小集団チーム内で集団決定する場、小集団チーム同士で吟味する場、さらに全体チームで集団決定する場の3つのチームでの活動を設定した。また、小集団チームの話し合いにおいて、ソロの考えを可視化でき、互いに操作できるシンキングツールである話し合いボードを活用した。本時の共有場面における子どもたちは、事前に出し合った新しいサークル活動の約束について学級全体で確認し、話し合いの内容の共通理解を行った。解決の場面では、まず、同じサークルの中で、約束に対する自分の考えを話し合いのめあてにそって出し合わせた。その時に写真3のように、話し合いボードを使って、話し合いボード上の原案カードを操作しながら、互いの考えの説明を行った。そうすることで、自他の考えの共通点や相違点を視覚的にとらえることができ、話し合いのめあてに合っているかを判断することにつながった。達成場面では、サークル内で集団決定したサーク

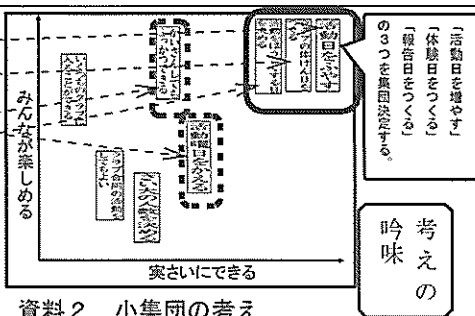
ル活動の約束を全体交流の場で話し合い、どの約束を取り入れたらよいか、集団決定を行った。

考察2

新しいサークル活動の約束を集団決定させる上で、話し合いボードを使ってチームで話し合わせたこと



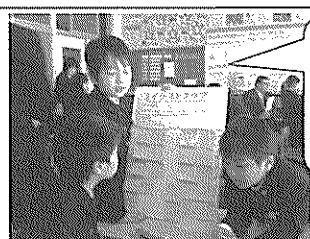
資料1 A児の考え



資料2 小集団の考え

発展段階：3／3時

新しい約束をもとにサークル活動を見直し、新たなサークル活動を実践するとともに、互いのサークルのよさを学級全体に広げる活動をつくり出す。



「ベアチームから自分たちの気付かなかったアイデアをもらったので、このアイデアを活かしてみんなが楽しめる活動に作り直そう。」

小集団での相互交流の場面
互いのよさを活かす調整力

写真4 活動を広げるには…



「初めてだけど、手芸サークルの人から教えてもらえるとうまくできるね。」

写真5 手芸も楽しいね。

ぼくは、サンフラワーズのサークル活動をやってきてよかったと思うことが3つあります。
1つめは、友達といっしょに絵をかくて、お互いにアドバイスをすることで、絵がうくなりました。また、いつもあまり話していない人とも話す機会が増えて、仲が深まったことです。
2つめは、自分のサークルのよさを発信できたことです。イラスト大会では、みんなが参加しやすいように、題材や賞を工夫しました。結果は、思った以上にいい作品があつまって、絵の楽しさを感じてくれてよかったです。
3つめは、他のサークル活動に参加して、イラストサークルでは、感じられなかった楽しさやおもしろさを発見することができました。ぼくは、これからもズサークル活動がよりよいものになるように、がんばりたいです。

資料3 A児の活動後の感想

とは有効であったと考える。それは、写真3と資料1に見られる自分の考えを話し合いのめあてにそって意欲的に説明する姿が見られ、可視化しながら判断することができたからである。また、資料2から小集団チームで話し合うことで、話し合いボード上に小集団チームとしての考えを、折り合いを付けながら、集団決定することができたからである。

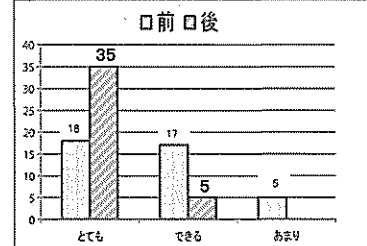
発展段階では、新しいサークル活動の約束を活かして自分たちのサークル活動を行うことで協力して楽しい学級生活をつくっていくことをねらいとしている。そのために、サークル活動を行う際に、活動の振り返りを行う場面を設定し、新たな課題や願いを出し合わせるようにした。子どもは、新しい約束でサークル活動を実践することで、自分たちの活動のよさを他のサークルの友達にも知ってもらいたいという願いをもち、互いのサークルのよさを伝え合う活動の計画を行った。そこで、計画をつくり上げる際に各サークルの考えた活動を小集団チームでの相互交流を行いながら(写真4)、互いのサークルのよさを伝え合う活動をよりよい考えへと高めていった。話し合いの最後に、学級全体に自分たちの活動を報告し、共通理解を図りながら、実践へとつなげていった。

考察3

自分たちでつくったサークル活動の約束を実践していく上で、新たな課題や願いをチーム相互でアドバイスしたことは有効であったと考える。それは、写真4に見られる他のチームからのアドバイスを自分たちの考えに取り入れたりする姿が見られたからである。また、写真5や資料3のA児の活動後の感想の自分たちのサークル活動のよさを伝えたり、友達のサークル活動のよさを感じたりしている姿からである。このような姿は、互いの考えを認め合い、そのよさを活かしていこうとする調整力が育った姿だと考える。子どもたちは、チームやチーム相互でサークル活動を実行していくことで、調整力や自分の学級生活をよりよくしていこうとする態度を育てることにつながったと考える。

【全体考察】

考察1からわかるように子どもたちが自分たちの手で楽しい学級生活をつくっていくために自他の考えを意欲的に出し合い新たな活動であるサークル活動をつくり出そうとする姿が見られた。また、考察2、3から、全体や小集団のチームの話し合いを通して、互い折り合いを付けながら、よりよい考えを集団決定していこうとする姿が見られた。これは、一連の活動において、学級目標に向かって、ソロで考え小集団チームで吟味し、全体チームで集団決定するチームワークを位置付けたことが有効だったからであると考えられる。また、本題材において、互いの考えを活かしながら問題を解決しようとする調整力が高まったことが資料4から読み取れる。



資料4 友達と考えを合わせる

○ 特別支援教育部の全体構想

生活を豊かにする子どもを育む学習指導の創造

特別支援教育部 主任 堀 亮輔

○ はじめに

本校は「生活を豊かにする子ども」の姿を目指して、5年間のスパンを想定した研究を積み上げてきている。これまでに、物的・人的・空間的な環境による支援のあり方、子どものよさに焦点を当て、プラス特性を活かした活動づくり、自立活動の視点を取り入れた特性別グループでの学習の在り方を研究してきた。また自立活動の視点を取り入れることの意味としては、授業の中で個別の課題にかかわ

1年次	「環境づくり」
	できることやわかることを増やしていく
2年次	「プラス特性」
	よさを伸ばし自尊感情を高めていく
3年次	「自立活動」
	特性別のグループによる支援
4年次	「個別の指導計画・課題別グループ」
	実態をもとにした教育計画の作成
5年次	「既存の教育課程の改善と再編成」
	グループ、過過程、年間計画のリンク化

【図1 5年間の研究計画とキーワード】

る自立活動の視点を含んだ支援を行っていくということを明確にした。しかし、これまでの研究のままでは、授業づくりの研究を単発で行っているにとどまり、子どもの育ちを長いスパンで計画的に支援するための研究にはなり得ていないという課題も明らかになってきた。そこで本年度は研究の4年次として、自立活動の視点で子どもの実態把握をし、それにもとづく個別の指導計画作成や課題別グループ編制の方途を明らかにしていきたいと考える。

○ 主題について

生活を豊かにするとは、次のような将来像を目指して、そのために必要な知識や技能、態度を身に付けていくことである。

- 心身ともに健康で、何事にも意欲的に取り組むこと
- 仕事や人とのかかわりなどを通して、やりがいを見出していること
- 趣味や余暇の利用などを通して、自ら楽しみを見つけ出していくこと
- 互いに理解し合ったり協力し合ったりできる人間関係をつくること

生活を豊かにする子どもを育むとは、子どもの実態を分析し、長期目標（年間）と短期目標（学期）を設定し、子どもの苦手なことを克服させるとともに、子どものモチベーションを発揮させていくことである。その際には、現在の子どもの実態だけではなく、個別の教育支援計画に明記されている保護者の願いや子どもの成育歴にも着目していく必要がある。

生活を豊かにする子どもを育む学習指導の創造とは、子ども一人一人の実態や特性、発達段階にもとづき、困難の改善・克服やよさの伸長を目指して、学習活動の目標や内容、グループ編制などを工夫することである。すなわち、自立と社会参加を目指して、その子どもの実態を踏まえた苦手なことの改善とよさの伸長を基本に、個別の教育支援計画と個別の指導計画の役割を明確にすることが必要となる。その中で、子どもたちの実態を幅広い視点で把握していき、それに応じた具体的な指導目標や手だてを設定し、計画的・継続的に支援していくことが重要である。

○ 生活を豊かにする子どもを育む授業でめざす子どもの姿

- 自ら目的意識をもち、学習に進んで取り組もうとする子ども （主体性）
- 自分のよさを活かしたり、得意な方法を用いたりして解決していく子ども （自己発揮性）
- 自分で目的を達成できたことを喜び、自信をもつ子ども （成就性）

○ 生活を豊かにする子どもを育むための長期目標と短期目標の一例

生活を豊かにする子どもを育む授業を展開するにあたって、子どもの将来像につなぐために、下の表のように年間を見越した長期目標と学期ごとの短期目標とを設定して授業を構想する。

長期目標の例 (年間)	短期目標の例		
	1 学期	2 学期	3 学期
自分の生活のリズムを、自ら身に付けていくことができる。	自分の生活を振り返り、課題をつかむことができる。	自分の生活を振り返ってつかんだ課題を、自らの力で改善していくことができる。	季節に合った生活の仕方をとらえ、自分自身の生活として工夫していくことができる。
自分の得意な面と不得意な面を把握し、得意な面を活用できる。	自分の好きなことに繰り返し取り組んで楽しむことができる。	自分の得意なことやできることを知り、学習場面に活用することができる。	自分のできないことに出会った際の対応の仕方を考えたり選択したりできる。
他者と円滑なかかわりをもつ方法をつかむことができる。	教師との安定したかかわりを形成することができる。	教師を媒介として、その周りにいる友達とのかかわりを自らもつことができる。	状況に応じて、かかわりをもつ相手を自ら選択していくことができる。

○ 学習内容設定の際に考慮すること

これまでの研究で、自立活動を取り入れることの意味付けや取り入れ方を明確に定義していく必要があることが明らかになった。そこで本年度は、次の視点から具体的な指導内容を設定していく。

ア 「主体的に取り組む」指導内容

「解決可能で、取り組みやすい」「興味・関心をもって取り組める」「目標を自覚し、取り組んだことが成功に結び付いたという実感ができる」こと等に配慮しながら具体的な指導内容を設定する。また、自己を肯定的にとらえるため、自分を振り返る機会を適宜設定したり、過去と比較して成長していることを実感できるようにしたりすることも大切である。

イ 「改善・克服の意欲を喚起する」指導内容

障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服しようとする意欲を高めることは大切であり、指導内容の設定にあたって、その意欲を喚起することに重点を置く必要がある。この場合、実際の経験等の具体的な学習活動を通して指導することが効果的である。

ウ 「遅れている側面を補う」指導内容

人間の発達には諸々の側面が関連し合っていることを踏まえると、発達が進んでいる側面を更に促進させることによって、遅れている面の改善に有効に作用することも少なくない。よって、個々の子どもの発達が進んでいる側面の促進と遅れている面の改善は相互に関連しているといえる。

エ 「自ら環境を整える」指導内容

社会的状況の変化の中で、障害の状態をとらえる上で環境要因が重視されていることや周囲のサポートを得ながら自分らしく生きるという考え方が広がってきている。このことを踏まえ、子ども自身が環境を整えて活動することができるように指導することや周囲の人に依頼して環境を整えることができるように指導することが必要となる。

特に、アとエの観点は、ICFの考え方を踏まえたものである。本研究では、学習に向かわせる視点としてアとイを、教科の内容につながる視点としてウとエをベースとしていくことにする。

～個別の指導計画をもとにした課題別グループの編制～

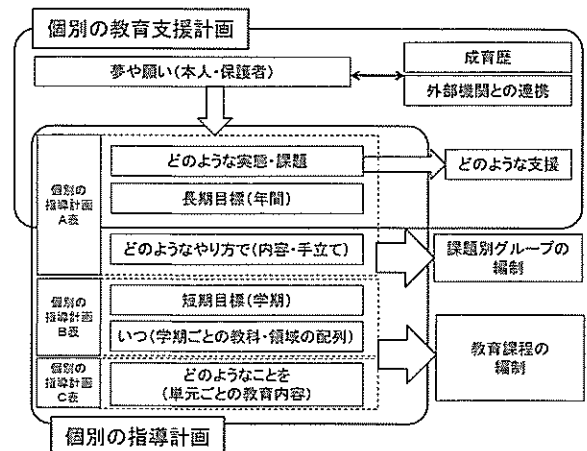
特別支援教育部 主任 堀 亮輔

1 副主題の意味

(1) 「個別の指導計画をもとにした」とは

本校の個別の指導計画は、実態を分析して長期目標を設定し、具体的な指導内容を明確にしたA表、学期ごとの短期目標と単元計画を表したB表、重点単元における教育内容を表したC表から構成されている。

図2のように個別の教育支援計画と個別の指導計画の役割を分けると、個別の指導計画とは、個別の教育支援計画で明らかになった将来像を、各教科・領域の学習内容で具現化させ、個別の支援を行っていくための指針となるものであるといえる。個別の指導計画をもとにした実践の積み重ねによって、教育課程の編制へと向かっていくことができると考える。



【図2 個別の教育支援計画と個別の指導計画】

(2) 個別の指導計画をもとにした課題別グループの編制とは

課題別グループの課題とは、子どもの実態から考えられる、身に付けさせたい態度や内容のことである。課題別グループとは、身に付けさせたい態度や内容に応じて支援を有効に行うことができるように編制した学習の形態である。編制する際には、子どものよさや学び方の傾向などを活かしていく。具体的には、以下の手順で行う。

- ① 自立活動の6つの視点にもとづいて、子どもの実態を把握し、長期目標の設定と、具体的指導内容を設定する。(個別の指導計画A表の作成)
- ② A表の具体的指導内容で同じ傾向が見られる子ども同士でグループを編制する。

個別の指導計画をもとにした課題別グループの編制とは、一定の基準に沿って個の実態を明確化したうえで、その傾向を根拠として学習集団を構成することである。その課題別グループ単位での年間単元計画の作成、重点単元での目標設定をしていくことで、個から全体、そして全体から個というようにミクロの視点とマクロの視点を往還しながら教育課程の編制を目指していく。

その際に問題となるのが、「子どもの実態」「週あたりの教育時制」「年間を見通した指導計画」の3つをどのように一つの線でつなぐかということである。これについては、週あたりの時間割の編制方法を見直すこと(従来の「国語グループ」「算数グループ」の時間を「グループ学習」の時間として教科を柔軟に取り扱う等)によって対応していく。具体的には、国語グループ、算数グループ、生活単元グループ、体育グループの4つのグループを設定し、1週間につき4単位時間のグループ学習の時間を位置付ける。そのことで、教員の専門性を活かした指導も可能になってくると考える。

(3) 本研究の価値・主張点

3年次までの研究では、個に応じた支援の在り方を追究していくという側面が強かった。そのことによって一人一人のニーズや課題に応じた学習を展開することができたが、その半面、教育課程を編制していくことや学習のスタイルを一般化、日常化していくということが難しかったという課題も明らかになった。本研究によって、同傾向の子どもの分類とグループ化、学習の系統性の究明が可能になり、教育課程を見直す視点をもてると考える。そのような点で、本研究は価値があると考えられる。

2 研究の具体的構想

(1) 個別の指導計画をもとにした課題別グループ編制の視点

個別の指導計画を、以下の3部構成で考えていく。

① 個別の指導計画 A表 自立活動の視点に立った実態把握と具体的指導内容

※ 自立活動の視点から実態の分析や長期目標の設定を行い、具体的指導内容を設定する表

② 個別の指導計画 B表 課題別グループ年間単元計画

※ A表を作成した後に、個別に短期目標を設定し、似た実態の子どもたちで課題別グループを編制する。それぞれのグループの、1年を通しての学習内容を示した表

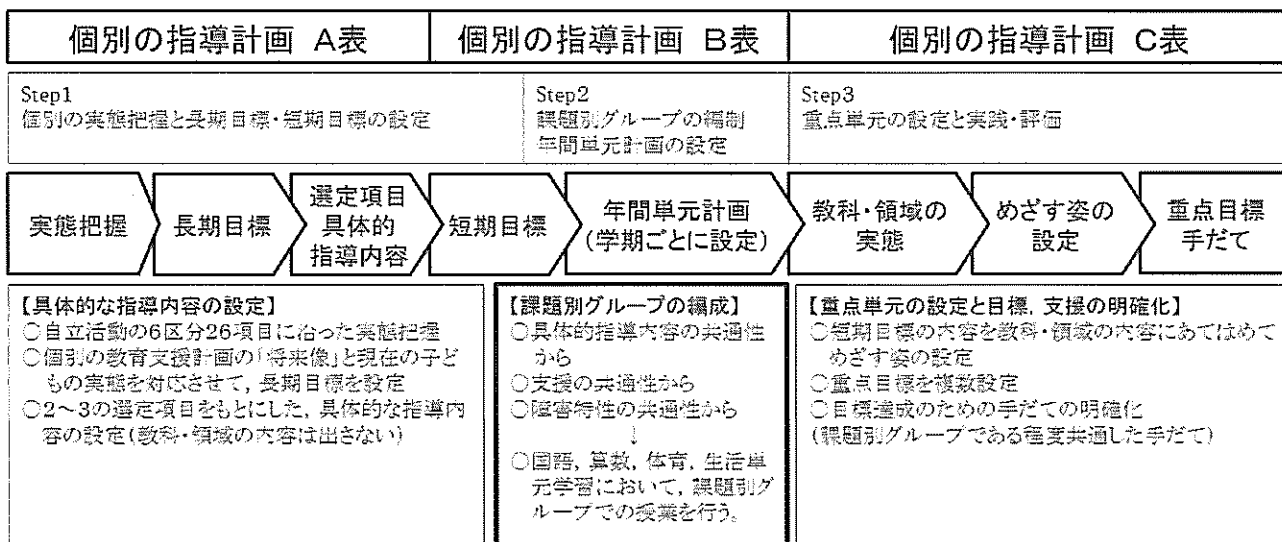
③ 個別の指導計画 C表 重点単元個別シート

※ 単元毎にどんな力を付けるのか、教科内容の視点と自立活動の視点から整理し、どんな場面で、どんな手だてを行うかを記載し、その結果を評価する表

個別の指導計画 A表 子どもの実態と具体的な指導内容 児童・生徒 氏名 性別 学年 自立活動の視点から実態を把握し、長期目標を設定する。 長期目標 短期目標 具体的な指導内容 【個別の指導計画A表】	個別の指導計画 B表 課題別グループ年間単元計画 (1/3) 児童・生徒 氏名 性別 学年 課題別グループの編制と年間単元計画の設定 短期目標 年間単元計画 (学期ごとに設定) 【個別の指導計画B表】	個別の指導計画 C表 重点単元個別シート 児童・生徒 氏名 性別 学年 重点単元の設定と実践・評価 重点単元 目標 手だて 【個別の指導計画C表】
---	---	---

(2) 個別の指導計画をもとにした課題別グループ編制の考え方

個別の指導計画（A表、B表、C表）を作成していく際に、課題別グループを以下の手順で編制していくことにする。



B表の短期目標設定までは、教科・領域の内容ではなく子どもの全般的な実態をとらえた個別の指導計画を作成する。具体的に教科・領域の内容として作成するのはC表である。

進んで言葉を伝え合う国語科学習

特別支援教育部 国語科 松 尾 京 子

1 国語科における「生活を豊かにする」とは

国語科にとって生活を豊かにするとは、生活の中で、自分の思いや願いを発信したり、受信したりするというコミュニケーション能力を身に付けることである。また、相手に話したり、相手の話を聞いたりしながら双方向の意思の伝達をしていき、伝え合う力を養って、積極的に言葉で表現しようとする意欲や態度を身に付けることでもある。そして、将来的に、主体的に言葉を使って事柄や思いを表現する力を身に付けることを目指していく。これを細分化すると、①言葉を生活場面で進んで使っていこうとすること（主体性）、②自分から進んで語彙力・文字力・文法力を高めて、わかりやすく表現すること（自己発揮性）、③相手と言葉を使ってやりとりができたことへの自信や喜びを感じる（成就性）である。

本校特別支援学級の子どもたちは、これまでの国語科学習で、言葉に興味、関心をもって絵本の読み聞かせを聞いたり、行事の感想を話したりと意欲的に学習に取り組む姿が見られてきた。しかし、話し言葉がまだ十分でない子どもや話し言葉で人と会話をするが、うまくコミュニケーションできない子どもがいる。また、会話はできるが抽象的な言葉の理解には困難さがある子どももいて、言語技能の発達のレベルが多様なので、個に合わせた支援が課題として考えられる。さらに、家族や先生、学級の友達以外の人とやりとりする体験が少ないことも課題である。このような子どもたちに、身近な相手と話をしようとしたり、意思を伝え合おうとしたりする意欲を育てることは、これからの生活を主体的に生きていく上で大切であると考え。現代の社会は情報化が進み、相手とのコミュニケーションの方法が多様になっている。そこで、情報機器等のいろいろな方法を活用することも視野に入れていく。子どもたちが、伝え合う力を身に付け、積極的に表現しようとする意識や気持ちをもつことは、言葉を通して生活を豊かにすることにつながっていくと考える。

2 主題の意味

進んで言葉を伝え合う国語科学習とは、積極的に周りの人とのかかわりを持ちながら、人の話を聞いてそれに答えることや、自分から事柄や思いを話したり書いたりすることである。子どもたちは、言語を獲得すると、自分の意志を伝達したり、事象の概念化、関係付けなど、事柄を分析して思考したりすることができる。このように、子どもたちが言語を使いこなす能力を育てていく必要がある。自分から相手にわかるように表現していき、思いや願いなどを適切な言葉を選び、使っていこうとする態度を育てることが必要である。言葉の認知や理解に困難さがある子どもたちが、体験を通して言葉の意味や表現の仕方を理解したり、人とのやりとりのために話したり書いたりできるようになることは、生活の中で人とかがわる喜びを感じる上でも意義深いと考える。そのためには、多様な特性をもった子どもたち一人一人に合わせた個別の支援を行い、言語の主体的な使い手として、言葉の意味がわかり、目的や意図、場所や状況に応じて適切に言葉で伝え合えるようにすることが必要である。

○ 進んで言葉を伝え合う国語科学習で目指す姿

【主体性】

- 言葉を生活場面で進んで使おうとする意欲をもち、相手の立場や意図を尊重しながら、自分から進んで答えたり話したりすることができる。

【自己発揮性】

- 生活に必要な身近な言葉について、語彙を増やし、文字を書いたり文法を正しくしたりして表現する力を伸ばしながら、言葉で相手にわかりやすく話したり書いたりすることができる。

【成就性】

- 相手からの返答を読んでその内容がわかるなどやりとりができたことへの自信をもち、やりとりを繰り返し行うことを楽しむことができる。

体験したことを文章化する視聴覚教材や教育機器等の活用

特別支援教育部 国語科 松 尾 京 子

3 副主題の説明

本校特別支援学級の子どもたちの個別の指導計画（A表）を、自立活動の視点を踏まえながら作成し、課題別国語グループを編制した。

グループ	具体的指導内容の例	代表的な手だて
1 グループ	学習・生活上の困難を改善・克服すること	具体的操作をして思考できる学習具の活用
2 グループ	学習に向かう力を身に付けること	視覚的に構造化された学習の場の工夫
3 グループ	自分自身で環境を整えて活動すること	個別学習・共同学習を促す学習具の活用
4 グループ	遅れている面を改善・克服すること	思考を促す情報機器や教育機器の活用

ここで対象とする国語4グループの子どもたちは、相手を意識して話したり、場所や状況に応じて表現を変えて意思伝達したりすることは難しいが、写真等の視聴覚情報を提示して相手意識や目的意識をはっきりさせると、指示を理解して、読んだり書いたりしながら相手に自分から表現していこうとする意欲的な姿が見られる。

体験したことを文章化とは、自分がしたことについて、相手意識や目的意識をもちながら、自分が伝えたい内容を考えて、要点を落とさずに書くことである。体験したことを文章化する視聴覚教材や教育機器等の活用とは、自分が実際に行った事柄の中から、伝えたい内容を詳しく言葉で表現するために、場面を想起する手がかりとして、写真や動画、音声などを使うことである。そして、様子を表す言葉や文末表現などを表現の工夫をさせることでもある。子どもたちに文を手で書かせるだけでなく、機械を使って表現させることもできる。また、ここでいう視聴覚教材や教育機器等とは、写真やイラスト、挿絵などを視聴覚教材とし、パソコン（文書作成ソフト、プレゼンテーション、電子メール、インターネット）、実物投影機、ICレコーダー、タブレット端末、FAXを教育機器等とする。視聴覚教材や教育機器等を活用することで、子どもが①指示をとらえやすいこと②記憶をつなぐことができること③表現することのよさを実感できることが期待される。

4 具体的な方途

(1) 教科の内容に対する支援

文章化するための段階を、①想起、②構想、③記述、④推敲として、文章化を行っていく。

①想起→体験の想起では、写真や動画などを視聴させたり、モデル文の提示を行ったりする。

②構想→写真や動画から書きたいことを選ばせたり、はっきりさせたりする。

→写真カードの並び替えなどにより、書きたいことの順番を考えさせる。

③記述→マス目の大きさを変えた学習プリントの用意や表現のヒントカードの提示をする。

→電子黒板や拡大投影機を使って原稿用紙の書き方の提示をする。

→パソコンの文書作成ソフトを用いて作文を書かせる。

④推敲→見直す視点をわかりやすくするために、2つの例文を実物投影機を用いて提示する。

(2) 活用する対象に応じた支援

文章化の過程（想起・構想・記述・推敲）の各段階において、視聴覚教材や情報機器などを児童の障害特性に応じ、以下のように活用する。

段 階	想 起	構 成	記 述	推 敲
活用機器	写真や動画によるプレゼンテーション	写真によるプレゼンテーション	文書作成ソフト	電子黒板 文書作成ソフト
価 値	体験を振り返り、書くことをイメージすることができる。	書きたいことを選ぶことで、内容の構成がしやすくなる。	文字を書いて表現するための負担が少なくなる。	記述内容を見直しやすい。また、修正もしやすい。

国語4グループ 題材 スイートポテトしゅうかいの あんないじょうを かこう

(1) 題材でめざす姿

- ◎ 相手に体験したことや思いを伝えるために進んで案内状を書くことができる。 (主体性)
- ◎ 案内状に書く文の構成や感じたこと、思ったことなどの表現を自分で考えて案内状を書くことができる。 (自己発揮性)
- ◎ 自分が書いた案内状を相手に読んで渡し、自分の思いを伝えることができる。 (成就性)

(2) 学習の流れと考察

動機段階：1～2／6時

中学生との芋苗植えや芋掘りの様子を振り返り、スイートポテト集会の案内状に書くことを話し合う。

- (1) 芋苗植えや芋掘りの様子をプレゼンテーションを見ながら話し合う。

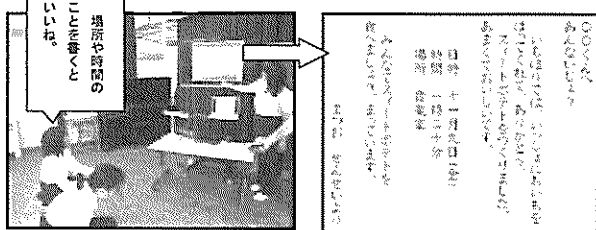
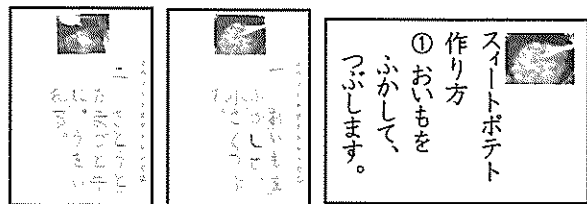


写真1 案内状を書こう。(主体性) 資料1 教師のモデル文

- (2) スイートポテト作りの様子をビデオで観ながらスイートポテトレシピを作る。



資料2 スイートポテトレシピ 資料3 提示用モデル文

熱中段階：3～5／6時

他のグループの友達や先生たち、またお世話になった中学生をスイートポテト集会に招待するための案内状を書く。

- (1) 案内状に書くことや気を付けることを知り、他のグループの先生や友達に案内状を書く。
 (2) 芋苗植えや芋掘りでお世話になった中学生に案内状を書く。

a グループ (c 児)

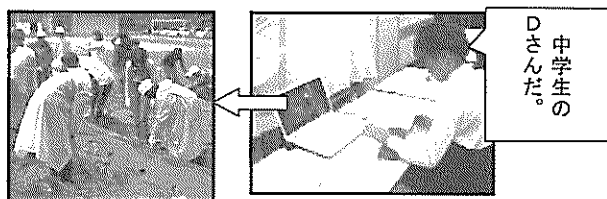


写真2 ビデオを繰り返し見るよ。

b グループ (b 児)

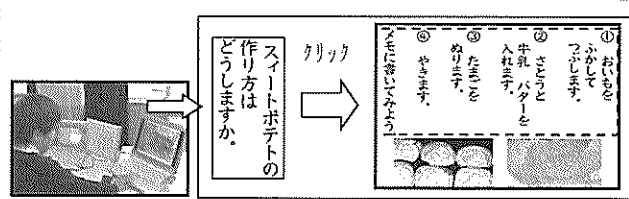


写真3 パソコンを見て。

資料4 プレゼンテーション

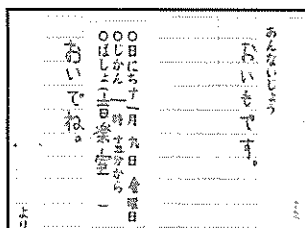
動機段階では、中学生が芋苗植えや芋掘りをさせてくれたお礼にスイートポテト集会を行い、その案内状を書くという学習のめあてや見通しをもたせることをねらいとしている。そのために、6月に行った芋掘りやスイートポテト作りの様子をプレゼンテーションで提示した。子どもたちは行事のことを振り返り、「中学生がいてくれてよかった。」などの発言をしていた。そこで、中学生をスイートポテト集会に招待することについて話し合った。子どもたちは、中学生がスイートポテト集会に来てくれるには何が必要なのか最初はわからない様子であった。そこで、日時や場所が書かれたモデルの案内状を提示した(資料1)。子どもたちは、中学生に集会に来てもらうために案内状を書こうという学習への意欲をもち、これからの学習で案内状を書いていくという見通しをもつことができた。

考察1

中学生に案内状を書こうという相手意識や集会に来てもらうという目的意識をもたせる上で、プレゼンテーションで体験を想起させて、案内状を書くことについて話し合わせたことが有効であったと考える。それは、モデルの案内状を見て、場所や時間を知らせたいというという子どもの反応があったからである(写真1)。また、スイートポテトレシピを書くことで、資料2のように子どもたちは、モデル文をもとに作り方の手順を想起して、レシピを書くことができた。

熱中段階では、案内状に日時や場所、時間を書くこと、また「～しましょう。」などの相手を誘うような文末表現を用いて、書くことができるようになることをねらいとしている。そのために、パソコンを使った動画の提示(aグループ)やプレゼンテーションによる活動ごとの写真とそれについての説明の文の提示(bグループ)という手がかりをもとに、案内状を書く活動を行った。写真2や写真5のように子どもたちは、案内状に書く内容を動画や写真という視聴覚教材から考えたり、教育機器を進んで活用しながら案内状を書いたりすることができた。

資料5 案内状1



資料6 案内状2

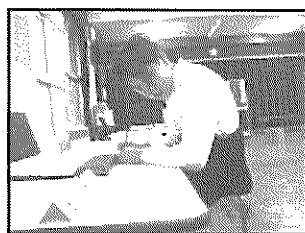
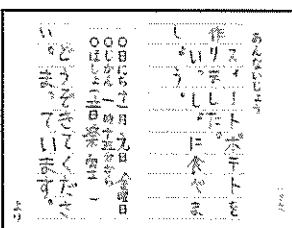
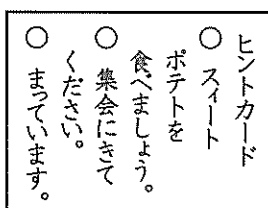


写真4 ヒントカードを見ればわかるね。(撮影時)



資料7 ヒントカード

考察2

パソコンで動画の再生を行ったりヒントカードを提示したりしたことは、文末表現を工夫する上で有効であったと考える。これは、c児が視覚的な支援で場面を想起し、ヒントカードをもとに案内状を書いていた姿から言える。c児は、資料5から資料6のように、文末表現の工夫ができていた。また、パソコンのクリックする場所がわかると、繰り返し動画を見ながら、スイートポテト作りの場面を想起することができた(写真2)。これは、手順がわかると自分から進んで学習に向かうというよさを活かして、教育機器を活用することが有効であったからである。場面をイメージすることができたことで、案内状に書く文を自分で考えることができた。

発展段階：6／6時

案内状を中学生に読んで渡したり、中学生からの感想を聞いたりする。



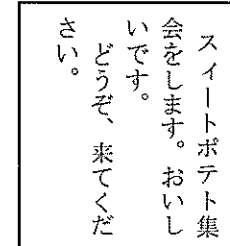
写真6 中学生に渡したよ。(成就性)



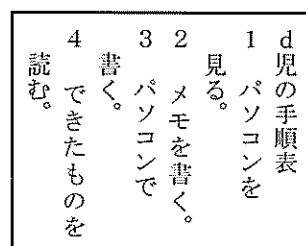
写真7 スイートポテト集会。(成就性)

【全体考察】

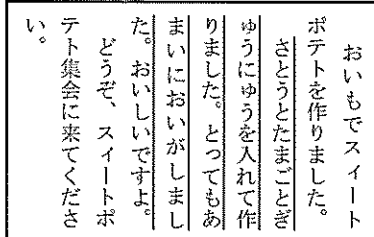
考察1と考察2からわかるように、中学生に案内状を書くという相手意識や目的意識をもち、伝えたいことを明確にして案内状を進んで書く姿が見られた(主体性)。また、考察3から、案内状を書くことでやりとりができたことを喜んだり、活動の満足感を味わったりすることができた(成就性)。これは、動画やプレゼンテーションなどの視覚的教材を提示して教育機器等を活用しながら案内状作りをすることで、自分の思いを案内状を読んで伝えたりすることができたからである。また、体験したことを想起して詳しい表現をしたり、文末表現を「～しませんか。」など工夫して案内状を書いたりすることができた(自己発揮性)。これは、イメージすることが苦手である子どもたちに、ビデオやプレゼンテーションなどの視覚的教材をもとに書く活動を行ったことが有効に働いたためである。このような学習経験を重ねることで、子どもたちは、進んで周りの人とかかわりをもとうとする意欲が高まってきた。このような学習経験から、進んで言葉を伝え合うことができるようになってきたと言える。



資料8 案内状1



資料9 手順表



資料10 案内状2

考察2

プレゼンテーションで、質問するシートと写真等を使った説明のシートを交互に提示したことやメモをもとに案内状を書く活動を設定したことは有効であったと考える。これは、b児がどんな様子だったのかを視覚情報をもとに考え、表現できたからである(資料10)。b児は、資料8から資料10へと、詳しく案内状を書く姿が見られた。また、スイートポテトの作り方やできた時のおいなどを想起しながら詳しく案内状を書くことができた。これは、プレゼンテーションに写真だけでなく言葉で文末表現などを提示したこと(資料4)が有効であったからである。

写真5 パソコンで書くよ。(撮影時)



発展段階では、中学生に書いた案内状を読んで渡し、スイートポテト集会の感想を聞くなどのやりとりすることをねらいとしている。そのために、中学校の教室へ行き、招待状を渡す活動とスイートポテト集会を行った。子どもたちは、自分が書いた案内状を読んで渡し、中学生も「楽しみな。」と話す姿が見られた。そして、楽しく集会を行った。

考察3

視覚情報や教育機器等を活用しながら書いた案内状を直接中学生に渡すというやりとりをする場を設定したこと(写真6)や生活単元学習と関連して中学生と一緒に「スイートポテト集会」を実施したことは、言葉で相手とのやりとりをする楽しさを味わう上で有効であった(写真7)。また、案内状を書くという活動の満足感や達成感を味わうことができたと考える。

一人一人がよさを発揮し合う生活単元学習

特別支援教育部 生活単元学習 片 小 田 雅 夫

1 生活単元学習における「生活を豊かにする」とは

生活単元学習において生活を豊かにするとは、子どもたち一人一人が、自分が得意なことや好きなこと、できることを活かしたり、友達と力をあわせたりして、やってみたいことを実現させ、成就感や満足感を味わうことである。自分が得意なことや好きなこと、できることを活かすことで、自己有用感をもつことができる。また、友達と力をあわせて活動することで、生活をより楽しくすることができる。このような経験を繰り返すことにより、子どもたちは、将来、社会の中で自分の役割を果たしたり、他者とよりよい関係を築いたりしながら、自分に自信をもって生活していくための社会性の基礎を身に付けることができると思う。社会性とは「社会生活を営むための素質や能力」のことであり、構成する主な要素には、コミュニケーション能力・基本的生活習慣・実践力・アサーション・将来展望性・集団参加能力・共感性・自尊感情・規範意識などがあるが、本研究では、これらの要素を「主体性(基本的生活習慣・集団参加能力・規範意識)」「自己発揮性(実践力・コミュニケーション能力・アサーション・共感性)」「成就性(将来展望性・自尊感情)」と分けてとらえ、生活単元学習で身に付けていくことができるようにしたい。

2 主題の意味

よさとは、自分が得意なことや好きなこと、できることである。よさを自覚することは、自分に自信をもち、自尊感情を高めることにつながる。よさを発揮するとは、自分の能力や興味・関心を十分に働かせて学習に取り組むことである。子どもの特性や能力は、自信や意欲を伴って、繰り返し働かせるほどに伸ばすことができるものであり、よさを発揮して活動に取り組むことは、自分にできることや得意なことをさらに伸ばしていく上で意義深い。一人一人がよさを発揮し合うとは、子どもたちが、目標を達成するために、積極的に自分が得意なことや好きなこと、できることを活かしながら、友達と力をあわせて活動に取り組むことである。友達と力をあわせると、一人よりも大きな目標を実現できることを味わわせる。一人一人がよさを発揮し合うことで目指す姿を3つの力で分けると、意欲的に取り組む力(主体性)では、目標を達成するために積極的に活動に参加する姿を目指す。自分の思いを友達と共に実践する力(自己発揮性)では、自分の得意なことや好きなこと、できることを活かしながら、活動の仕方や方法を工夫して取り組んだり、友達と力をあわせて活動したりする姿を目指す。成果を実感できる力(成就性)では、自分たちが取り組んでいる姿や成果物を称賛してもらうことにより達成感や満足感を味わう姿を目指す。子どもたちは、所属するグループの中で活動に積極的に取り組んでいる姿や成果物を、友達や周囲の人たちに認めてもらうことによって自己有用感を味わい、自分に自信をもつことができると思う。また、目標を達成するために友達と力をあわせて取り組むことで、友達との関係をよりよいものにしていくことができると思う。このように、一人一人がよさを発揮し合うことは、子どもたちが生活を豊かにする力を育てていく上で意義深いと考える。

○ 一人一人がよさを発揮し合う生活単元学習で目指す姿

【主体性】

- 目標を達成するための自分の役割がわかり、見通しをもって活動に参加し、意欲的に取り組むことができる。

【自己発揮性】

- 自分の得意なことや好きなこと、できることを活かしたり、友達と協力し合ったりしながら活動に取り組むことができる。

【成就性】

- 活動に積極的に取り組むことで達成できたことを感じ取り、達成感や満足感を味わうことができる。

個別的な作業と協同的な作業を段階的に位置付けた活動を通して

特別支援教育部 生活単元学習 片 小 田 雅 夫

3 副主題の説明

子どもの実態把握をもとに、具体的指導内容や手だてを考えていく。そして、以下のような基準で課題別グループを編制する。

グループ	具体的な指導内容の例	代表的な手立ての例
1 グループ	学習・生活上の困難を改善・克服すること	具体的操作をして思考できる学習具の活用
2 グループ	学習に向かう力を身に付けること	視覚的に構造化された学習の場の工夫
3 グループ	自分自身で環境を整えて活動すること	個別学習・共同学習を促す学習具の活用
4 グループ	遅れている面を改善・補完すること	思考を促す情報機器や教育機器の活用

ここで対象とする生活単元学習3グループの実態としては、好奇心旺盛で興味・関心をもった活動に対しては、進んで取り組むことなどが挙げられる。その際に、活動の全体像を提示することで、活発に活動するようになる。

個別的な作業とは、子どもたち一人一人が、自分の得意なことや、好きなこと、できることを活かして一人で取り組む作業のことである。協同的な作業とは、一人で取り組むよりも、他の人と一緒に取り組んだ方が目標を達成できるときに、グループの友達と力をあわせて取り組む作業のことである。個別的な作業と協同的な作業を段階的に位置付けた活動とは、子どもたちが、自分の役割を果たす段階のときには個別の作業を行い、協力し合った方が実現できる大きな目標を達成したいときは協同的な作業が行われるように、意図的・計画的に活動と内容、支援を設定することである。子どもたちは、自分のよさを発揮して与えられた役割を果たすことで、自分に自信をもつことができるようになる。また、友達とお互いの成果物をあわせて、共通の成果物にすることを通して、友達と力をあわせることのよさを味わい、周囲の人たちとのよりよい関係を築く基礎的な力を育むことができると考える。したがって、個別的な作業と協同的な作業を段階的に位置付け、意図的・計画的な学習活動を行うことは、社会性の基礎となる力を培うことにつながり意義深いと考える。

4 具体的な方途

(1) 学習内容を身に付けさせるための支援

3グループの子どもたちに対しては、以下のような支援によって学習内容を身に付けさせる。

- 一人一人が、自分のよさを発揮することができる役割分担
- 個別の作業と協同的な作業を捉えやすくするために作業の順序や活動形態に応じて配置した場の構造化
- 適度な困難さを生じさせる教材・教具の準備
- 自分たちの成果物を活用したり、他者からの評価を聞いたりする場の設定
- 作るもののイメージをもたせるためのモデル作品の提示

(2) 個別的な作業と協同的な作業を段階的に位置付けた活動構成

個別的な作業で一人一人がよさを発揮して活動に取り組んだ後に、グループ全体の目標を達成するために、以下のような活動構成を行う。

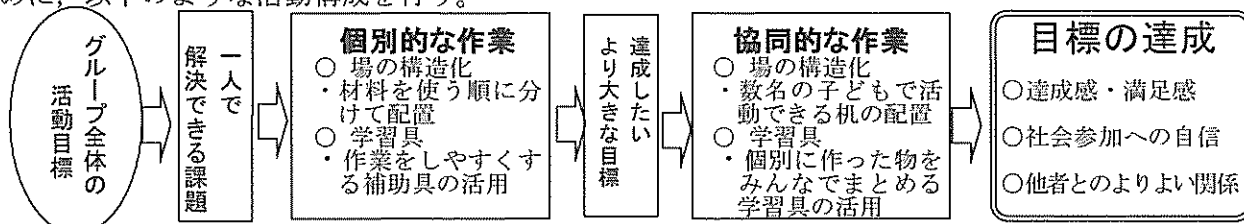


図1 個別的な作業と協同的な作業を段階的に位置付けた活動の流れと支援

生活単元グループ

単元

おいもパーティーをしよう

(1) 単元でめざす姿

- ◎ おいもパーティーをして、おいしい芋のお菓子を作るために、活動への見通しをもち、意欲的に取り組むことができる。(主体性)
- ◎ 自分にできることを活かして活動の仕方を工夫したり、友達と協力したりして芋のお菓子作りをすることができる。(自己発揮性)
- ◎ 活動に取り組んでいる姿や作ったお菓子を、周囲の人たちに認めってもらうことで、成就感や満足感を味わうことができる。(成就性)

(2) 学習の流れと考察

動機段階：1～2/5時

芋掘りで収穫した芋を使って、お菓子を作る計画を立てる。

- (1) 収穫した芋を試食する。
- (2) 収穫した芋を使って、お菓子を作る計画を立てる。

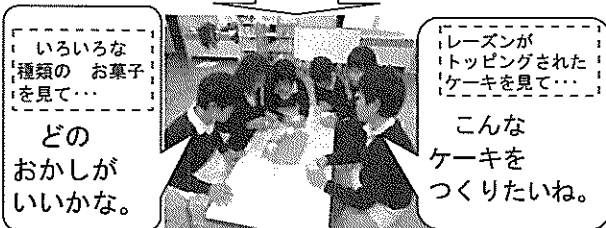
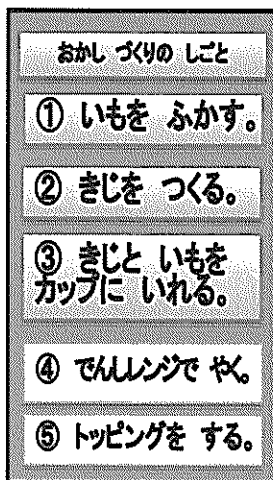


写真2 どれをつくろうか。(主体性)

熱中段階：3～4/5時

収穫した芋を使ったお菓子作りをする。

- (1) 役割を分担して、お菓子の下地作りをする。
- (2) レンジで焼いて、トッピングして仕上げる。



資料1 お菓子作りの手順表

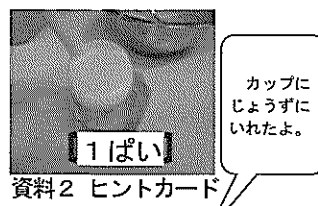


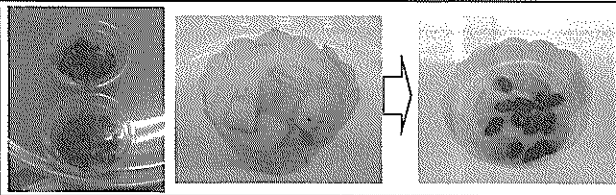
写真3 じょうずにできたよ。【個別的な作業】(自己発揮性)

動機段階では、収穫した芋を使ってお菓子を作り「お芋パーティー」をしたいという思いをもたせることをねらいとしている。A児は、提示された泥がついた芋を見たときはあまり関心がなさそうであった。そこで、芋をふかす調理器具を見せて、これから何をするのか考えさせた。すると、A児は「ふかしいも」と答え、芋を食べてみたいという気持ちをもつことができた。自分たちが食べることを理解すると、丁寧に芋を洗う姿が見られた。その後で、洗った芋を切って、ふかし芋を作り試食した(写真1)。さらに、まだたくさん残っている芋を見せ、芋を使ったお菓子を3種類紹介した。すると、A児は「お菓子を作りたい。」という発言をした。そこで、お菓子作りの計画を話し合わせた(写真2)。

考察1

芋の試食や調理器具、実物のお菓子などを提示して、これからの活動の見通しをもたせたことは、お菓子作りをしたいという主体性を育てる上で有効であった。それは、写真1のように、芋を実際に食べる体験を通して、子どもの関心を高めることができたからである。さらに写真2のように、作りたいお菓子について友達と話し合わせたことも、活動への期待や見通しをもたせることにつながったと考える。

熱中段階では、お菓子作りの役割の中から、自分ができることに取り組み、友達と力を合わせて活動できることをねらいとしている。そこで、子ども一人一人の役割を話し合い、個別的な作業を行う活動と、友達と力を合わせる協同的な作業を行う活動を仕組んだ。はじめにモデルとなる見本のお菓子を提示し、資料1のようにお菓子作りの手順を示し、どのような役割が必要か話し合った。子どもたちは、「生地を作る人」「カップに入れる人」などの役割が必要であると発表した。そして、お菓子作りの活動に取り組ませた。A児は生地をカップに入れる仕事を選んだ。日頃の家庭でのお手伝いなどの経験から、自分でもできそうだと感じていたようである。おたまたに、ちょうど1杯分量り取るということがわかるように、生地をすくい取った写真と、「1 ぱい」と表示したヒントカードを提示した(資料2)。A児は、最初は生地をこぼしてしまった。そこで、大きさが異なるカップを複数提示し、生地量の量に合うものを選ばせた。A児は、大きいカップを選ぶと、こぼさずにでき、喜んで活動を続けるとできた。次に、一人一人が役割を終えて、レンジで焼いた後に、トッピングの活動をした。トッピングするものを子どもたちみんなが決められることができるように、資料3のようにトレイの上にトッピングする材料を数種類並べ、どれを選択するか決め



資料3 トッピングする材料とトッピング前後のお菓子



写真4 なにをのせようかな。



写真5 みんなでトッピングしよう。【協同的な作業】(自己発揮性)

発展段階：5／5時

おいもパーティーでお菓子を食べ、中学生や中学校の先生にお菓子を贈る。



写真6 おいしくできたね。(成就性)

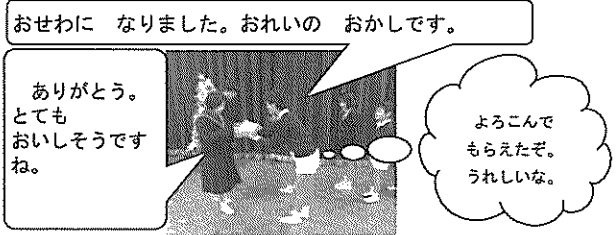


写真7 ありがとうございます。(成就性)

【全体考察】

考察1からわかるように、芋のお菓子や調理器具などを提示して、これからの活動の見通しをもたせることで、子どもたちは、その後の活動に意欲的に取り組むことができた(主体性)。また、考察2から、個別的な作業と協同的な作業を段階的に位置付けることで、子どもたちは共感的にかかわりながら、友達と協力し合い楽しく活動することができたことがわかる。さらに、考察3からわかるように、中学生や中学校の先生方からの称賛の言葉かけにより、活動に対する自信を深め、成就感や満足感をもつことができた。これらのことから、子どもたちに芋の試食体験をさせたり、モデルの教材・教具やお菓子の提示をしたりすることで、「何をするのか。」という見通しや「自分にもできそう。」という安心感をもたせることができたといえる。また、最後に友達と力を合わせてお菓子を仕上げるという、共通の目標を設定して協同的な作業を段階的に体験させる活動構成を行ったことも有効に働き、「一人一人がよさを発揮し合う」姿が育ったといえる。

る話し合いの活動を行った。教師が最初に材料を見せて、どのトッピングにするか問いかけた。するとA児は「レーズンがいい。」と自分の意見を言うことができた。みんなもそれに賛成し、レーズンのトッピングをみんなですることができた(写真4)。次にB児が「甘納豆をのせよう。」と発言した。A児は「いいね。」と言って、一緒にトッピングを手伝うことができた。トッピングの活動は、協同的に行わせた(写真5)。トッピングは、お菓子の仕上げの作業であり、友達と一緒にすることでみんなで作り上げたという実感をもたせることができると考えたからである。A児も、友達と楽しそうにトッピングしている姿が見られた。

考察2

個別的な作業と協同的な作業を段階的に位置付け、お菓子をみんなで完成させる活動に取り組ませたことは、共通の目標を意識して自分のできることをしたり、友達と共感的に関わったりする自己発揮性を育てる上で有効であった。これは、写真3のようなA児の個別の役割を果たせたという満足感とお菓子をみんなで完成させたいという意欲を連続させて、写真5のようなA児の意識を高めていくことができたからである。教師が子どもたちの意見を引き出して、どんなトッピングをするか話し合って決めることができるように、資料3のようなトッピングのモデルとなるお菓子を提示しながら、子どもたちの考えを順序よく交流させたことも、友達と協力し合っ、楽しく活動する姿につながったと考える。

発展段階では、みんなで、お菓子を作り上げることができたことに対して成就感や満足感を味わうことができることをねらいとしている。そこで、おいもパーティーを行い、友達と一緒に食べたり、芋ほりのときにお世話になった中学生や中学校の先生方に贈ったりする活動を行った。A児は、自分たちで作ったお菓子をおいしそうに食べ、そのできばえに満足していた(写真6)。また、中学生と芋掘りをした写真を提示することで、「お世話になった中学生や先生にも食べてもらいたい。」という考えをもった。そして、中学生を招待してお菓子を手渡すことができた。子どもたちは、中学校の先生方や中学生から誉めてもらい、とても嬉しそうであった。

考察3

おいもパーティーを設定し、みんなで食べたり中学生にお菓子を贈ったりする活動を行ったことは、活動をみんなでやり遂げたという成就性を育てる上で有効であった。それは、写真6のみんなと喜んでいる姿や、写真7にあるような中学生との交流で称賛をもらい、満足している姿からわかる。単元を通して、目的意識をもち、活動させたことが成就感や満足感を味わわせることにつながった。

身体感覚を身に付ける体育科学習

特別支援教育部 体育科 堀 亮 輔

1 体育科における「生活を豊かにする」とは

体育科において生活を豊かにするとは、「生涯にわたって運動を豊かに実践するための資質や能力、健康で安全な生活を営む実践力及びたくましい心身を育てることによって、現在及び将来とも楽しく明るい生活を営むための基礎」（特別支援学校学習指導要領解説P307）、つまり運動を楽しんだり仕事や生活に必要な体力を身に付けたりすることである。これを細分化すると、①自ら運動に取り組んだり、動きを身に付けようとしたりすること（主体性）、②実際に運動に取り組んだり、必要となる動きを身に付けたりすることができること（自己発揮性）、③運動に取り組んだり動きを身に付けたりできたことに対して満足感をもつことができること（成就性）が必要となってくる。

本校特別支援学級の子どもたちは、これまでの体育科学習で、学習に興味をもって主体的に取り組み、初めての動きでも臆することなく模倣をしたり補助具を積極的に活用したりして取り組むなどの姿が見られてきた。しかし、課題としては、運動を行う上で必要となる基礎的な体力が十分でないこと、動きの見通しをもつことが難しいこと、自分自身の体の位置感覚や動いている様子を客観的にとらえることが難しいことなどがある。したがって、動きを通して自分自身の身体感覚を身に付け、学習や生活の中で適切に活かすことは大変重要である。

教育の在り方を考える上で、知的機能に制約があることによって生じる困難や特性として問題視されていることは、①習得した知識や技術が偏ったり、断片的になりやすいこと、②習得した知識や技術が実際の生活には応用されにくいことなどである。これを受けて、体育科指導についての動向としては、①可能な限り体力等をつけること、②系統を踏まえ指導すること、③子どもの興味・関心を活かすことができるように教材・教具の工夫をすることなどが大切である。

2 主題の意味

身体感覚とは、空間的、また時間的なイメージを伴って体を動かそうとすることである。身体感覚をつくるものとして、接触、動き、体の位置、視覚情報、聴覚情報などがある。身体感覚の識別の弱さは、自己の身体を認識することの障害や運動行動を企画することの障害につながる。身体感覚を身に付けるとは、動きを通して、その場に応じた体の動かし方や動かす際の感覚を自らつかむことである。身体感覚を身に付ける体育科学習とは、自分自身の体の動きをつかみ、それを運動の中で活かし、必要となってくる動きができるようになったり、さらに上達したりすることのできる学びのことである。動きの見通しをもつことが難しく、自分自身の体の位置感覚や動いている様子を客観的にとらえることが難しい子どもたちにとって、身体感覚を身に付けることは、日常生活に必要な体の使い方を身に付け、今できる力を活かして主体的に自分の課題に取り組むことができるようになるという点で意義がある。そのためには、今できる動きとこれからできるようになりたい動きをつかみ、自分の状態に応じて必要な動きを自ら選んで行っていくことが必要になってくる。

○ 身体感覚を身に付ける体育科学習で目指す姿

【主体性】

- 学習の進め方がわかり、見通しをもって運動に取り組んだり、場に必要動きを試そうとしたりすることができる。

【自己発揮性】

- 見通しに沿って活動して動きを身に付けたり、自分に合った学習具を使用して動きを身に付けたりすることができる。

【成就性】

- 活動の手順がわかり最後まで取り組めたことや、必要な動きを身に付けることができたことに満足感をもつことができる。

ボディイメージを活かした動きを取り入れた繰り返しの遊びを通して

特別支援教育部 体育科 堀 亮 輔

3 副主題の説明

個別の指導計画A表の、子どもの実態や具体的指導内容をもとに、以下のような基準で課題別グループを編制する。

グループ	具体的指導内容の例	代表的な手だての例
1 グループ	学習・生活上の困難を改善・克服すること	具体的操作をして思考できる学習具の活用
2 グループ	学習に向かう力を身に付けること	視覚的に構造化された学習の場の工夫
3 グループ	自分自身で環境を整えて活動すること	個別学習・共同学習を促す学習具の活用
4 グループ	遅れている面を改善・補完すること	思考を促す情報機器や教育機器の活用

体育2グループの子どもの実態として、①身体の位置感覚をとらえることが難しいが、揺れたり全身を伸ばしたりする動きは好んで行うこと、②注意力が多方面に向かい学習に気持ちが向かわないこともあるが、見通しのもちやすい場であれば進んで学習することができることの2点が挙げられる。

ボディイメージとは、自分の身体が空間的・時間的にどのような動きをするかの経験をもとにした考え方である。ボディイメージには、接触、動き、体の位置、視覚情報、聴覚情報などがある。それらを伴った動きの経験の不足が、ボディイメージの弱さとなる。そのことは、自己の身体を認識することの障害や運動行動を企画することの障害につながってくる。ボディイメージを活かした動きとは、子どもたちの好きな感覚刺激や運動活動に目を向けることができ、かつ子どもにとって簡単すぎず難しすぎず、達成可能な身体操作である。繰り返しの遊びとは、数種類の運動種目を組み合わせ、それを1セットとし、その運動を配列にもとづいて順々に行っていく動的な活動形式のことである。ボディイメージを活かした動きを取り入れた繰り返しの遊びとは、入ってきた刺激を正確に識別して、触覚、身体の動作や位置の感覚、回転やスピードの感覚を体感することのできる学習の一連の流れや支援を構想することである。自閉症・情緒障害の子どもの多くは、バランス感覚などの運動面に課題があるといわれている。そのような子どもたちに、実際に体を動かしながら動きの見通しをもつことのできる場を構成することは、身体感覚を身に付けていくことができる点で価値がある。

4 具体的な方途

(1) 学習に向かう力を身に付けさせるための支援

2グループの子どもたちに対しては、以下のような支援によって学習に向かう力を身に付けさせる。

- 活動の始めと終わりが明確な、一連の活動の流れがイメージしやすい直線的な場の工夫
- 個別に色分けするなど、視覚的な手掛かりのある場の工夫
- 活動のイメージをもたせるための、写真や動画の提示（タブレット端末の活用）

(2) ボディイメージを活かした動きを取り入れた繰り返しの遊びの設定条件

ボディイメージを活かした動きを取り入れる際には、図1のような系統性を考えて場を設定していく。その際の課題設定の条件は、以下のようにする。

- ① 身体図式を育てる運動遊び
自分の体の位置や動きを遊びの中で意識できる課題
- ② 運動企画能力を育てる運動遊び
手足をどこに置く、どこに伸ばすかなどを考えながら行うことのできる課題
- ③ 時間的要素のある運動遊び
運動にタイミングの要素が加わった課題

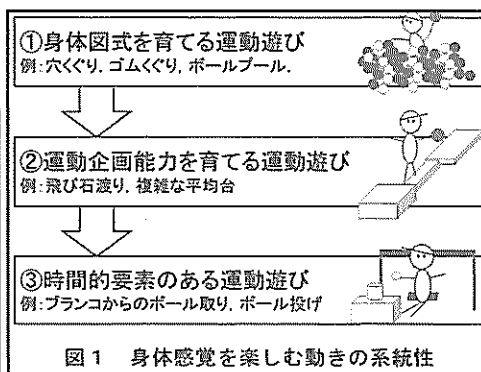


図1 身体感覚を楽しむ動きの系統性

繰り返しの遊び場を設定する際は、上記の3つの条件の難易度を、毎時間少しずつ変化させていく。

体育2グループ 題材 パズルを あつめよう ゆらゆらコース

(1) 題材でめざす姿

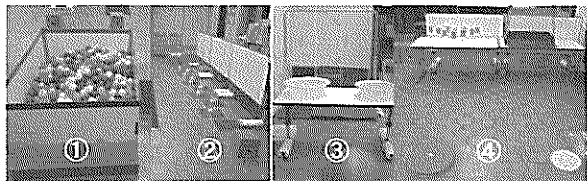
- ◎ 自分のコースや目標、活動の進め方がわかり、見通しをもって取り組もうとする姿 (主体性)
- ◎ 体のバランスをとりながら、歩く、投げる、蹴る、持つなどの場に応じた動きをしようとする姿 (自己発揮性)
- ◎ 教師の評価言をもとに、自分ができるようになったことを振り返り、頑張ったことを自分なりの言葉で発言している姿 (成就性)

(2) 学習の流れと考察

動機段階：1～2/7時

活動の手順に沿って、ゆらゆらコースの4つの動きを1つずつ試す。

- (1) 4つのコースのそれぞれの動きを、一つずつ試しにやってみる。
- (2) コースの規則に沿って、一つずつの動きを続けてやってみる。



資料1 ゆらゆらコースの4つの場

【4つのコース】

- ① ボールプール
- ② はし
- ③ ブランコ
- ④ ツイスター

ボールの中は気持ちいいよ。

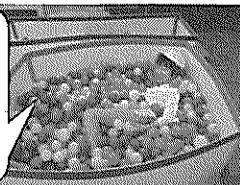
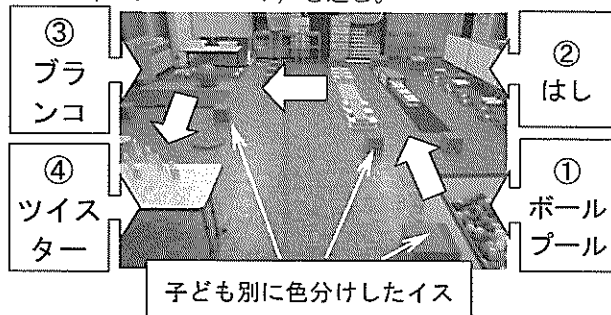


写真1 ボールの中で体を伸ばそう。

熱中段階：3～6/7時

ゆらゆらコースで、身体のバランスをとりながらボールを操作する。

- (1) ゆらゆらコース①(穴くぐり→飛び石渡り→ブランコからのボールとり→的あてツイスター)を進む。
- (2) ゆらゆらコース②(ボールプール→橋渡り→ブランコやキャスターからのボール蹴り・ボール投げ→ツイスターシュート)を進む。



資料2 サーキット形式に仕組んだゆらゆらコース(主体性)

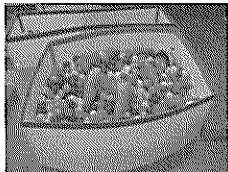
動機段階では、ゆらゆらコースの一つずつの場における動きを楽しみ、活動の見通しをもつことをねらいとしている。題材としてはサーキット形式の場を構成しているが、この段階では一つ一つの場での動きを楽しませたいと考えた。そのために、4つのコースのそれぞれの動きを一つずつ試しにやってみる時間、また、コースを回る順番などの簡単な規則に沿って一つずつの動きを続けてやってみる時間を設定した。コースは、①ボールプール、②橋、③ブランコ、④ツイスター、の4つを設定した(資料1)。これらの場はボディイメージをもとにした動きを身に付けることができる点で価値があると考えた。B児は、身の回りのことに注意が向いてしまう、複雑な場には興味を示さない、身体を過剰に動かす、体を回転させる・揺れる動きを好むなどの実態があるが、ボールプールやツイスターを好み、写真1のように場の中に浸って感覚を楽しんでいる姿が見られた。

考察1

活動の見通しをもたせる上で、複数の場を仕組んだこと、またそれぞれの場でじっくりと動きを試す活動を設定したことは有効であったと考える。それは、資料1のように本グループの子どもたちが好む感覚運動的な場を仕組んだことがうまく働いていたからである。そこで次の段階では、それぞれの場をつないでサーキット形式の場を仕組んでいく。

熱中段階では、動機段階でとらえた身体感覚をもとに、規則に沿った体の動かし方ができるようになることをねらいとしている。B児は、身の回りの様々なことに注意が向いてしまったり、複雑な場には興味を示さなかったりするが、活動の流れがわかりやすいときには自分で活動できるという実態があるので、資料2のようにスタートとゴールが明確にわかりやすいサーキット形式の場を仕組んだ。さらにそれぞれの場の中に、子どもの待機場所となる椅子を置き、活動することと順番を待って友達の動きを見ることがとの区別をつけて学習することができるようにした。また、コースや椅子は子ども別に色分けをして、自分の活動する場がどこなのか明確にわかるように工夫した。B児は、活動に集中できなかったり場を離れたってしまうことがあったが、自分の色や待機する場所を明確にしたことで、声掛けをしたり場の写真を示したりすることで混乱することなく活動を行うことができた。また、タブレット型機器を使用して、随時きちんとした座り方を表した写真をモデルとして提示したり、「ボールを持つ」「ブランコに乗る」などの動きを表した動画を見せたりすることも、学習に向かわせる上で効果的であった。

1 試行目



2 試行目



人形を
みつけたよ。



ボールを
持って
渡れたよ。

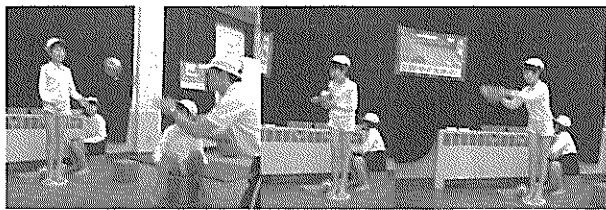


ブランコに
乗って
シュート
できたよ。



体を
ひねって
シュート
できたよ。

資料3 1試行目と2試行目の動きの変化(自己発揮性)



①ボールをとる

②体をひねる

③ボールを投げる

資料4 ツイスターでの動きの様子(自己発揮性)

発展段階：7/7時

ゆらゆらコース大会をする。



集めた
パズルを
貼って…
やった！
できたよ。

写真2・3 パズルが完成したよ！（成就性）

各時間は、2試行の活動を仕組んだ。1試行目は、4つのそれぞれの場でじっくりと体を動かすことに浸ること、2試行目は、1試行目の動きに、規則を加えたり複数の動きを同時に行ったりするような活動を仕組んだ。また、4つのそれぞれの場でパズルのピースを集めて、4つのコースをすべて回った後にパズルを完成させるようにした。

B児の1試行目の様子は、ボールプールでは体を沈めて長い時間じっとしていた。丸コーンを並べた橋では、手すりを伝いながらゆっくりと上手にわたることができた。ブランコも教師が止めるまで長い時間ずっとこぎ続けていた。ツイスターも、長い時間続けていた。上記の反応から、いずれもB児にとって心地よい感覚であると思われる。

2試行目の様子は、ボールプールでは人形を探すという規則をなかなか理解できないでいたが、一度人形をもたせて、それを目の前でプールの中に入れると、体を動かしながらその人形を探すことができた。橋では、何も持たずにわたっている途中に、ボールを手渡した。バランスを取るのが難しくなったが、何度もやり直しながら最後まで渡ることができた。ブランコでは、大きめのボールを教師が転がすと、タイミングを合わせてゴールに向かってけることができた。ツイスターは、資料4のように、教師が投げたボールを取る→体をゴールの方向にひねる→ボールをゴールに投げ入れるという一連の動きを、ツイスターに乗りながら行うことができた。

考察2

資料4のB児の姿が出たのは、B児がツイスターに乗りながらボールを投げるということを理解できたからである。これは、タブレット端末での動きのモデルの提示や、好きな感覚に別の動きを組み合わせた場の設定が有効に働いたからである。しかし、心地よい感覚に浸りすぎて別の動きを加えることをためらう場面も見られた。子どもが「やってみたい」という規則を加えて、動きに向かう意欲を高めていく手立ても合わせて考えていきたい。

発展段階では、ゆらゆらコース大会としてサーキットコースを進み、満足感や成就感を味わうことをねらいとしている。そのために、できるだけ教師の支援を少なくしたり、たくさんのパズルを完成させる活動を仕組んだりした。B児は、コースの進み方を理解して活動を楽しみ、写真2・3のように、パズルを完成して喜ぶ姿が見られた。

考察3

動きに向かわせる上で、B児にとって心地よい感覚の動きを仕組んだ場を設定すること、活動の見通しをもちやすい明確なサーキットコースを設定すること、満足感をもたせるためのパズルを集める活動などが有効であったと考える。

【全体考察】

考察1と考察2からわかるように、子どもにとって心地よい感覚を仕組んだ場を設定し、色や写真などの視覚的情報を支援として与えることや、活動全体をイメージできるサーキットコースを設定することで、子どもは自ら動きに取り組んでいく姿が見られた（主体性）。また、子どもにとって心地よい感覚を活動の場の中に仕組んだことで、動きを繰り返す、さらに別の動きを加えて楽しむことができるようになった（自己発揮性）。また、考察3から、動きができるようになり、パズルなどの子どもにとっての目的となるものを設定することで、子どもたちの満足感や達成感を味わわせることができると考える（成就性）。題材前と比較すると、資料4からわかるように、単に心地よい感覚や興味のある動きを楽しむだけでなく、体育科の内容としてできるようになった動きが増えた。このことから、感覚運動を取り入れた場や学習に向かわせる支援が有効に働き、身体感覚を身に付けることができたと言える。

海外生活経験に自信をもつ子どもを育てる帰国子女教育

帰国子女教育部 今 村 光 宏 合 田 賢 治 江 口 友 子

1 帰国子女教育で目指す力

帰国子女教育において各学年段階で目指す姿を、下表のように設定する。

主体性	○ 滞在国や日本の文化について意欲的に調べようとする子ども
価値性	○ 滞在国や日本の文化について調べたことを比較し、互いの文化のよさをとらえることができる子ども
自己発揮性	○ 海外で生活した経験があることを肯定的にとらえ、その知識や経験を自分の生活に活かすことができる子ども

帰国子女学級は、①国内での生活に適応し、最終的には公立学校における学習ができる能力の育成、②海外で身に付けた特性（言語や文化など）の伸長を図ることを目的として設置されている。

①については国語・算数・社会科を帰国子女学級独自で行っている。その際、在籍学年と同等の学力が身に付いていないことを考慮した上で個別に学習を進めたり、帰国子女学級における異学年のグループを編制したりしている。また、上記以外の教科については交流学級の児童との交流を深めるために、一緒に学習する形態をとっている。

②については総合的な学習の時間を国際交流タイムとして、滞在国の歴史や文化を追究して他者に発信する学習を行っている。帰国子女学級の子どもたちは、海外での生活期間や、学校での学習状況も様々であり、日本語の習得状況も様々ではない。そのために、滞在国と日本の文化に対するとらえ方も様々である。このような帰国子女の特性を活かして様々な国や地域の文化や伝統を調べたり、それぞれの子どもから見た日本のよさを比べたりすることで、日本と滞在国のよさについてより深く追究できる学習が展開できる可能性を見出すことができる。しかし、子どもたちは海外で生活してきたことを楽しかったととらえているものの、貴重な経験であるということの意識をはっきりとはもっていない。そこで、国際交流タイムでは、学年に応じて海外で生活してよかったと思うことや、その経験に価値を感じる姿を求めていくことが必要である。そして、将来的には自分たちのもっている個性の自覚を図るとともに、海外での経験と日本での経験を活かし、自信をもって生活することができるようにしていくことが必要である。

2 主題の意味

海外生活経験とは、子どもたちにそれぞれの生活環境の中で育まれた、生活や文化に対する感じ方や考え方、行動の仕方のことである。これは、子どもたち一人一人によって、海外で過ごした年数や生育歴、通学した学校の種類等によって異なっている。海外生活経験に自信をもつとは、日本で生活する上で、子どもたちが感じている文化や生活様式、行動の仕方やコミュニケーションのとり方等にマイナスイメージをもたず、海外で生活したことに価値を見出し、いろいろな視点で物事を見たり判断したりしていくことである。海外生活経験に自信をもつ子どもを育てる帰国子女教育とは、日本と滞在国の違いを追究し、それぞれの文化や生活習慣などのよさを見出し、よりよく生活していくための考えを選択したり、滞在国のよさを他者に伝えて理解を深めたりすることによって、自分たちが広い視野で各国の文化をとらえることができることや、自分の経験が活かされることを自覚させ、生活上に活かすことができるようにすることである。具体的には、滞在国のよさについて様々な角度からとらえ、その国が独自に発展させた文化とその背景にある気候・風土の特徴をとらえたり、文化をつくりあげてきた滞在国の人々の工夫や努力についてとらえたりすること、同じように日本でも独自の文化をつくりあげ、私たちの生活を潤いあるものにしてきていることに気付くことである。このように、各国のよさや日本のよさを経験上から見たり考えたりすることができることを、子ども自身が自覚することによって自分自身に自信をもち、積極的にコミュニケーションをとったり、自分の滞在国のことを友達に伝えたりしながら、その経験を活かそうとすることにつながるものであると考える。

滞在国の経験を生かす国際交流タイムを通して

帰国子女教育部 今村光宏 合田賢治 江口友子

3 副主題の説明

滞在国の体験を生かす国際交流タイムとは、海外で獲得した知識や見方・考え方などの特性を生かしながら、日本や外国の文化のよさを追究し、広い視野を身に付けることができるように、文化理解・共生の視点を中心に、帰国子女学級独自の総合的な学習の時間を仕組んでいくことである。この学習を通して、海外と日本の文化のよさを認め合うとともに、自分が経験してきたことに価値を感じることができるようにしたい。そのために、その国が独自に発展させた文化とその背景にある気候・風土の特徴や、文化をつくりあげてきた滞在国の人々の工夫や努力について取り上げる。これらは、海外での生活経験をもった帰国子女学級の子どもたちが、自ら課題を見つけ、自ら学びながらよりよく問題を解決していこうとする資質や能力を身に付けることにつながると考える。このような学習を教科等での学習を踏まえ横断的・総合的に行うことで、互いの文化を尊重する態度をはぐくみ、その結果が、日本での学校生活や社会生活への適応を図ることができ、これからの自己の生き方について考える視点をもつことができるようになると思われる。

4 具体的な方途

(1) 教材化の視点

帰国子女学級の児童が日本の学校生活・社会生活を行っていく上で必要な力を確実に身に付けていくため、以下のような視点で教材化を図る。

- テーマとして独自の衣食住、伝統行事などを設定し、日本の同じテーマと比較することで滞在国のよさをアピールすることができるもの
- 個の表現特性が生かされ、活動目的も個の言語状況等に応じた選択肢が設定しやすいイベント活動ができるもの
- 日本と滞在国の関係が明らかになり、共通点や差異点が見出される中でそれぞれのよさをとらえることができるように表現することができるもの

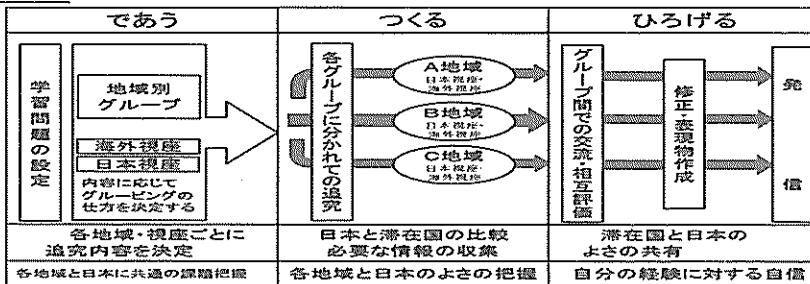
(2) 国際交流タイムでのグルーピング

帰国子女学級の子どもたちは、滞在国、滞在期間、学校（現地校、日本人学校及び補習校）の違いがある。そのため、文化への接し方の違いが出てくる。グルーピングは以下のような視点で行う。

- 地域でのグルーピング
（滞在した国をアジアグループ、アメリカグループに分けて行う。）
 - 視座によるグルーピング
（現地校に通った子どもと日本人学校に通った子どもでは、文化へのふれあい方は異なる。文化を滞在国を中心にとらえる子どもと日本を中心にとらえる子どもでグループを編制する。）
- ※ 各グルーピングを学習内容に応じて編制していく。

(3) 国際交流タイムにおける活動構成

地域や視座を考慮したグループ編制を行い、個別の追究やグループでの交流を通して、各地域での経験や文化と、日本の文化双方のよさをとらえ、海外での経験が自分たちの視野を広げていることを自覚させたい。そのために双方の視座から見た追究内容を相互評価させる活動を位置付ける。



【図1 国際交流タイムにおける活動構成】

自他の心を見つめてよりよい人間関係を築く高学年学級活動

養護教諭 佐藤 美和子

1 主題設定の理由

私たちの日常生活はすべて他者とのかかわりによって成り立っている。円滑な社会生活を送るためには、適切なコミュニケーション能力とともに、お互いの価値観を共有したり存在を認め尊重し合ったりしてよりよい人間関係を築いていこうとする姿勢が必要である。しかし、今日の子どもたちを取りまく社会環境は、情報化や少子化、核家族化が進み、コミュニケーション能力を培う場と時間が大きく変化している。学校教育においてもいじめ問題の深刻化をはじめ、些細なことで短絡・突発的な言動が生じるといった、円滑に人間関係を築くことができない子どもが増えている。

保健室には、人間関係や自己の内面についての悩みや不安から体調不良を訴え来室する子どもが多くいる。平成18年度の保健室利用状況に関する調査によると、いじめや人間関係の問題など、心の悩みを訴えて来室する子どもが10年間で大幅に増え、平成13年度からの5年間で小学校では約10%増えていることが明らかになっている。本校でも、高学年になるにつれ、からだの成長とともに心も大きく揺れ動きはじめ、人間関係や自己の存在について悩む子どもの来室が多い。そして、自分の素直な気持ちに向き合い、相手を大切にしながら気持ちを伝え合うことができずにトラブルにつながるケースが目立つ。これらのことから、相手や自分の気持ちを大切に、場面や状況に適した人間関係を築くことが必要であると考えます。

保健室は心の悩みをもっている子どもたちの「心の居場所」としての役割を果たしており、そこに居る養護教諭は子どもたちの心の状態を把握しやすい。よって、養護教諭の積極的なかかわりがますます求められており、特別活動や保健学習においても、その力が発揮されることが子どもたちの心身健康の保持増進に有効である。平成20年の中央教育審議会答申では、養護教諭の求められる力量として、深刻化する子どもたちの現代的な健康課題の解決に向けて、学級担任等と連携し養護教諭の専門性を生かした学級活動や保健学習へのティーム・ティーチング、兼職発令での参画が示されている。このようなことから、養護教諭と担任が協働し、それぞれの特性を活かして多面的に子どもを理解し情報を共有することで、同じ方向性をもって一人一人の子どもの日常的・継続的な指導と支援につながるできると考える。

2 研究主題についての説明

自他の心を見つめてとは、社会生活での様々な場面において、自分の気持ちや相手の気持ちに意識を向け、理解していくことである。子どもたちは、毎日いろいろな出来事や出会いのなかで、喜びや悲しみ、楽しさや不安など、様々な気持ちを感じている。自他の心を見つめることは自己理解・他者理解につながり、その結果、自尊感情や他者尊重が高まり、よりよい人間関係を築くことができる子どもの姿が期待できる。

よりよい人間関係とは、相手の気持ちやおかれた状況や様子を見極め、相手との適切な心の距離感を保った、自分も相手も気持ちよいと感じる人間関係のことである。人間関係を築く際、言葉や心の交流が必要となる。そのためには、自分の気持ちを表現するだけでなく、相手の気持ちや状況を察することが大切である。相手の気持ちやおかれた状況を理解した上で、自分の気持ちをきちんと表現して伝えることで、互いに働きかけ合って折り合いのついた人間関係を築くことができると考える。

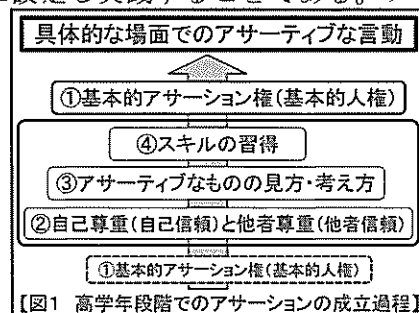
自他の心を見つめてよりよい人間関係を築く高学年学級活動とは、高学年を対象に、自分や相手の心に丁寧に意識を向けることで、互いが気持ちよいと感じる人間関係を段階的に築く学級活動のことである。自分の気持ちや相手の気持ちに丁寧に意識を向けて自己表現するために、相手の目に見える様々な情報を感じ取ったり、話をきちんと最後まで聴いたりする。そして、おかれた状況を感じたり表情から心情を察したりするスキルを身に付け、相手と必要な心の距離感を理解した関係を築く。このように段階的に取り組むことで、良好な人間関係を築く子どもの姿へと導くことができると考える。

適切な自己表現を導き出すアサーション活動の工夫

養護教諭 佐藤 美和子

3 副主題の説明

適切な自己表現とは、相手の気持ちを考えながらも自分の気持ちをきちんとと言動で表現できることである。気持ちを伝える際、自分の気持ちばかり考えていると、相手に不快な思いをさせて本意が伝わりにくい。そこで、相手の気持ちや状況を考えた上で、身振りや姿勢、表情や視線などの言語を伴わない表現も含めて気持ちを表現することがよりよい人間関係を築く上で重要だと考える。適切な自己表現を導き出すアサーション活動とは、相手の気持ちも自分の気持ちも大切にしたい気持ちの伝え方をアサーションの理論に基づき体験的に学ぶ活動のことである。適切な自己表現を導き出すアサーション活動の工夫とは、相手の気持ちを大切にしながら、自分の欲求や気持ち、考えなどを率直にその場に合った適切な方法で表現ができるアサーション活動を段階的に設定し実践することである。アサーション活動が成り立つ仕組みとしては、4つの土台が備わっていることが必要である。思春期にさしかかる高学年段階においては、②自己尊重と他者尊重の精神を育てることで、③アサーティブな見方や考え方が身に付き、④適切な自己表現のスキルを獲得することで、①基本的アサーション権も定着していくと考える（図1）。そこで「導入段階」では、アンケートを通して自己の内面に目を向け振り返り、ワークシートを使って体験的に自己尊重と他者尊重を学ぶ。「展開段階」では、自分の気持ちや考えを適切に表現して伝え合う活動につなぎ、アサーティブな表現を学ぶ。また、グループ活動を通して他者理解や他者尊重の気持ちをさらに高める。最後に「発展段階」では、学んだアサーティブな表現を日常生活の中で取り入れ、生涯を通じて自分の気持ちも相手の気持ちも大切にしたい自己表現を通して、よりよい人間関係を築く態度とスキルを身に付ける。



4 具体的な方途

(1) 自己尊重からスキル獲得に向かう段階的な活動の設定

- まず、事前に人間関係についてのアンケートで自己の内面に目を向けさせ、自分の気持ちを大切にしたい自己尊重の意識をもたせる。次に、具体的にアサーティブな表現や考え方を理解させ、相手の気持ちを知るポイントを実践に取り入れたグループ活動を仕組む。また、日常で起こりやすい場面を設定し実践を深めさせることで、スキル獲得へとつないでいく。このようなアサーションの理論に基づいた段階的な活動を通して、適切な自己表現を体得していく姿が期待できる。

(2) 適切な自己表現をするためのポイントの習得

- 適切な自己表現を導き出す過程においては、自分の気持ちだけでなく相手の気持ちも大切にすることが重要となる。しかし、相手の気持ちの感じ取り方には個人差があり、苦手と感じている子どもに対する何らかの手だてが必要である。そこで、相手の気持ちを知るポイントとして、しぐさや顔の表情、声の大きさ、まわりの様子などの非言語メッセージの特徴や違いを視聴覚教材を用いて気付かせる。このポイントを学ぶことは、より多くの子どもが相手の気持ちを感じ取り、適切な自己表現ができるようになる過程として有効である。

(3) 自他のありのままの姿を尊重することの大切さを体感する活動の設定

- アサーション活動の考えに、ありのままの自分とありのままの相手を尊重するということがあ。そこで、自己表現ワークシートを用いて交流し、自分らしさの再確認や相手と相違点があってもお互いの「その人らしさ」として認め、尊重することの大切さを体感させる。そうすることで、違いも含めて相手を大切にしたい精神を学び、アサーション活動の高まりが期待できる。

お わ り に

副校長 芋 生 修 一

平成 23 年 6 月に開催した教育研究発表会から 1 年 8 か月ぶりに平成 24 年度の教育研究発表会を開催することができました。この 1 年 8 か月にわたり、新たな研究の方向を模索したどり着いたのが「開かれた個」を育てる学習指導の創造です。この研究主題を設定するにあたって次のような 3 つのことを想定し、研究を推進してきました。

○個を高めると共に、個が所属する集団を高める学習指導

これまでは、個の資質・能力を高めることに重点を置いた研究を行ってきました。しかし、高まった個の資質・能力を発揮できる場や集団が必要であると感じてきました。そこで今回は、個を高めるだけでなく、個の資質・能力を発揮する集団も共に高める学習指導を追求しました。

○全ての教科等においてよりよい人間関係を育成する学習指導

集団を高めることは、集団の中にある人間関係を望ましいものにすることであると考えています。そのためには、一部の教科・領域に任せるのではなく、全教育活動を通してよりよい人間関係を育む指導、特に教科等における学習指導の在り方を明らかにしようとしてきました。このことは、いじめや不登校、学級崩壊等を防止・削減する上からも価値があると考えました。

○特別活動が学習指導要領の総則に位置付いたときの教科等学習指導

よりよい人間関係を育むには、望ましい集団を通すことが必要条件となります。望ましい集団活動を通してよりよい人間関係の育成を目標とする特別活動が道徳と同じように総則に位置付いたと仮定したら、教科等の中で望ましい集団活動を通した学習指導はどのように変わっていくのかを明らかにしようとしてきました。

今回の研究を通して、個別ではなく、多くの人と共に学習をする意味を問い直しました。学校が学級や学年等を母体とする集団で学習を行っている以上、個が所属する集団の育成は避けて通れない指導内容であると考えているからです。特別支援教育部や帰国子女教育部においても、同様の考えを基に研究推進してきています。このような本校の提案に対し、たくさんの御指導と御助言を受け、今後も新しい教育の創造に向けて精進したいと考えます。また、本年度から文部科学省教育課程特例校の委嘱を受けました。1 年後には、新たな教育課程の在り方を公開できると考えます。

最後になりますが、本校の研究を推進するにあたり、御指導いただきました福岡教育大学の先生方及び本校先輩をはじめ関係の先生方に深く感謝申し上げます。特に、文部科学省教科調査官 杉田洋先生には、御多用中にもかかわらず何度も本校へ足を運んでいただき、御指導と御助言を賜ったことに衷心より御礼申し上げます。

今後も、私たちの研究に厳しい御指導・御助言を賜りますようお願い申し上げます。

平成 24 年度 福岡教育大学・福岡教育大学附属福岡小学校研究同人

◎ 学 長	寺尾 慎一						
◎ 大 学							
(全 体)	小泉 令三	(理 科)	坂本 憲明	(道 徳)	堺 正之		
	植村善太郎		谷 友雄		小林万里子		
(国 語 科)	山田 洋平	(生 活 科)	津川 裕		池田 隆		
(社 会 科)	河野 智文		富安 浩樹	(外 国 語 活 動)	中島 亨		
	石丸 哲史		生田 淳一	(特別活動)	木内 隆生		
	小田 泰司	(音 楽 科)	木村 次宏	(特別支援教育)	納富 恵子		
(算 数 科)	豊 啓司	(家 庭 科)	甲斐 純子		中山 健		
	清水 紀宏	(図 画 工 作 科)	阿部 守	(養 護)	宮田 正和		
	今井 一仁	(体 育 科)	相部 保美				
	森 保之						

◎ 附属福岡小	(担 任)	(専 攻)	(氏 名)	(出身地区)
(職 名)				
校 長		英 語	古賀 元章	福 岡 市
副 校 長		社 会	芋生 修一	福 岡 市
教 頭		国 算	平川 洋一	福 岡 市
研究主任		体 育	弘松 英樹○	福 岡 市
教務主任		生 活	緒方 勝彦○	福 岡 市
総括主任		音 楽	福原 伸治○	福 岡 市
教 諭	1 の 1	国 語	高武 龍彦	福 岡 市
教 諭	1 の 2	外 国 語	大久保 良博	福 岡 市
教 諭	2 の 1	道 徳	棚町 尚子	福 岡 市
教 諭	2 の 2	活 動	三浦 研一○	福 岡 市
教 諭	3 の 1	特 別 活 動	谷岡 良寛	福 岡 市
教 諭	3 の 2	育 会	平井 源樹○	福 岡 市
教 諭	4 の 1	数 科	山田 耕司	福 岡 市
教 諭	4 の 2	科 会	伯川 康洋	福 岡 市
教 諭	3・4 の 3	数 科	今村 光宏	福 岡 市
教 諭	5 の 1	算 数	藤岡 太郎○	福 岡 市
教 諭	5 の 2	図 画 工 作	二串 英一○	福 岡 市
教 諭	5 の 3	算 数	合田 賢治○	福 岡 市
教 諭	6 の 1	国 算	森 将和○	福 岡 市
教 諭	6 の 2	家 庭	岡田 充弘	福 岡 市
教 諭	6 の 3	支 援 教 育	江口 友子	福 岡 市
教 諭	ふ さ く じ ら	支 援 教 育	片小田 雅夫	福 岡 市
教 諭	専 科	支 援 教 育	植田 秀樹	福 岡 市
教 諭		支 援 教 育	堀 亮輔	福 岡 市
教 諭		支 援 教 育	松尾 京子	福 岡 市
教 諭		支 援 教 育	佐藤 美和子	福 岡 市
養 護 教 諭		支 援 教 育	藤井 裕希	福 岡 市
栄 養 教 諭		支 援 教 育	藤木 悠介	福 岡 市
研 究 修 修	専 科	特 別 活 動	若杉 大輔	福 岡 市
研 究 修 修	専 科	国 社	大脇 安倫	福 岡 市
研 究 修 修	専 科	国 音	齋藤 淳	福 岡 市
講 師	専 科	外 国 語	清水 知子	福 岡 市
講 師	専 科	活 動	阿久津 奈美恵	福 岡 市
講 師	専 科	支 援 教 育	ナナダン ラビ チャン	福 岡 市
講 師	専 科	支 援 教 育	大塚 みどり	福 岡 市
		支 援 教 育	河内 望	福 岡 市

※ ○印は平成24年度研究部員

平成 23 年度 附属福岡小学校転出教員

塚本 正典(三潴・大川)	黒澤 真二(筑 紫)	島川 二郎(筑 紫)
緒方 敦子(福岡市)	永江 英俊(糟 屋)	都 理香(糟 屋)
杉 奈穂美(福岡市)	臼杵 秀高(糸 島)	谷口慎一郎(筑 紫)
中原 正文(糟 屋・三潴)	伊東 勇治(浮 羽)	フィリップ ハーディング

平成25年2月 印刷・発行
福岡教育大学附属福岡小学校
研究紀要 No.43

発行者 福岡教育大学附属福岡小学校
〒810-0061
福岡市中央区西公園12-1
TEL 092-741-4731 (代)

印刷所 エース印刷株式会社
〒810-0052
福岡市中央区大濠1-6-9
TEL 092-741-9090 (代)

平成25年度 福岡教育大学附属福岡小学校

授業づくりセミナーのご案内

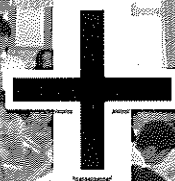
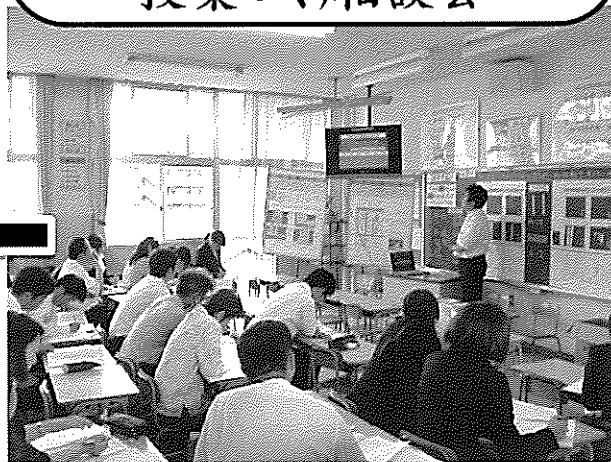
平成25年6月5日(水), 6日(木), 7日(金)
どの日も午後からの開催です!

先生方のニーズに応える!

子どもたちが生き生きと学ぶ
公開授業



すぐに使えるポイントがたくさん
授業づくり相談会



各教科等で個別に
テーマを設定し、
授業を提案!



授業後すぐに、
授業者による
相談会の設定!

※ 詳しい日程については決まり次第、ホームページにてお知らせします。
ホームページアドレス <http://www.fukuoka-edu.ac.jp/~fukuokas/>

